

明治四十一年 (一九〇八年)

一月九日 大学の講義はじまる。

○某工業高校教授 Köln Zeit に技書して曰く、ドイツの現行法(1906)によれば、高等文官は大学を於て法律を研究したる者ならざるべからず、然れども行政官は理論的よりも實際的、抽象的よりも現実的の知識を必要とする者なり。現今の青年行政官中、往々彼が大等に於て費したる時間と努力とを、全く自己の職業上に無用なりしと言ひて嘆息する者あり。昔 Friedrich Wilhelm I は Kameralien (財政学) の講義を授けし(一七二七以来) 法律、経済、数学、機械学、建築、農業、哲学、歴史を教へしめたり。

Jan. 10. Es hat geschneit gestern abend. Das Thermometer zeigte 4 unter Null um 2 Uhr nachmittags, obwohl das Wetter ganz schön

und windfrei war. Man sieht auf dem Kaiserplatz einige Schlittendroschen.

Jan. 11. Ich habe die Briefe geschrieben nach Bruder, Tasaki und Frl. Morishima. Von den beiden letzten habe ich kürzlich gehört. Da Frl. Mukasa für eine lange Zeit mir nicht geschrieben hat, glaube ich, dass sie schon verheiratet wäre. Aber es ist noch nicht geschehen.

Jan. 12. S. Ich besuchte Herrn Misumi. Herr Toyosumi ist schon am dritten d. M. nach Prag abgereist. Abends war ich in dem Stadttheater. Will. Tell.

Jan. 13. M. Seit ein paar Wochen treiben auf dem Rhein zahllose Stücke Eisschollen in unendlicher Reihe. Sie sind 1-10 Meter lang



きは政略の策略のみと。併し策略にもせよ、それが策略の種子になる所を見ればドイツ人の人氣が如何に國家に集て居るか分るなり。

一月二十五日 前の月曜日より毎日朝夕二度つづ冷水摩擦を行ひ、日に一二時間の散歩をなす事したり。

三角君の診断に依れば、余は慢性神経衰弱に罹つて居る。夜寝付の悪しき事は其原因に基く。そこでこれを医するには右の方法を実行する外に、一般の生活を規則正しくする必要あり。余の神経衰弱は平生は無事なれども、あせつて来ると腦がボンヤリして仕事が手につかなくなる。此の如き状態に陥つた事は従来よくあつた。併し之に対して別に根治療法を考へた事は無い。今から少し氣をつけて見ようと思ふ。

Jan. 26. Son. 雨 Stadttheater: Rabensteinlerin

一月二十七日 雨 Kaisers Geburtstag, Hofgartenにて Parade あり、戸々国旗を掲ぐ。ドイツの旗は賑ならず。三角君と共に佐藤君を訪ふ。

夜マルチンへ独行。

一月二十八日 今日もまだ国旗を下さぬ家あり。書生等は土曜日より毎日酒を飲む由。日本の正月と同じ

くするずるの御祝と見えたり。

ベルリンにては、土曜日に天長節の前祝として Hof-theater にて職工のため皇帝の命により特に催された芝居あり。

入場料は 50 pig にて不足は御手許より出る筈。

一月二十九日 明日より Arbeiterversicherung (労働保険) を調べ始む。

○伯林の子供に或人が問ふた。天使は何うして天国の来たれる事を知つたか。答へて曰く、新聞で讀んだ。

又問ふ、Adam と Eva はなぜ Eden の花園から追はれたか。曰く、家賃を払はなかつたから。

一月三十日 Paulsen, Deutsches Bildungswesen を讀む。

一月三十一日 午後あまり寝むき故横になりしに、いつかおすして講義の時間をはつしたり。

近來元氣宜しからず、仕事手につかず、勉強の能率低し、朝は充分眠るに拘らず、午後眠気を催す。養生法は実行して居る。

労働保険調べ。

Februar

Feb. 1. Sam. Prof. Schumachers Excursion zur Besichtigung der Gasmotorfabrik zu Dentz. Eine grosse Fabrik mit 3400 Arbeitern. Umfasst Giesserei, mechanische Werkstätte, fitting shop, Probierplatz, baut nicht nur Gasmotoren, sondern alle Arten Verbrennungsmotoren, also Öl-Spiritus-, Benzinmotoren für Werkstätten, Wagen, Schiffe, u.s.w., neben Pumpen. Grosse Motoren mit 1,000-2,000 P.K. sind auf Bestellung gebaut. Aber die Firma hat immer 3,000 Stücke von kleineren Maschinen auf Lager. Es hat auch Zweigfabriken in Berlin, Wien, Mailand und Philadelphia.

Besuchte Kunstmuseum zu Köln.

Bei "Sonne" nachts, u. Billiard.

Feb. 2. Sonn. Billiard nachmittags.

Abends in der Beethoven Halle. Carnevalseitzung des Bonner Männer Gesangs Vereins. Einzug der Stadtsoldaten, humor-

istische Reden, Gesang, bis 1.30 mitternachts.

In dieser Jahreszeit werden im Rheinland verschiedene Carnivalsitzungen und Maskenbälle veranstaltet. Diesen Abend waren da drei solche Versammlungen in Bonn. Jede von 300-400 Damen und Herren besucht.

Feb. 3. Mon. Turnen u. Schwimmen.

Arbeiterversicherung.

Eine Anzahl Neujahrskarten sind von Japan gekommen.

一月廿四日 今日ヤツト、ナーニト、Inneren Colonisation の問題出ひじや。Referat の Professor の英國の Small Holdings Bill の演説したる事を知ひや。著の如く難したり。愛國心の動を方なごとな者乎。

Prof. Sch. 曰く、ハインツの Professor は出来るだけ厚い本を書かうと勉めると。同氏が本を書かぬことと引ひく、面白き言なり。又曰く、アメリカにては経済学者の Ethics of Business Life に問題を求むる者多し。Hadley は鉄道業者とて最も有望なる人なりしが、遂に此問題にかつれたり。アメリカの實際社会の有様と対照すれば無理ならず。

Feb. 8. Sam. Schuhmachers Excursion nach Farbrenfabrik Beyer & Co. Mülheim a/Rh., eigentlich eine Elberfelder Firma. Aber jetzt nur Hauptsitz des Geschäfts in Elberfeld, Hauptwerk in Mülheim, Zweigfabrik in Moskau, Rountaix und Albany in U.S. Gegründet 1850. Verschiedene Erfindungen nach 1870. Grossen Gewinn gemacht. Jetzt 36 mil. Mark Aktien, 14 3/4 mil. Reservefonds, hat zweitgrösste Arbeiterwohlfahrts-einrichtung in Deutschland, verwendete für diesen Zweck schon 9 mil., gibt noch 1 mil. jährlich, beschäftigt 3,700 Arbeiter in Mülheim. Wert am Rhein, Schwefel, Salpeter-, u. Salzsäurefabrik, Farbstofffabrik (nicht gezeigt), Probierplatz, Maschinenwerkstatt, Holzwerkstatt (Fässer), Packplatz (interessante Packmaschinen wie die, die ich bei Cadburgs besichtigte), Beamten—u. Arbeiterkolonie, Kasinohaus, Junggesellenheim, Mädchenheim, Wöchnerinnenklinik (250 Kinder schon hier geboren), Bucherei, Fortbildungsschulen (für Knaben und Mädchen),

Konsumanstalt, etc.

Feb. 8. Sam. Besuchte Herrn Sato, Prof. Kowalevsky, nachher bei Haschimoto und Martin viel getrunken.  
 Feb. 9. Sonn. Herr Sato kam. Spaziergang auf den Venusberg, besuchte Dr. Misumi. Essen bei Bodega. Dr. Misumis Vater ist vor drei Tagen in Kumamoto gestorben. Schrieb einen Brief nach Herrn Akimoto.  
 Feb. 10. Mon. Sprachstunde—Deutsch—Vorlesung.  
 Feb. 11. Di. Turnen u. Schwimmen.  
 Feb. 12. Mi. Deutsch. Abends: Kinematograph.

二月十二日 ドイツ人は肩書を好み事既に知渡たれど語なり。人を呼ぶたれども一々 Herr Dr., Herr Referendar, Herr Kaplan, Herr Lehrer, Herr Oberlehrer, Herr Direktor, Herr Generaldirektor 等々あり。國體を例に附らば新聞の死に於ては世に Bäckermeisters-wive, Schlächerskind, Rentners Tochter 等々あり。ドイツ人自ら稱し「プロ」を Titelaucht せり。

おかしき事に南ドイツの新聞と北ドイツの新聞と、何れの地方が「Tiel」に淡泊なりしやの議論をなしたり。  
 二月十四日 笹尾氏曰く「フランス國民は Kunst u. Wissenschaft に酔ひ居ると。此語は今日の欧大陸の思想界を説明するに適當なりと感ぜらる。余が英國より英國に渡りて感じたる事も是なり。」

二月十五日  
 ○今日汽車中にて乗合せたる学生の説に、或學生は大學にゐる内に不規則な生活をなして不活潑になり、兵役によりて全く別人の如くになりて帰り來ると。兵役は、或意味に於て教育組織の一部なりと考へらる。

○近世の教育は知識の修得を専門にするものなり。ドイツに於て此風最も盛なり。英國に於ても新大學は旧大學に比して、其傾向に押されるもの如し。日本に於ては古の漢學塾は意志の力、廉潔の風を養ひしが、今日の學校は専門知識なり。此風にて進歩的學校が氣品の泉源となる事はむづかしかるべし。高等學校が學生の私行に干渉する必要はなかるべきや。學校當局者としては學生の氣風を養成するの心得なかるべからず。

日本の教育の理想は今日尙知識専門といふ事はなして居らず。品性陶冶といふ事が一大要件なり。柔弱者及卑劣といふ事を最も戒めねんべからん。

Feb. 13. Do. Turnen u. Schwimmen. Schmol-ler.  
 Feb. 14. Fr. Herr Offermann, Sekretär des Christlichen Studentenvereins, Herrn Pague u. Lutz.  
 Herr Sasao, Professor an der Tohokugakuin in Sendai, hielt einen Vortrag bei der Christlichen Studentenschaft. Er kam zu mir.  
 Feb. 15. Sam. Fuhr nach Düsseldorf mit Herrn Sato, um den dortigen Hafen zu sehen. Herr Zimmermann, dessen Vater der Direktor der Hafenverwaltung ist, führt uns durch den Hafen. Herr Direktor hat uns in seinem Zimmer gesehen.  
 Düsseldorfer Hafen: Städtische Unternehmung. Öffentliches nicht privatwirtschaftliches Prineip verfolgt in Gebühren-politischen neue Zwecke kostet 22,000,000 M. Ein grosser

Schlepper zieht so viel Kohlen wie 250 Eisenbahnwagen—Verbesserung der Rheinwasserwege — Verbesserung — Strassburger Projekt, Kunsthalle, Kunstakademie, etc.

Köln: Apollo Theater

Feb. 16. Son. Besuchte Herrn Lutz, Traifort Herrn Pagne. Ging in das Beethovenhaus. Sehr viel amerikanische Namen im Besucher Buch. Haus u. Museum sind von einem Verein unterstützt. Der Verein kaufte einen Brief Beethovens der 200 M. kostete. Kinematograph—ganz voll.

Abends: Herr Sato—Café.

Feb. 17. Mo. Sprachstunde—Zeitung—Colleg. Feb. 18. Di. Regen. Herr Zimmermann kam.

二月十七日

○近年ドイツには従来の三種の労働組合の外に *die Gewerkevereine* と俗称するものが発達したり。

○帝国大蔵大臣 *Steugel* は辭職に決したるもの如し。ドイツ人はまだ重税に苦しんで居らぬが、國の組織の複雑なると政党のまぢらなるが故に帝国財

政の困難を来すものなり。肉や穀類に税をかけながら、煙草、ビールに重税をかけぬといふのは変な財政策なり。之も *Compromise Politik* の弊なるべし。

二月十八日

○プロイス国会の教育予算の討議中、自由党の議員某は、ドイツに於ては下層より出でて才幹ある者に高等教育を受けしむるの機關なき事を攻撃し、国家自らその設備をなすべしと論じ尚此の如き設備をなす時は單に万民平等の主義を实地に行はしむるのみならず、*Proiens* の官僚政治に新しき血液を注入して、その働を敏活ならしむるを得べしといへり。之に対して保守黨員は主義に於てその説に賛成すれども *gehilfete Arbeitslosen* を多くする事を恐るゝらひ、文部大臣も同じ事を繰返し、且政府にて工、農学校、師範学校には此主義を實行せりと答へたり。ドイツに於て下層の者が高等教育を受くるの困難を察すべし。

○ドイツの学生は *Gymnasium* にて厳格な監督を受けて、大学に入れる当日より急に所謂 *Akademische Freiheit* を得る。然れども大学生と言へども若年者は自制の力を具へたるに非ず。彼等は試験なきに乗じて

學問を措き、又暇にまかせてビールを飲み、夜ふかしをなす。又ドイツの *Gymnasium* にては英國のそれの如く競技をなす事少なきが故に、彼等は運動に興味を感じずる事極めて少なし。しかも彼等は決して思想の上の子供にはあらず。理屈を言はずれば何れも中々うまき事を言ふなり。故に学生生活の結果は神経質にして、意気に乏しき人間を作るの外なし。

ドイツの大学生生活は人格を養ふの機關としては甚だ価値に乏しきものと考へざるを得ず。 *Verbindungen* は、ドイツ学生界の歴史的産物にして一種の氣象を養ふ機關なれども近來は反對者多くなるといへり。反對者のいふ所によれば *Verbindung* は酒を飲み血闘をなす所なり。且酒と血闘を強ゆるものなり。然れども酒と血闘とを除けば *Verbindung* は零となる乎。余は否と答へざるを得ず。

教育ある者が集りて団体をなす以上は、そこに相互の制裁を生ずるや疑あるべからず。制裁の標準はこの場合に於ては卑怯に陥らざるを以つて主眼とするならん。是少なくともドイツの *Studententum* の氣風なり。大学より *Verbindungen* を去らば、その氣風を

維持する事益々困難となるべし。

余の意見にては *Verbindungen* は維持したし。然れども酒と血闘とを少くしてスポーツを入れたし。現に *Rhenania* の如きはポートをなし血闘をなさざる事を標榜して一新派を立てたり。然れども此改革を全からしめんが為には *Verbindungen* そのものの改革のみにては足らず。 *Gymnasium* の学科を簡易にし、ここへスポーツを輸入して智力にかたよらざる、神経質ならざる活潑の青年を養成せざるべからず。要するにドイツの教育界はあまり知識に傾きたるを欠点となす。單に教育界のみならず全体の人気が此方面に傾きたり。通俗講演会や難しき芝居にて頭をいたため、夜ふかししてビールを飲み、而して人は近世社会の神経衰弱を患ふ。是不健全なる社会なり。

教育上に関しドイツが余に与へたる *Suggestion* は二つあり。

第一、学年試験の效能。

第二、競技運動の必要。

二点とも従来あまり尊重して居らず。特に試験は不都合なるものと思つて居たりしが、今日は真実悟る所

あり。

○都会の生活は淋しきものなり。学生、其他の独身者が住慣れざる都会に出づる時は随分時間のつぶし方に困る事あるべし。

同宿の小学教師等は講演会、芝居等にてその穴をうめて居る。おそらく之が普通なるべし。併し安きクラブを設けたらば更に妙ならんと思ふ。書生の為には寄宿舎もよし。

○プロイス議会は中央党の某議員は裁判所が美術の証人を呼ぶ事を攻撃せり。

曰く、或絵画が卑猥なりとて訴へられたる時、今日の裁判官は美術家を呼んでその意見を問ふを常とす。併し問題は絵が美術的なるや否やを判断する事にあらざり。絵が卑猥なる観念を普通の人民に与ふるや否やにあり。此問題は何人も常識を以て判断し得べき事なりと。之には政府も各派も賛成したり。

然るに *Kölnische Zeitung* は此討論を評して曰く、絵が普通の人民に対して卑猥の観念を与ふるは普通人が美術心に乏しき故なり。例へば裸体の名画を卑猥なりと発売禁止に付するとせば、社会は永遠に此名

画を含まずる事能はざるべし。真の匡正法は画の発売禁止にあらずして、人民を美術的に教育する事なりと。

余は久しく斯の如き問題を疑問として持ち居たりしが、現今にては *Kölnische Zeitung* のいふ如き議論に反対するものなり。何となれば人民を美術的に教育する事は殆んど不可能なり。而して絵画が社会に及ぼす感化力は善悪共速かに広まる。故に美術文学を主としてその倫理的側面を覗ざる時は社会は腐敗すべし。

○ドイツにては大学に入る者は先づ卒業すべき生徒徒にならざるべからず。中学校卒業の時に総ての学科に付試験を受けて及第したる者を *Abiturienten* といふ。現制度にては此試験は各学科を一樣に取扱ひ居る故、数科目に秀でて一科目に拙なる者は落ち、全科目に通じて普通の成績なるものは通過す。又此の如く多数の科目を一時に試験する故、学生に非常の苦痛を感じしめ、学校を不愉快なる場所となす。然かも其苦痛に相応じたる効能はなし。試験は主として記憶力の試験なればなり。大体学科多く、特に記憶の演習多き事はドイツの中学校の欠点なり。(*Kölnische Zeitung*)

以上の弊害は日本にもあり。而して余は右説に賛成する者なり。併し問題の解決は随分困難なるべし。

日本ならば英漢数を必須科目となし、別に歴史、地理の内を一科、博物、物理、化学の内を一科といふ如き選択科目を設けては如何と思はる。又此外に点数の揃ひたるのみを取らずして一科目に秀でたる者を特に重んずる方針も必要なりと思ふ。

二月十九日 今日も Herr Zimmermann と長き対話をなしたり。彼は今年夏英国へ行くとして、色々と他国を觀察するに就ての注意を問ふ。此質問は中々進んだものなり。十九といへば日本の二十か二十一に当るに、あれ丈の頭が出来居るは感心なり。日本にては先づ珍らしき事なり。尤も之はドイツにても珍らしきかも知れず。

○プロイス議会は官有石炭坑拡張に付公債を募集せんとする政府の要求を討論したり。

之に對し中央党は曰く、最近に至り石炭の非常に騰貴せるは、石炭カルテルが独占権を有する為なり。カルテルが市場の平均を保つ効能は之を認むれども、独占の地位を利用して市価を高むるに至ては見過すべ

からず。

此場合に備ふるには国有炭坑を拡張して、カルテルに對抗せしむるを要す。現今国有坑の産出高は全体の十パーセントなり。

自由党は曰く、近時の石炭騰貴はカルテルの独占の力にあらず生産費の増加による。賃金の騰貴、労働危険、労働者に対する諸設備の拡張されたるに依る。併し石炭の騰貴と石炭の不足とは別問題なり。石炭の不足せる原因は政府の炭坑が需要の盛なる時に産出を増さざるにあり。故に政府が公債を募りて自己の坑区を開発せんとするは異議なき所なり。

○ドイツにては小学教師の六分の一が女、ベルリンにては四十パーセントが女なり。女教師の給金は男教師の四十パーセントなり。

二月二十日 笹尾氏に会ひ、三角、佐藤兩氏を誘ひて会食す。

二月二十一日 夜笹尾君を訪ふ。

二月二十三日 三角君と Vennsberg へ散歩。

二月二十四日 兼て Barmen の Frl. Tiemann に何か福利増進施設を見なければとて紹介を依頼せしに

Barner Verein für Gemeinwohl の書記 Rector Halbach といふ人へ紹介せられ、今日同氏を訪ひて色々話し、且 Ronsdorf, Lungenheilstalt 及び市中の Koehschule, Nähschule を見たり。

○Verein は Fabrikanten 其他の慈善家の事業にて、十何年前に十二人の病人を治療せしより始り、千九百一年に七十万マルクの資本を投じてこの施設を建つるに至れり。資本の出処は寄附金四十万マルク、Versicherungsanstalt für Rheinland 三十万マルクなり。病人百四十人を收容するに足る立派なるサナトリウムなり。現今一人に付一日平均四マルクを要す。内二マルクは個人費用、二マルクは一般の維持費及び償却費なり。此等の費用は会費及び市の補助並に Landesversicherungsanstalt の補助を以てて支弁す。

職工が病氣にかかつた時は最初は疾病共済基金より無料治療を受くべき筈なれども、此療養所へ来れば完全なる手当を受くるの利益あり。疾病共済基金は普通の治療に必要なだけの費用を Landesanstalt に托し、Landesanstalt はそれに自己の資金を足して療養所の補助金となす。職工の家族は疾病共済基金の扶助

金を受くる事勿論なり。

病人の全治しがたき者は取らず。初期に属する者のみを入れ、全治せしむる方針にて入院者は平均十週間にて全治す。二回以上入院する者は全体の五パーセントのみ。病院の仕掛は新鮮なる空気を呼吸し、氣ままたに暮らしむる事を主とするものの如し。病人の食堂に集れる所を見るに、何れも仕事着のままにて楽しさうに話しあひ居れり。床につける者は四五人のみなりといふ。

余の最初の感じはこんな丈夫さうな人間を遊ばせて置く必要はなさうなものといふ觀念なりしが、二回以上の入院者は五パーセントのみといふ事を聞きて、成程之までにすれば病氣の伝播を防ぐ事が出来る。Alters-u. Invalidenversicherung にかかるべき人数を少なくするならんといふ事に感づきたり。

Verein の病院の外に市中で二十ヶ所の Koehschule 及び同数の Nähschule を経営す。此等は Fabrikarbeiterinnen に冬の内六ヶ月だけ授業す。毎週二回づつ出席せしめ、一級に十二三人から二十人を收容する。故一冬には九百人を養成する力あるなり。市は一般に

男児の補習教育は十七才まで義務的にすれども、子女には之を強制せず。唯 Verein に補助を与ふ。

○Rector Halbach は六十五才の老人で既に四十年間教職にあり。至て親切にして元氣よく雪中、雨中に拘らずよく案内してくれた。此種の Public minded man は他人の爲に働く精神あると同時に、事業をなし遂げた時自己の榮譽心を満足する者なり。従つて一寸頑固の所あり。Halbach 氏はよき model なり。

○同氏は Charakter の修養が大切なりといひたる故、余はドイツ人の Charakter とは如何なるものかと思ひ尋ねたるに、キリスト教主義なり。敵が戦場にたほれて水を欲する時は、自己が渴を覚ゆる場合に於ても先づ此敵に水を与へよといふ主義なり。又ドイツ人は treu であるといふ事を重んずといへり。

余は今までドイツ人は知識に重きを置きすぎて、人格の尊き事を忘れては居らぬかといふ疑を有せる者なるが、或は Halbach 氏の言が糸口となりてドイツ人の徳性を了解するに至るかも知れず。特に treu といふ事は何となく思当る様なり。

○又余は大学生の生活(余の悲観して居る)に付き

遠まはしに聞きたるに、之には同氏も面白からず思ひ居る様子にて、ビール飲みの減じる事、運動の流行しだす事を語り。

又同氏は Verbindungen の効を認むる者なり。

歸りの汽車にて兵士と語る。彼等は兵營生活に全く満足せる如く見ゆ。唯給料が一日二十 Pf. なりと言ひたる時はすまぬ様な顔付なりし。ケルンにて接続列車を待つ間 City Cafe に入りしに、日本へ行つたことのある男に出逢ひ共に飲みたり。此男は日本が hospital であつたといふて、真に日本を好む者の如くなりし。

二月二十五日

○今夜 Herr Zimmermann 方にて語れり。学生の Beleidigung といふ觀念を問ひたるに、例へば往來にて突き當つて来る者があれば侮辱を受けたといふ事になる。まじめな場に付て言へば、一学生が妹をつれて居たる時他の学生が酔て来て妹にからかへば侮辱になる。

舞踏に行つた時他の人が知らずに自分の婚約者をつかまへてはなさぬ時にも侮辱を感ず。此場合決闘を申

込まざれば男らしからず。

申込を受けた者は之を承諾せざれば男らしからずといふなり。

余より見れば之は日本の武士道の墮落したるもの、即ち俠客仲間位の觀念なり。こんなものが学生社会を支配しては困るなり。

○Gymnasium にて教師が宿題を与へ学生が之をなせる時は弱年者は打たれ、年長者は余計の宿題を以て罰す。此習慣が嚴重なる故学生は勉強せざるを得ざるなり。

此の如き嚴格なる監督を受けたる者が大学生となれば急ぐ Akademische Freiheit とかぶつばふなり。ドイツの Gymnasium を随分なめる人もあれども余には気に入らぬなり。

○Gymnasium の初年級は百二十人居るとすれば、卒業する者は三十人位の割合なり。

卒業の三年位前に志願兵免状を得て退学する者多ければなり、ドイツでも商工業教育は日本よりも實際的なり。日本程に學校万能主義に非ず。

○画三日前 Miss Hughes く余のドイツ悲觀論を申

are told. Germans are thrifty but their homes are managed with maximum of time and trouble. German lack of refinement makes it difficult for a Japanese altogether to like them.

Feb. 29. Sam. Besuchte Prof. Eckert auf der Handelshochschule zu Köln. Besuchte auch Konsul Gielen.

二月二十六日 新聞のたまりたる内より議会の記事を読む。ドイツは飽迄専門の國にて、議會の討論も至つて専門的なり。正確なると同時に充分細き点に拘泥する弊もある様なり。

二月二十八日 フランスにて来遊外人の消費する金は高は二十億マーク。人口一人に付六十四フランに当る。之に対して同國の輸出は人口一人に付き百フランに当る。イタリアは四億マーク。スイスは其輸出入の差高以上を外人より受く。

英人は自國にて外人の消費するよりも多くを外國にて消費する。米人の歐洲に遊ぶ者年々十二万五千人ないし一五万人あり。その消費高は六百ないし七百億マークなり。

送れり。余はドイツの militarism といふものを恐れず、知識主義及び芸術万能主義を恐る。

○ドイツ大学にて文科には貧生もあれども法科には財産家の子弟のみあり。文科ならば試験後直ちに世渡の途を得る故、在学中の stipendium (奨学金) 又は家庭教師位にて自活すれば足れり。然れども法科は多年無給にて資格を作る必要ある故到底貧民の行くべき所であらず。

ドイツの奨學費は法科には無用なり。従つて社会を支配すべき地位を得るの助となり。

Feb. 28. Germans are good at solid work but really a good deal of it is sometimes not worth doing. They are not good at brilliant generalisation or guess at truth. They care so much about their schools but sometimes we think their young men are worked into stupidity or something like that. They are boors. An English gentleman with their knowledge is often a much finer person. Military discipline outside army is a bad thing. Have your chimney cleaned when you

○一月二十三日付北京石丸君より來信。同君の妹を結婚せしむるに付余の意を問ふ。依つて余は今日俄かに妻を選定するの意なき事を答へたり。

○一月十六日付福田先生より來信。余が英國より送りたる美味入(先生の結婚を祝するため)到着の旨。

○先日 Miss Hughes く送りたる余の悲觀論に対し (Feb. 25) 返事あり。

二月二十九日

○Prof. Eckert の話。

(1) ドイツにては青年を使用する初めに半年位 Leihzeit として無給、又は極めて僅少の日給を与へて働かしむ。商業学生は入学前、又は卒業後に Lehrzeit を経ざるべからず。

(2) ケルンの學校は二年の後 Prüfung をなす。

以前には三年、四年の後試験をなす事もありしが、かくては実務に遠かるの弊あるを以つて短縮したり。

(3) 高等商業學校の卒業者は近來評判よし。高等商業教育反対者は漸次に引込みたり。

(4) ケルンにて商品學に付別に困難なし。学生は技

術に興味を有す。

(5) 商業実務の教授は実業界に多年の経験ある人より採用す。

○ケルン高等商業の報告。(余の感じたる点)

(1) 学生は卒業試験よりも志願兵免状を得たる後修業年限を終つて来る者多し。実務に経験ある者が学生中に在る事は学風に好き影響を及ぼすべしと信ぜらる。

(2) 学生は自立したる大商工業者の子弟多くして、会社員又は官吏の子弟は割合に少なし。之は日本の現状とは大に異れり。

(3) 創唱者 Mevissen の主張は単に商業教育のみならず、一般にケルンの市民に学問の影響を与へんとするにあり。此学校の通俗講演は此趣意を充すものなり。学生三百人に対し聴講者は千人以上あり。

(4) 新築校舎は三百万マークを費したり。其他費用充分にして設備完全なり。

三月一日 今日より三日間はカーニバルなり。カーニバルの特色は人々仮装して市中に出で、又はカフェ

ーに行き知るも知らぬも互に戯れ、老若共々我を忘れてさばぐ事なり。

又町々に Karneval Gesellschaft といふものありて行列を作り練歩く。その行列の特色はやはり仮装にあり。元来はローマの風なれども今日はキリスト教の Fastnacht と結びつき、旧教の行はるる地方一般に伝はれり。

ドイツにても Rheinland, Bayern を主とす。Rheinland の内にて最も Köln に盛んでして、Elbertfeld には徴々たる有様なり。

今日はボンの行列の出る日にて朝より賑かなり。マーカーに無数の公衆集り互に紙きれをぶつつけ、又は羽ばたき様のものにて顔をなでまはせども怒るものなし。夜に入りては人々カフェーに集る。

余は Sonne, Franziskaner, Habsburg, Wiener を廻り色々の人と語を交へたり。或商人風の男は傍にゐる女を指して、此人は自分の知人にあらず。三十分間に友達となりたるなりと。

之がカーニバルなりと余に説明したり。見れば其女は Zigeuner の風をなせども母親と共にあり。様子を

見てもあやしき者に非ず。

又或書生は何処かの店女らしきをつれて居たり。かくて彼等は少くとも一時、二時迄、多数は朝までさばぐ居るなり。

三月二日 Rosenmontag とてケルンに有名な行列の出る日なり。此行列の模様を見るため窓を借らんと思ひ、先日ケルンに行きたる時間合せたるに二階は窓一つにつき五十マーク、三階は三十マークといふ。あまりに高ければ止めたり。

今朝佐藤、Meyer 両氏と共に出かけ、途中 Lutz 氏に会ひ、四人組にて人垣を押し分け、Schiller-gasse にて待つて一時間余り、行列は十幾台の花車を擁し、様々の出立に隊伍を組み騎馬及び徒歩にて来れり。服装のぜい沢なる事驚くばかりなり。行列に加はれる各隊は諸の Karneval Gesellschaften より派出するものにて中には何々の同職組合より出でたるあり。Handelshochschule より出でたるあり。最後に Prinz Karneval の車来る。車の装飾は年々新工夫の意匠になるといふ。又昔の市民兵の服装をしたる一隊(之を Funken といふ)の者は未知の婦人をキスする特権あり。

余の立てる近くに一人の別嬪あり。佐藤氏と共に注目し居たるに Funken も又同意見と見え通行の際捕へてからかひ行きたり。

行列過ぎて後市中を行くに、群集の多きためにホコリ立ち暑し。併しけんかや怪我人は見ざりし。二三のカフェーを廻りたる後 Ewige Lampe といふ Wein restaurant に入る。此家は大きなホールの外に数個の小きき室あり。我等は小きき室に入り、七八人の客と一組になりて歌ひ、飲み、さばきたり。

此室に品のよき婦人ありて佐藤氏及び余と語りしが、それがあやしきものなる事は後に知れたり。或人が日本の為に歓呼を掲げたる故、余も立てドイツ及びドイツ皇帝の為に万歳を三唱し、一同之に和したり。一時四十五分の最終にて帰る。

ステーションに居りし一旅客が余に向つて pigeon English を話すかと問へり。依つて反問して曰く、君は柔術を知るか。曰く、否。然らばさる問を答する勿れ。日本人に対して pigeon English 云々は侮辱に当るべし。是危険なりと彼唯々として退く。

三月三日 昼間は新聞のたまりたるを読み、次は又

Café 廻りに出かけた。Sterne Hotel には Masken ball あり。仮装したる男女蝶々の如くに舞遊す。此夜は Meier と学生某とを伴ひ American bar, Martin などへまでひやかして行きたり。鬼に角 Karneval の三日間を Karneval 的に飲んでおぼい暮したり。

三月四日 兼て学生 Prange 氏と約せるに依り、三角、佐藤両氏と共に Elberfeld に行き同氏を訪ひ、午前中は市中を散歩し、午後は遠足に出かけたり。Prange 氏は未だ昵懇にもあらねど、父母も至つて hospital なる人にて余等を歓迎し、父 Prange 氏は遠足を共にしたり。

遠足の筋道は Cravenberg を経て Solingen や Renscheid との間の谷を出て Müngsten の大橋を見、Gastran に行き水車鍛冶を見、Ronsdorf の Talsperre を見て帰る。Müngsten の大橋は Wupper に架す稀有の作品なり。此橋を兩岸より建初め中央にて精密に符合せしめたる事を思へば、その計画の数学的精密なるに感服せざるを得ず。水車鍛冶は今日も沢山あり。併し水力足らずして、蒸氣力を合せ用ふるものも少なからず。大抵 Verlagsystem にて分業は頗る進めりといふ。

と。京都の染物屋を想ひ起さしむ。

Bergisches Land は美しき国なり。山高からねども凹凸多し、而かも山上平かたして山脚急坂をなし、山と山との間を Wupper その他の急流を通ず。山形は Thüringen に似たり。Müngsten は大和の月ヶ瀬に似たり。

此夜三角君は帰り、佐藤氏と余は Elberfeld に泊る。

三月五日 早朝立雪 Dortmund に行き港を見、引返して又汽車に搭じて Rouchel に行き、馬車に転じ有名な Schiffshebewerk を見て行く。帰途馬車を得ず、雨雪の中を歩行したり。それが為時を失し、初めて計画し置きたる Bochum の Bergschule を見る事能はざりし。此旅行に依り Dortmund-Elms Kanal の規模を見る事を得たり。

Panzel 行車中にて職工親方体のもの二人と語る。

此人に人を疑ひ懼れ又は軽蔑する様子なく色々と面白き事を聞ひたり。英国の職工と語れる感ありし。

三月六日 朝は寝、午後荷造をなす。夜新聞のためりたるを讀む。

○近日 Turnvereine は Berlin に全国大会を催し

決議して曰く、小学校を去りたる者の為に学校教育を継続せしむるは絶対の必要なり。之なきが為に多数の少年は心神の墮落に陥る。此弊を救はんと欲せば宜しく補習学校を拡張し、十四才乃至十七才の少年に対し義務的に学科を教ふる外、体操及びスポーツをなさしむるべし。体操を補習学校の必須学課となし、公認 Sport club に属するもののみ此義務を免除すべし。

○近日 Berlin の某 Gymnasium 学生自殺したり。その原因は学生が授業時間に必要なる書物を持参せざりし事を教師が咎め、学生の多少反抗したるに對し教師が嚴責を加へ、尚謝罪せしめんとしたるにあり。学生の遺書に依れば彼は此教師に謝罪するにはあまり stolz なりといへり。是勿論極端な場合なりといへども、ドイツの Gymnasium の教師が如何に役人なるかを思ふべし。

三月七日 終日荷造と雑用に費す。夜佐藤君來訪、弁護士經驗談あり。

三月八日 雨。三角、佐藤両氏と散歩、夜 Stadttheater; Faust (Schauspiel)。

三月九日 Prof. Schumacher を訪ふ。

○Prof. Schumacher 曰く、ドイツの大学にては経済科を理論、実地の二部に分ち講義すべく規定され居り。従て特別の題目を充分に論ずる事困難なり。アメリカにては必要に応じて鉄道とか工業組織とかを講義し、経済学中特別の題目に付て研究を積むの便宜あり。

○又曰く、高等商業学校に良教授を得るは頗る困難なり。Handelstechnik の教授は現今の所、實際の老練家を聘する事に成て居れども實際は眼界狭きを常とし、Professor に適當せる人至つて少し。されども又将来に於ても商業学校より Handelstechnik の教授を出す事は困難ならんと思はる。尚高等商業学校には重要商工業国の現状を説明すべき学科を必要とすれども、適任者なき故如何ともしがたし。此学科は geschichtlich よりも寧ろ organisatorisch なるを要す。且各国の重要問題の起因及将来を明かにするを要す。

夜 Herr Meier zu Bentrupp と語る。

○日本の学校ストライキの事を語りしに、ドイツには絶えて此事なし。Gymnasium の教師は随分学生より馬鹿にさるる事もあれども嚴罰を課するの権を有

す。Schulinspektor は勇に角をとなしを生徒を Mus-ter とす。

Direktor は大抵 Kleinlichkeit の特徴を有す。Discipline は行届き乱暴する生徒少し。

三月十日 愈 Berlin へ引越す。九・十六発。D-Zug 七・二十 Friedrichstr. 着。早速 Admiralsgarten Bad に入り、夜を Café 廻りに費し結局悪遊に終る。

○Berlin に於ける first impression は町の清潔なるなり。人通りの多き事は London に及ばず。Berlin は官庁を中心とす。Friedrichstr. Leipzigerstr. は London の Piccadery, Bond st., Oxford str. に比すべき City の如き quarter を見ず。City は Rathaus の近傍であり。

三月十一日 大使館に出淵君を訪ふ。Pension を二三軒見たる上て Pension Linde の Kurfürstenstr. 81 Bld に逗留すべく決定す。volle Pension にて 150 日の約束をなす。主婦は老年者にて二人の女中あり。下宿人には Konteradmiral 何某の夫婦と若き婦人二人あり。隣室の lady は Konservatorium の生徒にて、時々 piano をひく。やかましいが一寸別嬪にて且

愛想よき故許して置いてやる。

午後出淵君夫婦と Unter den Linden を散歩す。出淵君には五年目で会つた。不相変議論の根拠が精確でないけれども、彼が朝鮮支那で得た経験の結果として大に見るべきの進歩をなした。

三月十二日 Lehter Bahnhof へ荷物を取りに行くと、帰りに自転車、Tiergarten を通りぬける。Asphalt の坦道を一直線に快走し実に愉快なり。

午後 Friedrichstr. へ買物に行く。寒くして曇れり。夜は Volkswirtschaftlicher Verband の集会に行く。会は或 restaurant の一室を借切り出席者二十余人あり。講演は Prof. Lainer : Buchhaltung u. Wirtschaft なり。講演者の主意は Buchhaltung の結果を取りて Volkswirtschaft を研究するの材料となすこととあり。種々の discussion 繰り出づたり。double entry を官庁に應用すべしと云ふ余論も出づたり。新聞にて何人も出席する事を得ると書いてあつたから行つて見た。何もいはずに会が終ると直ぐ帰て来た。別に話しかける人もなかつた。討論者は Dr. 付の社員が多い様であつた。

三月十三日 Neue Don (renaissance) を見る。内外共にはやかなる裝飾あり。手の込み入りたる念の入りたるこしらへなり。席毎に姓名を刻みたる札を付す。何れも肩書付なり。

Katholische Kirche は遙かに小し。丸屋根のみより成りたる如き建物 Pantheon を做て成功せざりしものか。宮城は正面の外には一向飾なし。万事派出なる Berlin に昔ゆかしき Brandenburg 公の勤儉の佛を止むるは此御所位のものなるべし。

Universitätsbibliothek に入る。学生に非ざれば入れずといはれて戻る。Köln Bibliothek に入る。大使館の証明を要するといはれて帰る。学者固たるドイツの図書館は公衆に対して親切ならざる事ごんなものだらうか。

Aquarium を見る。地中海の魚族を集めたるは感心な様なれども、浅草の方が水族館としては完全なり。入場料一マークは高い。但し Mexico の Axoloti は初めて見たり。宿へ帰れば警察から詳細身分を質され、旅券を徴せらる。日本を出て二年、旅券を用ひたる事は未だ一回もなし。何処かへまほこみたり。

三月十四日 雪。大使館に一寸出淵君を訪ひ、夫より Nippon Klub へ行て見る。

Berlin にて日本人連と交通せず居れば随分暇がある。此間に本のみ読む事も出来ねば兼て延引に成て居る商業史の原稿を作るがよしと思ひ今日より着手す。

三月十五日 雪。今の Pension にては十一時になればガスがきえる。それを切にして寝る。朝は隣室のお嬢さんが八時頃からことごとやり出すから目がさめる。volle Pension にしたから食事時も定て居る。従て生活の規則を立てるには都合よし。

近所でイギリス新聞を見るべき家をさがす。Café Splendid に Paris 発刊の New York Herald あり。夜 Neues Schauspielhaus へ行へ。Dummkopf と

いふ滑稽世話物、何もわからず夢中で見てしまふ。三月十六日 鹿野清次郎氏及文部省へ手紙を書く。文部省へは昨年七月以来の修学事項を報告し、ドイツの高等商業教育に付て心付きたる所を報道し、米國行の命令を請求す。久しぶりに天気よし。自転車を試む。Dennewitzstr

① Volkshad にて泳ぐ。 Bonn の Stadthad に劣る事数等。入場料 25 pf.g. Wasche 10 pf.g.

Klub へ行き飯を食ふ。味噌汁、サシム、シタシ、玉子やき。 Klub の家六室、百二十坪の家賃なり。

近着の日本新聞に依れば、今度の増税問題には商工業者の連合反対運動ありたる様子なり。前内閣派の煽動かも知れぬが兎に角新現象、昨年足尾事件と共に余の注意に触れたり。

三月十七日 又雪になる。午前雑用、Deutsche Bank へ預金を頼みに行つた。 Pass を持つるか問はれた。銀行が Pass をあてにするとは面白い習慣なり。ホムより日本へ送つた荷物の運賃は 42.50 今日送金す (118 Kos)。

午後及夜商業史起稿。

三月十八日 雪及雨。 Zimmerstr. の Städt. Bibliothek を見に行く。ドイツの新聞雑誌は一寸集めてあり。一寸 Manchester の Rushmire Reading Room 位のものなり。 Schmoller 恐慌の章を読む。

三月十九日 Admiralsgartenbad にて泳ぐ。 Stadthad よりも高くして設備は却つてあつた。

Museum für Naturkunde を観る。動物の部に非常に大なる狸々、完全に発達したる木の葉虫あり。 Bergwerksmus. も観たが此方は大したものにあらず。

午後商業史、貨幣及信用の章出来上る。夜 Fulda, Dummkopf を読む。芝居で観たからわかりがよし。

三月二十日 去る十八日は千八百四十八年の小革命の六十年目にて Soc. dem. は之を Wahlrechtsreform の demonstration に用ひんと企てたり。午後は工場を休みて革命の乱にたふれたるもの墓地へ出かける職工多かりし様子なり。夜に至ては数十の集会催され、そのあふれが市中の示威運動となり、巡査との衝突となり、抜剣さばきもありしといふ。こんな事は一月の十二日にもあつた。十八日には三十八の Massenversammlung 二万の会衆ありしといふ。

今年二月中ドイツに起りたる strike 数は三十三、一月には二十四、昨年二月には十三、不景気の年に strike の多きは如何なる現象なるか。

イギリスにては前週中 Labour Party の Unemployed 救済案が提出された。此案の主意は Right of La-

bour に基たものである。然るに政府は之に反対したが自由党の一部は賛成した。政府は保守党の助けに依りて僅かに成功した。此時 Lord Rosebury は演説して曰く、もし Socialism と Protection と何れか一方を選ぶ必要が起れば自分は残念ながら後者を探るべし。

Socialism は国家、宗教及自由主義を破壊すればならぬ。

政府にては Sir Henry Campell-Bannerman 病氣にて引こもり、Asquith 代理総理たる中に Bannerman は危篤になれり。今後英国の政界は多少の変動あるべし。帝国大蔵大臣 Sykow は財政改革を今年中になすべしといふ。

喜劇 Dummkopf を一日がかりで読んだ。主意はこのせちがらい世の中に無類のお人よしを出し、此人物がさんざん他の連中に馬鹿にされた後遂に幸運にぶつかるといふ筋。

三月二十一日 Berlin へ来てから起居の規則立す。退屈な事は更になし。日本クラブにて陸軍少佐井上氏に会ひ色々話す。同氏曰く、ドイツにては貴族にあら

ざれば軍人として出世する事難し。併し日本の貴族とドイツの貴族とは非常にちがふ。ドイツの貴族は体格も精神上も平民以上なり。日本のは平民以下なり。併しドイツにて貴族が特別優遇さるるは好ましからず。

三月二十二日 好天気。自転車走らして Steglitz 方面をちろちろ restaurant にて英人 Fielding といふ人に会ひ共に Wannsee へ行き Hundekelchensee を経て帰る。Berlin 郊外は平坦にして松林多く、その間に大小の湖水をたたふ一種の風致あり。自転車乗の見地よりいへば樹木が往來に影を作る故、英国の牧場多き田舎よりも快し。新市街、新家屋の盛に建設せらるる有様はめざましきものなり。新築家屋はやはり宏壮なる建物にて Family houses は殆んど見る可らず。裝飾は二十世紀 Berlin 式とも言ふべきはでなものなり。珍らしき好天気として Auto や馬車、又は徒歩にて出掛ける公衆続々たり。その服装は立派なものにて、之もはでを主眼とす。Berlin のドイツ人は中々儉約ならずと見えたり。

午後 Club へ行き新聞を読む。 Herr Zimmermann へ手紙の返事を出す。此人は余との交際によりて大に

学ぶ所ありとて喜び居れり。

夜新聞。

三月二十三日 運動の為泳ぎを毎日する事にした。朝八時乃至九時に起き、食事後新聞、雑誌等を読み及雑用をたし、十二時乃至二時の間に泳ぎ、三時乃至八時読書及執筆、夜は勝手。十二時迄に寝る。之を規則としようと思ふ。今度は出来さうなり。

今日手袋、靴下等を買はんとして下宿の近所を歩きたれども、唐物屋といふもの更に見当らず。此辺は Warenhaus des Westens の独占と見えたり。尤もよき品を買はんとするものは Friedrichstr. まで行くならん。

午後恐慌史を書く。出来上る。

夜 Fr. Linde の案内にて或文学会へ行く。Recitation 及 Singing あり。Recitation は少しもわからず。Fr. Linde は元教師をしたる事もあり。文学を好み、同好の婆々を連中と英語、仏語の Kränzchen を立てて居る。

三月二十四日 午後より夜へかけ一時間運動に出た外は Schmoller Handelspolitik の章を讀む。中々勉

強したるものなり。

Etage 住居の爲めに大きな家を建てれば必然暗い室が出来る。Parterre にては殆んど真黒暗なり。之を Berliner Zimmer といふ由、Etage 住居は宏壮なる家を建て町を飾るに適すれども、右の如く間取りのわるくなる事、二階でがたがたしたり音楽をやつたりしてうるさき事、の外に庭の取れざる事を欠点とす。ドイツで宏壮美麗なる住宅に配するに広き道路、大なる Anlage を以てし、その壮観に依て家族的 Comfort の欠けたるを補はんとするもの如し。土いぢりをして見たいものは市外に共同の庭地を買ひ、又借りて所謂 Gartenverein を作る。之は Leipzig で見たり。

三月二十五日 徳川家から借りる事にした金はまだあると思つて居たが、もう受取済になつて居ると兄からいふて来た。兄はまだ心配してくれなうだけれどもそれは断る。但し岡田から内田へ金を返して、それを余が借りる事が出来るならば周旋を頼むといふてやつた。同時に小泉へ四百円融通を頼んでやつた。

午後 Schmoller を讀む。

夜 Schiller-Theater へ行く。Kaiser u. Gallier

von Ibsen. Bysantin 時代の歴史の。

三月二十六日

天気引つゞいでよし。今日は泳の代りて自転車を試む。商業史貿易及殖民の章を書く。

夜は Friedr. Str. へ散歩した。

其後の觀察に依れば今の下宿は随分ドイツ人の弱点が顯はれて居る。Fr. G. が自分は英語が出来るといふは Fr. F. はそんなら話して話して見るといふ。語を中たら一向出来はしなうが、片方自分ば學校の Dickens を讀んだといふて感服して居る。J. はドイツ人女学生かたをなう困たもんだ。

三月三十日 天気又わるくなる。

März 29. Somm. Besuchte Herrn Debuchi. Habe auch Prof. Hara getroffen. Radelte nach Onkel Toms Hütte, Zehlendorf u. Wannsee, furchtbar staubig.

März 31. Di. Geschrieben: Arbeiterfrage.

April

Apl. 1. Mi. Besuchte das Museum und die Gemädegalerie. Das Berliner Museum hat

nur die Reproduktionen der griechischen und römischen Skulpturen in Rom, Neapel, Dresden, Paris und London. Die Gemädegalerie hat keine oder nur wenige Arbeiten der alten Meister. Die Hauptattraktionen sind von den neuen deutschen Malern, aber sind sehr gut.

Nachm: Handelsgeschichte.

Abend: Lesen.

Apl. 4. Sam. Radfahren—Handelsgeschichte-Verein für russ. Kultur.

Apl. 5. Somm. Radfahren mit Herrn Fielding durch die Wälder.

A new experiment in housekeeping is being made in Berlin. There are houses resided by twenty five families in this imperial capital where flat-system is carried out into perfection. They have got an idea of having a common kitchen and a common cook and it was realised. If it would be widely adopted is not yet sure. A female cook for such a large kitchen costs 60 marks, while a young "Köchin" for small families

would demand 30.

- April 5. Sonn. Nachmittags schrieb einen Brief an Miss E. P. Hughes.  
Im Jap. Klub. gegessen.
- April 6. Mo. Schrieb Handelsgeschichte Greichenlands. Hat etwas Durchfall gehabt, vielleicht wegen des japanis. Essens. blieb ganzen Tag zu Hause.
- April 8. Mi. Bad. Handelsgeschichte-R. Herrn Debuchi
- April 9. Oo. Schwimmen. Handelsgeschichte-Vortrag d. Frauenverein.
- April 10. Fr. Kais. Friedrich Museum. Handelsgeschichte. Wintergarten.
- April 11. Sonn. Schwimmen. Handelsgeschichte. Metropol Theater. Erhielt M. 1,844.01 vom Unterrichtsministerium.

四月十一日 東京高等商業学校学科改正案下策。  
○改正の要旨は不緊要なる学科を除いて時間を少くし。緊要なる学科の効力を増すにあり。

○現行の課程表中より除き得しと考へらるる学科  
予科にては書法、珠算、数学、応用物理、経済通論

た。会衆四十人もあつたかと思ふが多数は勿論女だ。  
近年ヒンソンの Haeckel の Weltansicht が広まり其説を信ずるもの多し。Monistenbund を組織しつて世のヒソカ宗教家は其の反対を力いぢたり。

演説者は人間が猿から進化したと云ふ議論を解して居る人ぞ。其説は甚だ旧式なつたが職業中から討論者が出て中々進んだ説を吐た。其討論者の内には女もあつた。ヒンソンの政治的冷談だがこゝんな事にならば中々驚かぬ議論やのぞい。彼種面者由國民を輝たすのたと思は。

April 12. Sonn. Nach Potsdam zu Rad gefahren. Potsdam selbst ist keine schöne Stadt. Die Umgebung mit den Seen ist schön. Es ist wirklich eine Frage, warum ein See nicht für den Sanssouci Garten benutzt worden ist. Heute war es zu kalt für einen Ausflug. Da waren nicht viele Leute entweder in Potsdam noch unterwegs. Berlin nach Potsdam 1 Stunde 40 Min.

Nach der Fahrt ein gutes Schlafen zu Hause gehabt. Abends Herrn Debuchi

を除く。之に依て時間合計三十二時間を二十六時間に減す。

本科にては商品学、破産法、商事行政法、国際法を除く。商業学に就ては銀行、保険、海運、鉄道取引所を撰択学科となし四時間を与ふ。之に付ては商業通論の内にて破産、商事行政及商業各論の要目を講ずる必要あるに依て通論の時間を三時間に増加す。之に依て時間総計九十四時間を減じて八十九時間となす事を得る。  
機械工学は之を予科にくり入る。

語学に就ては成可く予科及本科一年に集中し、二年以後に参考書を読み得る丈の力を与ふべし。第二語等は二年、三年の時間を一時間にして予科及本科一年の時間を五時間づつとなすべし。英語も三年の時間を一時間とし、一年二年に八時間づつを与ふべし(此二頁疑問)。

此の如くして初年の時間多くなれば法律を後廻してすべし。

○某婦人会の催して Nürnberggerstr. の高等女学校内に Pfarrer Delbrück なる人の Monism 反対演説ありといふ事を往來の広告塔で読んだから早速行て見

besucht. Er ist jetzt der einzige Freund von mir in Berlin. Ich besuche ihn einmal jede Woche.

The automatic restaurant is one of the things I have found interesting in Germany. Automatic machines for selling goods are generally more utilized in Germany than in England. Another example is the machine for tram tickets in the Underground Railway Stations.

Having come back from Potsdam, I sat for supper with a lady friend of Fril. Linde. Her question for me was "Wo haben Sie in Potsdam eingekehrt"? She was asking where I have lunched. When I answered, she said it was a very good house and that we got it cheap too, perhaps for 1 mark 20! She is apparently well educated and a fine old lady for a German.

April 13. Mo. Schwimmen. Handelsgeschichte. Café.  
In Germany everything is to be paid for in advance. I bought a series of abonne-

ment-cards from a circulating library & I was asked to lodge 3 marks as security. Pension asks to pay the fixed amount for a month in advance. A branch-office of a Great Bank cannot give on a cheque without going to its Head Office. Wenn man im Tiergarten ein Boot mieten, muss man M.S. deponieren.

April 14. Di. Handelsgeschichte. Schwimmen. April 15. Mi. Radfahrt nach Spandau. Text von Walzertraum gelesen. Theater des Westens: Ein Walzertraum.

四月十五日

○今日午過ぎは気分よくはなぬ人間ばかりでは。第一弊が不都合だ。彼教師の免状持て来公の会話位出来ると梅のち、甚だ社議をむきかゝぬ。食事の時「目」の録をらへてのちくす位な話こじやるとこじや。皆の趣やがまたちよまごかるとは。甚だ不都合ではある。なまぬこじやるとこじやを教師が聴取やこじ聞へるとこじやを行なふと、甚だ一筆仕舞かんとすたの、Naturallich なおやなぬ。極米教師はこじやの興

へなこじやをこじやをせぬ。こゝな人間には謙遜が難いであら。教師は今日未の Kündigung を与けたのじや、頭はこじやをこじやしたる趣やな、そのおちこのおちへはぬ。其の彼の顔色が成つて居るや、こじやをこじやした。

April 16. Do. Radelte noch der Havel. Arbeitete bis Nacht.

April 17. Fr. Karfreitag. Radelte mit Herrn Fielding in den Wälder. Besuchte Herrn Hara, sprach mit ihm bis Abend. Fr. Mukasa schrieb mir wieder erst nach einer langen Zeit.

April 18. Sb. Schwimmen. Las Schäfer, Weltgeschichte d. neuen Zeit. Erhielt einen Brief von Herrn Zimmermann; er sandte damit einen Brief seines Freundes, der die Frage beantwortet: Was ist die Bedeutung der Studentenkorporationen? Nach diesem Brief ist das Ideal der Korporation das griechische Ideal: Schön u Gut, aber nicht alle Korporationen sind gut. Mitglied einer der Korporationen mag gern von einer anderen

sich fern halten wollen, weil sie so niedrig ist. Man muss einen tüchtigen Leiter haben, wenn eine Verbindung erfolgreich betrieben werden soll.

April 19. Sonn. Regen. Vormittags gelesen. Nachmittags geschlafen. Zoologischen Garten besucht aber es war schon 7 Uhr und viele Tiere hatten geschlafen.

Von den Zeitungen gemeldet, dass ein deutscher Student aus München im Krater des Vesuvs sich selbst getöthet hat. Einen Analogue Fujimuras.

April 20. Mo. Ostern. Vormittags im Tiergarten gendert. Nachmittags nach Teufelsee und noch weiter in die Wälder geradelt. Viele Spaziergänger. Es hat etwas gehagelt.

Abends war bei Frau Debuch. April 21. Di. Schäfer. Schwimmen. Handelsges.

Erhielt einen Brief von meinem Bruder mit einem Scheck für 1,040 mark. Marquis Tokugawa hat mir das Geld geschenkt, wofür ich sehr dankbar bin, besonders weil ich

jetzt nicht mehr das Stipendium von dem Kulturministerium zur Verfügung habe. Schrieb dem Bruder und Herrn Kishi, dem Kanzler des Marquis.

April 22. Mi. Schwimmen. Schmoller. Spaziergang nach der Stadt.

April 23. Do. Schwin. In der Stadt: bestellte Kamelhaardecke und Rasiermesser für Herrn Koizumi, bestellte einen Frühlingssanzug bei Herrich für M. 90. Abends bei Herrn Debuch.

Erhielt einen Brief von Herrn Koizumi mit einem Scheck für 1044.50 od. \$250. Von dieser Summe sind \$50 für seine eigene Sache, die ich über ihn bestellen soll: \$200 hat er mir gesandt meinem Brief von März 25. entsprechend. Er beartragt das Geld mir ohne Zinsen zu verleihen. Ich habe jetzt Geld genug, da etwa M. 2,080. plötzlich eingelaufen sind.

April 24. Fr. Schwimmen, Rudern, Spaziergang.

四月二十四日 聯合の森米の森米の森米の森米

をひく所の問題は南北極探険と空中船なり。

空中船の研究は独仏に於て最も盛に行はる。日本にては此両問題に付て人が興味を有せざるのみならず、総じて科学上又は技術上の時事問題と目すべきものなし。例へば日本に存在する鉄の鉱石を原料として鋼を製する方法の如きは日本の産業革命に至大の影響を及すべきものなれども、是未だ発明家の問題となり居らず。日本の科学界に *Erdmungsgeist* を鼓舞する必要あり。而して其時期に達したるもの如し。豊田式織機、鈴木式醬油、其他の発明は此機運の先鋒なり。

ドイツの経済的進歩に対しては *Thomas* 式製鉄術、アニリン染料、及電気モートルの発明が大なる刺激を与へたり。日本もドイツの如くに進歩せんと欲せば何か新発明をなさざるべからず。

ドイツの電気事業は日々に進歩す。前に *Köln-Trier* の鉄道を電気動力に変せんとしたりしも陸軍省の反対に依て中止せしが、*Leipzig-Halle-Magdeburg* の 164 km は電気動力を用ふる事となるべし。此変更の理由は地方の *Braunkohl* を利用して経費を節する事を得るにあり。Braunkohl は Locomotive には用ひ得べ

からざるも、普通の Boiler には適當するなり。

人民の懦弱になる事は最も恐るべき事だと思ふ。競技を奨励して、活潑なる娯楽に人心を向ける事は非常に必要である。日本の紳士には茶屋遊びを以て主なる慰とする事が、沢山あるが、之は不健全である。ドイツ人が夜通しの *Cafe* へ出入するのと撰ぶ所はない。神経衰弱は文明の病氣、世の中が忙しくなるから人間が nervous になるといふ説はドイツで度々聞たが、夜更しと運動の不足、新空氣の不足もやはりその原因である。

金が出来ると人が懦弱になる。忙しければ車へ乗るのは当然の事で、所謂徒歩主義等是不養成だが、同時にその金を運動の方に使へした。Automobile でも Yacht でも、外国旅行でも遊び事で金のつかひ方はいくらもある。Tennis、游泳でも随分贅沢が出来る。金のある人は馬車へ乗て Tennis 場へ行くがよし。

食道楽は大に可なりだが、運動をしないで食慾のたれない人間が薬味のこつたやうで少量の肴を吞込む様な柔弱な食道楽は宜しくない。充分に運動をした上で、滋養分のうんとある奴をしごたまふがよし。江

戸料理のさうばりしすぎたのは健全な人間には通用せぬ筈なり。江戸風は結構なれども、文化文政の濶季な風は亡國の初なり。

金が出来るのは結構なれどもそれが左うちへの理想に向けられれば世の末なり。それが飽足らぬ娯樂の慾に向けられれば進歩すべし。

四月二十五日

○服部氏の語で、或ドイツの連隊の士官集會所に働きし兵卒がツランの酒をぬすみ飲みしたが、除隊後良心の咎むるままに隊へ書を送りて酒代を支払ひたしと申込みし由。ドイツ人の *Treu* といふ事は此辺にある事なるべし。

April 25. Sonnabd. Besuche Herrn Hattori, Verwandter von Herrn Koizumi und Dozent an der Waseda-Universität. Bei ihm habe ich auch Herrn Tsuji, Lektor an dem orientarischen Seminar, getroffen.

○ Ludwrig Fulda は当今有名なドイツの文人なり。此の人のアメリカ見聞録中にいふ。

○ Die oft ins masslose gesteigerte Leidenschaftlichkeit, mit der diese Sportkämpfe betrieben und von der ganzen Nation verfolgt werden, hat natürlich die Schattenseite, das Interesse vom Studium abzulenken, und eine Sache, die doch schliesslich nur als Mittel zum Zweck ihre volle Berechtigung hat, zum Selbstzweck zu erheben. Aber dafür beegnet man dort auch nicht den schmalschultrigen, engbrüstigen und bleichsüchtigen Brillenträgern, die in so betrüblicher Anzahl unsere Hörsäle bevölkern; und es ist immer noch besser, dass die amerikanischen Studenten ihre Zeit mit Kräftigung ihrer Muskeln und Nerven, als mit Frühschoppen und Vespertrunk und durchkneipten Nächten verschwenden.

April 26. Sonn. Schnee am Vormittag. Ich habe in dem japanischen Klub Herren Wada und Fukada getroffen. Die beiden Herren habe ich in Leipzig kennen gelernt. Ich habe mit ihnen gegessen und dann gebummelt. Kam sehr spät nach Hause.

April 27. Mo. Sah einige Zimmer zu vermieten. Ging in die Universität um matriculiert zu werden, aber die Matriculation erfolgt nicht heute sondern am nächsten Mittwoch. Vorlesungen haben schon von heute angefangen. Herr Ota, ein H.C.S. Mann und jetzt hiesiger Botschaftssekretär, hat mich besucht.

April 28. Di. Ging nach der Handelshochschule, um über das Kollegiengeld Bericht zu erhalten. Ausländische Hospitanten sollen eigentlich 20 M. für Wochenstunde bezahlen, aber wenn er ein Student der Universität ist, wird es zu 5 M. herabgesetzt.

Anproben des neuen Anzuges bei Herpich. Sah noch einige Zimmer. Ein Zimmer mit genügender Grösse kostet im allgemeinen 50-70 M. ohne Frühstück. Zimmer in sogenannten Gartenhäusern sind bedeutend billiger 25 M.

Präsident Roosevelt hat kürzlich eine neue Botschaft erstattet. Er verurteilt die Demagogen, die Hass dem Reichthum predigen,

brandmarkt aber auch jene Multimillionäre, deren Sohn ein Dummkopf, deren Tochter eine ausländische Prinzessin ist, und die ihr Vergnügen in einem geschmacklosen Luxus sehen und ihr Lebenswerk in einer Anhäufung der Macht und einem Gebrauch derselben in der schmutzigsten Form.

April 29. Mi. Ging nach der Universität, um immatriculiert zu werden. Man hat von mir eine Bescheinigung der japanischen Botschaft sowie einen Pass verlangt. Ich habe nur den Pass gehabt und den Herrn den Charakter der Tokioer Handelshochschule erklärt. Aber das wurde nicht als genügend angenommen. Als ich auf der Universität mich gemeldet habe, hat man auch den Pass nicht verlangt. Man hat vertraut, was ich sagte. Ich dachte wieder an den Bureaokratismus Deutschlands. Aber als ich um diese Bescheinigung Herrn Debuch hat, wurde von mir verlangt, dafür eine Petition einzutreichen. Ich musste an den Bureaokratismus von Japan denken. Mit-

tags habe ich in einer Restauration in der Nähe der Universität gegessen. Da kostet die Speise a convert nur 75 pfg. Abonnement für Zehnmal 7 M.

Nachmittags Schmoller (Handelspolitik) gelesen.

Abends bei Herrn Debuch gegessen. Herr Ota war auch da und wir haben einen sehr interessanten Abend gehabt.

Apr. 30. Do. Besuchte die japanische Botschaft. Hat eine Bescheinigung für die Universität gekriecht. Wurde von Herrn Debuch dem Geschäftsträger der Botschaft, Herrn Hioki, eingeladen. Herr Hioki hat für einige Zeit über die kaufmännische Erziehung gesprochen. Nachmittags Schmol-ler gelesen (Handelspolitik). Nach der Zeitung ist der japanische Kreuzer "Matsushima" heute Vormittag bei den Pescadores gesunken und mit ihm ist ein auf 160 bis 200 geschätzter Verlust des Menschenle-ben untergegangen.

### Mai

1. Mai. Fr. Ich habe wieder und diesmal mit der Bescheinigung der Botschaft die Immatriculation auf der Universität gesucht. Aber man behauptete, dass die Handelshochschule in Japan nicht die den deutschen gymnasialen Lehrplänen entsprechende allgemeine Bildung gibt. Diese Behauptung scheint verhältnismässig ungünstig für die Absolventen der Handelshochschule, wenn man die Studierten von anderen japanischen oder amerikanischen colleges in Vergleich nimmt, die hier immatriculiert sind. Ich werde nochmal eine mehr ausführliche Bescheinigung der Botschaft bekommen und diese nach der Universität senden.

Auf der Handelshochschule wurde ich sofort als Hospitant aufgenommen, aber hier muss ich sehr teures Kollegiengeld bezahlen, falls ich nicht auf der Universität immatriculiert werde.

Las Max, Handelshochschulbewegung.

Umgezogen nach Ansbacherstr. 55 Hpt.  
b/ Frau v. Szilaggi.  
Fril. Mass kam zu mir.

五月一日 今度の家は商売的下宿屋ではないから来て見た。約束は室と朝飯で六十七マーク。ガスが三マーク。主人は後家で娘が一人居るハンガリ人だ。

Hochparterre は梯子段を沢山に登る必要がなくていいが、町の物音がやかましくていけない。今の家の下は料理屋で夜音楽をやる。之もやかましい。

大体今度の家は人物は悪くない様だが室の位置が気に入らぬ。又変るかも知れぬ。

五月二日 洋服出来て来る。

Max を読む。Handelshochschule に普通の大学と異りたる特色を与へるものとする議論は面白し。併し Handalwissenschaften を第一の主要学科とする事は同学科の幼稚なる現今に於て得策なるべきや否や疑問なり。此幼稚なる学科に身を入れる結果、従来の経済学、法律学と疎遠になるは可なりとしても、此等の進歩したる学科を研究するに依て得る所の Mental discipline を失ふ事に成ては不得策なりと思ふ。

る思想家、しかも現代社会に満足せざる人たるを知る。講義は別に変た事もなさうなり。今日愈一時間二十マークの割にて五時間分扱ひたり。

Sombart を読む、泳ぐ。

五月七日 大使館へ行き太田氏と証明書の事に付相談す。余は此上大学に掛合ふ事を中止する事としたり。将来高商卒業者にして当地大学に入らんとするもののためには特別詳細なる証明書を与ふる様に依頼したり。

クラブにて神戸肥料商某氏に会ひ、同氏を案内旁 Zeughaus 及 Nationalgalerie を観る。

Lehner, Methodik を聴く。之は初等の商業学校に於ける教授法なり。聴講者は何れも教師なり。日本の商業教員養成所とは大に異り、商業算術、簿記等の実地教授法を研究せしむる故非常に有益ならんと思はる。

夜出淵氏を訪ふ。

Dr. H. Dyer より來信、同氏は日本の勲二等に叙せられたり。返事出す。

五月八日 当地高商の年報を読む。商業学を経済法

太田氏を訪ふ。

五月三日 深田康算氏と共に Wannsee へ行き舟をこぎ、夕方ヘルリンへ帰り Wintergarten を見、それから Cafe Sever へ出かけ、税関 Amanda などものに会ひ、大に飲み、更に二三軒 Cafe をぶらめり、四時頃同女の家に入る。

五月四日 午後三時までソノフアの上で全く無感覚に寝てしまひ、午後四時頃朝めしを食てゆるゆる帰る。随分よく遊んだものなり。

シドニー前田兄より手紙来る。同君は肺病の気味ありしも、手早き注意にて全治したり。返事出す。

五月五日 Handelshochschule にて Schär, Handelsbetriebslehre 同 Buchhaltung を聴く。Handelsbetriebslehre は目録で見ればあまり感服した仕組でもなき様なれども、兎に角名に免じて全体聴て見るつもり。それより Borse 内の図書館へ行て見る。之は新聞雑誌縦覧所といふを適當なりとす。

Sombart, Deutschland in 19 Jahrh. 読む。

五月六日 学校にて Sombart, Spezielle Volksw. を聴く。先生は長身粗服、髪黒く顔長く一見して深遠な

律の上に置くと雖も商業学(幼稚なるを以て) mental discipline に適せざる事は暗に認めらるるもの如し。所謂商業学は原理を発見せんと務むるものなれども、その実ゼミナールの問題を見れば従来経済学に於て論ぜられたる事項多し。ゼミナールの仕事の一部分として株式相場、穀物相場、商業界の時事問題を取調べ報告せしむ。報告者は指導教授より指名されたる常置委員なり。此方法は余程面白かるべしと思はる。

Liefmann, Kartelle u. Trusts を読む。

五月九日 Arbeiter wohlfahrtseinrichtung の博物館を観る。

機械の蔽、塵を室内より取除ける装置、炭坑の救済具、労働保険の図表、職工住宅離形等あり。出品人は器具の製造者と Berufsgenossenschaften とを主なるものとす。Unfallvers の費用を事業家に負担せしめたる為に危険予防装置を進歩せしめたる事疑ふべからず。

Liefmann を読む。

三角恂一郎氏旅行中当地へ立寄、今日來訪、夕食を共にす。それより約束に依て余は税関を訪れ、之を伴

て大々的ぶんめりをなす。なんとかいふ Tanzhalle へも行って見たり。七時頃女の家へ帰た時は非常に酔て少々苦しかつた。それで終日寝てしまった。

五月十日 深田君午後一時頃来る。後で考へて見れば此夜は七十マーク許り飛ばしてしまつた。

曾てボンでぶんめりの愚なる事を考へたが今日も又之を悟た。小悟幾度にして大悟徹底するものによ。運動をやつて居れば金がかかるといつても知れたものである。ブンメリは之と比較にならぬ贅沢なり。而してその面白さは大してちがつたものでなし。ぶんめりは後で体がわるくなる。運動は体をよくする。

そんな事は昔からちやんと分てる。

五月十一日 Liefmann gelesen.

内田耕より来状。同君は今紀州の捕鯨会社に入り出張所主任になりたり。松尾五代太郎の教育費は自分が出す事にしたなりといふ。何処までもやさしき男なり。返事出す。

五月十二日 Jettel, Das Verhältniss der deutschen Gross Banken zur Industrie.

夜は出淵氏方へ招かれ原氏も同席夕飯をしたため更

くるまで話す。

原勝郎氏は両三日中パリへ出立すべし。

五月十三日 Sombart-Industrie 及 Banken の章読む。

Deutsch-japanische Gesellschaft へ出る。Prof.

Riess の Lafadio Hearn に関する講話あり。

Freiherr v. Schiebold に会ひたり。此会はドイツ人の立てたる会にして日本人の出席者は至て少し。

五月十四日 前週より講義に出席したる事二回のみ。之は講義の時間が午前九時にて、朝寝をすれば間に合はぬ為めなり。尤も Schäfer の allgemeine Handelsbetriebslehre といふのはあまり面白くもなき故すばかしても惜しいといふ気が起らぬなり。

今日は講義より帰ると三角君来りしかば、同道して Wannsee へ行き舟を漕ぎたり。湖辺新緑の色鮮かにして茅の下には蛙がなき居るなど実に閑静にてねむくなりさうな眺め、日本の四月なり。花は梅桜桃李名同じくして、実同じからず。日本の花は実を伴ふ花にして、ドイツの花は実に伴ふ花なり。

五月十五日 文部省及松崎校長へ書面を認め、アメ

リカ行の命令を催促す。松崎氏へは余の商事経理講義案を示して、アメリカの Corporation finance 研究の模様を見る必要を説明す。

Liefmann を読む。

五月十六日 Schwimmen, Liefmann 及 Jettel を読む。Gemische Werke の Kartell に及ぶ影響及びドイツ銀行の Akzeptgeschäft に就て得る所あり。夜太田喜平氏を訪ふ。

五月十七日 Radfahrt, — Wannsee, Lindwerden, Schildhorn を廻たが何れも一杯の人ごみで腰を下す気が出なかつた。夜食に Roland v. Berlin をおこつた。上等料理屋は閑静でうまくて其割合に高くはない。コーヒー屋などへ度々行くのは馬鹿な事だと思つた。併し今夜も Leopold へ行た。

Berlin 観

Berlin は市の中心から端に至るまで町幅広く、道路清潔にして並木と花壇にかざられ、家屋は何れも五六層の壮麗な建物実に見事である。併し物資の集散及加工をなすべき商工業の区域は割合に振はない。勿論

大工場もある、大倉庫もある。其絶対的分量からいへば Berlin の商工業はドイツ第一であらうが、それは Berlin の大より見る時は一向目立たない。然らば Berlin の市民は何で食てるか。

此問に対する答はかうだ。ムルリンは政治の中心であると同時に金融の中心、且快樂の中心である。九の大銀行は Berlin に集つ居る。Berlin 取引所の出来高は Frankfurt の幾倍か。

Berlin ではドイツの金持が集て来る。その金持が金を大に使ふ。だから小売業、芝居、料理屋、酒屋が繁昌する事に成る。勿論政治、金融、消費の中枢は何れの間でも首都に帰する。London でも Paris でもそれに違ひない。併し London は此等の資格を具へた上に、尚大きな海港である。消費の中心たるのみならず分配の中心である。

Paris は此分配の中心といふ資格をもつて居らぬのみならず、消費の中心として、Berlin よりも一層大仕掛のものである。Paris は世界の都である。併しまたここに差別の存する点がある。それは Paris には歴史あり、Berlin にはなしといふ一事。Paris には

歴史上の古跡が沢山ある。Parisの博物館には美術の傑作が集て居る。之に反してBerlinにはDomや国会議事堂の如きキラキラした新建築物が幅をきかして居て、さびた所が少しもない。美術館は甚だ見おとりのするものである。

Parisは美術の中心であるがBerlinは美術の中心としてMünchenやDresdenにも劣て居る。それだからBerlinで見るとは何かといはるればそれは夜景である。夜景より外にはない。夜遊の便利な事はLondonを越えてParisと同格に進んで居る。

Berlinは近世ドイツの一番よい事、即ち組織秩序といふ事とその一番わるい事、即ち肉慾に耽り懦弱に流れるといふ事とを最もよく代表した都會である。

五月十八日朝Tiergartenへ出かけて新聞を読む。之は此頃度々やるが中々宜しい。余と同じ目的で公園のロハ台を占領して居る連中も沢山にある。Zoolog. Gart.の裏でTattersallがある。

毎朝ここから馬を出して乗る人が非常に多い。ドイツの上流は馬へ乗たり、狐をしたり中々活気がある。

中流ではTennis, Sailingは新式の贅沢と見なされて居る。Tennisをやる者は綺麗なナリをして居る、いかにも流行見らしい。

之に反して自転車は労働者の独占に帰した形。それだから中流の者は森の中を歩くのが最も普通の運動で、その外の楽はロービー屋のConcertと芝居位なもの。併し散歩は中々盛で日本人は及ばないかも知れぬ。

近着の読売に三井呉服店の新築は間口二十八間、奥行二十間とあつた。Kaufhaus des Westensを歩数で量ると間口三十八間、奥行二十八間ある。Wertheimはもつと大きからう。

五月十九日今日高商にてProf. Scharに面会を求めしに同氏は喜で余の間に答へられたり。先Handelsbetriebslehreの性質に付て問ひしに、経済学を根柢とし其上にprivatwirtschaftliche Seiteを研究するとの答なりし。成程同氏の講義は其態度を取るものゝ如し。但其考ならば今少し面白き実のある事はいへぬものかと思はれたり。講義を別にして同氏の従来著作其他の事より見れば、同氏の得意とする所は寧ろ簿

記、計算、実務の方面にあるものゝ如し。尤も今後同氏は続々Betriebslehreの書物を公にする由なり。又同氏はそのSeminarに入る事を余に許されたれば、今後其研究の模様を見る事を得べし。

Schar氏は銀行及貿易業に従事したる事あり。Berlinへ来る前にはZürich大学にて商業学の講座を開き居たり。多年の研究に依りて前人未到の一学科を立てたりと自任し頗る得意なり。

次にドイツにては補習学校とHochschuleとを充分に組織しながら、其中間のhöhere Handelsschuleの設備に熱心ならざる事なきかと問ひしにPreussenにては其通りなれども、Sachsenにて其点に注目せり。Schweizは此点に於て最も進歩せりといはる。

同氏は青年をしてGymnasiumに相当する年限に普通学と簡易なる商業学科を修めしめ、然る後Handelshochschuleに入らしむるを以て最も適当なり、とすべし説なり。依てAbiturientenとしてHochschuleに來る学生の成績を問ひしに、手を振つて“Sie verstreuenicht”といはれたり。同氏はBetriebslehreの外に簿記、算術をも教へらるる故その方にてAbiturien-

tenをもてあまされたるものならんか。日本にても商業大学出来て、普通の高等学校の卒業生に理論的簿記等を教へたらば随分困る事あるべし。ベルリンにては幸にして実務に従事したるものが学生の多数を占むれども、日本にては此種のものを受容する方法なき故、結局実務の方面は非常に弱くなるべし。今日の問答は此点に於て大に余の反省を起さしめたり。

近着の日本新聞を見るに総選挙は五月十五日に行はるべき事を四月の十一日に発表し、選挙運動は此時より始りたり。

五月二十日Prof. ScharのSeminarへ出る。今日はVortragなりしが一體の様子を見るに、学生の学力はBonnのSeminarに比して遙かに劣れり。

それとその筈、両方の学生の学歴には非常の相違あり。昨日Schar氏がhöhere HandelsschuleとHandelshochschuleと連絡せしむべしと説きたるは成程此辺から考へつたかと思ふ。

Charlottenstr. 48; Weberとよき書店へ行て見る。商業書類沢山あり。Fabrikbetriebに関するもの三冊求む。帰宅後其いなるCalmesの書を読む。此人は

Berlin 高商の Dozest なるが、その論は主として筆記の技術なり。簿記以外に説く所なきにあらざれどもその方は皮相の見多し。併し余は未だ工業簿記の本をまじめに読だ事なければ此丈は一通り読むべし。

今日 Unter-den Linden にて Kaiser の御通行を見たり。御通行三十分前より沢山の巡查出でて道路を警戒したれども、Kaiser は三人の同伴者と共に白き Auto を駆て疾走せらるるのみ。其外にはつゞくものなし。

Kaiser は久しく旅行をし居られたり。初め Venice へ行き Italy 王と会合し、それより新たに求められたる Corfa の別荘に行きて暫く滞在し、且ギリシヤ王と会合し、今月に入りて Wien に入り、Kaiser Franz Joseph の即位六十年に際して他のドイツ諸王と共に同帝を訪問し、引返して Strassburg へ行き、Karlsruhe へ行き、Wiesbaden へ止り、然る後帰京せられたり。此間に Trinkspruch をなし、電報を発する事幾回なるを知らず。随分忙しき事なるべし。

五月二十一日 朝の講義は寝過したれば其代りて Sombart を聴く。午後 Cairnes, Fabrikbetrieb を読み

了ぶ。此書には多少の philosophising されども筆記の本として英國の諸書に及ばずと思ふ。

此夜下の Restaurant にて一時迄 Warzertraum の音楽をくりかへされ、眠る事が出来ず甚だ閉口した。いよいよ Köln Zeitung と Berlin に於ける Housing の困難な事を読んだが成程と感じた。Flat System はどうしてもむむむ。

五月二十二日 今朝も寝すぎた。Tiergarten へ行く、Zoilner, Eisenindustrie u. Stahlwerksverband を読む。之は中々よく出来た本なり。午後も引續て同書を読む。Integration of Industry の利益に就て得る処あり。

夜 Caré Bristol へ行きて新聞を読む。Berlin へ来てから Lokalanzeiger を取て居る。簡単に宜しいが business paper としては余の需要を充たさない。今日 Köln Zeitung Börsen Courier を読んで面白くと思た。経済雑誌には Deutsche Oekonomist というのがある。昔だが、之は売れぬと見えて雑誌屋に出て居らぬ。Pittus と云ふのがよく流行する financial paper だが、その論説等は随分あはれなものだ。

五月二十三日 Zoilner 読む。鉄工業に関する Kar-telle の事実にて得る所あり。

三浦より今夜八時半、ムルリンに着との電報あり。Station へ迎に行き、三越呉服店浜田四郎氏来伯に付出て来たとの事。依て共に同氏旅館 Kaiserhof へ行く。ここに工科大学の某氏(君嶋?)及山中(高商)両氏あり。Café を巡回して晚三時帰宅。

五月二十四日 三浦と共に Seessionist Ausstellung を見に行く。之は新派の画及び彫刻にて Impression を現はすといふ事に重きを置く。色は晴れやかなもの、沈んだものもある。筆あたり強く中には模様に近いものもあり。よく出来たものは趣あれども、何を意味するか分らぬ画も少からず。画題は様々なれども裸体が随分あり。奇抜又は病的と見ゆる題も沢山あり。三浦は此派の新しき着眼を賞すれども、全体に於て余には気に入らぬ画風なり。Common sense の足らぬ不自然な画風と見える。

約束に依て昼食後出淵氏方にて浜田、三浦両氏と会ひ雑談。それから Auto にて市中をまはり、七時二十分浜田のロシアへ向け出発するを送る。浜田は主とし

Department Store の簿記を見る為にアメリカ、イギリスを回りたるなり。三井にては未だ各部の rentability が分る様に成て居らぬといふのは随分驚き入たる幼稚な事なり。

夜は Comische Oper へ行く。Fledermaus 及 Indische Tanz。後者は Seessionist の画と同じく新しくてヒタイの分らぬものなり。

五月二十五日 三浦と Kunstausstellung (Lehrter Bahnhof) を見に行く。此方は各派合併なり。

三浦と共に服部、桑木両氏を訪ふ。桑木氏は思た通り温厚な人なり。

Prof. Junod (Schweiz) より報告を送り来る。

三浦は今夜 Leipzig へ帰る。同君とは相変わらず色の議論をなす。abstract の議論ではかなはぬが、實際では余の方が進んで居る事多し。

五月二十六日 加藤重男より来状、成一の病氣は消長あれども急に快方に向ふ見込みなり。医師の言に依れば全治するとしても二三年を要すべし。当人はそれが為め非常に神経質に陥れり。重男は七月より越後新潟鉄工所へ入るべし。返事出す。

今日は頭悪くして読書進まず。新聞を読む。夜出淵氏を訪ふ。

五月二十七日 Börse にて Organisation といふ雑誌を読む。商事経営の材料少からず。

午後 Zöllner を読む。Stahlwerksverband の組織に付て得る所あり。

五月二十八日 Himmelfahrtstag, 祭日なる事を知らずに学校へ行き失望したり。此日は日曜の如く商売も restaurant の外は休み居れり。

郊外へ散歩に出掛けるもの甚だ多く停車場雑沓す。今日も頭わるく読書進まず。昼寝をなし、夜は Club へ行く。

五月二十九日 朝七時起床、Tiergarten を散歩す。好天氣にて非常に心地よし。何故毎日早く起きぬかと思ひたり。

頭をよくする為めに Admiralsgarten Bad にて泳ぎ理髪した。近頃泳を止めて居るのは頭のわるくなる原因かも知れぬ。

午後 Jeldal を読む。Aufsichtsrat の Function に付て得る所あり。

五月三十日

昨日は野次馬に大学にて Russische Agrarfrage を聴き、今日は高商にて Gründung を聴く。両方とも分らず。後者は Technique の詳しく講義なり。

Passow, Aktiengesellschaft 読む。卓見はなければ面白き書なり。近頃ドイツの学者の一部が現代の問題、特に financial の事項に趣味を有するは明かに認めらる。Prof. Schumacher が "Nicht historisch, sondern organisatorisch" といひたるものも是なり。

Prof. Ashley が現代の boiling questions に historical method を応用すといひたるもの亦是なり。我輩西洋に來て得る処多からずと雖も、此態度を学び得たるは一の獲物なり。

朝日新聞の世界一周会一行は今朝当地に着、午後日本クラブにて歓迎会を開く。同一行指導者は杉村広太郎氏なれば、同氏に面会旁出席す。御馳走はノリスメン、牛メン、ビールといふ書生料理なれども、何分主客合計百人位の分を急速調理したるは感心な事なり。會員が各国を廻りたる上如何なる Impression を得て帰るや。日本の万事につけ及ばざる事を自覚せば幸甚なり。

り。

夜深田君と二三軒ぶんぬる。

五月三十一日 前週以来毎日非常に暑し。今日も寒暖計は二十八度に達す。泳 (Admiralsgarten Bad) 日本クラブ (新聞読む)。

Miss Hughes, Miss Salmon へ手紙書く。

近着の日本の新聞に牧野文部大臣の地方官に対する演説あり。其内に余の注意をひきたる事項二つあり。

第一、本年四月より実行されたる義務教育六年制は全国の小学校二万の内百四十を除きて悉く採用されたり。目下課税重くして人民の生活容易ならざる際に、直接人民の勢力範囲内にある市町村が此新しき費用を喜んで支出したる、文部大臣のいへる如く実に教育界の盛事なり。日本国民の教育に熱心なる証拠として大に賀せざるを得ず。

第二は文部省が中学校の補習科中に簡易なる実業学科を加ふる事を許したる一事なり。従来補習科は高等学校入学試験の落第生を收容する所なりしが、実業学科を加へたらば彼等も方向を転じて直ちに実業界へ入

らんとする考を起す事あらんとの推測に基きたるものなり。元來日本の中学卒業生が上級学校のみを目的としながら、其入学試験の困難なる為めに多年無為不活潑なる生活をなす事は余の最も不満足とする所なれば、多少なりとも此欠点を除くべき設備は歓迎せざるを得ず。

今回の改正は幾何の効あるべきや。勿論之が為めに最初より実業学科を修むる輩は、以前にても上級学校に赴かざりし少数のものに限るべし。併し二二回入学試験に落第したるものは目の前に一路の迷道を突見するが故に上級学校の方を断念する事、従来に比して早きかも知れず。又此実業学科の教師に適當の人を得たらば、其成績案外良好にして一般の卒業生の頭に上級学校の必ずしも崇拜すべからざる事を悟らしむるかも知れず。然れども中学生の上級学校崇拜熱は随分盛なものなれば、文部省の折角の苦心にも拘らず実業学科の志望者少くして計画の全部不成立に終るかも知れず。兎も角やつて見るがよし。

六月一日 Passow, Aktiengesellschaft 読む。野心

なき書なり。Economistに依れば米國の經濟界は既に恢復の時機に達し、其徴候は既に dry goods market に現はれたり。英國の金利は2%に下れり。公債の相場上向なり。

六月二日 高商へスエデン王來訪せられたり。王はモートルにて來り、Kaufmannschaftの連中及 Professorsに迎へられ Prof. Jastrowの歡迎の辭を聴き、それより建物を參觀せられたり。外國主権者として如何にも簡易なる行動といふべし。何故に王が特に高商へ行幸せられしや聞きたきものなり。

Zoologischer Gartenの隣に Deutsche Schiffbau Ausstellung 催され、今日皇帝親臨して開会せられたり。帝は海軍の制服を着しモートルにて來れり。スエデン王、同王妃、ドイツ皇后も來れり。新聞によれば博覽会の会長は皇帝に対し、陛下はドイツ海軍の組織者、造船業の奨励者、ドイツ海権の保護者なりといひたる由。是恐らくは過褒に非ざるべしと感じたり。

Passow 読む。  
泳がんとして Deunevitzstr.の Volkshadにてあつて無数の子供がなほを屏たる故群易して帰る。Admin-

ralgartendbadは 10ftg. 高き故なほどこまぬなり。それより自転車にて Halen Seeへ行く。ここは戸外にて広くてよけれども水は清潔ならず。之も中々の大入りなり。

六月三日 Seminar: Abschreibung, 主として算術上の Techniqueに就て議論あり。歸て見れば書店より Vintzelberg, Finanzführung u. Bilanz 着せるに依つてその Abschreibungの章を讀む、得る所あり。

Haushofer, Industriebetriebも同時に着、此書は体裁よくして中味の足らぬ、余のきざひな書物なり。向登つてい子より來快、返事出す。小泉新兵衛へも発状。

六月四日 Prof. Scharの Weltmarktの講義と Kalkulationslehreの講義とを聴て見るに、先生は簿記より入りたる人なれば後者(即ち商業算術なり)の方は材料豊富なれども前者は未だ經濟學の採取以上に達せざる心地す。

Passow 讀む。  
Schiffbauausstellungを觀む。第一室の一方にて一段高處所あり。其壁に Unsere Zukunft liegt auf dem Wasserと云々 Kaiserの語を現し、其前に Kaiser

及ぶ。

六月六日 八時頃起き女と Tiergartenを散歩し、歸て夜の七時まで寝て別る。Tiergartenの Zelbenには朝の六時より Concertありてあんまりの流れが群集する由。

來週は Pangsten 即ち Whiteunide なればとて人入 Maieの若枝を室に飾る。今日町に之を呼売するもの多し。一間位の大枝 50ptg.

六月七日 Preussen 下院の Urwahlenの結果報告する。今回は前に絶無なりし Socialdemokratが数人出る筈なり。其他には著しき変動なし。

昼食後出淵氏方へ行く。ロンドン大使館書記官本多氏あり。雑談数刻、同氏は紀州人にて余も曾て名を記し居たり。頗る書生肌にて議論風発當るべからず。併し機敏なる外交官たるは即ち蔽ふべからず。

兩三日前より又冷かになり、正午十度内外。  
○日本の社会組織は西洋諸國に比して平民的なり。現今内政外交の要なる地位に立てる人は皆華族なれば、西洋人は日本を貴族的の國と思へども、其実此等の人は皆貧乏書生より出でたるものなり。維新以來國

の出品されたる銀製模型を陳列す。其他の出品者は海軍省造船所、船会社、鉄工場、電気会社等にて、出品物は船の模型、船内設備の自然大なるもの等、A.E.Gは別に一の Pavillionを立つたり。Stettinの Vorkan-Werftは模型を以て設立以來毎年の建造船舶を示す。図表の内に英独米仏の産鉄高と造船高とを示したるもの面白し。

昨日は Preussenの Urwahlen行はれたれども別で賑かな事はなし。銀行、取引所などは半休なりし。選挙の結果は前回と大差なかるべしといふ。

六月五日 泳ぐ。  
Philippovichの Börseの章を讀む。疑義あり Prof. Scharに面談。

夜クラブへ行く。和田、鈴木(和田氏と同じく化学者なり)二氏に会ふ。十二時過に至り二氏と共にぶんめり、滑稽なるビール店に入る。ここには数人の男、駄洒落をいひ又音楽をなす。便所の戸の表には Zum Amtserichtshofとあり、裏には Notausgangとあり。ビール三杯ニマークは中々安からずといふべし。遊び飽きたる粹人の來る所ならんか。余は結局悪遊に

の實權を取るものは主として小士族の輩にして、農商より起りて立身したるものも亦甚だ少からず。今に至るまで学校の修学費の低廉なるは、他の諸物価と比較しても世界無比なれば才力あるものは血統及資産の如何にかかはらず出世せざるを得ず。又一方に於て旧大名の輩は全く無勢力となり、初は外交軍隊の間に有爵者を見る事少からざりしも今は殆んどはき出された。実際に於て日本の貴族は心身共に墮落せるを以て用ふる事能はざるなり。故に今日貴族として特別に出身の便宜を得る所は貴族院のみなり。

四民の階級嚴然として區別せられし國が忽然として此の如き平民に變じたるは実に驚くべき事なり。

六月八日 Pfingst. Unter den Linden 及び Friedrichstr. を散歩するに Berlin 見物の田舎者の如し。其割合に Berlin のものは他へ旅行せぬと見えて、英國の如き割引切符も出ず停車場の人混みもなし。Klub へ行き久邇宮家従に会ひスペインの話聞く。

午後初めて商事経営講義に筆を執る。

六月九日 服部文四郎氏来り商業教育及商業学の議論をなす。論争はなし。

午後自転車にて Fishethütte 及 Onkel Toms Hütte へ行く。雨に逢ふ。

兄より来状、返事出す。近頃万朝報に小石川庵の寄宿者に洋行多き事、並に関根お要の履歴が出たる由聞きしが、其後松尾伯父の事も馬術の先覚者といふ題にて掲載されたりとて切抜を送来る。

六月十二日 豊住、津田両氏来る。津田氏は豊住氏と同じく医学士にて目下 Prag に留學せる人、同伴して伯林へ來れるなり。Tiergarten を散歩し、クラブにて食事し夜はぶんめる。愚遊に終る。此時始めてグレンテを知る。

六月十三日 午後帰る。

六月十四日 豊住氏等と共に Potsdam へ行き Schloss 及 Sanssouci を観る。総し Versailles の模倣々々外に感じたる事なし。勤儉尚武の Frederick the Great がかかる優柔なる趣味を有したること不思議といふべけれ。

此夜又ぶんめる。曉に Kronenstr. Wein-Local の奇談を作る。

六月十五日 津田氏と共に車を雇ひて市中を巡り

Wertheim へ入て見る。青蛙、トカゲ、ヤモリ等を売て居るのは意外なりし。

夜豊住、津田両氏来り二三軒ぶんめつて帰る。Pfingsten の休は此の如くして終れり。

六月十六日 暑し。泳。Schmoller, Krisen の章を讀む。

深田康算氏来る。Tiergarten へ散歩し Zeiten にて休む。大多数の客はビール一杯にて一時間以上音楽を聞く。其他に尚沢山の人々は門外にて立聴せり。

六月十七日 Borse にて讀書。泳。

午後企業経営論を考案す。先日來商事経営学に筆を執て見たが、学といふ名をつければ何となぐ System を立てて見たくなる。System は立たぬ事はないが材料が乏しい。恰かも林野を区画して之に植ゆべき苗木を有せざる感がある。

加之 System を立てて privatwirtschaftlicher Standpunkt と云ふ事を前置すれば、何となぐ volkswirtschaftliche St. を度外視したくなる。それでは實際上に重要な議論を落す事になる。経営学の由來、範圍、學問上の系統等は我輩の議論の System の外へ置

く方がよささうだ。之は固より期する所であつたが筆を執て見て益其感を深くする。

六月十八日 曾て専攻部に行政法を講義したる行政裁判所評定官渡辺廉吉氏当地滞在中に付訪問す。

六月十九日 出淵氏を訪ふ。露國駐在書記官岩崎氏に會ふ。

六月二十日 泳。東洋經濟來る。

六月二十一日 泳。午後グレンテ方へ行く。夜少しぶんめる。

六月二十二日 泳。

太田喜平氏來る。同伴して Rheingold にて食事し Friedrichstr. 付近を散歩す。Passage にて種々の Automaten を試む。之も Berlin 名物の一なるべし。

六月二十三日 深田君來訪。

六月二十四日 服部君を訪ふ。

六月二十五日 Baumgarten, Trusis u. Kartelle 讀む。材料豊富なり。

六月二十六日 夜太田君を訪ふ。近年經濟事情調査を始む。

六月二十七日 午後グレンテ方へ行く。夜少しぶんめ

つて帰る。

六月二十八日 日本新聞読む。太田君を訪ひ政談をなす。日本の総選挙の結果は中々面白し。

経済学研究法及教授法

従来日本の学校に於ける経済学は組織及制度の性質を説く事に偏して、分量の研究に疎き弊あり。一方より見れば理論に傾き過ぎて実際に遠かるといふものなり。日本の貨幣制度を論ずるに金本位、補助貨の制、兌換券発行法を精しく説きながら、現在幾何の貨幣が流通するか、幾何の正貨が存在するか、幾何の制限外があるかを問はず。従つて貨幣制度を学びても實際の貨幣問題を解釈すべき力を得る事能はず。吾輩の如きも此弊を受け居るために世界経済界の変動に対して判断を下すに甚だ困難を感ず。然るに実際新研究を為さんとすれば、少くとも商事経営等の方面に於ては實際界の材料を集むる外なきに依り右の分量的研究の足らぬ事は非常のひけめなり。

是に於て余は最近にアメリカ恐慌のありたるを機として此前後に於ける経済界変動の模様を調査し、分量的研究の出発点たらしめんとす。調査の手續は差当り

エノノミストを通読して前後の事情を対照するにあ

り。

六月二十九日 泳。近年経済界調査。

六月三十日 泳。近年経済界調査。

七月一日 泳。午後グレテ方へ行く。夜少しぶんめつて帰る。

七月二日 泳。Elektrische Industrie.

夜出淵氏を訪ふ。沢野氏に会う。

七月三日 泳。Elektrische Industrie.

Graf Zeppelin の Luzern 及 Bodensee 地方に於ける実験は非常の大成功を以て終れり。試乗十二時間三百幾キロ、上下左右の運動全く自由なり。独帝例に依りて電報を送りて曰く "Beginn einer neuen nationalen Aera".

七月四日 夜クラブへ行き和田君に会ひ少しぶんめる。

七月五日 午後クラブにて大橋新太郎氏に会ひ種々経済談をなす。同氏の同伴されたる書記山田静三氏は一橋出身なり。渡辺廉吉氏を訪ふ。

七月六日 Elekt. Industrie. 桑木博士を訪ふ。深田君来り深夜雑談。

七月七日 午後グレテ方へ行く。泊る。

七月八日 約束に依り渡辺先生と Grinewald に散歩す。

○本月四日の当地新聞に西園寺内閣辞職の報あり。政友会内閣は前に堀田、千家両氏の入閣に依り貴族院操縦の便を得、又総選挙に於て絶対多数を得たれば議會に於ては貴衆両院とも困難を生ぜざる道理なるに、何故今に至りて突然辞職したるや。是疑もなく財政策の不人望に起因するものなるべし。

昨年六年計画なるものは前の七年計画を縮小したるものなりしが、内閣は此時未だ充分なる縮小を断行する事能はざりしなり。是に於て井上伯及実業家の圧迫あり、到底六年計画を実行する事能はざらざるに至りたるものなるべし。此想像にして当れりとすれば、日本の実業家は元老を通じて議會以外の政治に大勢力を有する事明かなり。而して議會は政治上の大問題に對して終結の判定を与ふる力更になきものなり。

七月九日 夜太田君を訪ひ例に依てこねる。

七月十日 Zeppelin の Luftschiff の写真を載せたる新聞を日本へ送る。

七月十一日 桑木博士来る。近頃は Franziskaner といふ安料理屋にて昼飯の時、日々桑木、深田両氏と會ひ雑談し得る所少からず。

夜クラブに山田静三氏を訪ふ。クラブには三四個空問あり。常に通過の旅客宿泊する由。

七月十二日 Berlin W といふ小説を読む。

七月十三日 深田君来訪。鹿野君大陸旅行の中途当地へ来り余と同宿す。今日は深田君と共に三人にて市中を drive し、クラブにて会食す。

七月十四日 鹿野君と郵便博物館及 Wertheim を見て後 Halen see, Wannsee, Potsdam へ散歩す。

七月十五日 兼ねて三井物産ハンブル支店より得たる紹介により当地 Allgemeine Elektrizität Gesellschaft へ行く。Friedrich Karl Ufer の事務所には一千人の書記及技師あり。又陳列所に製品を置き専門の説明者を付す。Fahrstuhl の仕掛及広告ランプの仕掛最も面白し。事務所より同伴したる案内人は New Zealand の人にて、同地につき A. E. G. の Agent 也。

なるべき管轄にてドイツの高等工業学校を卒業したるものなり。

午前汽車にて Oberspree の Cableworks を見て行き、午後は Brunnenstr. の機械工場と Ackerstr. の小キートン工場を見む。Brunnenstr. は確かに systematic laying out の模範と見えたり。

ここにて数千個の小キートン二乃至五馬力のもの、代価にして二百五十万マートの保管をみる倉庫を見た。

七月十六日 Siemens Schuckert の事務所へ行き、日本に久しく在留したる Direktor Kessler に面会して日本に於ける電気事業の前途に関する談話を聞く。又同所附属の陳列所を見る。

午後 National Gallery へ入る。山田静三氏に会ひ共に帰宿して雑談後 Kempinsky へ夕食。

七月十七日

Berlin Maschinenbau Gesellschaft vormal. Schwartzkopf の Wildan に於ける Locomotive Works を見る。新しい建築物にて配置の systematic なる事 Maschine shop の場所をたまた節約せる事と感

想を近々そのなり。

六月二十六日付を以て文部省より米國へ譯語を託せり。漢語費三四三十日米幣の計。

July 22. Started with Mr. Kano at 1 p.m. from Lehrter Bahnhof-Messrs. Fukuda and Yamada came to see us off. Train goes through meadows and corn fields but land does not look fertile a few flourishing villages between Berlin and Hamburg, arrived at 5 at Hamburg Hauptbahnhof-put up in Hotel Germania which lies near the station-telephoned to Mr. Funatsu of Mitsui & Co. who soon came to us—went to his house at Blankenese, a pretty little town on the Elbe—Japanese supper with him.

July 23. *Hamburg.* Went to see the port on one of Mitsui's motor boats, Mr. Ishikawa accompanied us. Mr. Yoshii of Manchurian Railway was also guest. Enormous harbour with numerous spacious docks, warhouses, cranes, etc. also shipbuilding yards but no

服したり。此地はヘルリンに遠く、水利もなければも荒地にて土地安ければ引合ふなるべし。職工村の設備完全なり。

午後 S.S. の Normendamm Werner 工場を見る。陳列場は Feuerwelder enrichment 面白し。此工場は Schwachstrom の材料のみを製作する所なり。大規模なると秩序の立ちたる事は何れにても感服の外なし。

夜鹿野、山田両氏と共に少しおんぬる。

七月十八日 午後グレンテ方へ行き Kempinsky へ夕食少しおんぬり泊る。

七月十九日 グレンテ同伴 Trepptow へ行く。雨に逢ひ Tanzhalle へ雨止み閉口して帰る。Apollo Theater へ行きて機嫌を直し流連す。

七月二十日 帰宅。写真出来て来る。秋元、内田耕、加藤、三村、内田伯母及兄へ送る。

夜 Café をおんぬるは健康に害あり、且翌日の仕事を妨ぐればとも女をつれて歩く時は運動になる。よき料理を食へば滋養となる。女を楽みて而して健康を益するの心得此の如し。散歩、ホート、其他の趣味を有する淑女を妻として、飲食及運動の娯楽を共にするは理

important factory in the Free Port District, except flour mills. The district divided from the main part of the town by a canal. Any ship coming into the Elbe is stopped at Cuxhaven where a pilot take up the charge of it. He is half official and sees to that a boat may not come along the ship's side. Smuggling practically impossible. Free Port is nothing more than an extension of custom house grounds.

Afternoon was spent at Hagenbeck's Zoo. Hills of huge rocks are provided for animals. There are also performances of wild beasts and a village of Singalese. Made a sail on the Alster. Avenues of pretty villas are extending toward the North. Rathhouse is a large fine building and is quite new.

The Central Station is a still newer and still more noteworthy construction. Most extensive steel construction I have ever seen.

Hamburg has only few reminiscences of its mediæval grandeur except some old houses

near port. Everything is modern and recent expansion is enormous.

July 24. Meant to start at 1, but was obliged to take the next train owing to the negligence of hotel porter. Arrived at Kiel at 5.

Landscape between Hamburg and Kiel is very flat and monotonous—pastures and forests dotted with poor farmhouses.

Put up in Hors's Hotel.

Made a sail to Hattman where Kaiser Wilhelm's Kanal has its East end. Walk along the canal, crossed it by pontoon, came back by tram to Kiel.

Kiel is exclusively a naval station. Only very little commercial importance may be attached to it if there were no Krupp.

July 25. Sunday. Parted with Mr. Kano at the station, as he started for Bremen. Travelled to Lübeck. Train crosses one of the most beautiful parts of northern Germany. The land is flat but rich in lakes. Some of these are very large. Lot of tour-

ists. Lübeck has a number of old buildings. Rathaus, St. Mary's Shipper's company (now used as a restaurant but all furnishings and decorations kept unaltered), Dorn, Holsten & Burgtor, etc. Looked over these together with an elementary teacher from Stralsund.

Left Lübeck on a Swedish steamer "Halmstadt" at 6.30. It is to arrive at Copenhagen at 8 in the morning. Lübeck shows some signs of progress but large ships cannot come up the Trave and this fact must have a negative effect on its expansion. Extensive timber yards lie along the lower course of the river. Goods are brought in on sailing ships. Further down, a large iron works, probably that of Donnermarck's. Had talks with a Swede who is now settled in U.S. for twenty years, a Hamburg merchant, and a technical teacher from Finland, etc.

Rainy but very calm.

July 26. Got up at 7 in the morning when

the boat was running off the Isle of Möen with its lowland and white houses. Weather cleared up splendidly. Drove to Hotel d'Angleterre in Copenhagen.

Walk in the town from East to West:—Kings Place is rather simple. The marble church is a noble edifice. Went up to the gallery where the whole city comes into sight. Langelinie, promenade, near the new harbour. Two large basins are quite new and modern in all respects. Several ocean-going steamers—Rosenborg & Kongens Have are parks. Frauenkirche & University (old)—New Rathaus & Kunstmuseum (new)—Christiansberg.

Copenhagen has its older parts, old basins where only small sailing ships come in and bargoes are taken into flat red brick house along the water. But its newer parts are splendid modern town in continental sense. Towör is a white city in large scale.

July 27. By tram to Stranbad and to Klampenborg—then by rail to Helsingör—back to

Copenhagen via Hilleroid—vast plain in small island. Railways are very busy with tourists.

Helsingör stands just on the Sound of Kattegatt. The Swedish town on the other side is clearly seen. Ferry boat is so constructed to convey railway carriages between the two lands. Sea is very quiet. Started Copenhagen on steamer for Malmö at 7.30. It is only 1½ hours voyage across the strait. There is no direct service from Copenhagen to Rügen, because passengers to Germany generally goes through Rostock or Kiel. Those who want to go to Rügen or Stralsund have to go across to Sweden and join the route from Stockholm to Berlin.

Stayed a night at Savoy Hotel, Malmö—a sea-port of considerable size but very quiet at night—Ride on tram through town.

July 28. Train started Malmö at 9. General feature of land is very much like that of Denmark very flat and fertile. 10 a.m. at Freleborg. Steamer "Gustan Adolf" sailed

off immediately—beautiful sunshine, quiet sea and comfortable chair; an ideal sail—2 p.m. at Sassnitz: Scenery of Rügen is somewhat similar to that of Bōshū but not so pretty. Cooking was very primitive where I had lunch. Poor arrangements for bathing. Few good hotels. Some rooms are to be hired very cheap, i.e. 1 Mk per day. Gave up the idea of staying at Sassnitz and sailed by 5 o'clock steamer for Swinemünde. Boat small and not clean. Mixed public. It calls on Zinnowitz & Heringdorf, both bathing place. 9.45 at Swinemünde. Kaisers Yacht "Hohenzollern" was anchoring with Kaier's Ensignment on the foremast and accompanied by a gun boat. Boys and girls on our steamer shouted "Hoch" while passing by.

Stayed a night at a hotel, run by a Berlin hotel owner together with a restaurant. The chamber maid told me the season is now nearly at an end, as school children have to resume their works next week, and

she was glad to go back to Berlin. There are hundreds of small hotels and pensions in Swinemünde temporarily open during summer. It is a temporary "Berlin on sea-side" in the same way as Kamakura is merely "Tokio on sea-side".

July 29. Walk along the Strand—beautiful sand, considerable pine-woods on the background—much better arrangements than in Sassnitz—Herrn—Damen & Familienbad—Restaurant on the pier, concerts—Yast number of cafés, restaurants and hotels, all temporary business.

Many people are staying here for a longer period with their children, "Kinderfäulein", and dogs. They will probably be going off in a week as the chamber maid told me.

Steamer started at 11 for Stettin. Terrible crowd on the boat. Arrived at Stettin at 2 p.m. Very busy traffic in docks, canals and rivers. A Free Port District surrounded by fence. Great number of Baltic steamers in docks. All bridges are made so as to be rais-

ed when a boat comes. One of them is an old style draw-bridge which is worked by four men. Steein is the seat of famous ship-yards Vnekan. Couple of topedo-boats were in construction on their yards. I saw all these in two hours and started by 4 o'clock train for Berlin.

7 p.m. at Stettiner Bahnhof.  
July 31. Called on Debuchi.

Aug. 1. Called on Grete—a little "Bummelnung."

Aug. 2. Went to Zoo with Grete. Dinner at Debuchi. Again to Grete's.

Aug. 3. Mr. Hattori. Mr. Fukada.  
Aug. 5. Visited the Embassy. Mr. Debuchi, Mr. Kuwaki, Mr. Ota and Bank. Meant to start to-morrow, but prevented from doing so by carrier's negligence, postponed a day.

Aug. 6. Sent off two trunks and a bicycle books for Japan.

When I came home from the Japanese bank, I found Mr. Miura lying on my sofa.

He said he came up to Berlin to attend the Historians' Congress but he decided to do so quite suddenly that he could not me beforehand. Thus I am now induced to stay another day in Berlin.

Mr. Ota came.  
Aug. 7. Called with Mr. Miura on Mr. Watanabe and Mr. Kuwaki. We "bummelte" and discussed several questions as we do whenever we come together.

Aug. 8. Started at last with 11.42 train. Arrived at Rosendal at 10.15 (i.e. 11.15 in German time). Antwerp at 12. Terminus Hotel.

Aug. 9. Sunday. Antwerp. Streets are paved with blocks of stone and not well-looked after. Houses are generally lower than these of Berlin and not so elegant.

Structure of Belgian faces is distinctly different from that of German.

Flemish language is very much like German and still more like Dutch. Very likely

there is less French element in it than in English.

All notices at railway stations are given in French, German, English and Flemish. This is one of the Kinness days which come twice a year. People go through streets in processions singing and with banners among them.

Cathedral and Town Hall are both fine old buildings. The monument of Brabo, a legendary hero of the town, stands on Market Place.

The wharf of the Schelde extends a few miles and is able to receive largest ocean liners alongside. Five promenades along the wharf. Docks are exclusively used for loading and unloading of goods.

Museum is very rich in Flemish works including Rubens, who was one of the citizens of Antwerp. The Flemish school stands between the Italian and Dutch Schools. Dark lighted landscape paintings seem to have originated in Flanders.

The view from the top of the tower of Hotel de Ville is grand. The huge building of Palace of Justice on a hill takes a prominent part. King's Place, Cathedral, Park and Botanical Gardens also come into sight.

The town hall both of Antwerp and of Brussels is in gothic style, but here is this style more beautiful than strong. In the impression it gives, it is more like Renaissance than English or German Gothic. Started this evening for London via Rosendal and Flushing. The railway and steamer connection at Flushing is not so well-accommodated as in Hook of Holland. The Boat is dutch. Met quite unexpectedly Mr. Fuji Tanaka on the boat. He just came from Japan through Siberian Railway.

Aug. 11. Arrived at Queensborough at 8. English landscape with its gradually rolling hills and with its pastures, oak trees, green grass, gave me an agreeable impression. Victoria Station. Drove to Mr. Kano's.

Greatness of Antwerp attained its highest point under Charles V. Spanish prosecution of protestant devastated it and then followed the commercial policy of Holland which was detrimental to Flemish prosperity.

Keyser Avenue is the busiest and most stream of crowd passes forward and backward along the foot-paths. Many people sit around tables in numerous cafes to have a glass of beer and look at the crowd in the streets. The Kinematograph is being performed in several places. I visited one of them and saw some pictures of detective stories. They represent both cruel and immoral inclination of human mind.

Aug. 10. Monday. Visited Brussel. It is an hour's journey through flat well-cultivated land. Avenues and boulevards are nicer than in Antwerp but nothing worth the surname of "Second Paris". Old buildings dating from the Spanish grandeur including Town Hall and Guild houses are carefully

Streets in London looked awfully dirty to me, as I am now used to cleanness of Berlin. Low, black houses, narrow, irregular streets with lot of exertions of the horse on the way. Saw rooms to rent. Went to School of Economics. The new Hampstead Tube, now about a year since its opening, is 400 ft underneath the surface at Belsize Park Station and gives an excellent accommodation. There are half a dozen underground electric lines now open, traversing all points of London. The means of communication here is practically revolutionized by this network of tubes.

Called on Mr. Igarashi in the evening.  
Aug. 12. Took a room at Mrs. Whitton's where Mr. Mizushima was staying before. 30/week without lunch.

Aug. 13. Visited with Mr. Kano, Takata & Co. (Mr. Furumi), Consulate (Mr. Sakata) Franco-British Exhibition covers an area of 40 acres. All colonies represented. A great number of continental visitors are

now in London. Many work-people come from Paris for weekend. Notices in the tube station all given in English as well as French and German.

Aug. 14. The Borough of Hampstead provides an excellent library for the free use of the residents. I found here the "Economist" for 1907 and shall be occupied by reading through it for some time.

The swimming bath also public charges 6d. It is on a very large scale. 100 ft long. Visited "Empire" at night.

Aug. 15. Set on work at the Hampstead Library.

Aug. 16. Visited Mr. Tatsumi's house at Strawberry Hill with Mr. Igarashi. A number of young Japanese in and out of the Yokohama Specie Bank meet here every Sunday and play tennis, row boat on the Thames and dine and talk. Mr. Igarashi and I were rowing while others were playing tennis. The House stands just on the river side and we can get on a boat from the

garden. Hundreds of boats were going upward and downward on the river.

Aug. 17. Visited Mr. Okubo in the evening and dined with Messrs. Igarashi, Takeuchi, Fujii and Sugita beside himself.

Aug. 18. Walked to Golders Green. Here is the terminus of Hampstead tube and numerous new houses are being built. It is a new suburb of London.

Aug. 19. Boating at Hyde Park.

Aug. 20. Wet. Hampstead is really a nice quiet place. It is a type of London suburb. Our house at 12, Heath Hurst Road is one of the dozen similar looking red brick houses along a little hill road. Each house has a tiny garden on the front, decorated with flowers. The wall is very often covered with green ivy.

Aug. 21. Fr. Visited the British Museum Library. I did so, as I have finished with my work with books at Hampstead Library. But I found this great library not very convenient for me. So I turned to the

School of Economics and obtained permission to use their Library. I shall be there every day for some time.

Aug. 22. Sat. Visited with Mr. Tanaka National Gallery.

Aug. 23. Sun. Wet. I got cold and stayed all day at home. Mr. Tanaka came and discussed college administration.

Aug. 24. Mon. Mr. Ishikawa, brother of Mr. Bungo Ishikawa, came.

#### *Current Events*

The Harvard University proposes to provide a course of two years leading to the degree of Master of Business Administration.

The new Patent Law, which was drawn out by Mr. Lloyd George, and came into force now, requires that foreign patentee must manufacture his goods in England.

Marquis Katsura declares that the expenditure of the Government is to be reduced by 200,000 yen per annum. Price of Japanese consols made quick springs.

Prince Arthur of Connaught was received at Glasgow by a socialist demonstration party. The people are not against the royalty but their discontent on the expensive preparation made by the City authority for His Highness was expressly declared. Shipbuilding & iron & steel trades are at worst. Thousands of workmen are out of work in that town.

Sept. 6. S. Took a walk with Mr. Tanaka from Hendon to Neasden. There is a large reservoir between these two places surrounded by beautiful meadows. It is called Brent Reservoir and the water is used for feeding the Regent Canal.

Sept. 7. Mon. Called on Mitsui & Co. to meet friends, Mr. Nishimura and Mr. Mitsui among others.

Mr. Nishimura and I went in the evening to the Palace Theatre. Miss Mand Allan is a famous dancing girl. Her dances are accompanied with some classical music and

display her musical fantasy. She appeared as Salome to-night.

Sept. 8. Tues. I spent the whole afternoon at Hampstead Library reading Sadler's Continuation Schools and Ashley's Enlarging Political Economy in Economic Journal. Prof. Ashley explains here his plan of study "Business Economics", as he terms it in distinction from "Political" Economics. "Not that they can expect to jump from the class-room into the manager's office though indeed now younger men are coming to the front . . . . . But it is essential in anything worth the name of Higher Commercial Education to make our students realise the business point of view and to give them a stimulus which will carry their intellects through the years of drudgery to the day when they will have a chance of showing what is in them".

Sept. 12. Sat. Visited National Gallery and Tate's Gallery with Mr. Tanaka. I noticed some important changes in painting during

the latter half of the 19th century. 1. Modern painters are generally speaking very fond of representing some abstract idea or fantasy. 2. There is a tendency on one hand to show the effect of atmosphere as much as possible and on the other hand painters are sometimes inclined to leave purposely this point altogether.

The streets in Westminster were dreadfully crowded on account of Mr. Winston Churchill's wedding, and our bus had to be stopped several times before reaching Vauxhall.

Sept. 13. S. Joined the party at Mr. Tatsunomi's. I and Mr. Igarashi and some others were rowing on the Thames for many hours. There were seventeen to dinner. Mr. Tatsumi must be spending a lot for these weekly meetings.

Sept. 14. M. A catholic congress was going on for about a week at the Westminster Cathedral and a cardinal was sent by the Pope as his representative. The congress

was to come to end with a pompous procession yesterday when all the high priests were to proceed in their ceremonial clothes and the Host (I do not know exactly what it is) was to be carried. But many protestant organisations protested against this act and even to the King. The Government yielded to the protestant influence at the last moment and advised the archbishop of Westminster to the effect that a procession, whose legality is open to question, should not be carried out, as it is feared to rouse some disturbance. This action of the Government is criticised severely by some people as exposition of their weak-mindedness. It is also considered to have some effect in the New Castle by-election against Liberals.

Sept. 15. I picked up at a second-hand book shop at Charing Cross a book called "Decamerone" by Boccaccio. This is one of the books seen in some shop-windows at Piccadely and Leicester Square together with

"Nana", "Madame Camille", etc., and I have heard of it since long time. Written in Italy in 14th century, it is supposed to have had certain influence on Shakespeare. It is a collection of short stories, something comparable with our "Ise-Monogatari". It does not picture love-affairs in their materialistic aspect but the love-affairs of illegal nature.

Sept. 19. Saw Faust at His Majesty's. The whole thing is re-written to make it easier to understand. Some important deviations from Goethe's original are also made. scenery is most extravagant one. Music is played during the performance although there is no singing after the way of opera. It is exceedingly popular as Mr. Tree's new Faust and it is said that some seats are already booked until December. London theatres are very strongly visited now. Number of visitors is considered to exceed 30,000 in all every night.

Sept. 21. Monday. Saw offices of the Bank of England through introduction of Yoko-

hama Specie Bank. The room where the Governors meet every Thursday to discuss the rate of discount is rather a simply decorated place. General banking office is rather small. We were allowed to see heaps of bags of gold thousand pounds each only through the glass. All incoming coins are tested by a weighing machine which throws away worn-out coins and leaves only those having standard weight. Bad coins are sent to the mint to be re-coined. Sovereigns generally speaking must be re-coined in twenty years and half-sovereigns in eighteen. Notes are not re-issued, once returned, but kept for five years in the store and then are destroyed. The whole stock of these old notes amount to 41 tons. Bank notes, Indian Government's notes and some bills are printed in the works in the building. Here machines print consecutive numbers on the note quite automatically.

Met Mr. Iwashita at the Bank quite unexpectedly. Went to the Franco-British Ex-

hibition with him.

Sept. 22. Saw "Idols" at Garrick Theater. This is a piece adapted from a novel of the same title written by .....

It gives a picture of the English middle class of the present time with its well-educated, highly-spirited lady and with its strong-willed gentleman. The story consists of idolisation and worship between lovers and reveals that there is no perfect man or woman in this world as lovers do think of each other.

Sept. 24. Had an interview with Mr. Reeves, director of the London School of Economics. The Librarian Mr. X said: A larger part of students belongs to evening classes. They leave school, go into business and, when they reach mature age, they begin to wonder what they are doing at the office, and then come to the school. If we draw an age curve the highest point will be thirty to thirty five. Some years ago three young clerks of the Great Western Railway entered

the school for the first time. The general manager of the company heard of it and placed them in his own office and gave more salaries than before. The school has now a class for railway of 200 students. The school is run on a quite different principle from that of Birmingham University. While there students come in just after leaving school and devote their whole time to study, here the evening classes have much greater importance. The school looks at the offices as laboratory for economic sciences. Another characteristics of the London school is the importance it attaches to the original research works of the post-graduate students, of which there are now 150.

Sept. 25. The first international congress of moral education was opened at the London University under the presidency of Prof. Sadler. The rudimental question seems to be if direct or indirect principle or both should be used. But the relation of feelings to moral education must be also the

centre of difference in opinion. I heard only the opening address of President and Prof. Sadler's speech.

Sept. 27. S. Called on Mr. Hara at Mr. Kamiya's. The latter gentleman is working at the N.Y.K.

Read Upton Sinclair's "Captain of Industry".

Sept. 28. Monday. Called on Mr. Sakata at the Consulate. Discussed about the proposed commercial university in Japan.

Booked through to Japan at Canadian Pacific Railways Office. Second class cabin and first class train via N.Y. \$42, plus extra for Lusitania \$4, for deviation to Chicago \$2.

Called on in the evening Mr. Tatsumi. Heard his opinion on business education and his experiences in London banking. On the former question he said: Young men from the Imperial University were not suited for practical work at the office at the beginning, while those from he Higher Com-

mmercial College were competent clerks on the very day he entered Bank. The latter were much appreciated by some managers just for this reason. But knowledge and skill that were obtained at schools could be gained in very short time at the office. Therefore it did not make much difference if young men were trained at schools in book-keeping and calculation. The real efficiency in business lies in the personal character and ability of individuals. The schools of the present day were not able to form character through the personal influence of great teachers like Fukuzawa. We used graduates of colleges in preference to persons of lower education because they had more mental ability, which was trained by scientific studies. Employ a graduate of the Literary College, he would rapidly gain skill and knowledge necessary for office works. He would read, provided he was a hard working intelligent fellow, books on business subjects which he could understand through

his general reasoning. He would make an excellent manager in some years. Of course he would have done it better if he were educated at a commercial college. But most important thing that a college could give was not knowledge itself but real mental ability.

Sept. 29. Tuesday. Went to Moral Education Congress to meet Miss Hughes.

Called on Mr. Tanaka in the evening.  
Sept. 30. W. Went to the Library at the London School of Economic as usual. Finished the work with old magazines, there. Saw Elgin marbles at the British Museum with Miss Hughes.

Invited to dinner at Mr. Sakata's.

*Sneezing*

Once a wish, twice a kiss, three times a letter, four times something better.

Oct. 1. Thursday. Saw "Faust" at His Majesty's again. Took Mrs. Whilton and Mr. Sato together.

Oct. 2. Friday. Went to Tate's Gallery, paying special attention to Watts.

Oct. 3. Saturday. Did practically nothing to mention except dined with Mr. Tanaka at Nihon-jin-kai. The weather was extraordinarily fine and very warm during last ten days. The thermometer went up to 80°.

Oct. 4. Sunday. Wrote to Prof. Ashley. I meant to visit him personally in order to thank him for valuable teachings and also to ask his advice in study of "Business Economics". But as he had not given me answer to my letter inquiring when I should come to call, I wrote this second letter saying that I felt very happy that I could pick up his spirit in "enlarging economic science". Went to Harrow-on-the-Hill for a walk. The college is situated at the top of a beautifully wooded hill. The buildings are mostly modern. An engraving on the wall of one of the buildings denotes the site, where Earl of Shaftsbury saw as a Harrow boy the funeral of a poor man, the little event which

moved him to devote his life for the betterment of working classes.

Oct. 7. W. Dined with Mr. Igarashi at Nihon-jin-kai. Started from Waterloo Station for Paris via Southampton and Havre. The night train leaves at 9.50, arrives at Southampton 12.00, at Havre 8 a.m., at Paris 11.30.

Oct. 8. Th. Arrived in Paris. Called on Mr. Yamanaka but could not meet him. Saw his wife for the first time. Visited Louvre. Stopped a night at Terminus Hotel.

Oct. 9. Fr. Removed to 11 bis rue Lord Byron, an English pension. Cost only fr. 7.50 a day with full pension.

Oct. 18. S. Came to Havre but there was no steamer on Sundays. Was obliged to spend a day there.

Oct. 19. M. Walk about the town and Bourne-ward Maritime. Sailed for England.

Oct. 20. T. Arrived in London. Called on Mr. Sakata, Mr. Igarashi, etc. Alumnus Association of U.C.S.

商業大学問題

一、実業界が人を下より採るか、上より採るかは一國経済上の能力に関する大問題なり。

日本の現状に於ては下より採る時は事務に明かなるものを得れども大局に通ぜざるものを得る事難し。上より採る時は細事に短あるの恨あり。

高等商業学校は此欠点を充すに最適当なる学校なり。(考へがまともらぬ)

パリ雑記

○歐洲を去るに当て今一度英國を見たく成てロンドンへ来たのが二ヶ月前であつたが、居て見ると又今一度パリを見たく成た。見なければ歐洲の Impression が完全にならぬ様な気がした。それがパリ行の動機である。

○三年前にパリを見た時は眼が日本の眼であつたら、唯驚くばかりで比較の標準がなかつた。今度は最近にベルリンとロンドンを見て居るから面白味が進んで来た。但しフランス語が出来ぬ為めにはがゆい事が

あつた。

○パリに居た十一日間の仕事は度々 Louvre へ行てフランスの画を注意して見た事。一日見物に歩た後には必ず Cafe へ入て夜景を眺めた事。山中君宅へ行て度々日本食の馳走になりながらフランスの事情を聞いた事。其他オペラへ二度行た。寄席へ二度行た。

Bois de Boulogne から St. Cloud へ自動車で行た。Versaille へ行た。Eiffel tour へ登た。Bulo Charmingmond へ行た。石川剛氏を通訳に頼んで Ecole supérieure de Commerce 及 Ecole haute Etude de Commerce を見た。パリの別嬪も二度見た。

十月三十日(金) 早朝 Lustraria はニューヨーク港外に着す。郵便船来りて、驚くべく多量の郵便物を受取る。検疫船来り、官吏上船す。下等船客は列をなして検疫を受け、其間高歌放吟、頗る景気よし。余等二等客は、一々食堂に呼出され、移民監督官並に検疫医の承認を受く。ロンドン総領事より貰受けたる旅券の効能著し。

本船は数艘の小蒸気に押されて、キエナードの船渠

に入る。

上陸場にはAよりZに至る二十六文字の札をかけてあり、客は自己の名の頭字を願したる札の下にて待てば、人足達荷物を運び来る。荷物には勿論各人の頭字を記しあるなり。

荷物取揃ひたる時は、人々列をなして税関吏の前に行き、船中より出し置きたる申告書を受け、下役人に伴はれて荷物の点検を受く。此間、荷物の本船より取出さるるを待ち、又税関の手のすくを待つに数時間を費す。人足も税関吏もよく働けども、仕事多くして人少ければ時を多く要するなり。

鹿野清次郎氏、出迎へくれたれば、同氏の助を得て大荷物を運送屋に託し、小荷物のみを提げて、高架鉄道にて百二十二番街なる同氏の下宿に入る。室も此下宿に空間ある故、それを借ることしたり。

ヨーロッパより来りて、ニューヨークに入港するものは壮大なる光景に接す。先づ右に Brooklyn、左に Staten Island の砲台、続つて Jersey City を眺め、偉大なる自由の銅像に迎へられて愈船渠に近づけば、ニューヨークの所謂 Down Town は目前にあり。

かねて噂に聞ける Sky-scrapers は、方塔、円塔相時ちて、之を遠望すれば其輪画は壯嚴なる中世の城の如く、寧ろ画趣に富めり。それより Hudson 河に入れば、左右に無数のドックあり、自由に最大の汽船を碇泊せしむ。船渠の上屋は皆鉄骨の宏大なる建物なり。

下宿へ着たるは既に二時なりき。それより鹿野清次郎氏と共に、支那料理店にて食事をなし、兩三日前、日本より着したる山口高等商業学校教授、蒲生保郷氏を訪問し、然る後百二十二番街へ夕の食事に行く。百二十二番街辺は、すべて下宿屋、貸間の多き所なり。家は大抵、三、四階にて、一階毎に便所と物置あり。

Flat として貸すこともあればなるべし。余の室は表の一才広き室にて一週五弗なり。食事は朝と夕だけ二〇二番へ行く。一週四弗なり。

二〇二番に法学士にて、正金銀行に勤むる島氏下宿せり。食事後、此人の室にて暫く雑談し、然る後一二五番街の夜景を見物に行く。島氏の最初に案内せる所は、ドイツ流の Tanzlokal なり。ビールを売り、女郎も沢山来て居る。最近にパリを見た余の目には、全ての裝飾如何にも田舎びて見えたり。それより Pa-

pastと云ふ稍上等の料理店に行く。之も大陸風の Palm Garden なり。

十月三十一日(土) Elevated にてウォール街へ行き、正金銀行、領事館、及高田商会を訪問す。

正金にて山内、中井両氏に逢ふ。金を預けたるに、同銀行より National Park Bank へ宛てたる小切手をくれたり。ニューヨークにては州の法律にて、外国人が普通の銀行業務を営むことを禁じ居る故、かかる手続をなすなり。尤も之は州の法律なれば、他の州、例へばカルフォルニアにては正金も土地の銀行と同じく普通の銀行業をなすと云ふ。

領事館及高田商会は同じ Wall St. 60 と云ふ Sky-scraper の内にあり。高田は二十何階の上にて見晴しよし。此建物には四か五の elevators あり。二十何階の上に行くには、その内の Express に乗るなり。高田にては、三上、津村両氏に会ひ、領事館にては水野総領事及山崎領事館補に会ふ。山崎氏は高商出身者なり。今日は Late 応援の為に実業団体の旗行列を行ふ由にて Wall St. は早退け。

行列は朝の十時より夕の六時まで引きりなしに、

を取り、茶を取り、シチューを取りそれを携へて席へつく。Buffer の一端に見張の婦人ありて、各々に切符を渡す。此切符には十より六十まで数字を印刷しあり、それを渡す時に、取ただけの食物に相当する数字を切抜いてくれる故、客は其切符を cashier へ持行きて払をなすなり。此切符の形は電車の切符の如く、之をきるに電車に用ゐると同じ punch を用ふ。

此 Station の如き弁当屋にて、余と同じ机に座りたる二人の男はフランス語を用ひ、隣の机にはポーランドかロシアらしき語を用ふるものあり。ドイツ語はあちこちより聞へ居たり。

余が食事をするに二〇二の下宿屋にて、同じテーブルに座するもの十四、五人あり。九ヶ国を代表せり。米、英、蘇、独、加、パナマ、猶太、アルメニア、日本はなり。

食事中談笑するもの殆んどなく、ただ一緒に食ふといふだけのことなり。一緒に食ふのは手数のかからぬ為にて、賑かに話し合ふ為にあらず。

公園の揭示は、英、独、伊及びハンブリー語を用ふ。

Broad way 及 Fifth Ave. を練り歩く。Madison Square には機敷を設けたり。沿道の商店は大抵休業して、店員も行列を見物せり。或 milliner の店には、Vote for Women の幕を見えたり。

ニューヨークの町は Down Town へ行けば、敷石が凸凹し、街燈や郵便箱が泥だらけに汚れ、おまけに曲りくねつた狭い道の両側に Sky-scraper が軒を並べて立つ故、頗る殺風景なり。

「E」も「sub」も、手入れ行届かずして汚なし。併し Up town へ行けば、縦横の道路整然として暮盤目をなし、道中広くアスファルトを布き、並木を植え、恰かもハルリンの W であるの思ひあり。

今日は正午過ぎの最も忙しき時に、Trinity Church の側なる Child と云ふ弁当屋で食事をなしたり。Child はロマンの Slatier 又は Lyons の如く、ニューヨーク市中到る所に店を出して居るが、右の Church の傍の店には一種特別の手続を採用せり。店には Buffet の前に鉄棚を設け、客は行列をなして Buffet と鉄棚との間を通行す。而して、その通行の際に Buffet より盆を取り、sandwich を取り、ナイフとフォーク

十一月一日(日) Central Park 及 Metropolitan Museum of Arts を見て。Central Park は Hyde Park や Tiergarten の如く、放蕩の趣なれども、池あり、岡あり、岩石、樹林あり。特に樹林の内より木鼠が出て来て、遊覧者に慣るるなど面白き所なり。此公園の特色は岩石なり。此岩石はニューヨーク全体の地盤にして、即ち Sky-scrapers の実行せらるる所以なり。

Museum of Arts の Grand floor には、彫刻、古器物を陳列す。其内に Pompeii の或 Villa より取り来りたる fresco あり。Crete 舟より発掘せられたる古器物あり。二階には絵画あり。伊、蘭、フランマンなどの古典もあれども、特色は近世画、特にフランス最近の名画なり。Meissonier, Detaille, Bonhem, Cot (Storm), Corot, Merle (Falling leaves) 等の。夜、東夷五郎、蒲生保郷両氏来訪。

十一月二日(月) 鹿野氏と同行。Fifth Ave. Lenox Library, Museum of Arts を見て。Fifth Ave. には誰でも知るニューヨークの金満家町といふ Vanderbilt 其他の邸宅あり、クラブあり。立派なものなれども、

所々に草の生へたる空地ありて新開地たること明かなり。往來の婦人多くは姿勢よく、衣服はパリの流行を逐へり。

Lenox Library は、美術文学に關する書を集め、其一部に画廊を設く。F. E. Church-Cotopari の名画あり。

十一月三日(火) Wamaker へ買物に行く。英、独の large stores と別に違た所も見えず。店番の愛想なき所はアメリカ風なるべし。

Riverside Park を散歩す。

此公園は雄大な Hudson の河岸、險峻なる崖を利用して造りたるもの。眺望広大なり。今日は暖かなれば、之より Bronx の方に趣かんとして、「回」に乗りしに、案外反対の方向に行くべきプラットホームに出でたれば、計画を変更して下町に行き、Bower, Park Row 辺の貧民町を觀、支那町、イタリア町に入る。支那町に日本御料理ののぼりを立てたる家ありて、今日は天長節なればとて日の丸の国旗を出したり。

City Hall Park より Brooklyn Bridge に入り、電車にてブリックリンの五十何町目まで行きて、又帰り來

る。ブリックリンには木造の家屋多し。道路のみ出來て家の立たざる所もあり。ブリックリン橋には、「三」の道、普通電車の道、人道、車道あり。随分複雑なものなり。

今日は即ち四年に一度の大統領選挙日なり。商売は全て休業し、投票所には朝より投票者列をなしてつめかけたり。投票所としては理髮床、弁当屋など普通の民家を用ひ、其近所には選挙事務所も何もなく、極めて静肅なり。所が夜の七時頃より市中は非常の人出となる。

各新聞社は幻燈を以て最近の選挙の結果を報道する故、Times 及び Herald の本社の前は、最も群集雑沓せり。併し群集の多数は必ずしも此報道を得んが為に出で來たるにあらずして、ただ騒がん為に出で來るなり。

彼等は手に手にラップ、牛の鈴、毛ばたきなどを持ち、又紙切れを抛げちらし、ヨーロッパ大陸のカーニヴァルのまねことをなす。

是が選挙投票終りて、しかも其結果の未だ公にならざる前行はる処を見れば、選挙の応援にもあらず、

当選の祝にもあらず、全くさはがん為にさはぐなり。又此夜の著しき光景の一は、大ホテルの雑沓なり。大ホテルにては新聞社と同じく、最近の選挙の結果を揭示する故、金のある連中は新聞社の前に立つかはりに、ホテルにて食事をなし、酒を飲みつつその報道を得るなり。此夜、Waldorf-Astoria, Astor House 其他三、四軒のホテルにて夕食をしたためたる客の数、一万五千人ありしと云ふ。

唯、ここに我輩の感心したるは、此大騒ぎの裡に乱暴を働くもの殆んど一人もなかりしことなり。大統領選挙は法律上複選挙法に則るものなり。然れども選挙人は各党派にて指名し、人民はその人々を一旦とめに選挙する故、選挙人の競争は皆無にして、事実上は直接選挙と同様なり。又此日は大統領及副大統領選挙人、州の知事、元老院議員の代議士を同時に選挙したるが、其最も肝要なるは大統領と知事なり。大統領の候補者は Republican の Taft, Democrat の Bryan, Independent の Higgins なるが、其選挙の Programme は政綱よりも人格に集中したるもの如く、敵党を不道德の党派として罵り合ふ様子なりし。

ニューヨークの知事の候補者は Hughes と Chauler なりしが、之は Hughes が現任期中に強烈なる手段を用ひて賭博及酒店を取締りたる為、其可否に付て議論沸騰したり。

中には大統領としては Taft を推し、知事としては Chauler を推すと云ふ党派外の一派派もありたり。

此夜起りたる出来ごとの内にて、今一つ著しきことは、Wall Street の Stock-brokers が徹夜にて注文を受けたることなり。それは Taft の当選確からしくなるにつれて、買手の数一時に増加したる結果なり。選挙が事業の実行を差控へしむることにも表れたりと云ふべし。

十一月四日(水) 昨日に引換へて今日は寒く、且静かなり。

余も手紙を書き、又コロンビア大学図書館に入る。図書館は公開されるれども、普通の自由図書館の如く雑沓せず。閲覧者の取扱振は英の図書館と同じく親切を極めたり。

十一月五日(木) 鹿野、蒲生両氏と共に Aquarium を見に行く。入場料を取らず。帰りにブロード・ウェ

イの書籍店をまわり、R. de Bary — The Land of Promise を得たり。

午後九時より Hotel Astor にて水野総領事夫婦の天長節祝賀会あり。会の模様は、日本人外国人を合せて二百余名ありし。来客を六、七人づつ小きテーブルに分けて座せしめ、食事の終りたる頃主人立一場の興味ある演説を試み、然る後座中の名士を指名して演説を請求す。此請求を受けて立ちたる連中には銀行家の Schitt、海軍少将某、Griffith 博士、貿易商某、医師某の他に、ヘリー遠征の生存者たる白髪の一老翁もありたり。

アメリカにては此の如く夕食後の演説の多きを以て盛会となす由なり。余は此夜多数の友人に久々にて面会することを得たり。その人々は太田原一定、坂本勉、中井長三郎、高木舜三、矢嶋俊吉、田島某等の諸氏なり。帰宅は二時。

十一月六日(金) 午前原勝郎博士を訪ふ。同氏は明日発足、カナダ並にポストン地方を巡る筈なれば、余は一週間後に発してポストンにて落合うことにきめたり。

食ふことにしてゐるので、余を飯に招いたのだ。Mrs. Stephen は Episcopal Church に属し、一寸古風な所がある。その話にアメリカ人は reverence といふことを知らない。子供までが親に対して尊敬の情を持たぬのが多いとて、なげいて居る。又往来で老年の黒人を見て、あれは昔の奴隷だと思ふが、身なりも卑しくない。行儀作法も心得てゐる。昔のよき家に飼はれたものは奴隷でもかくの通りだといふた。

Mrs. Stephen は、まめな女だ。此日第一に余をエヂソンの活動写真及蓄音機製造所へつれて行て一緒に見物し、それから帽子製造所をも見せると云ふて連れて行たが、此方は時間後に成た。それから自分の教会へつれて行た。教会には附屬の会堂があつて、毎日子供の会とか、娘の会とか、母の会とかを催す。

アメリカの教会は、中以下の社交の中心として活動して居ることが分る。此夜は黒人の催して黒人の教会堂を建てるためのバザーがあつた。一番終りに自分の室へつれて行て、自慢の姪に余を紹介した。誠に利口な子で言葉も伯母さんの御仕込だけに正しくてきれいだ。Orange は New Jersey に属する美しい Resi-

領事館を訪ひ、後、山崎馨一氏の案内にて日本クラブにて食事をなし、密席を見る。日本クラブには、西洋間に床の間、ちがひ棚を設け、紙襖を用ひたる一室あり。

十一月七日(土)、十一月八日(日) 風邪をひきたれば此両日は外出を見合せて之だけの日記を書き、且 Bary の書を読む。

十一月九日(月) Miss. Hughes の紹介にて Mrs. Stephen を訪問する為、Orange へ行く。

停車場に着すれば、六十近き丈夫らしい婦人が待て居て余を出迎へ、早速ささやかな Hat へつれて行た。此家は此人の息子夫婦と、独身の娘が住で居る家である。

Mrs. Stephen は Miss Hughes と同じく Wales の人で、三十何年前に此地へ移住し、夫が死んでから看護婦になつて二人の子を育てた気丈者である。今は生活に不自由もないと見えて、教会の用事やら、看護婦会の世話焼やらで忙しく働で居る。息子は何かの職人で、娘は看護婦だ。Mrs. Stephen は別に十一か十二になる小さな姪と別の家に住で居るが、昼飯はここで

Edison も此村に住で居る。

Edison の工場は三千人の職人を使て居る。中々仕事に忙しくて度々夜業をするが、労働時間は普通五十四時間で、給金は一ドルから四ドル。オレンヂは一方に於て工業地である。帽子の工場が沢山ある。職工は各国人の寄合である。町を通る間に、ここはイタリア町、ここはドイツ町と区域が分れて居るのを見る。黒人もニューヨークよりは沢山に居るが、工場には来ない。

ニューヨークからニュージャージーに渡るには渡し舟がある。舟と陸との連絡があまりよく出来て居るから、或日本人は舟へ乗て、そのみよしまで行て、おや、まだ渡し舟は来て居ないのかと、疑つて居たら、自分の棧橋と思つて居たものが動きたしたといふことである。それから別にトンネルが出来て居て、電車が通て居る。又、Penn. R. R. は目下大トンネルの工事をなしつつある。

Newark の先で鉄道が大きな沼地を横切る。之が Hackensack Marshes といふ荒地である。人口四百万のニューヨーク市の近辺にこんなものが開かれずに残

て居るのは、米国の様な新しい国でなければあるまい。ニューヨーク以外の町に木造家の多いことも、歐洲で見るとからざる有様だが、之は材木の安いことが一つの原因ではあるまいか。

オレンヂに老人下宿とも云ふべきものがある。老人の独者を集めて一つ家に住ましめ、Comfortを与へる目的で出来て居る。

西洋では、子供が成長して家を持つ時は、親と別居するから、老人の親は淋しい独住をせねばならぬ。之は我々日本人から見ると実に気の毒だ。西洋でもそこへ気の付た者があると見えて、こんな設備が出来て居る。

十一月十日(火) 用事があつたから領事館及高田商会へ行た。それから大倉へ行て太田原君に会ひ、三井へ行て福井支店長に会ひ、それから高木舜三氏と支那町の支那料理へ行た。高木氏は嚴父の教育の効力にて身体強大なるのみならず、性質も大様にてしかも企業心に富み、面白き人物に出来上りたり。

それから Brentano へ行て米国近刊の商業書類を買求めたが、ペンシルヴァニア大学出版のもので面白さには何分感服の他はない。

十一月十一日(水) 午前は手紙を書く。文部省、松崎校長、関一氏へ近状を報道し、帰期を告げた。余は十二月末にヴァンクーバーを立たうと思ふ。

ロンドンに大学へ行く。

Miss. Hughes 紹介のデューイ教授に会ふ。此人は心理学の教授だが、至極愛嬌のない人物だ。それから Board of Education へ行たが、希望の人が居なかつた。それから Cooper's Union を見に行た。規模の大きいには何分感服の他はない。

夜は中井長三郎、坂本勉両氏の招待で日本クラブへ行た。両氏共中々にアメリカ風に成て居て面白い。ニューヨークの日本人間にはバクチが流行する。其方法はサイコロを使ふこともあり、トランプを使ふこともある。尤も何れにしる少額の賭金に止るらしい。

今夜、余も付合て見たら中々面白いので、二時頃まで飽きなかつた。併し夜更かしの弊に陥るのは免れない。バクチよりは運動の方が勿論よろしい。

十一月十二日(木) 三井の紹介で鹿野、鷺見両氏同

うなのが少くない。

夜、日本料理、生福へ太田原君の招待で行た。同君の話に面白いことが一、二節あつた。曰く、アメリカで商売すると困ることがある。日本では官庁でも、会社でも書付がなければ信用しない。何か買付をすればアメリカの商人から受取を持って行かなければ承知しない。然るにアメリカの人は、自分は二度代金を請求する様なことはない、いふて請取書をだすのおつくりにする。もつと困るのは品物の引渡が遅れた時に、その理由書を日本へ送らねばならない。それにアメリカ人は理由がないと云ふ。充分に急いだ、それ以上には仕事が運ばなかつたのだから、気の毒だが致方がないと答へる。日本では不可抗力以外の理由で引渡が遅れた時は日歩を取ると云ふ。もう一つ、鉄材料、又は機械は多く船で積出す。現在、日本とニューヨークの間を通る *Field* (貨物船) が六十艘位ある。そこで鉄材料になると米国には例のスタイル・トラストがある。之が船を Control してゐる。保険を支配して居る。それで大倉あたりから注文しても、F・O・Bの契約はいやがる。C & F 又は C I F にしたいとい

行、パターンソンの機場を見に行く。三井の一ノ宮氏案内で行てくれる。

パターンソンの地形は山を負ひ、流を夾み、最も水力の利用に適して居る。初は此水力に基て事業が開けたに相違なく、現今も之を用ひて電氣を起して居るが、汽力を用ふる機場も少くない。機屋は大小色々であるが、中に二、三のアメリカ流の大工場がある。吾々が案内されたのはリボンの工場で二百五十人の女工を使て居るが、一人で十二本、二十四本、又は四十八本のリボンを見て居るから場所が広く、人が少く丸で空店の様だ。

女工の最上のは週に十五ドルを得るといふ。労働時間は五十四時間。州に工場法あり。Inspector あつて二ヶ月毎位に見廻に来る。夜業は仕事が悪いといふてやらぬ。

パターンソンにも各個人町の町が分れて居る。雇主達の上等の屋敷町もある。立派な公園が二つある。併し概していへばオレンヂと同じく家が飛び飛びで道路等はまだ整て居らない。

今日、パターンソンへ行く前に Singer Building に登て

見た。之が四十何階といふ最近迄最高の摩天楼であつた。今は Metropolitan Life Bldg. が最高だつた。四、五年前に出た英国人のアメリカ旅行談に Flat-iron Bldg. の高さを珍しげに書いてあつたが、今の Metropolitan は Flat-iron Bldg. を眼下に見下す勢だ。地震でもあれば全滅になるが、其他には出来るだけ高くするのに不都合はあるまいと思ふ。

十一月十三日(金) ロンビア大学へ行って、Prof. Seligman に会た。此人は Prof. Dewey よりは世辭がいいが、緩々話をするとは出来なかつた。

序に戸内運動場を見て来た。普通の運動場の他、棧敷に駄足の稽古をする所が出来て居り、階下に泳ぎ場が出来て居る。図書館に次で大きな仕掛だ。

先日の答礼として東氏を訪問した。同氏の下宿は前に原氏の居た家と同じく、高く flat building で、リフトが設けてある。

夜はニューヨーク同窓会の招待で生稻へ行た。来会者三十幾人、其内で三井の岩下朝周氏、森村の松瀬氏、独立の笠井氏、曾て正則に居て、今は三井に属する山浦英太郎氏には初めて面会した。人の集た割合に、別

段珍しい話をきかないのは、即ち同窓会たる所以だらう。

十一月十四日(土) N. Y. High School of Commerce, Y. M. C. A. N. Y. University を見る。

夜、一宮、山浦他一人、皆若い連中が来て深更まで雑談。

十一月十五日(日) Boston へ立つ。汽車の窓から見るに、村はちろちろあるが、耕地が少くて荒地が多い。林はあるが雑木林が多く、牧場も英国の様な手を入たのは殆んどない。

今日は雪が降って居て景色が中々よろしい。日暮れて Boston に着く。かねて原君より紹介された Cambridge の宿まで馬車を雇たら三弗取られた。

十一月十六日(月) 前以て打合せて居た通り今朝は State House なる Board of Education へ行って、午前には Prence 氏 (Miss. Hughes 紹介) に会す。同氏案内で English High School の Commercial Department, High School of Commerce, Saleswomen's Class, 並に Simmons College を見た。

米国では日本の中学校に当る学校を High School と云ふ。それが English High School, Latin High School に分れて居たが、近頃は High School of Commerce が出来た。

High School of Commerce は、従来の Business College と異り、簿記、速記の如きもののみを教ふるに止まらず、経済、法律の一端を教へ、且、語学、歴史、科学を教ふることを標榜して起りたるものなり。現今、ニューヨーク、フィラデルフィア、ボストンの三ヶ所にあるもの最も大なり。

此種の学校は、米国需要に適せりと見えて、近時独立の学校として、又は普通の High School の一部として新設せらるもの少からず。学科の配合は Course of Study (H. S. of Com). Eng. H. S. (p. 25) にある如く、思ひ切つて普通学科を多くし、商業的学科を少くしてある。Eng. High School の Commercial Department は特志の生徒のみが来る。即ち選択科目である。そこで此部の主任は自分の学科が、英語部又はラテン部の如く Educative であるといふことを主張するのである。

午後は此部長の Mr. Carpenter と雑談した。一通り要領を得たが、He don't know などと云ふ妙な言葉を使ふ。此人は苦学して大学を卒業したのだといふことだ。それから、此人は二十余年間商業部を教へて居る間に、常に商品を集めることに興味を有して居た結果、商品見本の蒐集保存に付て一角の巧者となり、今は自分の business を開き、町に一室を借り、一人のタイピストを使用して居る。態々、余をそのオフィスへ案内して見せて呉れた。さすがはアメリカ人だけのことはある。

Training Class for Saleswomen と云ふべきものは、Women's educational & industrial association の一事業として開かれて居る。其創立者兼教師は Board of Ed. の Mr. Prine の妻君である。此人は教師として経験があるが、兩三年前に Department Store の売子を教ふることを思ひ付き、自ら店へ入って実地を見た上で色々工夫した揚句、今の級を組織したのだ。最初は雇主の応援微弱であつたが、今は四ドルの売子を三月教へれば、十ドルの価値が出ると言ふの勇氣になり、自店の売子中より抜擢したものに毎朝休

で雇主も手へ通はしむる様になつた。  
 学科は織物の種類、産地等、又は色彩の配合と云ふ様な問題の他に、実地の売捌の練習をなさしめ、その批評をなすこと恰かも師範学校の教授法練習の如し。Mrs. Prince は如何にも利発らしき人にて、その学科の Original なるには感服したり。

Simmons College は High School for girls を終りたる者を入れる。一種の女子大学なり。その部分を Social works, Library works, Teachers, Secretarial works などに分ち、一般教育と共に professional subjects を教授す。Secretarial の部は Type-writing, Stenograph に沢山の時間を用ふ。

十一月十七日(火) 毎夜原君と雑談面白し。  
 今日と同君と同行にて Wellesley の女学校を見に行かんとしたが、電車の連絡悪きため、途中より帰り Institute of Technology に Mrs. Richards (Miss. Hughes 紹介) を訪ふ。此人白髪のお嬢にて愛嬌あり。

学校出身の女子が家事に疎きは不都合なりとて、科学的に食物の研究を始めたといふ人物。所謂 domestic 考書を見る。其内には従来余の知らざりし書物も少からず。

昼飯は Mr. Green の招待にて Colonial Club にてしたむ。歴史家某博士、並びに今年の夏まで東京にて教授せし Mr. Sprague 同席。

午後四時、約束によりて Miss. Scudder を訪ふ。此人は Wellesley 女学校の文学教授。中々頭が良さうで、うっかりすれば理屈詰に來さうな女。此人の説に依れば、アメリカに独身の女子多きは好しからぬことなれども、女の高等教育が結婚を妨害するとは思はず。宗教談に移れば、日本人が祖先崇拜と仏教の Pantheism とを同時に信ずるといふことは理屈が判らぬといひ、之には余も一寸説明に困た。Miss. Scudder の母なる人は宗教で固た人物らしい。

日本へ派遣した宣教師の学校は如何、ときくから、それは昔は充分用をなしたが、今日は市立の女学校がよく成たから、流行せぬと、答へた。次には宣教師の医術は如何と問はれたから、それは三十年前には日本に医者が乏しかったから役に立たたが、今日ではあまりいらぬ。病院の設備に於ても、医師の手腕に於ても日

the science movement の先鋒なり。

午後ハーバード大学へ行き、Green 氏を求めたが、不在にて要領を得ず。Green 氏は President Elliot の Secretary にて、此人へは高木舜三氏の知人なるボストン山商会、森本銀太郎氏の紹介を得たり。

夜に入りてはボストンへ行きて、Wells' Memorial Hall 及……Memorial Hall を訪問す。Wells M. H. は Wells と云ふ宣教師の社会事業に勉めたことを記念せる為に設けたもの。職工の為に夜学、クラブ、通俗講話、新聞閲覧所を備へる。現時、Payne と云ふ有名な慈善事業家を会長に頂き、会員組織を以て維持す。

ボストンには慈善事業非常に多く、職工の夜学は皆此種の方法に依頼するものなり。

……Memorial Hall は Unitarian の平民的クラブにて、仕事は Wells と大同小異なり。(右二ヶ所より印刷物を貰ひ受けたり。)

十一月十八日(水) Harvard 大学にて Green 氏に面会し、各館を巡覧した。又、新設 Business School の書記より様子を聞き取り、図書館に入りて、商科の参

本医者の方が進んで居ると云ふた。先方は少々不機嫌の体だつた。

夜は Mr. & Mrs. Thorp (Miss. Hughes の紹介) の晚餐に招かれた。

Mr. Thorp は Harvard 出身の法律家にて、鉱山業にも関係す。Mrs. Thorp は昔 Miss. Hughes とケンブリッジにて同学なりし人。他に Albany 鉄道会社の部長、法律の教授両夫婦の客あり。Miss. Thorp も同席した。

家はアメリカ流の木造、周囲に広く空地を取てある。玄関の戸を押せば、其内は大きなホールで、一方には名刺皿、帽子掛あり。他方には応接間の仕掛あり。之はアメリカ風と見えて、何処の家もさうだが、こんな立派な家でも同じことだ。

食事は非常な御馳走があつた。主客共イブニングを着てゐたが、此文の馳走があればイブニングも似合ふと思つた。併し何れも大学出の連中だけあつて上品だつた。所謂アメリカ風の ostentation はなかつた。

Mr. Thorp の談に、新設の Business School は全く Presid. Elliot の考に基く。Elliot 氏は総長として実

業界に交遊した結果 College Men の要素を此方面に  
加へるの利益を認めて自ら此案をだしたのである。  
現今に於て College Men の実業界に於ける勢力は年  
々増加し、実業家も College Men を使用するの利益  
を悟て居る。

余が Business School の目的を見て大に感心したこ  
とがある。学校の設立早々 Corporation Finance の  
講師として数人の実業家を抜きたるに、その人々は皆  
ハーバードその他の学士である。来年は Industrial  
Management に付き、約同数の実業家を入れるべしと  
いふことなり。Harvard Business School は Graduate  
Schools の一なり。四年の College education を  
予備として要求するものなり。而して年限は一年以上  
なり。完全なる予備教育の後に比較的短かき専門教育  
をなすといふ点から見れば、ドイツの Handelshoch-  
schule と似た所あり。併し学科は H. の如く technical  
のものを多く課せず。又、H. の如く入学前又は在校  
中に手代を勉めたるものを收容するの意志更になし。  
其代りに初年と二年との間の夏休暇に、実地経験を得  
んことを要求す。

従来アメリカの大学にて Faculty of Commerce は  
皆、カレッジの程度なるに、ハーバードが進んで Gra-  
duate School を置きたるは、実験の一步を進めたる  
ものである。

十一月十九日(木) Boston Free Library に入る。  
非常に大規模にてマンチエスター、ハーミントン及  
ば、午後原勝郎氏同伴。Mrs. Richards の案内にて  
Women's Education Association の会を傍聴す。

之は女教師の会で主に女子教育を研究するもの。毎  
月集会ある由。今日の出席者五十人位。討論に口をだ  
した人の内には、学校の他の世間を知らない娘らしい  
ものあり。娘を持た母らしいものあり。所謂オールド  
ミスのタイプ、口のとんがったのもあつた。全てが  
殺風景な女史連のみではない。

Mrs. Richards の講話が面白かつた。

曰く、十九世紀の初めまでは、母が娘に家事を教へ  
たから、学校でそれを教へる必要はなかつた。工場が  
発達してから、下流の娘は女工となつた為、家事を  
習ふ機会なく、それが為に社会上忌むべき結果を生じ  
た。

一八六〇—七〇年頃、アメリカに女子の高等教育起  
り、中流の娘達は家事を抛擲して詩を誦じ、それで  
emancipate されたと思つて居た。自分もその経験を  
自らしたが、誤りだと思つたから domestic science を起  
した。

十一月二十日(金) Museum of Arts を見た。イマ  
リー、フランダー、オランダ等の大家の標本を一つ二  
つ並べた他に、最近のフランスの名画を集めてある。  
モネーの作特に良し。それから日本の木版画と陶器が  
よく集まつて居る。

午後原君同伴、汽車で Wellesey へ行き、Wo-  
men's College を見る。Miss. Scudder の紹介なり。  
女子大学の良きものは、ハーバードと密接せる Pa-  
cific, Wellesey, Philadelphia の Bryn Maur 等な  
り。

Wellesley College は大きな池に臨み、丘の上に  
立ち、森を囲りし、絶景の地である。千三百人の学生  
あり。その大部分は寄宿舎に住居して居る。四ヶ年  
のカレッジにて専ら Academic culture を与へ、  
Simmons の如く、professional の眼目を置かず。卒

業生の三分の一は教師、三分の一は社会事業という風  
なり。

十一月二十一日(土)今日は Concord と Lowell  
を見る。天気晴朗。

コンコードは極めて静かなる村、村といふよりは森  
の内に家が沢山あるといふ方が適當。その家は殆んど  
悉く木造、道路は砂利を敷ただけなれども、人通り少  
ければ清潔なものなり。Simple life の理想郷なり。

Emerson の墓は Nathaniel Hawthorn のと同  
じく Sleepy hollow Cemetery にあり、他の墓碑は  
切た石なれども、Emerson だけは自然石にて小さき  
ものなり。落葉を踏みながら、墓の番人に問ふてその  
墓を探したのは、一寸おつな様だったが、随分骨も折  
れた。

時間が非常に切迫して居た。ステーションへ行て切  
符も買はず列車の内へ飛び込んだ。車掌は All right  
で切符を呉れた。後で聞けばアメリカの田舎の汽車は  
みなこの通りだといふこと。

Lowell 45 Merrimack 河に臨み、その水力を用ひて  
Mills を運転して居る所が特奇。New England は

現今殆んど不毛の地といふてもよい位。而して石炭があるといふでもないのに盛な工業を営んで居る。頗る面白い現象だ。Waltham の時計工場はボストンとロンドンとの間にある。General Electric Co. は Lynn にある。Lynn と Brockton はアメリカ靴の本場である。

十一月二十二日(日) 原君同道 Christian Science の礼拝を見に行く。驚くべき広大な会堂が一ぱいに塞いで居る。儀式は簡単なもの。演説をする代りに聖書と Miss Eddy の書た何かいふ書物と、対照朗読する所が特色なるべし。

神戸高等商業学校の英語教授、小久保定之助氏を訪問す。同氏は前にも米國に居たことがあるといふこと。色々日本の英語教授法に付て話した。

今日ボストンで昼飯を食た。食てしまつてから財布を忘れて居ることを思ひ付た。ボーイに一時間後に持て来るといふたが、All right と来た。先日もニューヨークの立食屋で同様の伝をやつたが All right であつた。曾てスルリンでやつた時には時計を質に取られた。

Mr. Thorp 方へ先日の礼券 Battle St. を散歩して Mr. Auburn Cemetery の方へ散歩した。静かな暖かな夕で、詩人の墓でも訪ふには至極よきさうだが、墓地の門は閉てあつた。

Cambridge で泊て居た家は 13 Remington St. 主は Mrs. Crowley といふ婆さん。娘と二人暮らし。室の数四もあるが、その内二つは貸して居る。婆さんは幾つになるか知らぬが、生れはアイルランドで、ここへ来てから四十年になる。無論カソリックで Christian Science も Unitarian も知らひ。アメリカで物の高いのは tariff があるからだと言ふ。アメリカ人は贅沢にはかり成ていかぬといふ。無学のくせに中々分て居る。

此家では普通のストーブを使って居る。石炭は例の無煙炭で甚だ結構だ。燈は石油ランプだ。室代は一週間三ドル。小さな室だが、日あたりよく、暖かく至極心地良かった。此室で毎夜原君と色々の問題を討論するのは非常に面白かつた。

十一月二十三日(月) 今日には愈ボストンを去て、New Heaven へ行く。途中 Providence で下り、Fall

River を見るのが仕事なり。Providence では Prospect-Terrace と云ふ所へ行て市中を上からのぞいて見た。よい都合に或老人が居て説明してくれた。古い State house と新しいのと較べると、富の發達の盛なことが驚かぬを得なう。

Gear-Cutting Machine の製造元として、覚えて居た Brown & Sharp は市中に煙を揚げて居る。

Providence から Fall River へ電車で行た。その途中で美しい磯浜の海水浴場を三つ四つ見た。Fall River の向ふに有名な New Port の海水浴場があるが、時間がないから行かぬことにした。

Fall River は今尚發達の初期といふてもよい。水利のよい所に大きな Mill をボツリボツリと立てる。

その周囲に職工の家が立つ。道路が出来る。電車が出来るといふ都合だ。それで新しい町が出来るのだが、別に土地の凹凸を直すわけでもなし、道路の計画を立てるでもなし。おまけに立てた家と家とがあらゆる角度をなして散在して居る所は頗る奇観だ。New Heaven へ暗く成てから着た。之がアメリカへ来てから初めて宿屋だ。宿屋の体裁は戸を押すと大きな広間へ入

る。片隅には事務所がある。煙草屋、新聞屋がある。靴みがき、散髪屋が居る。沢山椅子が置てあつて、客は思ひ思ひに話をしたり、新聞を読んだりしてゐる。これは後からの経験に依ると、アメリカ一体の風で、大小上下等ともこの通りだ。

十一月二十四日(火) New Heaven では Prof. Ladd に会ふといふ考もあつたが、時を節する為に止めて、外面から大学の建物を見るに止めた。

建物のスタイルはハーバードよりも古めかしく大学らしい。規模は及ぶまう。

New Heaven の residential quarter では Hill house Avenue と云ふのが一番美しい町だ。之は恐らく世界中の他の町に類が少からう。

家が大きくて趣味に富で、庭が廣くて町に大きな樹があつて、町と庭との間に垣を設けない。East Rock の名所を見に行た。広大な小山を入れて公園にしてある。

フランクフルトの Stadt forest. 又はボンの Venusberg の類だ。うづは Long Island Sound を見はらす筈だが、今日は生憎霧がこめて居る。夜ニューヨーク

クへ帰た。島君方で食事をして、同君のソファアで眠た。此晚島君と同道、山内健吉君を訪問し、且三人で飲だ。島も山内も両方とも、さつぱりした人間ではない。

十一月二十五日(水) フィラデルフィアへ立つ。汽車の時間割を前に見ておかなかつた為、都合のよい汽車に乗りそこなつてプリンストンへ下りることが出来なく成た。ニューヨークーフィラデルフィア間は、ニューヨークーポストン間と違つて土地がよく耕されて居る。特にトレント以南に於て然り。差向き Broad St. の Hotel Walton に泊ることにして、今夜は高木舜三君から紹介された、海軍大尉上田良武氏をたずねた。

此人は大学の寄宿舎に住で居る。寄宿舎は立派な建物で、室の設備も中々整ふて居る。食事は外ですることに成て居る。此夜大尉方へ大学生の高木隆吉氏が来て三人で雑談した。

十一月二十六日(木) 午前は高木君の案内で主なる町を歩き、Independent Hall、フランクリンの墓を見

た。それから同じく同君の周旋で、書生下宿の一室を借りた。室代一週二ドル五十セント。ウォルトン・ホテルは一晚二ドル。

午後は上田君と同道、ペンシルヴァニア対コーネルのフットボール試合を見に行た。之はかねて高木舜三君を通して切符を用意して置てもらつたのだ。アメリカ大学の対抗マッチの景氣を初めて見た次第だ。

十一月二十七日(金) 上田、高木両氏同道、Fair Mount Parkへ散歩。午後はAcademy of Five Artを見る。

夜、上田氏の英語教師にて大学の助教、Oliver Bolger氏を訪ひ、アメリカ文明の性質に付、同氏の説を聴く。此人はトルストイに私淑する所の理想家で、説が少し偏して居るが、中々面白いことを云ふた。

曰く、アメリカの宗教心は bigotry である。人世の意味を高尚ならしめる力を以て居らぬ。

曰く、アメリカの平等は白人間の平等であつて、黒人は相変らず人間以外に置かれて居る。黒人は聰明なりとしても、黒人たるの故に社会の上流に進むことが出来ぬ。

曰く、アメリカの共和には欠点がある。アメリカでは個人は、多数の考ふるが如く考へなければならぬ。思想の独立に乏しい。

曰く、アメリカ人の Quick なる特色は Irish の血が持て来たものである。

曰く、独逸人の移住はアメリカの教育に影響を及したが、その影響は好ましくない。ドイツの教育は形式的、皮相的、学究的である。

十一月二十八日(土) フィラデルフィア在留の日本人が会合して、写真を撮ると云ふので仲間入をした。

この学生は金持の子弟、然らずんば苦学生。昔は新渡辺稲造、元良勇次郎などの諸氏も居た。高木氏と共に Commercial Museum を見る。

非常に寒い。風邪を少しひいたから、引籠て日記や手紙を書く。

十一月二十九日(日) 午前在宿。午後下町へ行て見るに Sunday Closing は充分行はれて居る。電車、地下電車、Ferry などを乗り廻して見る。

夜、University Settlement へ行く。之は上田、高木氏等の、ハイブル・クラスへ来る哲学生某氏の紹介。

建物も立派で経費も沢山にかけて居る。マンチェスターの Ancoats Museum に比すべきものだ。大学ではキリスト教徒教育に重きを置き、Settlement を中堅としてハイブル・クラスの様なもの奨励して居る。Settlement は社会事業としては費用の割合に効能が少いが、同時に学生の修養及研究の手段として見なければならぬと思ふ。

十一月三十日(月) フィラデルフィアでは、大学を見る考で、高木舜三君から其筋の紹介を沢山貰て来たが、Baseball match のもつた日が Thanksgiving day で、それから日曜まで大学は休であつた。Thanksgiving day はアメリカではクリスマスの次の大節句としてある。此日は何でも休む。

今日は大学へ行て College の学長 Dr. Penniman に会ひ、一般の大学の組織を問ひ、次に Wharton School of Commerce へ行つて Director Young に会ひ、その許可を得て講義を三〇聴聞し、運送の教授 Dr. Johnson に招かれて昼飯を共にし、食後 Wharton School の学科の編成、教授の方法に就て詳細なる説明を得た。Johnson 氏の説明に依て大に得る所があつ

た。  
それから Vice-Provost Dr. Smith に会って二十分許り話した。同氏は現今のアメリカ大学の運動熱は過分なりと断言せり。

曰く、大学生を捕へてフットボールの選手は誰かといはば知らざる者なかりし。之に反して数学の最もよく出来る人は誰かといはば、知るもの殆んどなかりし。是順当にあらざる也。余反問して曰く、貴下は如何にして運動に対する excess of enthusiasm を止めんとするか。対へて曰く、我に案なし。唯大学の對抗マッチを停止せんと空想するのみ。又曰く、technically less perfect but numerous champions を得ることが学生運動の理想なり。

それから Gymnasium へ行ひ Dr. McKenzie に会ひ、場内を案内され、且、学生の健康及体力調査の方法、学生に体操を強ふる方法などを説明せらる。大学は学生の体育に重きを置き、此完全なる Gymnasium を作り、特に医師なる同氏を雇ひて運動を監督せしむ。学生は一週間二回づつこゝへ来りて体操をなす義務あり。此義務を怠るものは学科の試験を無効にせら

るべし。又学生は卒業前に遊泳を覚える義務あり。然れどもフットボール、ベースボール、テニス、水泳その他何かのチームに加りたるものは一週二回の義務を免除せらる。

今日は朝から晩まで色々の人に会ひ、少しくたびれたから町へ行って Turkish bath へ入て帰ってから親族一統連名宛で手紙を書いた。之が余の留学中最後の手紙だ。曰く、御土産はありませぬ。三年前に日本を出た時のフロックコートを着て相変らず色の黒い厄介物が舞込みます。

十二月一日(火) Wharton School へ行つて Class を四じあり、Dr. Johnson に昼食に招かれ学科論を聴く。Drexel Institute を観る。

Dr. Johnson の Fraternity House を訪ひ、Mr. Norton の親切で寢室、勉強部屋を見、ボロと云ふゲームをなし夕飯の馳走を受けた。

寄宿舎よりは home の趣が多い。その代りに遊ぶ連中が多かつたら勉強は殆んど出来まい。併し上級者が下級者を導く点に於て、又専門の異なるものが同所に起

居する点に於て、利益少からずと思ふ。

十二月二日(水) 午前 Dr. Weis Mitchell と云ふ精神病の大家を訪ねた。高木君の紹介があつたから行つて見たのだ。併し得る所はなかつた。

十二月二十三分発、ワシントンへ立上。

フィラデルフィア—ワシントン間には沼の様な入海が数ヶ所ある。運送の便利は少いらしい。ワシントンは New Willard Hotel と云ふ上等の家へ泊た。

宿料は二ドル五十セント、朝飯が一ドル、夕飯は食たことがない。

十二月三日(木) 先づ sight seeing car で市中をまはり、それから Capital—真白でいやみのない、しかも威厳のある建物だ。アメリカの各州にある State house も之と同じスタイルを取て大きな dome を作る様に成て居るらしい。

次は Congress Library、建物も立派、内部も立派だが、内部の裝飾はちと念が入りすぎて種々のスタイル、種々の色彩が入りみだれた為に、統一を失て居るかと思はれる。ニューヨークのセントラル・パークで landscape garden の前に噴水池を掘り、石階や、石欄

を設けてあるのを見た時と同様の不調和を感じた。

図書館の一部にワシントン、フランクリン其他の自筆が沢山に陳列してある。Declaration of Independence の写しもある。それを見て居て思はず時間を過した。

急で飯を食つて National Museum, Smithsonian Institute を見て、Washington Monument まで行つた。昨今エレベーターが動かぬと聞て少からず失望した。大使館を一寸訪ねた。松井書記生に会た。

夜は Moving Picture を見る。入場料は五セントづつで三つを見れば一寸暇つゞしになる。昨夜も同様だった。

十二月四日(金) 昨今非常に寒いが天気は快晴である。

今朝大蔵省からホワイトハウスの附近を一まはりした。ホワイトハウスは簡単で心持のよい建物だ。

処が今日のプログラムは Mt. Vernon 行だ。電車往復一時間づつかかる。Mt. Vernon Mansion は中百姓に相当した作り、全て簡單質素で金がかかつて居るぬが、野鄙といふ分子はない。Banquet hall と云ふ堂

のマントルピースは大理石で、しかも彫刻されてゐて他の品に似合ぬ高価なものだと見込んだが、果して之は英国の金持からの贈物。それでワシントンの札状がある。その内に贈物があまり立派で republic style of my living に適當せぬといふてある。ワシントンあたりの人は、republicanとか democraticとかいふが、質素と考へて居たのだ。

日本でも平民的といふのは、安上りといふことだ。併しこの考は今日のアメリカには更に通用せず。

Harper's Ferry へ立上り。四時過にワシントンに居てもうまらぬから、田舎へ行って泊て見るといふ考だ。

十二月五日(土) Harper's Ferry、ポトマックとメナンドールと二川の溪流の合流点に立て居る景色のよふ所だ。おままた John Brown が Civil War の口きりをしたと云ふ古跡だから夏は避暑客が多いといふこと。

朝の汽車で Pittsburg へ行く。Allegheny の Vor-gebirge を Blue Ridge と云ふ。ブルー・リッジとアレガニイの間に意外に広い平地が有て、小さい farms が沢山にある。農夫は殆んど悉く黒人である。黒

人の small holdings は此地方が一番成功して居ると云ふことを後で聞た。

アレガニイへ入てからも汽車はポトマックに沿ふて走る。景色が可なり宜しい。面白いことには、この辺に川に沿ふて運河があつて、馬が鈴をならしながら小舟を曳て行く。

アメリカの様な忙しい国でもこの景色が見られることを思ふと、運河の効能は大したものだ。運河はワシントンから Cumberland まで通じて居る。カムバーランドは山中の鉄工場である。カムバーランドからアレガニイの最高点を超えて其西側に出で Young-henry Valley に入る。此溪谷は有名な石炭の産地だ。大きな Coking furnace が所々の山腹に設けられてある。

ピッツバーグに着たのは夜であつた。

Henry Hotel に投ず。

十二月六日(日) 午後町を一周して見るにピッツバーグは Young-henry と Allegheny と二川の合流する所に立て居る。川には石炭の運送船が一面に浮んで居る。曳船の蒸汽船が一種珍しい形をして

居る。岸には大きな製鉄所が数多ある。町は立派な丈の高い建物で埋められてゐる。

それから電車で Highland Park, Schenley Park を見に行つた。ピッツバーグの住宅区域は実に美しいもので、広さも中々広い。

シェンレイ・パークの側に有名な Carnegie Institute がある。今日は日曜だから休である。

非常に寒いから午後は日記を書いて居た。雨が降りだしたので夜教会へ行て見た。Presbyterian (長老派教徒)が繁昌するらしい。今日土地の新聞を読見たら、或牧師がピッツバーグの人の、金のみを重んじ、品行の乱れて居ること、不正直なことを攻撃したと云ふことを載せてある。

ピッツバーグはアメリカの富を作る処であるが、徳義の乱れた、趣味の浅い所と思はれる。

十二月七日(月) 朝寝してゆつくり発つ。行先はニューヨーク。汽車の沿道はやはりアレガニイを超えて、フィラデルフィアへ出るようになるから、山中には中々絶景が少くない。有名な Horse Shoe Curve と云ふのも通た。

ピッツバーグからニューヨークまで十一時間掛る。

ニューヨークで Astor House に投ず。

十二月八日(火) 三井の高木君を訪ふ。岩下君一家が来てあるといふので高木君の宿へ行く。ここには空間もあるから、余もここへ西三日泊ることにした。岩下君の手伝で荷物を造る。島君を訪ふ。夜は高木君の部屋で若い連中の研究会があつたから列席した。此会は毎火曜日に行なうさうだ。

十二月九日(水) 正金及製茶会社を訪ふ。製茶会社のある町は Spices Trade の中心でずいぶん汚い。

C・P・Rで切符を取かへる。太田原君を訪ふ。日本クラブにて会食す。

十二月十日(木) 原博士、ニューヨークへ帰て来たので、今朝来訪、昼迄しゃべる。

高田、領事館へ行き暇乞をいふ。

山崎君と日本クラブにて会食す。

十二月十一日(金) 原博士、又来る。又よくしゃべる。此人余が洋行中に得たる最上のしゃべり敵なり。

午後、東、蒲生両氏を訪ひ暇乞す。夜手紙を書く。

十二月十二日(土) 正金、大倉、堀越、生糸合名、三井へ暇乞に行く。堀越や生糸合名のある辺は、絹商売の中心である。

生糸合名へ行ったのは、金原東造君を訪ふ為。同君は最近に日本から来たのである。

三井で福井菊三郎君の商業教育意見を聞いた。夜八時の汽車で西へ発つ。発つ前に、一ノ宮君宅で夕食を共にす。

停車場に同君の他、東、蒲生、山内、中井、金原氏等見送る。初めて寝台車へ乗って見たが、よく眠られぬ。

十二月十三日 Buffalo で夜があけた。汽車の止つてゐる間に飯を食ひに行つて帰つてくると車がない。一寸ばかり動いてその先に止つて居た。

ナイヤガラの滝を下りた。其前に車中へ見物馬車の切符を売りに来たから買って置た。馬車は普通の客馬車であるが相客がある。アイルランドの百姓で ranching に来て居た男と Yorkshire 生れの医者に二人。

両方共不案内な奴で我輩が Baedeker に依つて講釈をしてやつたら喜んで居た。

馬車は Goat Island を一周し、それから Steel Arch

Bridge をこえてカナダ側へ行き、Horse Shoe Fall を下りて見る。此時日本の理学士片山正夫といふ人に偶然会ふ。

それからは Milwaukee から来た一夫婦と、イギリスから来た一夫婦とが連になつて、電車で川に沿つて Wheel pool Rapid まで行つて見た。町へ帰つたら一時。

汽車の早いのは今晚九時だから大分時間がある。ナイヤガラの滝の景色は実に雄大である。我輩の洋行中雄大を感じたのは Jungfrau の山とこの滝とである。

今日は雪が降つて居る。随分寒いが又散歩を始めた。散歩が終つてから片山君の宿へ行って夕食を共にした。

十二月十四日 N. Y. - Niagara Falls は New York Central 線、Niagara Fall-Chicago は Michigan Central 線。夜の間寝て通た。

シカゴでは Metropole Hotel に泊つた。室代一日一・五ドル。

朝大学へ行つた。兼て在独中友人となつた Payne 氏から紹介状をもらつて置つた Prof. Shepherdson を

求めたが要領を得ぬ。

それから領事館へ行つて余宛の手紙を受取る。余はシカゴで会つて見たいと思ふ人が沢山あつたから、前もつて手紙を出して余の滞在中、即ち十二月十四日から十七日までの間に会へるか否かを問ひ合せたのである。

堀越へ行つて小此木為二氏に会ふ。同君は商売上の關係で Sears & Roebuck と Mail Order System の元祖を知つて居るから、案内を受けて行つて見た。広大無辺なものだ。説明書がある。

小此木君と会食して帰宿。

## 明治四十二年（一九〇九年）

### 緒言

帰朝後日記をつけることを忘れて居たが、其時から今日までは余の生涯に於て随分多事な時であつた。夫につけても、其折につれて自分の所感を記して置くことは後日の為めによいと思たから今から此所感録を始めることにした。

四十二年五月二十七日 上田貞次郎

四十二年五月二十七日

(一) 商大問題に対する今回の文部省の処置は、非常の波瀾を惹起したが、此波瀾に際して余の執た態度は左の如くであつた。

文部省の処置は、一橋派をふみつけたやり方であると思た。余は到底この侮辱を忍ぶことは出来ぬと思つ

た。併し関、佐野、滝本三氏の如く辭職するといふことは出来ぬ。

職を失ふ丈のことは何とも思はぬが、留學費七千円を背負込むことは出来ぬ。

依て堀と相談した上で、無期欠席をして自然に免職になることに決した。

余は三月二十九日、法科の教授会が一橋卒業生を新設の商科に入学せしむることを決した後で、早速欠席届をだした。其後診断書を作らして長期の欠席届をだした。然るに学校の生徒は憤慨して総退学をやつた。問題が益々大きくなつた。

そこで学生の中には、学生が一身の利害を顧ずに退学まで決した時に、教師たる余等が辭表をださぬといふのは同情が乏しいといふ風に考えたものも多数ある

といふので、津村、佐野両氏の如きは心配して呉れて、かくては将来上田の名譽を傷つけることにならぬともいへぬから、辞表をだすが宜しからん、と云ふて来た。併し余は前の決心が不人情なものでないと思つた。勿論余は辞表をださうかと思つて、草野武雄氏とその金のことに對して相談したこともあつたが、それも思ふ様でなかつたから、致方がないと思つてゐたのだ。夫故、津村氏に余の考を話して此上辞表を出すといふことは断るといふた。特に今となつては辞表をだした処で、開届けられぬことは分て居る。八百長の辭職は余の良心が許さぬからそれを謝絶した。津村氏も之に同意して呉れた。

併し後から考へて見れば、学生総退學の時は余が辭表を出すべき時であつたと思ふ。何となれば、辭表が仮りに開届けられたとした処で金のこと位心配して呉れる者は出てくるだらう。今回の如き事件に際して辭職して免官に成て金に困るといへば、拾ひ手は必ず出てくる。

之に反して余は辭職をしなかつたために、学生等の疑を招き、從て最後の鎮撫策の実行には除外されてし

まつた。関氏等は悪意を以て除外したのではなからうと信ずる。此際、余を用ふることが出来ぬと思つたのに違ひない。故に一時たりとも疑を招たことの結果として、余は充分に尽力をすることが出来なかつたのである。

余は辭職しなかつたことに付て、更に疚ましいことではないが、最後の活動に参加することの出来なかつたことを遺憾に思ふのである。

#### 欧米漫遊所感

日露戦後は我が邦が世界の強國の一たる露國と干戈を交へたるに拘はらず、連戦連捷の名譽を荷ふことを得たるを以て、當時吾人は此勢力を以てすれば我が國民は奮に軍事上のみならず、社会上、政治上、將又經濟上に於ても欧米人に毫も劣る所なきを自信するに至れり。明治三十八年、余が初めて歐洲に渡航したる當時、余も亦此確信ありしが、歐洲に滞留すること一年又一年、歐洲の文物制度の整然たるものあるを見聞し、彼と我とを比較するに及び、渡航の際抱懐せる自負心は水の泡の如く消失せざるを得ざるに至り、我が

邦が日露戦争の結果世界の一等國に列したり、吾人は世界を濶歩し得るの國民なりとの自負心は全く誤りなることを悟るに至れり。第一、我が邦と欧米の先進國と比較すれば、其富の程度に著しき差違あり。今其一二の例証を挙げんに、其港灣の設備の如きは余が通過したる米國西海岸の港灣にても尚我が邦の港灣に比すれば遙に完備せり。況んや其他の諸國の良港に至りては我が港灣の匹敵し得べきに非ず。帰來先づ横浜に上陸し道路と家屋の不潔にして且つ矮小なるに驚きたり。之を欧米の先進國に比するに、其新開地に於ても尚且遙に優れるものなり。又汽車、電車等欧米に比して遜色あるは言を俟たざるなり。斯て我が國が欧米諸國に比して著しき不完全なる設備を有するは何故なるか、是れ我が邦の富の程度が欧米先進國に比して甚だしく懸隔し居ればなり。

第二、我が邦人は欧米人に比して其労働力遙に劣れり。英國の面積人口は殆ど我が邦と匹敵すべきものなり。然るに其富は我が邦と著しき差違あり。是れ英人が多く働き多く富を蓄積せる結果ならずばあらず。之を卑近の例を以て説明せん我が邦の店舗は比較的

多数の店員を使用し其店員は火鉢を圍繞して居眠と冗談とを為して空しく時を過す傾向あり。然るに英國の店舗は我が邦の如く多くの店員を使用せず。こは各店員が拮据精勵するを以て少数店員にして其店舗を維持することを得るならん。余は工業の盛大を以て有名なマンチェスターに滞在せしことありしが、其附近に於ける紡績錘数は五千万錘あり（日本の紡績錘数は百三十万余錘あり）。曾て我が邦紡績工場の技師來遊し、其工場を視察せるが、該技師曰く「英國工場は我が邦工場に比すれば殆ど虚空にして只機械の運轉する音響を聞くのみ」と、非常に其使用人の尠少なるに喫驚せり。又其家庭に於て見るに、其主婦は前垂を掛け、家政を整頓し、而も余裕綽々として客に接し、政治を談じ、教育を論じ、美術を弄び、尚讀書の時間を余せり。然るに我が邦の主婦なる者は、朝夕御化粧に日も尚足らずとなし、家には下婢下男を使役し、用事万端是等の為す所なれども、家政能く整頓せるを聞かず、嘆ずべきなり。今や我が邦は巨億の國債を有し、之が支弁を為さざるべからざる時に際し、富の程度に於て、將又其働振りに於て、著しく欧米諸國に劣れるものあるに

於て、如何にして能く健全なる発達を期し得べきや。我が国民には以上の欠点あり、一面より見れば深く憂ふべしと雖も、一面より窺へば毫も恐るゝに足らざるなり。是れ吾人は他日大に発展し得るの自信力あればなり。維新以来の歴史を追想するに、我が開国以来僅々五十年を経過せるに過ぎず、然るに其文明の進歩は洵に偉大なるものあり。余が数年間欧米に滞在せる間に於ても尚著しき変化を來せるものあり。現代我が邦文明は之を欧米諸國に比較対照するに於て劣る所あれども、過去の歴史を瞑想すれば、駭々として長足の進歩を為して止まず。故に此の趨勢を以て漸進して已まずんば、我が邦が欧米諸國と同等の富を蓄積すること敢て至難に非ずと確信せざるを得ず。吾人は叙上の確信ありと雖も、其富を増進するに当り、如何なる手段方法を執れば可なるか、是れ最も研究を要する問題にして、而も種々の政策を施さざるべからざるが、吾人は先づ勤儉貯蓄の励行を慫慂せざるを得ず。されどもすれば勤儉貯蓄の励行は、企業心を沮喪せしむる憂なき能はず、現に仏蘭西は勤儉貯蓄を励行し、其蓄積したる多額の資金をば、露國其他諸外國に放資し

居れども、其結果國民の企業心を喪失したる觀あり、之に反して独乙が日進月歩の有様を以て隆々として進歩発達せるは、國民が勤儉貯蓄の精神に富み、而も企業心の旺盛なるに由らざらばならず。余が独乙に遊びたる際、学校の女教師を訪問したることありしが、彼女は白前垂掛の扮装にて余に接せり。彼女曰く「主婦が斯る扮装にて客に接するは独乙の美風なり、主婦たる者が家政を整理せんとせば、斯の如き覺悟なくんば到底十分に家政の整理を圖ること能はざるべし」と。我が邦の婦人は大に鑑みる所無かるべからざるなり。

又外資輸入の必要を説く者尠からずと雖も、こは容易の業に非ず、縦令容易に之を輸入するも、之を利用する人なくんば寧ろ害多くして利なし。又朝鮮滿洲辺へ發展するの急務なるを説く者あれども、是れ又人を俟ちて初めて其大業を全うすることを得る者なれば、何れの方面より見るも人材の養成は勤儉貯蓄と相俟ちて刻下の急要と謂はざるを得ず。

國民教育を施すに就ては、只に學校に於て之を教育するに止まらず、家庭教育、社会教育に就て注目せざ

るべからず、仏蘭西人の母は其子を撫育するに甚だしく愛に偏するを以て、其子は多く引込勝ちなり。故に其國民は姑息にして進取の氣性に欠乏せり。然るに英人の母は甚だしく進取の精神を有するを以て、其國民亦進歩的にして活動を好めり。而して又未成年者を教育するに止まらず、成年者は之に社会教育を施すに努めたり。成年者に社会教育を施せば政治、教育、宗教、経済等の諸問題に就て趣味を有し、社会の進歩を圖るを得ればなり。英國は最も社会教育の発達せる國にして、寒村僻邑に居住する者も能く政治、財政、経済の諸問題に就て趣味を有し、何れも相当の見識を有せり。余偶々一紙屋に邂逅したるが、彼好んで政治上の議論を為す、余一小紙屋が如何なる必要ありて此の議論を為すかを怪みて之を質したるに、彼曰く「英國の政治は自治組織を以て其基礎となす、故に國家の政治は吾人の政治なり。政府の方針は吾人の方針なり。吾人は常に其政治に容喙して止まざるなり」と。又独乙に於ける夜学校は最も進歩せるものにして、小学校の課程を終り、商店工場等に入りし少年が之に通学するものにして、昼間突地問題として起りし疑問は、夜間

夜学校にて教師より解釈せらるゝことゝなり居るを以て、独乙に於ける教育の進歩は遂に英仏を凌駕せり。而して独乙國民は少年をして夜学に通学せしむるは義務教育の一部分なりと信じ居れり。只独乙人は英人に比すれば身体の運動十分ならず、為めに体力稍衰弱するの傾向ありと論ずる者独乙人中にあり。今や我が邦は經濟上一転して新時代に入るべき機運に遭遇せり。即ち是より一大発展を為すべき時代にあり。欧米の先進國にては既に其經驗を為し、何れも國運の隆昌を見たるが独り西班牙、葡萄牙等の國にありては新時代に転換すべき時期を誤りたるを以て、今日の如く微々として振はざるなり、我が邦に於ては大に鑑みる所なかるべからず。

以上は經濟上に就ての觀察なるが、我が國民性は之を如何にすべきか一言を費さざるべからず。今日の世界各國の競争は國民を以て本位と為す、故に國內に異分子あれば國政調和せず。独乙に於けるポーランド人が獨人と軋轢するが如き、オーストリア人とハンガリー人とが相和せず、國運に大なる進歩を見ざるが如き、其例に乏しからず。独り我が邦は万世一系の天皇を戴

き奉り、国民には我が邦特有の大和魂あり、世界に比類なき国体なり。曾つて英國のアルフレッドステッド氏は日本の如き国民的国民なしといへりしとあり。然り吾人は大和魂を如何に發展せば可ならんや。吾人は宜しく従来の島國的根性を打破して堂々たる人道を勇往邁進せんことを欲す。我が邦移民は今日米國より排斥せらるゝと雖も米國の建國の基礎は四海同胞主義なり。我が邦人が排斥せらるゝは畢竟吾人の愛國心が余りに鞏固なるに由るものなれば、敢て憂ふるに足らず。英國の殖民地に於ける大臣中には其外國人たる者二名あり。然るに英國は假令外人なりと雖も英國の國富を増進し、加ふるに國民の幸福を補翼するに於ては、之を歓迎して止まずといへば、我が邦人も亦完全に大和魂の発達を遂げ正々堂々人道に悖らざるに於ては國家の隆盛は期して俟つべきものなりと信ずるなり。(明治四十二年・東京經濟雜誌第五十九卷第一、四八三号)

四十四年九月十日記す。

此所感録は始めると殆んど同時に止めて居たが、久し振りで出して見て、又少しづゝ書く氣に成た。

四十二年一月十四日帰朝以来の大きな出来事

帰朝したのは正確に言へば一月十三日の夜であつた。此夜に船が横浜へ着た。併しそれから東京へ歸て兄の宅をさわがせるのもいらぬことと思つたから、船に泊ることにして眠てしまつた。さうすると十一時頃に成て兄が来てくれた。それから起て久し振の和船に乗て、電燈の影点々たる港内の夜を静かに上陸した。何だか自分の故郷へ歸たといふよりも、小説的な、東洋的な國へ来たといふ感じが強かつた。併し兄の迎に来てくれたのは嬉しかつた。

それから待たして在る車へ乗て暗い横町を幾つか通て宿屋に着たのは一時過だ。加藤が宿屋に待て居た。之は奥に嬉しかつた。何故ならば、加藤は病気で死ぬかと思ふて居たのが、健康な顔付で迎に出てくれたのだから、意外のことであつた。併し宿屋の室、薄暗いランプ、丁寧な下女、此等のものが、余にはまだ小説的に見えて居た。其晩はよく寝た。

翌日、向笠テイ子が宿へ来てくれた。

テイ子は旧から余の好んだ婦人、洋行中にも手紙を往復して居た。テイ子も余を愛して居たらうが、別に

深い考もなかつたらうと思ふ。併しそんな訳で嬉しいと思つた。それが余のテイ子を娶る一つの動機となつたらしい。

飯倉の兄の宅に一月ばかり居て、それから麻布仲ノ町へ小な家を借り、旧の水道端の家の古道具を持って来て、関根要といふ婆さんもつれて来て先づ自分の家をかまへた。

そのうちに余はテイ子と結婚をしようと云ふ氣に成た。余は帰朝の後暫く独身で居て、少しは道楽生活をして見ようとと思つて居たのだが、それは經濟が許さぬといふことが明かに成たから、そんなら一層結婚してしまふ方がいい。此時テイ子に対する余の愛は普通の友人としての情以上の或者と成た。そこで之を兄夫婦や松尾伯父に話して、それから先づ向笠の父に申込んだ。直に承諾を得た。尤も結婚は延びて五月二十八日に成た。媒酌も森島夫人に頼んで内々で式を挙げた。

併しテイ子は其前から仲ノ町へ来て居た。それは旧の古道具を専攻部学生の清瀬といふ人に譲ることにして、下女もつけてやることにしたから家が空に成た。それ故新しい道具を買集めることもテイ子の母に頼ん

でしまつた。さうして余は四月の休に阪神へ出張した留守中に、余の新家庭が出来たわけだ。

四十二年、四月、五月は学校の騒動で中々忙しかつた。五月の二十四日に學生が復校することに成て、兎に角學校が始た。

四十二年、夏休みは何処へか転地して徐り、ハネムーンをやつたが、悲しいことには金がなかつたから在京と決した。

余は毎日南葵文庫へ行て、外国商業史教科書の訂正をやつた。文庫では余の爲めに室を一つ貸してくれたから、余の書物は皆そこに置くことにした。

秋の学期の始る時に校長が沢柳氏と定て、関や、佐野や、滝本も講師として引続き教鞭を取ることに成り、學生も治た。

此頃テイ子の妊娠が分た。産をするなら小石川の宅の近くへ引越すが、好都合といふことに成た。余は初めの考では兄が余の宅へもつと度々遊びに来て気晴らしをするだらうと思つて居たが、現在の勤は會計の方

明治四十二年

に変わったので気のつまりぬ為めか、その必要もあまりない様であった。それで余が麻布に住ふことは必ずしも兄及、兄一家の為めになるといふ程のこともなく成たから、転居と決めた。

十一月に小日向台町一丁目六十二番地へ移た。

明治四十三年 (二九一〇年)

二月にテイ子は大学病院で産をした。入院してから延びて三週間も経てから出たのだ。十四日の昼頃電話が掛て来て、急で行て見たら、むず／＼した虫の様なのが小さな寝台に埋て居た。別に嬉しいとも、悲しいとも思はなかつた。変なものだと思た。子供は可愛けれども、赤子は少しも可愛いもんではない。

四十三年の夏休みは大部分東京で暮した。やはり金のなかつたのも一つの原因だが、小さな赤坊をつれて旅をするのは母親が却て骨が折れるだらうと思たのだ。併し余だけは向笠の子供を伴れて一寸、伊豆の伊東へ行た。

仕事としては八月中旬、学校で文部省の商業科補習へ出たのと、隆文館の株式会社論を書き初めたのと。

学校の方は四十二年の秋から中々忙しく成た。本二の貨幣に、本三の商工経営及商業史。それから専攻部の演習。それに明治で三時間、日本で二時間。四十三年の秋からは、中央へも二時間出ることになり、養成所の経済原論二時間も持たされた。おまけに専攻部の学生のために随意科としての講義を二時間開た。本科生の為めに讀書会をやることにした。

明治四十三年

## 明治四十四年（一九一一年）

冬休は余だけ箱根へ行って暮した。株式会社論は平生忙しくて執筆出来ないから休の時にやることとした。

正一は段々可愛く成てくる。併し余とテイ子との愛は子供にも奪はれない。家庭生活は愉快にして満足だ。

家の嘉例は五月二十八日の結婚を記念する為めに親類中の大人と子供を集めて一日遊ぶのだ。四十三年、四十四年は庭のある家に居たから小園遊会を催した。

四十四年の三月中に鎌田栄吉氏から、徳川侯爵家の令嗣、頼貞氏の学業のことについて相談を受け、四月の春休には同氏を伴て九州へ旅行することに成た。

和歌山学生会は解散して南葵育英会が出来たのは、四十四年の一月で、余は創立委員の一人として侯爵の相談を受けた。

こんな訳で、侯爵家と余との間に少しづつ関係が深

くなりつゝある。

夏休には又頼まれて、頼貞氏と共に赤城山へ登り、妙義へ登り、浅間へ登り、軽井沢に四十日間ホテル生活を行った。併し此間に余は株式会社論の書き直しをした。まだ完結しない。

余が軽井沢から帰京する二、三日前に家は台町一丁目三十五番地へ引越した。今度の家は二階があつて洋風の書齋がある。家庭の設備が少々よく成るわけだ。

四十四年九月の余は、家にありては幸福なる一家の父として愛せられ、学校では学生等に相当の敬意を以て迎へられ、旧藩の方面にも発言権を認められて居る。自分は之で満足して居る。

四十四年吟詠集

伊豆の海駿河の海のかすみかな

黄桜の平家の墓にちる夜かな  
 茅葺の屋根つくろふもあり桃の里  
 菜の花や長門周防を朝の汽車  
 宮島や夜静かなる春の海

夜の空銀河にせまる浅間かな  
 遠乗の裾野にちるや花の秋  
 雲の峯や真の峯や木曾の空  
 白百合のちりにし後や秋の虫  
 青嵐の紫になる夕かな

次男生る（四十四年十月一日）

十月一日 日曜日だから朝から出かけて内田及兄をも訪問して帰たのが午後十時頃。

格子を開けて入ると静ちやんが出て来て、声を小さくして、今生れたのよ、と云つた。

それから静かに上に見ると向笠の老母が居た。西尾といふ年寄の産婆が居た。二人の助手が居た。テイ子は大につかれた様子もなく寝て居た。赤坊は助手が二人で洗て居た。

聞て見たら九時四十分に産があつた。其前に二時間位痛みを感じた丈で、極く軽く分娩出来たといふこと。先達から、今日か明日かと待て居たので、今日も現に飯倉で産の話をして居たが、たうとう余の留守中に生れたんだ。男だ、名は先達からテイ子と相談して置いた良二とつけてやらう。

余が帰た時、産婆や下女がお目出度う御座居ますといふた。余は正一の生れた時と同じく別に嬉しくなかつた。唯かたわでないといふから悲しくは感じなかつた位のこと。

併し正一がどんなにして居るか、泣きはしないか、とそれが気にかゝつた。おとなしく寝て居ると聞いて感心した。

全体赤坊が生れた丈では吾輩には面白くも、つまらなくもないが、其赤坊が少しわかる様になるとかはいくなる。大きくなる程面白くなつて来る。

叙従六位（九月三十日）

二、三日前に宮内省から呼出状が来た。一昨年を経験で呼出の当日出席しないでも、何時か必ず又呼出さ

れることが分たから、今回は思切て当日に出かけた。

高商問題

九月初、南郷君上京の際に、和田瑞君と学校の前途を論ず。

九月十一日 関君を訪ひ此問題に付、意見を叩かんとしたれども、席に福田、津村両君も居り、且酒が出て居た為めによくは話すこと出来ざりし。

九月二十二日 四谷の牛屋、三河屋にて梅川会を催し、此問題に就て各意見を述べたが、肝心の関、佐野氏等は沈黙し居たり。

此月の末に社会政策学会の講演会ありて、関、福田両氏と京阪神へ同行す。

十月十一日 福田氏より学校問題の成行に付、最初の報告を得たり。

翌十二日 堀君と同道して福田氏を訪ふ。

同十四日 学生の経済学会あり。関氏と会したるに付、同氏を誘ひて都へ行きて飲みながら事の真相を聞質す。

同十八日 堀君と兩人にて同窓会の樓上に関君と会

す。洪沢男が最近に文部次官に会したることに付、内報を得たり。

同十九日 前日の報を持って福田氏を訪ふ。

同二十五日 石川君を訪ふ。

同二十六日 同窓会にて村瀬、関、福田、佐野、石川、堀、上田会合。其結果、福田氏は仙台へ出張して沢柳氏を訪ふことになる。

十一月二日 四谷三河屋にて七人会合し、福田氏の報告を聞く。

同三日 堀、和田両君来訪。共に散歩しながら種々相談す。

同四日 福田氏の意見書廻章として来る。余も意見書を作りて提出す。

同十日 同窓会にて最後の会合を開く。七人の他、鹿野、星野両君も出席。

同十一日 福田氏余の宅へ来り、以来此問題に関係せぬと云ふ。

同十三日 学生、亀山確郎、吉岡力と会見。

同十五日 御所の観菊会にて関、佐野両君と会せしに、其夜村瀬氏方に相談すると云ふことになりしかば、

余も同行す。堀君をも呼寄せぬ。此夜、村瀬、関、佐野三君も以来此問題に関係せぬと云ふ。

翌十六日 恰かも沢柳先生が仙台より上京中なりと聞きて、此夜同氏を訪ふ。堀氏同行す。然るに関、佐野両君も同所に落ち合ひたり。其後福田氏も沢柳氏と会見したり。其結果同君は全く口を出さぬことになりたり。

同十七日 学生、亀山、吉岡と会見。

超えて四十五年一月十三日 堀君と同行、沢柳氏を訪ふ。此時沢柳氏は、以後専攻部存続に力を尽すべしと云はる。

一月二十二日 三浦君の帰朝を迎に行きて、其婦りに関、堀両君と飲みながら色々話す。二十四日、沢柳氏より文部の方にも専攻部存続に大抵一決したりとの手紙来る。(以上一月二十八日記す)

社会政策学会

今年に僕も委員の一人だ。十二月十七日、中央大学で委員会がある。

十二月二十四日 同所にて大会第一日、労働保険問

題。余も討議に加はる。

翌日も行く。筆記掛を勤めた。

十二月二十六日 夜赤坂、三河屋で同文館の招待あり。此夜坂西、大西両君とブンメリの揚句、東京の夜を見ると吉原まで徒歩し、夜が明けてから芝浦へ行って竹柴館で休む。

明治四十五年 (二九二二年)

静浦行、元日の箱根遠足

徳川頼貞殿、治殿、今年の冬は静浦の保養館へ行くにあつて、監督を仰付けらる。二十八日に行く。

四十五年一月一日 静浦を出て三島から歩いて箱根を越して底倉、蔦屋に泊る。

一月二日 同所を立て乙女峠を越えて静浦へ帰る。六日帰京。途中大磯へ寄り、侯爵及夫人に拝謁す。

一月二十日 三村鐘三郎君洋行に付、两国、岩本町の兩三村氏と兄とを招て饗応す。嫂も招たけれども来なかつた。

二十二日 三浦新七君足かけ十年の洋行を終て帰朝、新橋に着く。迎に行く。

二十五日 同君来訪、例に依て議論を盛にす。

高商問題

四十五年二月二十二日 坪野校長より招かれて同氏宅に行く。村瀬、関、堀及余の四人同席す。校長は昨年末より病氣療養の爲め、須磨へ転地し居たりしが、昨日帰京し直ちに此会合を催したるなり。

校長は兼ねて文部次官福原氏と専攻部問題に就て談合し、早晚存続の決定を見る様を爲し置きしが、数日前沢柳氏より此問題早く片付ける方が宜しからん、との手紙来りしとして之を示したり。

校長の提議は此際専攻部問題を商大問題と取離して、速かに解決し、追て商大問題にも着手すべしといふにあり、一同の賛成を得たり。其後校長は文部次官、真野局長、洪沢男と打合せ。

三月十二日 商議員会を開き、渋沢、早川、中野、真野出席し、渋沢男の発議にて文部大臣へ上申を為すこととなる。

三月十五日 教授会を開き、校長より事の成行を報告す。

三月二十五日 文部省令を発し、専攻部を永続せしむることとなる。

二月九日 一橋経済学会にて貨幣數量説に関する講演をなす。

二月十日 国府津へ行き二泊す。一週間前より不眠症の氣味あればなり。

尚、之が為め一週間學校を欠席す。

二月十七日 前田卯之助君に招かれ夕食に行きたる留守に、正一が薬を飲み違へて大騒動をなし電話で呼戻された。コカインの入た水を飲みたる為め、神經亢奮したるなり。翌日は殆んど平生の通りなり。

三月一日 内田より招かれ芝浦松金にて夕食す。内田耕君、東洋捕鯨会社用向にてメキシコへ渡航するに

付、留別の為め会したるなり。

三月四日 内田耕、メキシコへ出発。川崎まで見送る。耕は老父母へ慰藉を与ふる様余に依頼したり。

三月二十八日 南英育英会の用向にて文庫に合会中電話あり。松尾伯父卒倒したりとのことに急いで帰宅す。

伯父は昨年来岡田式靜座法を實行し、元氣宜しかりしが、三月十八日某氏方にて酒を飲み酔ふて帰りし後、屢々吐き、数日間に身体は非常に衰弱せり。二十八日には向笠方に居りしが、八時頃便所へ行くとして立ちたる時に倒れ、一時人事不省となりしが榊醫師の手当にて復活せり。

十二時頃滝口醫師の来りし時吐血したり。之までには神經性の腦貧血と思ひ居たりしが、之にて胃に出血せることを知りたり。而して後に胃癌に罹れることを確かむるに至れり。

四月八日 夜、宅に居て書物でも読まんとして居た時に向笠の方で、「兄さん直ぐ来て頂戴」といふ声が出たから、庭に有た誰かの下駄を引ずつて行て見ると、

松尾が少し血色が悪くて苦しがつて居た。併しこの位のことは昨夜もあつた。其前にもあつたが間もなく直

たのだから別に深く氣にもしなかつたが、段々呼吸が急になり、脈が弱く成て来た。

看護婦が危険だといふから、不取敢榊醫師を呼だ。

夫と同時に滝口に電話をかけた。早速来てくれて注射をしたが最早きゝめがなくして死んでしまつた。其時時計を見たら八時二十分で、初め苦しみ出してから三十分過ぎなかつた。飯倉へも電話をかけ、弁町へ電報を打たが、無論間に合はなかつた。

伯父の病氣は胃癌であるから、全快する望は持たなかつたが、或は一時直ることもあるかと思つて居たが、夫も空望であつた。

卒倒した後に、卵や牛乳や果物の汁が少しづつ飲めたので、一寸持直して謹一郎や五代太郎とも時々話をしたり、又吉村や内田の伯母、島田左平、島崎次郎、須原のおみねさん、栄太楼のおいとさんなどをも、自分から呼んでくれといふて、会て話をした。

二、三日前にはおみねさんの三味線で一中節を一段やつた位だ。併しその後何も食べられなく成たので急

に衰へてしまつた。

病氣中向笠の母、お静、お玉の三人は非常によく世話をしてくれた。謹一郎もよく来て看護して居た。看護婦は卒倒の翌日から頼んで手伝をさせることにした。

伯父の最後は何の煩悶もないらしく、死期を覚悟して居たらしく見えた。

其死んだ夜は、朧月の下に桜花のちらちら散る時であつた。

四月十一日 葬式を麴町十一丁目心法寺にて営む。

伯父の死んだ後で飯倉の兄と相談して葬式の方針を質素にすることに決め、八日、九日の二晩通夜をなし、十日の午後に火葬場へ送り、十一日の朝火葬場から骨を受けて、寺へ持て来て午前九時から式を行た。

通夜には内田伯父、伯母、森島伯母、直造、須原みね、竹川寅次郎、塚原とし等。

会葬者は日疋主計監、松島剛、山崎成高其他四十人位。

松尾伯父

伯父松尾三代太郎は弘化四年（西曆一八四七）の生で今年六十六に成た。医者之家に生れたけれども医者が嫌で、内緒で騎兵の稽古をして居た。和歌山藩で新式兵隊を組織する時に用ひられて、一方の隊長に成たのは十八、九才の頃である。夫から紀州へ帰て薩藩置県の頃まで藩の軍人であつた。

西南の乱の時に遊撃隊に加て出て、帰た時は大尉であつた。併し何か氣に入らぬことがあるとかいふので陸軍を止めて、民間に入てアルコールの製造等に手をだした。

明治十五、六年頃福沢翁に知られて朝鮮経略に参与し、軍事顧問として朝鮮へ行き、金玉均等に重んぜられて居たが、此事は失敗に終た。夫からは常に朝鮮問題を憂へて居たが、何も出来なかつた。其内に世の中は進んで自分が時勢に晩れてしまつた。

明治二十六、七年頃飯倉の母が病氣の時分には飯倉へ来て泊りきりに成て居た。

日清戦争中に朝鮮へ出かけて、少し金儲をしたらしいかつたが、間もなく元の無一文に成て、東京へ出て来た時には京橋で内田の厄介に成て居た。内田が蹉跌し

てからは、方々で厄介に成て居所不定であつた。其頃空也に入つた。それから余が水道端に家を持つ様に成てから引取てやつた。此頃日露戦争で又支那へ出かけたが之も金にはならなかつた。燕麦を馬糧に使ふことなどは、中々力を尽したものであつた。余の洋行中はやはり水道端でお要の世話になり、余が帰朝してから引続き余の家に居ることに成たのだ。

此の如き次第で余は伯父の世話をしたけれども、昔から伯父の世話に成たことは少しもなかつたが、併し何となく面白味ある人物と思て居た。十七、八才頃は伯父の話を聞て感心して居た。多少は余を感化した所もある。特に仏教風の邪正一如といふ様な思想を最初に吹込まれたのは伯父の力であつたと思ふ。伯父は善人であつて気品も高かつた。

併し虚栄心が強く常識を欠た様な欠点があつた。運が好たならば随分大事業を為したかも知れぬが、堅固に自己の勢力を扶植する等といふことは出来ないのである。併し兎も角も面白味のある人物であつた。

四月十四日 心法寺に於て松尾伯父初七日供養をな

す。

四月八日より一週間学校を休む。十六日より出席す。

四月三日 高商ポートルースに行く。

四月七日 徳川侯、大磯別荘落成には招かれて行く。

四月十七日 実業之世界（雑誌）の爲めに「日本の財政経済を如何にすべき」を執筆。

四月二十六日 浜離宮観桜会に陪席。

同日、木挽町みどりやにて三々会。

四月二十七日 築地精養軒にて高商同窓会。

専攻部復活に付、渋沢男、沢柳氏、坪野氏、島田三郎氏を招待す。

四月二十八日 千駄ヶ谷別邸にて、南英育英会大会を開く。

五月一日 三月中「貨幣数量説に就て」一論文執筆す。国民経済雑誌五月号に出でたり。

五月五日 飯倉兄過般来、頸部に腫物発生し、切開後兩國三村宅にて静養中に付見舞に行く。

五月十二日 神田金清楼にて木国商友会。先輩としては湯川兼吉君及余出席。

五月十五日 岡本柳之助氏上海にて客死の報あり。

五月十八日 一橋経済学会、小林丑三郎、三浦新七両氏講演。此会は学生中篤志者の団体にて、余、表面上の指導者、福田氏黒幕たり。

五月十九日 童阿源翁四十九日に付墓参。午後宅にて近親ら会し、追善茶話を催す。

五月二十五日 伊勢松坂、徳義社長星合政輔氏の来訪を受く。同日、池上本門寺に於て岡本柳之助氏葬儀に会す。

五月二十九日 学士会にて経済学攻究会あり。福田博士、貨幣の性質に付講演し討論あり。余も参加す。

五月三十一日 文部省図書局長を訪ふ。昨年神田区金沢小学校教員、佐藤仁寿氏と謀り、小学商業教科書を著ししが文部省にて不認可になりたるに付、其理由開合せに行きたるなり。

六月四日 再文部省を訪ひ、略要領を得たり。

六月九日 佐藤氏来訪。此件に付談合す。

六月一日 近藤栄、植物園へ採用になりしとして礼に来る。同人は中学修業中の処、成績悪しき方にて面白

からず、兼て園芸志望なれば修学を断念して実地に就く方からんとて、松尾童阿彌翁より其世話方を余に依頼されたり。依て余は加藤成一兄を経て渡瀬氏の紹介を求め植物園へ園丁として就職せしめたる也。

六月二日 テイ子と共に富子、正一、良二、下女(タヅ)をつれ、家中総出にて井ノ頭池へ行く。総出の外は今日が初めてなり。併し正一とは度々散歩に行く。

一月二十一日(日) 正一と上野へ行く。

二月四日(日) 同。

其後度々日比谷、上野等へ行く。

五月五日(日) テイ子及正一と兄の見舞に両国へ行き、小蒸汽にて吾妻橋へ行き、浅草へ行き、上野へ行く。

五月二十六日(日) 正一と向島へ行く。

六月 十日より例年の通り学年試験始る。

二十二日に結了。

七月

三日 教授会あり、専二、及本三の及落を議す。七

日、卒業式。

二十四日 教授会、卒業者以外の及落を議す。こんな訳で此間は大抵答案審査に費してしまつた。併し本年は六月十七日から三十日まで、酒匂の松濤園へ徳川頼貞氏と共に居て居て、試験のある日には同所から上京した。

其内で二十三日は専二、商工経営の学生と共に信州軽井沢へ遠足をした。

七月十一日から又頼貞氏と日光へ行た。二十三日に帰た。此間には試験の審査以外に山野を歩た。

七月十二日 内田セツ、西村省三と婚姻の式を挙ぐ。式場は三田喜望教会なり。余はテイ子と同行列席す。西村省三は本年慶応義塾を卒業し、厦門三五公司に入る事となり間もなく同地へ赴任す。

徳川家の教育に關すること

昨年三月中鎌田栄吉氏より徳川頼貞氏の通学及住居のことに就き相談を受けたるに依り、余は初めて此事に就て云為するに至る。

此時頼貞氏は中島力造博士方に寄宿したりしが、岸

幹太郎氏等家職のもの一同反対なる上に侯爵夫人も之

を好まざる為め、同氏方を引揚ぐることとなる。其引揚の時期に就ても種々曲折あれども、つまり中学卒業と共に之を為すに決す。

頼貞氏は数学不出来の為に二年間中学の上級に止りしが、数学教師宮崎忠保氏等の尽力に依りて四十五年五月卒業す。

依て此時中島氏方を引揚げ、我善坊に求めたる新邸へ移転し、学習院高等科へ通学す。治氏も同時に引揚げたり。

此に問題なりしは、中島氏の代りに何人が監督をするかといふことなり。岸氏等は余を頼貞氏と同所に住はしむることに独りできめて居た様なれども、余は輕井沢の経験及中島方にての観察等より推して之を好まざ。何故なれば、同居すれば余の家庭は高等下宿になり下り、不愉快極まるものとなるべければなり。そこで余は昨年末及本年一月の二回、鎌田氏に面会して同居だけは断然断ることとなしたり。而して余は此際、寧ろ同居監督者を定めず、唯時々鎌田氏及余が巡回する文に止めて其他は頼貞氏の自治に委すべきことを主

張したり。

併し此説は行はれず、徳川家にては其人を物色したる結果、慶応義塾漢文教師、玉井房之輔氏をして我善坊邸の一寓に住はしむることとなしたり。然るに其後玉井氏は、頼貞氏、治氏を抑ふる能はずして、頼貞氏等

は不平の声を揚げたり。四十五年五月頃、再び頼貞氏は神經衰弱症と称して学校を休みたり。而して鎌田氏より余に対し、屢々我善坊を訪問する様依頼し来れり。余は学校を休みて自邸に引籠ることが神經衰弱を治す所以にあらざるを説きて、六月中酒匂に転地せしめ、次で日光に旅行し、本年夏の旅行(北海道及樺太)にも同行することとなり居れり。

玉井氏は七月二十七日解雇することとなりたる旨、侯爵より聞及べり。

今後を如何にするかに就ては余も真面目に考へてやるつもりなり。併し同居は余に取りて不愉快、頼貞氏の為めに必ずしも有益ならずと思ふ。

七月十六日 松尾伯父の百ヶ日に相当す。是日、余

は日光、湯本にあり。  
在メキシコ、内田耕へ書状を發す。

天皇陛下御不例の事

七月二十日 日光ホテルにあり、頼貞氏と野上と散歩に行きて帰り、神橋畔の松の太木に張出しありて、聖上陛下腎臓病にかゝられ、御熱四十・五、御脈百云々、と宮内省より發表されたる由を語る。此張出は宇都宮下野新聞社より電話に依りて伝へたるものにて、夜、同文の東京新聞号外を見たり。

二十一日 東京宅より、電話あり学校より急使にて成可く本日中に参内すべしとの旨伝へられたるに付、坪野校長へ旅行中の趣申送りしに、然らば電報にて御見舞申上るべしとの返事なりと云ふ。

依て左記の電報を渡辺宮内大臣宛にて二十二日早朝發す。

セイジョウヘイカゴフレイノオモムキウケタマワリ、キョウクニタヘズ、ツツシンデゴヘイユライノリタテマツル。

二十三日、婦京。二十四日、教授会。

二十五日 午前参内。御車寄にて天機伺をなす。家

名姓名を奉書の帳面に記し、御容体書を拝見して帰る。

御病氣は十四日に始り、十九日重らせ給ひ、一時お

宜しく、二十四、五日御不良、又立戻り、二十六、七日

日頃は余程有望と認め奉りしが、二十八日再御不良にて御脈百二十。御呼吸急促四十五、六回に達す。

二十六日 夜、二重橋外に集る群集に混りて御平癒を祈る。群集中には地上に座して頭を下ぐるもの、直立して呪文を誦するもの、火を掌中に点するものなどありて、余等の眼には稍異様の感あるも、兎に角敬虔熱烈の態を失はず。陛下に対する人民の感情美に打れざる能はず。

二十八日 夜テイ子、良二、とみ子、及下女たづを携へて二重橋へ行く。広場は一面の人なり。此夜御容体危険の号外出て人心騒然たり。夜半一時学校より電話あり、高等官一同今晚中に参内せよと申来る。眠らんとしてよく眠らざりし余は、直ちに車を命じて参内、前回同様の天機伺をなす。

今回の御容体発表は西園寺首相の發意に基くらし、其の結果は真に人民一般の同情を喚起し、陛下は

真に六千万同胞の陛下たることを明かにしたり。

日光行

七月十一日 八時二〇分上野発。一時四〇分日光着。日光ホテルに泊る。

七月十二日 東照宮社殿拝観。午後中禅寺行。Lake Side Hotel に泊る。

七月十三日 湖水を舟にて渡り、葛蒲ヶ浜に上陸。戰場原を経て湯本まで徒歩。

湯本南間ホテルに泊る。

七月十四日、十五日 (雨) 兩日試験答案審査。

七月十六日 雨、近傍散歩。

七月十七日 金精峠を越えて菅沼丸沼へ行く。午前十時発足。午後四時帰宿。

七月十八日 頼貞氏は戰場原を経て中禅寺に來り、米屋に投ず。余は先発、男体山を越えて米屋に落ち合ふ。

十時発足、六時下山。

七月十九日 日光ホテルへ帰る。

七月二十日 午前、霧降滝へ行く。

午後非常に暑し。

七月二十一日 含満へ行く。雨降る。

七月二十二日 終日雨。行者堂、開山堂へ行く。

七月二十三日 婦京。

明治天皇崩御

七月二十九日の夜は、天皇陛下の御容態益々險悪なるの報を讀で、寝に就たけれども、実はよく眠られなかつた。

夜半頻りに戸外で新聞売の鈴の音が聞えたので是は愈崩御ならんと思て早く起きて見たら、果して其通りであつた。

七月三十日午前〇時四十三分を以て登遐あらせられた。後に聞けば、崩御の後直ちに皇太子殿下踐祚の式を行はせられた。三十日には電報に依て学校へ行て教授会に出た。午後には服を改めて参内、天機伺をなした。一昨日までには宮中車寄に聖上陛下、皇后陛下の天機伺名簿が備へてあつたが、今朝は聖上陛下、皇后陛下、皇太后陛下と變て居る。崩御の日に直ちに改元令が出で、大正と定められた。

三十一日に朝見式が行はれた。此式場に朗読された

勅語に、「朕俄に大喪に遭ひ、哀痛極り凶し。但た皇位一日も曠しくすべからず、国政須臾も廢すべからざるを以て、朕は茲に踐祚の式を行へり。」と報告せられた。

又「朕今百世一系の帝位を踐し、統治の大権を繼承す。祖宗の宏謨に遵ひ、憲法の条章に由り之が行使を怠ることなく、以て先帝の遺業を失墜せざらんことを期す。」と宣言せられた。同時に陸海軍人へ勅語を下された。

八月六日 臨時議會召集の勅語が出た。

蓋し朝見式には高官及有爵位者のみを御召に成たのだから、更に国民の代表者たる議員を御召に成るといふ趣意である。大喪費のことは、何人も異なき筈なれば、議會召集の必要なしとする説もありたるに拘らず、此勅語が出たのは実に余等の有難く思ふ所であつた。

八月十三日 伏見、有栖川兩宮殿下、並に、山県、

大山、松方、井上、桂の五元老を召されて勅語を賜た。

同時に桂公は内大臣兼待從長に任ぜられた。此事は大磯から帰途汽車中で夕刊を見て知たが、実に意外であつた。

桂公の宮中入に就ては世間にも随分兎角の批評がある様だが、余等も感心の出来ないことである。

八月二十一日 議會が召集された。

八月二十三日、開院式を行はれた。其勅語に「祖宗の宏謨に遵ひ、先帝の遺緒を紹述せんことを期す。」と仰せられた。是には「憲法の条章に由り云々」の御語はなかつた。

貴衆兩院の奉答文には、先帝の徳を頌し、崩御を悼み奉る、の意味が入れられた。衆議院の奉答文は名文とは思はれなかつたが、其内に「率溥驚悼豈に翹に考批を喪ふるが如くなるのみならんや」といふ文句があつた。

併し奉悼の演説は兩院共になかつた。物足りない気がする。

八月二十四日 大喪費議事、費額は百五十四万五千三百八十九円なり。

八月二十七日 大行天皇の追号を明治天皇と定められた。之に就ては年号は余り通俗になり居る故、別に諡を作るべしとの意見もあつた様だが、やはり明治を以て先帝を呼ぶことの出来るのは有難く思た。

九月十三日 大葬儀

余は高等官五等の官吏として御葬列に供奉すべきであつたが、大礼服を持たぬから、其方は止めて学校の学生と共に二重橋前の芝地に奉送することにした。

三時から行て待て居た。勿論弁當を持て行たのだが、之は随分御苦労なことだと思た。

午後八時、号砲一発天に轟くと共に葬列は二重橋を出た。糸の如き新月の淡き光の下に灰色の幡がひらひらと列を進だるときには、如何にも「大君の神去ります」心地がした。

其他はよく見えなかつた。

此夜、馬場先門外に少数の怪我人が出来た他、事故なかりしは群衆の節制及警察の取締法の進歩と見ねばならぬ。

九月十四日 今朝の号外に依れば、乃木大将は昨夜八時御葬列の発すると共に自殺し、夫人も同時に自殺したと云ふこと。

余は始め大将が精神に異状を来たしたのでないかと怪しんだ。併し事實はさうでなかつた。殉死をしたのであつた。殉死！ 大正元年に大将伯爵の夫婦が、

実に意外なことだ。世間では賞めるものが沢山あるが余は嫌だ。

大将は旅順の戦に幾千の兵卒を殺したのを残念に思て、何時か自命を陛下に捧げたいと思つて居たさうだ。併しそんなら何故蓮生坊熊谷にならないか？

大将は先帝の鴻恩に感激して御不例中にも、崩御後にも日々参内したと云ふ。そんなら何故引続き軍人として新帝陛下に忠誠を尽さないか？

大将は一世の腐敗に憤慨したから、一死を以て世人の反省を促さんとしたのだといふ。併しこんな古風なやり方で今の人間が反省するだらうか。余には大将の心事が理解出来ない。唯旧式の忠義を行たものと見るより他に説明がない様に思ふ。併し大将の自殺は短刀を用ひられ、古法に適して居たといふことを聞ては、又其床しさを感ぜざるを得ない。

維新前の武士の物語を聞く様な心地がする。大将の思慮は誤て居たと思ふが、其誤た結論を実行する所の方法に至ては感服の他ない。五十年前にこんなことをした人があつたらば、余は全然尊敬の心で迎へたであらう。

暑中休暇

今年頼貞様と北海道並に樺太へ旅行する筈に成て居たが陛下崩御のあつた為に止めに成た。八月七日から十三日まで大磯御別荘へ行た。十七日から軽井沢へ行た。

碓氷峠へ登ること四度。

離山へ登ること二度。

小瀬へ四度。矢ヶ崎山へ一度。

富士見坂及綱張へ二度。鼻曲りへ一度。

書物は Nora の独訳 Irving, Sketch Book, Avebury, Beauties of Nature 位なもの。Heise, Speight 等と屢々往復した。Mme de Maunlich と云ふ仏人と懇意にした。九月五日帰京。

商業教科書

九月八日 佐藤仁寿氏商業教科書の原稿披幸して校閲を求む。同書は前に文部省にて不認可となりし故に、更に模様替をなして認可を求めんとするものなり。早速訂正に取かゝり、十月六日済む。

徳川家の教育取締を引受く

徳川頼貞氏は九月初帰京の後、又々神経衰弱症に罹りて学校を休み居り、到底今年年の成績を挙ぐることに六かしからんとのことにて、鎌田氏及余へ相談あり。

九月三十日夜、余は鎌田氏を訪問したるに、同氏は退学の他なからんとの意見を述べ、余も同意し、従て今後の処置に就ては良教師を招きて、英語、仏語、漢学、哲学等を教ふることとし、余が其取締をなすべく、又稽古を休む時には余が同行して各地を旅行し、日本の歴史及現状を説明すべく、其準備として平生より余も少しづつ講義することゝ定めたり。此事は鎌田氏より侯爵へ答へ、十月九日侯爵は余を招て正式に依頼したり。

教師は英語戸川秋骨氏、仏語 Jaconlet 氏、漢学鈴木氏、論理川合貞一氏と定めたり。

余は右に付、麻布方面へ転居する必要を感じ、諸所を捜したる結果、麻布新網町一丁目十五番地なる加藤成一君の持家を撰定し、十一月二十六日移転したり。又此方を引受くる為めには私立大学の講義を減ぜざ

るべからず。差当り日本大学を断り、中央も減したしと思ひ居たり。

九月十八日 日光湯本にて知合になりたる香港の技師 Gibbs 氏上京に付、市中案内す。

九月二十四日 日本大学の銀行講義を引受く。但し、此講義は麻布へ転居の爲め、正月より止めざるを得ざるに至れり。

十月七日 加藤重男君を訪ふ。同君は九日渡米の筈。

十月十二日 軽井沢にて知合となりたる仏人 Mme & Mile Maunlich 徳川頼貞氏と同伴にて来訪。

十月中、実業の世界へ「生活問題と商業組織」を執筆。国民経済へ「信託会社に就て」を執筆。

十月十九日、二十日 社会政策学会。今年は討論にも加はらず、懇親会へも欠席したり。我善坊の用務ありし爲なり。

十月二十一日 一橋会編纂部の会へ出席す。編纂部長を委託されて引受くることになりたり。余の方針は干渉もせず、煽動もせず、唯言論を成可く自由にす

為めに、其妨害となるものを取除くにあり。一橋会雑誌へ「大喪期の反省」を執筆す。

十月二十六日、七日、八日 頼貞氏と同行。伊香保、碓氷の観楓に出掛け、テイ子、とみ子も加はる。

十一月三日 頼貞氏と同行。自転車にて井ノ頭へ遠乗す。

十一月九日 三浦君宅にて同君と、学科編成改良に付相談す。

十一月二十三日 同君と同道して校長を訪問す。

十二月四日 学校にて校長に面会す。

十二月二十一日 再校長訪問。十一月二十日、南葵育英会寄宿舎、進修学舎にて幹事数名学生に面会す。

十二月六日 進修学舎へ評議員を招かる(賛助員制の発起)。

十二月八日 同舎開舎式。

十二月十六日 元良博士葬儀に参列。

十二月二十四日 正則中学にて同氏追悼会へ参列。

十二月十六日 試験始る。  
十二月二十一日 終る。

十二月二十六日 多久堯純君死去の旨、大阪の中島鉄造君より報あり。本日飯田一馬君と之に付相談す。

○河野宗人（渡辺与七君の義弟）十二日より余の宅へ預る。

森島直造君も十二月末より来る。

大正二年正月より宗人の弟宗次も来る筈。

かくて余の麻布の家は主人夫婦、二児、女中二人、書生三人になるなり。

○旅行

夏、冬、春の休暇に徳川頼貞氏と共に旅行すること  
は常例に成てしまつた。

十二月二十七日 東京発。名古屋丸文泊り。

十二月二十八日 名古屋城を観る。

安藤七宝店を観る。

十二月二十九日（雨）名古屋発伊勢山田へ行く。五

二会ホテル泊り。

十二月三十日（晴）山田市中及二見ヶ浦散歩。

十二月三十一日（晴）鳥羽在多徳島、御木本真珠養殖場を見る。

大正二年（一九一三年）

一月一日 両宮参拜。

一月二日 山田発名古屋へ戻る。途中松坂にて公園及本居翁旧宅を観る。名古屋ホテル泊り。

一月三日 岡崎へ日帰にて行く。岡崎城を観る。熱田及大須へ回る。

一月四日 中村公園、秀吉及清正の誕生地を訪ふ。最大急行展望車にて帰京。

二月二十八日（金）学校へ飯倉邸兄より電話あり。

徳川治氏昨日学習院にて乗馬演習の爲め出勤中、飛行機が通過したるに依り其爆声中に馬が驚き躍りたる結果、落馬して頭部に負傷し一時絶息、其後蘇生して学習院病室にありと。

依て余は直ちに車を命じて目白へ行き見舞ひしに、

病室には軍医、看護婦の他、中島博士夫人、及児玉啓子あり。暫く容体を聴き居る内に看護婦に招かれて病室へ行けば、治氏は頭部を繙帯したる姿にて横臥し、今眠より醒めたる処なりしが、例の如く紅き顔色にて微笑されつつ挨拶され痛も甚しからざる様見受けられたり。余は傷の案外軽く見ゆるを喜びて帰ったり。

三月一日 午後飯倉本邸へ行きしに、治氏の病状は引続き良好に経過しつゝあり、生命に異状なかるべしとの報あり。侯爵と対談して夕刻に帰れり。（此日の用談は兼て交渉中の我善坊邸世話役大西絹子に關してなり。）

帰宅後村山きみ子来り、例の如く河東の稽古を済ししに、間もなく飯倉邸より使来り、治氏危篤なりとの報を伝ふ。

急ぎ参邸せしに家扶室に多数の人集り居り、頼貞氏も来りて治氏は絶息したりと告げたり。此時十二時頃なりしが、余は頼貞氏及鎌田氏と馬車に同乗して目白に赴けり。

昨日と同じ場所に治氏は青白の顔色をして横はれり。看護婦が白布を取て顔を示せし時、頼貞氏はハンケチを出して泣き初めたり。

別室へ行けば侯爵、同夫人、中島博士、同夫人、其他多数の人々集り居り、侯爵夫人は泣きつづけに泣き居たり。

頼貞氏、鎌田氏及余は再び同乗して帰れり。此夜天晴れ、星羅満空、風頗る寒し。

三月一日より五日まで日々参邸。来客に接し、通夜を為し、納棺式に列す。

六日、葬儀を行ふ。本邸より棺馬車にて上野寛永寺中堂に至り、同所にて式を行ふ。

学習院は特に同情を寄せて三百人の学生全部を列席せしめ、陸軍省も此事件が陸軍の飛行機に関係あるに依りて、特に軍楽隊を派して弔意を表したり。式後簡單なる列を作りて真如院の塋域に埋葬を行ふ。

三月二十日 教授会。試験場に於ける不正行為矯正の為め委員を挙ぐ。(石川、星野、山口鋹太氏指名さる。)

五月七日 教授会、学科制度改正の為め委員を挙ぐ。関、佐野、神田、志田、中村、下野、三浦、堀及余指名さる。

同日直ちに第一回相談会を開く。議事の準備を、三浦、堀及余の三人に託さる。

五月十一日(日) 三人にて相談会の議案を作る(起草委員会)。

五月十三日(火) 第二回相談会。

五月十八日(日) (準備) 起草委員会。

五月二十二日(木) 第三回相談会。

五月二十八日(水) 第四回相談会。

六月五日(木) 第五回相談会。

六月六日(金) 起草委員会。

六月十二日(木) 第六回相談会。結了。



後列左から二人目筆者、  
前列左から二人目徳川頼  
貞氏，三人目鎌田榮吉氏  
右端小泉信三氏  
(大正2年)



書齋における筆者(大正五年)

堀君も一案を作りて提出せり。堀君の説は飽くまで商業学を中心として専門学を授くべしとするものなり。十二月に入り三浦君及余は度々校長を訪問して実行を促せり。

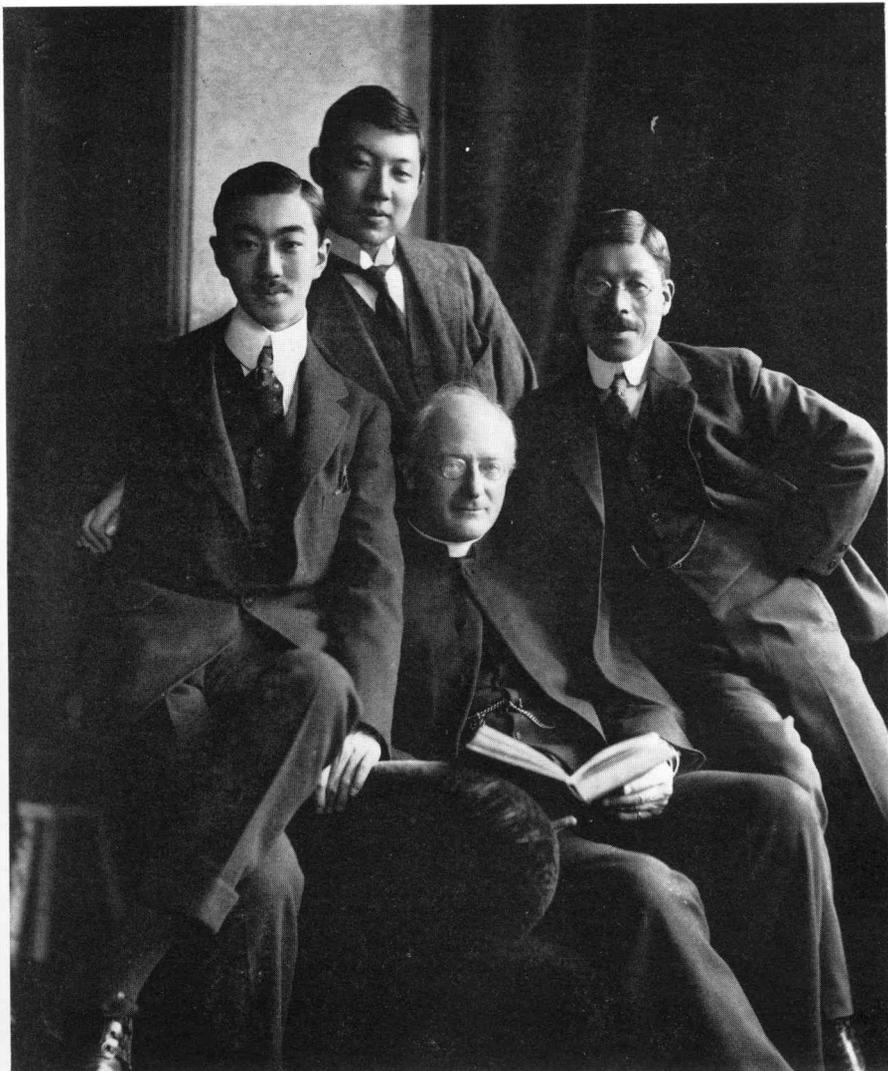
学科編成の改良

昨年暑中休暇前、三浦君が余の宅を訪問せし時、学校の学科編成法改良の急務なることを説きしに、同君は直ちに賛成し、其後度々会合して此事に付意見を交換せしが、兩人の意見は大体一致せり。

其趣意は、勿論普通学の部分を多くして専門学の基礎を与ふること。専門学の授業時間を少くして内容よりも寧ろ思考力の養成に重きを置くことなり。此意見は校長にも話たり。休暇後他の主なる教授にも話したる結果、十一月に入りて、佐野、下野、堀、鹿野等諸氏と会合し、意見を交換したれども余等の意見は余り顧られず。併し改良の必要は皆認めたり。其結果として三浦君及余は自分等の案を作りて校長に提出せり。

堀君も一案を作りて提出せり。堀君の説は飽くまで商業学を中心として専門学を授くべしとするものなり。

十二月に入り三浦君及余は度々校長を訪問して実行を促せり。



第二回留学当時ロンドンにおける筆者（右端）  
後列中央は徳川頼貞氏（大正3年）

校長は一月、二月中避寒して不在となりたり。其後五月に至りて初めて前記の如く委員会を開くに至れり。今後は文部省が之に対して如何なる解答を与ふるか問題なり。

三月二十二日 本三、読書会員九名来訪し、余にインクスタンドを贈る。此会は四十三年秋より余が引受けたるものにして Seligman, Economics を読むものなり。

会員の主なるは中谷芳郎、菊地泰、佐々田英敏、風間武三郎等なり。今回解散の為め余に敬意を表したるなり。

三月三十一日 徳川頼貞氏京畿地方へ旅行することとなり、先づ午前十時横浜丸にて横浜を出帆す。同行者は余の他に凶師尚武、加納栄之助なり。

四月一日 神戸着午後四時。須磨へ散歩す。ミカドホテルに泊す。

四月二日 大阪に移る。中ノ島大阪ホテルに泊る。造幣局参観。

四月三日 大阪城、天王寺を見る。  
 午後奈良へ移る。奈良ホテルに泊す。  
 四月四日 奈良見物。  
 四月五日 法隆寺、葉師寺、唐招提寺を見る。  
 四月六日 吉野へ赴く。  
 四月七日 京都に移る。  
 東山見物。都ホテルに泊す。  
 四月八日 御所、二条離宮を見る。  
 四月九日 嵐山、及保津川、修学院。  
 夜、深田君に逢ふ。  
 四月十日 神戸、桑木両氏を訪ふ。村井氏別荘を見る。夜行にて帰京。  
 四月十六日 徳川侯爵母堂、沢井八重子逝去。  
 四月十八日 梅に行く。  
 四月二十二日 葬儀。  
 五月五日 鎌田栄吉氏送別会(育英会幹事)。  
 五月六日 同氏出発。  
 五月十九日 村田省蔵君久々にて帰朝。学校にて余を訪問す。

五月二十一日 京橋三十間堀寿々本にて、九鼎社総会を開く。飯田、村田、石丸、前田、高嶋、守屋、鈴木及余会す。

五月二十三日 余の為に梅川会送別会を開く。(赤坂三河屋)

六月十八日 高商教授、余の為に送別会を開く。

(富士見軒)

六月二十日 育英会幹事、余及川瀬善太郎、橋井清五郎両氏の為め送別会を開く。(築地精養軒)

六月二十一日 専攻部一年にて余の演習に列せるもの、余の為に送別会を開く。(神田宝亭)

六月二十三日 一橋会編纂部幹事、送別会(日比谷平野家)

六月二十四日 専攻部二年にて余の演習に列せしもの送別会を開く。(上野常盤花壇)

○徳川頼貞氏洋行問題は、治氏逝去の後間もなく岸氏に唱へられ、次で鎌田氏漫遊あるに依りて、其機会にひかされて事実問題となりたり。同行者は余の他に橋井清五郎、山東誠三郎両氏なるべく、出発期は八月

末又は九月初ならん。

六月十四日 南英育英会雑誌の為に賛助員制度開始の顛末、及其財政上の影響を起草す。

六月十二日より半年試験あり、不正行為防止の爲め新規則を發行す。

Tokio to Shimonoseki, Keijō, Moscow.

Spet. 3. Left Shimbashi by 7 o'clock train.  
 4. Arrived in Kioto in the morning. Went to visit the late Emperor's Mausoleum at Momoyama. Continued our journey to Wakayama.  
 5. Visited Chōhōji. Attended the mass meeting at the Prefectural Council Hall.  
 6. Visited Nanyō Shrine and other places in town. Went to Osaka and called on Mr. Moriya. Stayed at Osaka Hotel.  
 7. Left Osaka in morning. Arrived Shimonoseki. Had chats with Messrs. Noda Kōichi, Saïto Ken, Kashū Ryōji and Uchida Kō.  
 8. Started on board Ikimaru. Arrived in Fusan at night. Attended a meeting of

wakayama men and continued the journey by night train.

9. Arrived in Keijō in morning. Visited many places of interest during the day. Attended the meeting of Wakayama men, and also a meeting of Koto Shōgyō Gakko.

10. Left Keijō in morning. Toward evening passed the great bridge crossing the Yalu.

11. Arrived in Changchun where I was met by Viscount Iwashita. Changed carriages. Ran through the endless bean field until we reached Harbin. We were met by Consul Honda at the Station. Saw the city on an isovstschik. Continued journey.

12. Reached Manjuria Station where customs revision took place. After this station train ran through natural pastureland, cattle, horses, canals were seen.

13. Since this morning we ran through a more fertile country. Forests of white birch and rivers and hills. At 5 o'clock reached Lake Baikal.

14. Running whole day through a vast forest.

- Passed Irkutsk in the afternoon. Changed carriages.
15. Running whole day the same sort of country as yesterday. Sometimes we see villages with cathedrals which are painted white, roofed green and crowned with a gold cross.
16. Same country, but moorish. More cultivated land afternoon. Passed Omsk.
17. Reached Chelabinsk. After this pine forest, hilly country. 1.30 passed the frontier of Europe and Asia.
18. Endless corn field. Passed Volga at noon.
19. Arrived in Moscow in morning. Visited Sparrow hill. Went to Opera (Carmen). Metropole.
20. Visited Kremline and other places of interest. Started by night train.
21. Arrived in St. Petersburg. Visited Winterpalace. Hotel d'Europe. Went to Opera (Faust).
22. Visited Embassy. Talks with Messrs. Matsusaki (Secretary) and Sekiya Teizaburo
- (Director of Education of Korea). Shopping. Started by night train.
23. Reached Eidskuhnen in morning. Train services in Germany are far better than those in Russia.
- Reached Berlin at night. Changed car.
24. Reached Koin in morning. Visited Cathedral. Continued journey to frontier where change of carriages again. Ostend—Dover—London 10 p.m.
25. Shokin Ginko, Consulate.
- 26-28. Stayed at the Hotel as I had cold.
29. Walk in city. Invited to Dinner by Mr. Kamada.
30. Called on Mr. Yamasaki Keitchi. Lunch at Nihonjin-Kwai.
- Night: Solloseum (Sarah Bernhard).
- Oct. 1. National Gallery. Tea at Mr. Batlers. Earls Court Exhibition (Imperial Service).
2. Visited East End.
3. Mr. Tokugawa removed to Mr. Batler's. Invited to Dinner by Mr. Nakamura.

4. Mr. Sato Buntaro came. Looked out for our rooms.
5. Mr. Kamada started for America. I and Messrs. Kitsui and Santo removed to our respective rooms. My new address: 15 Glenmore Rd. Belsize Park (Mrs. Simpson).
6. Gori Gallery. Hyde Park.
7. Wrote to Tei Chan my first letter. Hampstead Library. Dinner with Messrs. Fujimoto, Iura and Tajiri.
8. Library. Charing Cross old book shops. At night Mr. Kiyose Ichiro came.
9. Went to Barry. Met by Miss Hughes at station, had talk and walk with her. Stopped a night at her place.
10. Returned London.
11. Called Mr. Tokugawa.
12. Sun. Visited Kew Garden, K.S. and Mr. Waza.
14. Zoo, with T. K. S.
16. Mrs. Webb's at Home.
18. Wrote to Prof. Meredith, Fabian Society, 3 Clement's Inn, Strand Miss Mary H. Wood,
- Cambridge, Mr. R. S. Momber, Cambridge, Mrs. Atkinson, Cambridge, Miss Salmon, Manchester.
19. Sun. Wrote letters to Tsubono Heitaro Esq., Mrs. Uyeda. Been to Tea of Dr. Chas. R. Maitland with Mr. Tokugawa. Dr. M. is a friend of Prince Iyesato Tokugawa and a Cambridge man.
20. Started Liverpool Sta. at 8.40 Ar. Cambridge 9.50. Bull Hotel.
- Called on Mr. W. S. Hadly, Master of Pembroke. Mr. Momber, Lecturer, called on me. Went to see Atkinsons with me, and showed me round the town. Called Baron Kujo at night.
21. Visited Rev. A. Rose (Emmanuel), Mr. W. G. Bell (Trinity Hall), Miss Wood (Training College), Miss Jones (Giston College) Wrote to Mr. Hamaguchi.
- Dinner at Baron Kujo's.
22. T. Visited Mr. C. Smith (Sidney Sussex), Miss Stephen (Newnham), Mrs. Frazier. Dinner at Hotel with Baron Kujo and Mr.

Yanada. Wrote to Mr. Kishi.

23. Th. Visited Mr. Shirres (Trinity Hall), Mr. Murray (Selwyn), Mr. Anderson (Cains) Lunch, Mr. Chapple, Mr. Bell (Tea), Trinity Hall (Dinner).

24. F. Visit: The Master of Pembroke, Mr. Wallis, Mr. V. Blehn. Returned to London.

25. S. Wrote: All ladies and gentlemen met in Cambridge. Visit: Mr. Nakamura with R. (Raitai Sama)

26. Su. Caught cold. Stayed all day at home. Read Masterman's Condition of England.

Wrote: Mrs. Uyeda.

22. Mr. Lloyd George's Speech describing Government's policy of land reforms.

25. Mrs. Asquith's Speech declaring Government's attitude toward Ulster.

28. Tu. Mr. & Mrs. Webb's first lecture at King's Hall. The lectures deal with "Socialism restated" and are to be given on Tuesdays as follows:

Oct. 28. Mr. Webb. Economics

Nov. 4. Mrs. Webb. Equality

" 11. Mr. Webb. Politics

" 18. Mrs. Webb. Woman

" 25. Mr. Webb. Empire

Dec. 2. Mrs. Webb. Science and Religion

31. F. Called on Dr. Murray, Master of Selwyn College, with Mr. R. T.  
Attended the meeting at Japanese Embassy held in honor of H. M. the Emperor whose birthday falls on this day.

Nov. 1. Walk with Mr. R. T. in Golder's Green.

No. 2. Wrote a letter to Marquis Tokugawa. Attended the service at City Temple, where Rev. R. J. Campbell was preacher.

Nov. 3. Sent Report of Expenses to Mr. Kishi (Sept. 3rd—Sept. 25).

Nov. 4. Lecture by Prof. Morgan on legal organization of the Empire. Lord Haldane presided. Lecture by Mrs. Webb.

Nov. 5. Mrs. Whitton invited me to her

tea. She is my former landlady living at 12 Heath Hurst Rd. Hampstead, where I stayed in 1908.

Nov. 6. Mr. Tatsumi invited Mr. R. T. and others to his dinner.

Nov. 7. Visited Kew Garden with Mr. R. T.

Nov. 8. Went to Covent Garden Theater with Mr. R. T. Wagner's "Tristan and Isolde" was played in English.

Nov. 9. Su. Had a walk to Golder's Green. Inspected a new house to let. It had a wide veranda on the front of the ground floor, room facing to it taking light through a bay window on the side.

24s. 8d. wage for a week  
Man's fares, tobacco, national insurance, etc.

Rent of a house with 3 rooms 8.0  
Various insurance 3.0

$\frac{1}{4}$  cwt coal 1.0  
Starch, soap, soda, matches, etc. 8

Gas 11  
Boat club 1.0

Clothing club 6

Man's dinner 3.6

Foods for family 4.11

Nov. 11. Tu. Read Mill—on Liberty Mr. Webb's Lecture.

Nov. 12. W. Mr. R. T. Mr. Santo. London School of Econ.

Nov. 13. Th. Wrote down questions about Socialism, presented to Mr. Webb.

Nov. 14. F. Bath. Mr. R. T. Mr. Butler-Smythe.

Nov. 15. Sa. Hampstead Library (Economic Journal)

Mr. R. T. Mr. Bevent.

Nov. 18. Tu. Called on Mr. Ellis, Local Government Board. Farewell dinner for Mr. Koizumi at Frascati.

Nov. 19. W. Japan Society Reception at Hotel Metropole. R. T. comes to discuss politics once every week beginning to-day.

Nov. 20. Th. Called on Mr. Flux. Director of Census of Production Board of Trade. Met Mr. Wills & got information about

Minimum Wage.

Nov. 21. Fr. Went to Cambridge with R. T. Called on Mr. Bells.

Nov. 24. M. Called on Mr. Comyres, Old Age Pension Dep. of Local Government Board. Called on Mr. Nakamura.

Nov. 25. Tu. Wrote letters to Alpine Sports L/d and Public School Alpine Sports Club to announce our giving up the plan of Swiss journey.

十一月二十五日 本日着の日本新聞に依りて、天皇、皇后両陛下三角門の辺に出席人民の誠意を受け、心から印として、高張を打振られたり。十月三十日発行の東京新聞は後藤男新政党脱退とす

切なり。

27. Mr. Nanjo's dinner.

Dec. 1. Peace discussion at Town Hall.

2. British Museum Library. Read old newspapers.

9. Take French lessons at Hampstead branch

of Berlitz School. 12 lessons.

18. Dösockai at Nihonjinkai. 24-28. Manchester.

27, 30, 31. Meet Mr. Meredith. Balkan War 1913.

Jan. 1, 1913. Peace conference in London, fails because Balkan powers demanded cession of Adrianople.

Jan. 23. The Young Turkish party brings out the war again.

March 26. Adrianople surrendered.

April. Montenegro takes Skutari, but is forced by Austria to retreat.

May. Bulgaria on the one side and Greece and Servia on the other side quarrel on the division of the soil surrendered by Turkey.

May. Peace Conference of London decides that Turkey should cede the whole territory lying to the south of Enos-Media line.

June. War breaks out again between Bulgaria and Greece and Servia. Roumania proceeds

from North to Sophia.

July. 22. Turkey proceeds from South and takes Adrianople.

Aug. 10. Bucharest Peace. Bulgaria and Servia.

Sep. Peace between Bulgaria and Turkey.

朝鮮にて会ひたる人々

京城内山商会支店	平岩内蔵太郎
京城古市町新宮商店	利光 小三郎
	三木 熊之助
朝鮮総督府中央試験所技師	武田 五十八
釜山	宇野 三郎
	岩崎 修省

徳川頼貞君へ講義

第一回 歐洲古代文明と近世文明との関係。

第二回 中世のキリスト教國とイホメット教國。

第三回(一月二十九日) イタリーの都府國家 (Re-

naissance)

第四回 宗教改革。

第五回 神武聖の崇拜。

第三回 伊太利都府國家

Genoa & Venice—Florence—Pisa, Arnalfo

Raffaël Santi: 1483-1594.

(Dante Alighieri: 1265-1321)

Michelangelo: 1475-1564

(Thomas Aquinas: 1227-1274)

第4回

1517 Luther's 95 thesis on indulgences.

1521 Diet of Worms decided in opposition to Luther.

1523 Zwingli inaugurates changes in Zürich.

1535 Henry VIII of England completes his revolt against Rome.

1534 The Society of Jesus founded by Ignatius Loyola.

1536 Calvin secures religious and political independence of Genoa.

1546 Charles V. attacks protestant princes, triumphant for some time, but afterwards isolated and helpless.

大正二年

- 1555 Diet of Augsburg heaves religious matters to each prince to decide for his own country.
- Since then 50 years in Germany.
- 1562 First civil war in France.
- 1572 Massacre of St. Bartholomew.
- 1598 Edict of Nantes.
- 1579 United Provinces of Netherland formed.
- 1588 Armada dispersed.
- The Growth of Dutch and English colonial possessions at expenses of Spain.
- 1618-48 Thirty years war.
- The gifts of historical thinking are better than historical learning.—Lord Acton.
- You are dealing with human beings with a history behind them and an ideal before them.—A. Balfour.
- A philosophy is a poetry stated in terms of logic.—Leslie Stephen.
- The Problem of the Continuation School and its successful solution in Germany. by R. H. Best & C. K. Ogden.
- Best & C. K. Ogden.
- Kings. IS.
- English Literature by G. H. Mair. Williams Northgate.
- 第5回 Colonial Expansion
- 1492 Columbus discovers West Indies.
- 1498 Vasco da Gama's circumnavigation of Africa to India.
- 15th Century: Spain and Portugal attains their glorious expansion.
- 17th Century: The Dutch takes Portugal's place.
- 18th Century: France and England quarrel about colonies in East and West.
- 19th Century: England's superiority.

440

大正三年 (一九一四年)

- Jan. 2-11. Switzerland: Hotel Mercedes, Lausanne.
- 2. Leave London 2 p.m.
- 3. Arrive Lausanne 10.48 a.m. Walk in town with Mannlich.
- 4. St. Catherine.
- 8. Montreaux.
- 9. Les avants.
- Jan. 14. Remove to Cambridge: 20 Clisson Road.
- 16 Mr. Tokugawa remove here. Dine with Murray family.
- 19. Dine at Selwyn College.
- 23. Theatre: Diplomacy.
- 24. Terminal Dinner at Fitzwilliam Hall.
- 25. Tea at Mr. Bell's.
- 30. Write an Essay on Joint Stock Company in reply to Dr. Fukuda.
- 31. Messrs. Santo and Kitsui come to stay with me for the week end.
- Feb. 1. Receive a letter from Registry granting me to be a Research Student of the University.
- Subject: English theories of the Functions of Government and their application to Economic life of the people under the supervision and direction of Mr. G. L. Dickens.
- Feb. 3. Theater: "Hypollipus" a Greek Play.
- 4. Tea at Mr. Foxwell's.

大正三年

441

8. Theater: "Girl in the Taxi".  
Readings since arrived here:-  
Sir Roland Wilson: The Province of State.  
Green: Short History of English People:  
pp. 735-844.  
Sidgwick: Elements of Politics. Chap. 1,  
4, 10, 9, 30.  
Dicey: Law and Opinion.  
Feb. 11. Went to London: Saw "The Darling  
of the Gods" at His Majesty's. Went to Mr.  
Nakamura's reception at Trocadero. Stop-  
ped a night at the Station Hotel.  
Feb. 12. Came back to Cambridge.  
13. Called on Mr. Dickenson.  
14. Law and Opinion: Growth of Collectiv-  
ism. Dinner at Selwyn lodge.  
15. Su. Walking and rowing with Baron Kujo.  
17. Walk to Shelford.
- February 5th. Political Agitation in Japan.  
The Alleged Navy Scandal.  
Tokyo, Feb. 4.\*  
February 6th. The Political Situation in  
Japan.  
Tokyo, Feb. 5.\*  
February 7th. Japanese Naval Scandal.  
Indignation Meeting in The  
Capital.  
Tokyo, Feb. 6.\*  
February 9th. Japanese Naval Scandals.  
Tokyo, Feb. 7.\*  
February 10th. Japanese Navy Estimates  
Reduced.  
The Anti-Government Agi-  
tation.  
Tokyo, Feb. 9.\*  
February 11th. Japanese Navy Scandal.  
Vote of Censure Defeated  
in The Diet.  
An Ominous Anniversary.  
(From Our Correspondent.)  
Tokyo, Feb. 10.

新聞切抜 (日記帳に貼付けられた新聞切抜の見出しだけ掲載した。本文は省略。新聞紙名は不明だが、英文はロンドン・タイムスが大部分と思はれる。日付はわかっただけ入れた。以下同じ)

Mass Meeting in The Capital.  
Tokyo, Feb. 10.\*  
February 11th. Japan Navy Scandal.

Vote of Censure Defeated  
Excitement in Tokyo.

*China & Japan.* An English doctor, who has been working in North China for seven years, was a guest at the Selwyn Lodge, when I was invited to a dinner there. The first question to me was an extraordinary one. He asked: "How long will it be before Japan and China become one country?" My answer was: "I have never thought of its possibility." He also asked afterwards: "Don't you think Japan will be made a republic?"

Feb. 17. We are having an extraordinarily mild winter this year. I did not use an overcoat for last three weeks except for a few cases. Daisies are coming out meadows. Larks are heard. Some trees are shooting. Readings:—Morning: Dicey's Law

and Opinion (last chapter). After tea: Pollard's History of England—Chap. II and III. 1066-1485.

Feb. 18. Mr. Tomoyeda, Professor at Kyoto University, came to see me in the morning. He is just making a flying visit to Cambridge.

I was matriculated at the University Registrar. There is nothing ceremonial in it but I had to be present in cap and gown and sign in the book personally.

Mr. Tokugawa came about at five o'clock and told me that he did not return to Selwyn Lodge but was told to remove to Mrs. Pollock's. This was a surprising news for me because, although I knew by Mrs. Murray's letter of yesterday that her little girl was unwell and there was a doubt of her illness being infectious. I also was told that doctors thought it quite safe for Mr. T. to come back. Beside it is rather curious that I was not consulted about it by Mrs. Murray. I called on Mrs. Murray later on and was

apologized by her. She said her child was suspected of being infected with scarlet fever and kept isolated in her room and as she thought it was not dangerous for Mr. T. She telephoned asking him to come back but she was bewildered on objection made by Dr. Butler Smythe. She asked Mrs. Pollock to take Mr. T. in for some time.

I think Mr. T. need not be kept separate from the house and live in another house without his things under these conditions. I shall let him go back in a couple of days.

Readings: Did not get on much owing to the above condition.

Leslie Stephen, English Thought in the 18th Century published 1902. Vol. II. Chapt X. Political Thoughts. Introductory and Principles of 1688.

Slave. A man cannot make himself a slave, because he cannot give away that he does not possess,—namely the power over his own life.

(Lock's idea stated by Stephen)

- Feb. 24. Mr. Momber tea.
- Feb. 25. Mr. Keynes dinner.
- Feb. 26. Mr. Kitsui left. (He was staying with me since Saturday).

Readings: Dunning: History of Political Theories.

減税問題

日本の租税負担が非常に重くして増税の余地がないとは思はない。年々自然増収の高二千万円に達するのが其証拠である。併し租税は取れるだけ取るべきものではない。減らせる丈減らすべきものである。

日本の租税の悪いのは間接税が直接税に比して多いことである。間接税中の最も悪いのが米の輸入税で、次が石油消費税である通行税である。

然るに日本の議會では營業稅全廢などが提議されて居る。是はやはり日本の政治に下級人民の利益が代表されて居らないからだ。

財政秘密主義

年々議會の度毎に正貨準備の質問が出て、政府は在

Feb. 19. Mr. Tokugawa called on me and we discussed about his intention of reading for music at Cambridge. Wrote afterward to Mr. Kamada on this question.

Went to see the boat race with him and Mr. Tomoyeda and Baron Kujo. Had tea at Baron's.

Dine with Mr. Tomoyeda and Baron Kujo at Bull Hotel.

Feb. 20. Went to University Library. Read Pollard's English History, Chap. IV & V.

Went to see Mr. Tokugawa and found him in bed, feverish. Sent for Dr. Wingate, who said he caught cold. Went to see him again in the afternoon. His temperature was 39.4.

Feb. 21. Mr. T. a little better. Doctor says his illness is influenza.

Mr. Kitsui came to see Mr. T. as I called him by letter.

Read: Green's Short History: Walpole. Feb. 22. Su. Called on Mr. Layton.

Mr. T. much better.

Feb. 23. Dr. Murray tea.

外正貨の高を答へる。何故平生から在外正貨の高を公表する事、日本銀行の正貨準備の如くせむか。

日本の外債

時事新報二月二日の社説に依れば

國債	一、四九五、〇〇〇、〇〇〇	利子四・四四%
地方債	一七七、〇〇〇、〇〇〇	利子五・二五%
社債	一六七、〇〇〇、〇〇〇	利子四・八五%
内國債輸出	六六、〇〇〇、〇〇〇	
合計	一、九〇六、〇〇〇、〇〇〇	平均四・五%

現代の特徴

太陽二月号に出た藤井健治郎氏の論文の趣意に、現代の特徴は自由解放に依て道徳の標準を失たことである。其結果が強いものは精力主義や活動主義や奮闘主義になり、弱いものは自然主義、デカダン主義に墮ちた。夫だから現代を救ふの道は新理想の建設でなければならぬ。夫は即ち自己超越といふことだ。

経済的我の上に真我を発見することである。身のあらゆる論だと思た。

## 社会主義と個人主義

ルーソーは人間に自然の権利がある、国家は之を制限したのであるといふた。是は個人主義の基礎として有力なものだが、少くとも歴史上の事実が相違して居る。

ベンサムは自然の権利を認めないが、個人の自由を拡張することは多数の幸福を増進するに必要な条件だといふた。併し夫ならば多数の幸福が主眼だから若し個人の自由主義が之に反するならば自由を制限してもよいことになる。そこで社会主義が起つた。

併しながら又社会主義が起て見ると個人の性格、人間の価値を無視する様な気がしてならぬ。一方に於て社会主義を行ひ、而かも他の一方に於て個人の人格を發展させる様な工夫が出て来なくてはならぬ。

## 九条男爵

今劍橋に學んで居らるる九条よしむね男は九条公子で皇居陛下の同胞に當る人だ。此人に會て面白く感じたことば、同氏が今頃の青年に似ぬ保守思想を抱て居ることだ。併し同氏の保守思想は日本の頑迷党とは余程異つて英國の保守党で學ぶ所が多うしく、日本で

は一方に憲政運動が起て藩閥を打破りつつあるのは結構だが、他の一方に健全な保守党が起らなければ愚民政治の弊に陥る恐れがある。元老が死んだ後の貴族院には是非保守党が起らねばならぬ。而して衆議院の方では Jingoistic な民衆を基礎とする所の國權党が起つて之と結びおほならぬ。(三月二日)

"Recent Tendencies of Ethics" by Prof. Sorley.

In the last century the controversy in English ethical thought was that between Utilitarianism and Intuitionism.

The controversial points were concentrated in two questions: 1. the origin of moral sense; 2. criterion of moral conduct. Utilitarians insisted that moral sense could be traced up to the sense perceptions and feeling; while intuitionists hold that moral ideas were in their origin spiritual. Again, utilitarians thought that the distinction between right and wrong depended upon the consequences of conduct in the way of pleasure and pain, while intuitionists considered that moral ideas had

an independent value.

This neither of the controversialists repudiated the traditional morality.

But a change came toward the end of the century. Darwinism is the driving force of this change.

Darwin explained survival of the fittest among tribes as survival of the altruistic but failed at the moral development between individuals. He simply said that the application of natural selection to the relation of man to man will destroy the most noble element in human mind. Huxley and Spencer followed him and came to the same deadlock. But Nietzsche demanded the withdrawal of old christian altruism for the natural development and insisted on the morality of prince. Green's neo-Hegelian principle is the reaction to these evolutionary ethics but it does not give any definite criterion of right and wrong. (Mar. 2nd).

*Leslie Stephen on Burke* (English Thought

in 18th Cent.)

The doctrine of prescription admits ..... a noble meaning. Burke had fully grasped the conception of a nation as a living organism of complex structure and historical continuity. It is precisely the absence of any such conception which vitiates all the contemporary political speculations. He had emancipated himself from the purely mechanical and the purely mathematical conception of politics. The methods of the constitution mongers and of the abstract theorists were equally beneath his notice; and the word "prescription" not free from unfortunate ambiguity—evidences his recognition of that element which they equally neglected. Prescription, taken absolutely, may of course sanction anything—English tyranny in America as well as English liberty at home. But, in appealing to prescription, Burke is recognising the fact that the ninety ninth of men's thoughts & instincts are those which they have inherited from their fathers and of the corresponding doctrine, that reform

is impracticable in the sense of an abrupt reconstruction of society, and can only be understood as the gradual modification of a complex structure. Prescription in this sense is based on the presumption that every existing social arrangement has been developed by certain needs and is the mode in which certain forces operate; and that therefore to cut it away abruptly is possibly to inflict a vital injury, and at any rate implies rush and unscientific surgery.

Feb. 28. Mr. Asada and Mr. Uno came from London. They returned in the afternoon.  
Mar. 1. Sunday. Mr. Sarto came. Rowing on the Granta. All Japanese friends of Cambridge came to my tea.  
Mar. 3. Went to Mr. Pollock's tea at Corpus Christi.

新聞切抜(便出し)

The Dickinson Return.

Strengths of The Navies of The World.

余が政治学に志したること

余は日本を立つ前に今回留学中の研究事項を何にせんかと色々考へたり。英国に於ける社会主義の歴史をやらんとしたこともある。

併し文部省からは商業及財政学研究の辞令を受取た。倫敦へ来た時には財政学をやらんとして居た。然るに倫敦滞在中に Mr. Webb の講義を聞いて又社会主義に帰りたく成た。夫から Hobhouse—Liberalism, Hobson—The Crisis of Liberalism の二書を読んで社会主義の外に個人主義及民衆政治を研究したく成た。

Cambridge では English theories of the Functions of Government & their application to Economic life of the people なる問題を研究生の許可を得た。此学期は政治思想史の大体を見ることに力を注いだ。此追ては英国の個人主義の発達を究め夫から社会政策上の施設を見ようと思ふ。個人主義の発達は十七世紀まで遡らなければ本当でないと思ふ。

社会政策は貧民法、教育法、健康法、工場法、職工組合法、老年年金制度、土地問題、国民保険に亘る管

徳川頼貞君大学正科生となりん事を望む

一月前頼貞君は Cambridge にて音楽の学位を得たしと語られたることあり。余は是に對し多く注意を払はざりしに、其後度々同様の希望を語りしに依り余程決心して努力せざれば little-go にも及第し難きことを話せしに、夫は覚悟すべしとのことなり。依て尚再考を求め置きしに愈希望の真面目なること明かになりたり。

日本にては或は留学期間の長くなること、及び音楽を専門とすることに付異議を生ずるかも知れざれども本人の希望に従ひ本人の長ずる所に從て学問せしむるは当然のことと考ふる。故に余は之を助けんと決心したり。若し日本にて異議あらば日本側を説服すべし。尤も頼貞君が果してやり通すか否かは疑問なれども、仮りに中途にて止めるとしても其時までには英語、数学、漢学を真面目に勉強すれば夫丈の利徳あり。

留学期の二三年長くなることは心配の種子ならんも、今の状態にては健康上も品行上も危険の微更になし。又音楽を専門とすることも反対すべしき正当の理由なしと思ふ。(三月四日)

だ。制度の細いことは余の研究の目的でない。大方針の立て方と政治思想、倫理思想との関係が見たいのだ。

学問の為めの学問

余は兼ねて学問の為めの学問、即ち職業の為めではない学問をして見たいと思つて居たが、前回の洋行の時は何分商事経営といふ新しいものを引受けて来た為めに終に其方に引付けられてしまつた。日本へ帰つてからも講義の必要上商事経営の研究に最も多くの力を用ひた。其結果が株式会社経済論となつて出た訳だ。此方面の研究はやつて見ればつまらなくはないが、併しまた外にもつと面白いもののあることは常に忘れることが出来なかつた。今度も学校の命令通り財政をやらうかと思つたが、財政の講義位今でも何うかかう出来るから大して研究の必要もあるまい。夫よりも職業を離れて自分のやり度と思ふことをやつて見ようといふことに成た。夫が政治学だ。

余は中学時代に倫理上の問題として国家主義對個人主義の研究をしたことがある。商業学校に入ってから学校の課業に追はれて此方の問題に遠かつたが、併し本

科卒業間際には Mill の経済学に没頭して居た。専攻部に入ってから経済学持切りであつた。学校教授になつてから仕方なしに商事経営の如き狭き所へ頭を衝込んだ。今度は思ひ切て職業離れして見たい。自分の趣味の向ふままに学問の領域に拘泥せずして思考力を自由に走らして見たいといふ氣に成た。

全体余には倫理学、政治学、歴史の如きものが適當なので商業学に志したのが間違であつた。尤も学校へ入るときは商業学者になる氣はない、商業家になるつもりだつた。學者になるつもりなら初から文科大学へ行くのだつた。

新聞切抜(見出し)

Law and Reality.

Our Real Legislators.

To The Editor of The Times.

A Question of Principle

英國人の宗教心

或日 Mrs. Simon との話の内、同女は死後に行くべき Heaven の状態を有り有りと想像することが出来た。その時同席の Mr. Morish に問きた処が

同氏も同じ事だといふた。何うしてそんな事が信ぜられるかと問ふたらば、勿論信すべき理由はないが子供の時から教へ込まれたのが常に遺て居るといふ事だ。

其後此問題を Mr. Layton の宅の茶の時に出して見た処が、Mr. & Mrs. Layton 及同席の二二人の人も此様の notion を有して居らない。同氏の話では英國人で此様の事を考へて居る人は少くないが大多数とはいへないとの事。

Middlecott

本年春休に頼貞氏の行かれた家は Cambridge の Corpus Christi の architect なる Mr. Lyon の宅に、S. Devon の井田舎なる一軒家である。

昔風の天井の低いハリのトビ出した薄暗い家で、如何にもどろりとした英國の田舎氣質が現はれて居る。村の名を Islington といふが其村は家數十軒位と小さな教会堂があるばかり。而かも Lyon 氏の家からは十丁程もある。此辺は小山の多い所で家は大抵山の上に立て居る。畑もあるが牧場が多い。夫よりも多いのは所謂 moor である。moor には樹木なり heather が生

ひ茂つ居る。村民の共用地である。昔は共有地であつたのが今日は私人の所有地で、村民は畜類を放す権利を保有し居るから先づ共用地と云ふべきであらう。Islington の manor の昔は Islington の Singer なるの面也。

Mar. 14 Sa. Come to London. Put up at 80 Gower St. Call on Mr. Butler Smythe. Go to theater: "Joy-ride-lady".

15. Su. Call on Mr. Nakamura in the morning. Stay there until late at night.

16. M. Come to Mr. Lyon's Middlecott, Islington, near Newton Abbot, S. Devon, with Mr. Raitei. Stop.

17. T. Walk up to the top of a hill with Mr. T. Stop.

18. W. Come back to London. Call on Mr. Santo. Back to Cambridge at night.

19. Th. Call on Fitzwilliam Hall, Dr. Murray. Wrote to Mr. Kishi, Tokio.

20. F. Tea with Mr. Dickinson.

21. Sa. Come to Paris.

à Paris

Le 21. Samedi. Nuageux

J'ai quitté Cambridge par le train de bonne heure le matin, et ai rencontré M. Santo à la Gare Charing Cross comme convenu. J'ai pris le train pour Paris à 2.05. La traversée du Pas de Calais était un peu agitée, non pas parce qu'il y avait beaucoup de vent à ce moment-là, mais parce que les vagues étaient grosses, effet des orages derniers. M. et Mme. Pollock et leurs enfants étaient aussi sur le même bateau.

Arrivé à Paris, j'ai pris un auto de la gare à la Pension Galilée par les quartiers les plus mouvementés. Il a plu, mais Paris est toujours la ville lumineuse.

Le 22. Dimanche. Pluie.

En trouvant que la Pension n'est pas une place pour étudier la langue, j'ai déménagé chez Mme Jacob où M. Sekiya vivait jusqu'à la veille.

L'après-midi, je me suis promené en ville. Si Londres est une ville noire, Paris est celle

blanche. Les ponts sont blancs, maisons sont blancs, monuments sont blancs, et quelque chose mise sur les visages des dames de même.

Le 23. Mars. Lundi. Beau temps le matin, ensuite pluie. J'ai commencé mes leçons avec Mlle. Jacob. Je trouve l'usage des pronoms tres français difficile. J'ai acheté un libre d'histoire et un autre de lecture pour enfants. Quand je les demandais, la dame du magasin me posait la question: "Des livres pour enfants? Bien monsieur—quel âge?" Je repondais "Trente-quatre!"

Le 24. Mars. Mardi.

J'ai visité M. Suzuki à la Banque Franco-Japonaise. Je prenais le métropolitain de la Place Victor Hugo, changeais à Villers et quittais à la Bourse. Je retournais par un autobus de la Bourse directement jusqu'à la Pompe. Il fait très mauvais aujourd'hui. J'ai reçu une réponse du Secrétaire de l'École supérieure du commerce, m'informant de l'adresse de M. Naud. Mais, il ne pou-

vait pas garantir que cette adresse est bien exacte, Parce que M. Naud ne fait plus partie de l'association des anciens élèves de l'école. J'ai écrit à M. Naud.

Il y a un autre hôte chez Mme Jacob. C'est M. Takeda, capitaine de l'armée et l'attaché militaire adjoint de l'Ambassade. Il a beaucoup d'expérience quant au voyage dans la Sibérie Est.

Le 25. Mars. Mercredi.

J'ai visité l'École des Sciences politiques pour voir M. Halévy, mais il n'était pas là aujourd'hui. Je lui ai écrit en joignant la lettre de recommandation de M. Dickinson.

M. Elie Halévy

Mr. Dickinson の紹介で l'École des Sciences Politiques の教授 Halévy 氏を訪ねた。同氏の著書 Bastille なる四十分書の一冊。Suey en Brie なる小説は其の父が少将の庭に於て別荘風の家だ。

英国の自由主義の將來如何。夫れは socialism なる。英国人は individual liberty を其の代りて demo-

cracy を進めて其欠を補はんとするか。

然り、されど斯今の傾向は、経済上は state interference を擴張すべし、宗教上は 家族生活上は individual liberty を進めざるべし。故に二の相反する currents ありんことを注意せざるべし。 (是は先日来余の考へて居たりとだから非常に面白く響た)。

英国にては paternalism を打破す individualism が起り其弊害を生ずるに至りし socialism を成した様を思ふが、フランスは如何。

英国にては paternalism は仏国又は独國の如く成功せざりし。仏国にては一方に centralisation が極端に行はれ、同時に一方には英國以上の individualism がその more anarchistic である。仏国には centralisation が行はれて居る為めに個人の initiative を妨害のむかひとはなきや。例へば大学は自由なきや。大学は国立なればも autonomy を有する故政府の干渉を受けず。併し仏國の大学は政府より多 conservative なり。

Le 27. Mars. Vendredi.

J'ai été chez le coiffeur. Il m'a demandé des explications sur Tokio. Je lui ai raconté qu'il y a des tramways électriques partout et surtout une ligne élevée dans l'air et beaucoup de cafés, de cinémas et de coiffeurs. On y peut avoir ses cheveux coiffés à la raie et sa barbe à l'impériale. Enfin il m'a demandé: "Quel est le prix de la coiffure à la française", ai-je répondues, "mais on y doit manger beaucoup de riz au lieu des pain." "Ah!" dit il, "Je n'irai pas au Japon même pour beaucoup de l'argent." J'ai appris du Times aujourd'hui que le Ministère Yamamoto a demissionné juste après l'ajournement de la Diète. La "House of Representatives" faisait une diminution de ¥30,000,000 à l'estimes navaux. La "House of Peers" demandait une autre réduction de ¥40,000,000. Une conférence des représentants des deux Houses a passée l'estimate comme revisé par la "Lower House" par une majorité d'une vote.

Seulement un gouvernement très fort pouvait survivre à de telles conditions. D'ailleurs le ministre Yamamoto était tout excepté fort. Vigoureux comme l'attaque de l'opinion publique est rousée contre le gouvernement, la Seiyukai partie ne le supportera plus. Il faudra beaucoup de temps pour former un nouveau ministère, mais ce ne peut pas être un ministère bureaucratique. Le Japon demande un système de gouvernement par parties.

Le 28. Mars. Samedi.

Il paraît que le beaux-temps est revenu à Paris. Je suis allé à l'exposition des artistes indépendants au Champs de Mars. Il y avait beaucoup de peintures que je ne comprenais pas. Dans l'ensemble nous pouvons dire que ces artistes-là sont trop anxieux à faire quelque chose de nouveau. Peut-être ne sont-ils pas assez sérieux.

Ce soir je suis allé au restaurant japonais avec M. Takeda. La propriétaire est une Mme. Itahara, qui est à Paris depuis long-

temps. Elle va aux Halles chaque matin pour acheter des provisions de poissons, légumes et viande. Après la dinner nous allions à Folly Bergère, un théâtre-variété.

Le 29. Mars. Dimanche.

J'ai fait deux visites aujourd'hui: une fois chez M. Halévy et l'autre fois chez M. Prunier.

M. Halévy habite un petit village aux environs de Paris appelé Sney-en-Brie, qui est à 17 km de la gare de la Bastille. Sa maison est située au sommet d'une colline et est entourée d'un grand jardin. J'étais invité à déjeuner avec deux autres hôtes. M. et Mme. Halévy parlent bien anglais. Nous avons parlé des habitudes, des moeurs, et de la politique du Japon. Après de déjeuner nous sommes allés dans le jardin pour nous promener un peu; j'y ai eu la chance de poser des questions scientifiques à M. Halévy.

Courbevoie où la famille de M. Prunier habite est ( ..... ) à l'ouest de Paris,

tandis que Sney-en-Brie est à l'est. J'ai eu à traverser la ville entière de l'est à l'ouest par un chemin de fer, et un ( ..... ) souterrain et un tramway électrique. Il me ( ..... ) fallait deux heures pour y arriver.

Chez M. Prunier j'ai rencontré le père, la mère, son plus jeune frère et une petite nièce. La mère de M. Prunier parle bien anglais. Elle a été en Angleterre, mais elle ne l'aime pas beaucoup. L'Anglais est trop pratique et trop peu idéal. Il est trop dévoué aux sports et beaucoup moins intellectuel que les Français.

Le 30. Mars. Lundi.

J'ai visité l'exposition des arts décoratifs au Louvre.

Le 31. Mars. Mardi.

Ce matin, quand j'ai pris la leçon avec Mlle Jacob, un monsieur est entré, demandant à me voir. C'était M. Filandi, qui avait été à Cambridge jusqu'il y a trois mois et qui habite maintenant à Paris. Il a reçu une lettre de Mme. Simon quant à mon séjour ici.

Je suis allé visiter Baron Ishii, l'Ambassadeur du Japon, cette après-midi. Il m'a parlé de la politique française. En France il n'y a pas de parti qui s'appelle conservatif; on est ou un modéré ou un radical, quoi fut il y ait beaucoup de partis actuels entre l'extrême droite et l'extrême gauche. Cette grande classe de paysans est représentée par les modérés, tandis que les ouvriers urbains appartiennent aux radicaux et aux socialistes. Le gouvernement français est le plus centralisé, et par conséquent il emploie un grand nombre de fonctionnaires savants et capables. Mais ce sont des fonctionnaires purs et simples; ils ne deviennent jamais ministre du cabinet. Le cabinet est formé par le plus influent des partis parlementaires; il est changé souvent, mais les fonctionnaires restent les mêmes.

Le 1. Avril. Mercredi. J'ai visité M. Filandi à sa pension, rue de Montseguien près du Palais Royal. Après nous sommes allés

nous promener dans le jardin des Tuileries, j'étais invité à dîner à sa pension. Ici on mange à la même table avec tous les hôtes. Il y avait les Français, des Italiens, des Américains, et des Allemands, et tout le monde parlait français. Puis M. Filandi et moi, nous sommes sortis encore pour nous promener sur les Boulevards des Italiens, où nous avons également causé au Café. M. Filandi m'a parlé sur la vie française. Il pense que les Français en général manquent d'idée d'ordre; qu'ils n'ont pas l'habitude de la propreté; ils sont coquets. Mon ami est un grand anglophile.

Le 2. Avril. Jeudi. Je suis allé pour faire canotage sur le lac au Bois de Boulogne. J'ai fait le tour des îles deux fois. Tous les arbres verdissent maintenant. Nous voyons quelques fleurs aussi, surtout des cerisiers japonais et des rhododendrons.

Le soir M. Irie est venu me chercher. Il est un des secrétaires du gouvernement général du Corée et m'est recommandé par

M. Sekiya.

Le 3. Avril. Vendredi. Je suis allé voir M. Naud à son bureau ce matin, car il m'avait invité à déjeuner. Mais il était sorti et le bureau fermé quand je le visitais. J'étais en retard. J'ai mangé dans un restaurant près de la Sorbonne et ensuite j'ai visité le musée du Louvre pour voir les peintures. J'ai trouvé au jourd'hui que Prud'hon, Ja Justice et al Revanche divide poursuivant le Crime' et Henner, 'la Lisense' surtout sont excellentes.

Du Louvre j'ai pris le chemin vers la pension de M. Filandi, où nous avons pris du thé. Nous avons convenus la dernière fois d'aller ensemble à une conférence à la Sorbonne, mais nous l'avons remis à la semaine prochaine parce qu'il est enrhumé et a un mal de tête terrible.

Quand j'étais revenu chez moi, j'ai trouvé une lettre du Baron Ishii, m'invitant à dîner ce soir.

À l'ambassade il y avait outre moi MM.

Takata, juge de la cour supérieure de For-

mose, Konishi, agent commercial du gouvernement de Formose, Ijichi, de Mitsui & Co.

Le 4. Avril. Samedi. Cette après-midi je suis allé avec M. Irie aux librairies dans le quartier Latin afin de lui obtenir quelques livres sur la politique coloniale française. L'une d'elles était E. Larousse, rue Victor Cou-Sin, qui se spécialise en ce sujet; l'autre Armand Colin, grand éditeur sur le Boulevard St. Michel.

Le 5. Avril. Dimanche. Je suis allé me promener au Bois de Boulogne. J'ai traversé le lac jusqu'aux îles. Il y avait beaucoup de monde. Que les dames françaises en général ont meilleur goût que les autres Européennes, c'est vrai, mais ce n'est pas toujours acceptable. Quelquefois elles envelopaient beaucoup trop de garnitures et se rendent ridicules.

J'ai écrit plusieurs lettres, surtout à ma femme et M. Tokugawa.

Le 6. Avril. Lundi. Hier soir j'ai eu une

indigestion qui m'a empêché de bien dormir.

J'ai visité le bureau de M. Takeda pour lire les journaux japonais.

Suivant le télégramme reçu par le Temps, il paraît que Vicomte Kiyoura a réussi de former un nouveau cabinet. On informe aussi que les membres du cabinet, outre MM. Matsumoto et Uchida, étaient nommés en dehors des anciens ministres; que tous d'eux n'ont pas le siège dans la chambre basse et le caractère du cabinet entier est absolument réactionnaire.

Le 7. Avril. Mardi. Je suis allé voir Alison, la jeune fille de M. Pollock de Cambridge. M. et Mme. Pollock sont allés en Italie, laissant Alison et son frère David en France, afin de leur donner la chance d'obtenir des connaissances de français. Alison reste avec une dame anglaise à Paris, et David le pauvre petit à Versailles. La façon d'élever les enfants anglais rend ceux-ci indépendents mais elle est plus ou moins dure.

Je suis allé au Bois pour m'asseoir sur un

bane et lire en plein air. Maintenant je peux lire Descamps, la Formation sociale de l'Anglais moderne. M. Filandi est venu chez moi pour dîner. Il a parlé de l'argots français.

Le 8. Avril. Mercredi. Je suis allé au Bois pour lire.

M. Descamp est d'opinion que l'initiative privée a joué un grand rôle dans toutes les choses et toujours en Angleterre. Quant aux affaires éducatrices, il n'ya pas d'opposition entre les forces publiques et privées ou entre les pouvoirs locaux et de l'État. Lorsque l'État intervient dans le domaine de l'éducation, ce ne signifie pas l'adoption de l'étatisme, mais d'une coopération de l'État, des pouvoirs locaux et des forces privées dans l'oeuvre de l'éducation.

Le 9. Avril. Jeudi. Je suis allé aux Bois encore pour lire.

M. Descamps fait une comparaison entre les attitudes française et anglaise envers l'éducation intellectuelle. En Angleterre on

s'efforce à développer l'intérêt des garçons, dans les choses qui leur plaisent, tandis qu'en France, les garçons sont obligés de s'assimiler toutes les matières enseignées. Le principe d'une côté est le développement de l'esprit encyclopédique, mais dans autre c'est le développement de la personnalité.

M. Takeda m'a dit ce soir, que l'Impératrice douairière du Japon est morte.

Le 10. Avril. Vendredi. Je suis allé avec M. Filandi à la Sorbonne pour entendre une conférence, mais la salle était fermée parce que c'est Vendredi-saint aujourd'hui. Nous prenions notre chemin vers l'église Notre Dame, où il y avait beaucoup de monde entrant et sortant dans un mouvement incessant. Devant l'autel vingt personnes étaient agenouillées, trois prêtres vêtus pompeusement passaient lentement devant elles. Les personnes s'en allaient, une autre série prenaient leurs places, et les mêmes prêtres passaient de la même façon. En allant plus près, nous avons trouvé qu'on

baisait trois trésors de l'église portés par les prêtres. Ensuite nous avons lus dans le Baedeker que les trois trésors étaient la couronne du Christ, un morceau de la croix et un des clous avec lequel il avait été tué.

Le 11. Avril. Le Journal de ce matin nous informe que le conseil des Genros a proposé Comte Okuma à constituer le cabinet. Si cette information est vrai, le cabinet du Vicomte Kiyoura paraît ne pas se former. J'ai écrit plusieurs lettres, une à M. Kamada et une autre à M. Koizumi. J'ai décidé de retourner au Japon avant la fin de l'année prochaine et M. Koizumi prendra ma place comme tuteur du jeune Tokugawa.

Le 12. Avril. Dimanche. J'ai fait une longue promenade cet après-midi. J'ai pris le tramway de la Place de l'Étoile à Asnières, une petite ville au bord de la Seine, et j'ai marché de là-bas à St Denis via Gennevilliers. Il faisait beau temps et c'était très agréable à marcher le long du fleuve et à travers les champs. Suivant le Baedeker,

er, cet endroit était presque un désert il y a quelques années, mais il était transformé en une des régions les plus fertiles dans les environs de Paris, grâce à utilisation de l'eau des égouts. St. Denis est une ville des usines et illustrée aussi comme le siège de l'église St. Denis. Aujourd'hui étant Paque, tout le monde était dehors. L'avenue des Bois de Bourlogne était tout à fait voire de monde. Les wagons des tramways étaient bondés comme des sardines. Mais je n'ai pas trouvé beaucoup de piétons à la campagne. Je n'ai rencontré que peu d'automobiles sur les chaussées. Il n'y avait personne faisant du canotage sur la Seine près Asnières, bien que le centre du canotage se trouve ici. Les français n'aiment pas beaucoup la campagne. Ils ne sont pas "sportsmen".

Le 13. Avril. Lundi de Paques. Je suis allé dehors pour voir le peuple français en fête. J'ai marché à travers le Bois jusqu'à la Porte de Suresnes. Je

pouvais ici observer un grand nombre d'ouvriers jouissant de leur congé avec leurs petites familles, sa femme et un enfant, rarement deux. Ils jouent avec les enfants; ils se plaisent à faire jouer les enfants. Toute l'attention de père et mère paraît être concentré dans leurs enfants. Ou ne voit jamais une aussi aimable image en Angleterre. J'ai pris le tramway du pont de Suresnes à St. Cloud. Je suis entré dans le parc et monté la colline, où on peut avoir une vaste vue sur Paris. Il y avait trop de monde et j'étais fatigué de marcher à l'air poussiéreux. Mais ne pourrais prendre ni tramway ni bateaux parce qu'ils étaient terriblement bondés. Je suis revenu en voiture, dont le cocher m'a demandé prix extraordinaire.

Le 14. Avril. Mardi.

Je suis allé pour visiter l'exposition du Salon qui a été ouverte depuis hier. Le nombre qui peintures et sculptures et autres objets d'arts exposés cette année est de plus

de deux cent soixant-dix. Bien entendu, on ne peut pas les voir tous dans une visite. Il y a plusieurs grandes peintures que ont été fait, spécialement pour la décoration de grands bâtiments, comme le Palais de l'Élysée ou le Petit Palais des Beaux Arts. Le ton général des peintures est progressif et libre, mais ce n'est pas exagéré comme chez les indépendants ou les sécessionistes allemands. Toute l'avenue de Champs Élysées est maintenant sous l'ombre verte des arbres. Les drapeaux rouges du Salon s'agitent sur verdure.

Le 15. Avril Mercredi. Je suis allé me promener, faisant une tour, Henri Martin—Trocadéro—Quai Debilly—Pont Alexandre—Champs Élysées—Victor Hugo. La vue des Champs Élysées au sud est grande. Entre les deux Palais des Beaux Arts s'ouvre une large avenue conduisant tout droit jusqu'au Pont Alexander III avec les statues d'or et domine le tous le dôme des Invalides bril-

lant sous les rayons du soleil du printemps.

Le 16. Avril. Went to Versailles with Alison Pollock and Madame Murray in order to see David Pollock.

17. April. Salon.

18. April. Tea, Madame Schneider.

19. Sn. St. Germain.

20. Exposition Humoristes.

Tea, Madame Murray.

Theatre Francais, with Capt. Takeda.

21. Rose.

22. Back to London. Stopped at 80 Gover St.

23. Thurs. Messrs. Kitsui and Saito called.

Visited Y.S.B. to negotiate a bill (\*2000) without a letter of credit, as the former letter is expired and the second one is not yet arrived.

April 24. Fri. Mr. R. T. called.

Back to Cambridge.

28. Tu. Theatre: Pearl Girl.

29. W. Wrote to Mr. Kinoshita, new financial agent to Marquis T.

30. Th. The King came to visit Leyes School. The houses along the route were decorated with flags, school boys and girls made rows along the streets. The traffic was stopped for four hours. The King passed in a motor car.

Bentham ~ Owen

1813 Bentham と James Mill の友人たる William Allen の孫と Owen の New Lanark 工場を參觀する事と成り。

Bentham と Owen と中絶し成り。 began in vapour and ended in smoke と譯たり。 Bentham と Owen の教育事業に趣味を有し business ~ philanthropy と結合した積りて成り居た。 美談利権と稱せられた。

田舎新聞

ペロリヤの花のなかの娘は Jane と Jack の内は Jane 也

幾千の草木をとりて Champs-Élysées と稱す

風ふく

Cambridge の春

故郷の人に見せばやイギリスの春の牧場のこの若緑  
青きに林檎の花のさるところ茶を汲む人の妬ましき  
哉

別れてもまた逢ふ時ひかへらむも幾年前の昔きこ  
るに

恋ゆゑに沸する血潮の冷ゆへしや我等此世をさら  
限は

ケム川の岸の青柳燈るまで細く声なく春の雨降る  
新緑の森の下道奥かく鳩の声して日は暮れんとす

新聞切抜  
Mars 10

JAPON

La mort de l'impératrice douairière

JAPON

Le nouveau cabinet

The Crisis in Japan.

Count Okuma's Reappearance.

East and West.

Japan and Her Difficulties.

MAY, 1914

4. M. Saw Mr. Fines-Clynton, the new coach  
for R.T.

5. Tu. Lunched with Mr. Yamada and his  
friend Hon. Watson Armstrong, the pre-  
sident of East & West Society.

Went to Theatre: Faust.

7. Th. Lunch at Mr. Dickinson's with him  
and two other gentlemen and Mr. Tokugawa.

8. F. Called on Dr. Naylor, the tutor of  
music for Mr. R. T.

10. Su. Had a walk with Baron Kujo.

13. W. Mr. Sekiya, the director of Educa-  
tion of Corea, came to see me.

21. Th. Dr. Takata and Mr. Masuda of the  
Waseda University came.

22. F. They came to my tea.

Mr. Kitsui came to stay with me for a few  
days after his tour in England and Scot-  
land.

Read a paper on "Japanese characteris-

ties" to the East & West Society.

国民的努力を要す

元老は凋落せしも政党は未だ有力ならず。戦勝の結  
果外交上には一等国の列に入りしも、総ての点に於て  
二等国以下なり。明治の大発展の結果は大正の国民的  
危機となる。国民努力せざるべからず。

貴族は眠より醒めよ。高等遊民存在の理由は唯一意  
天下を思ふにあり、disinterested effort にあり。

商人貴族——成金よ、汝は新時代の貴族なり。商人  
は金の為めに何でもするといふは時代の變を知らざる  
ものなり。

中産階級——政治は汝の手に墜ちたり。官吏、医師、  
技術家、教師は専門家たると共に臣民たることを自覚  
せよ。

商工業者、地主は素町人、土百姓の考を脱せよ。選  
挙権の拡張は急務なり。

西洋標準の弊害——日本は第二の西洋となるべから  
ず。貧国強兵は無意味なり。軍隊は大を誇るなかれ。

The Budget

The Budget 1914-15 was introduced into the  
House of Commons on Monday, 4th May.  
On Saturday the following article appeared in  
the 'Times'.

新聞切抜(見出し)  
First Normal 200,000,000 Budget.

軍旗の多きを喜ぶなかれ。税源の大なるを期せよ。富  
国弱民も否なり。貿易商の多きに憧る事なかれ。衝突  
の増加に満足するなかれ。人民の健康は如何、知識は  
如何、道徳は如何。

植民地の大なるを誇るなかれ。植民地の文明を考へ  
よ。  
正貨流出は憂ふるに足らず。国民の膏血を輸出する  
を憂へよ。工場法の実施遅るるは何事ぞや。

二大政党は目的にあらず。主義の争が目的なり。日  
本の国粹と国弊、政争の基礎。

政党内閣は目的にあらず。人民の自治力が目的な  
り。自治共同の精神、学校、地方自治体、Cavendish  
Association.

Thursday's debate

A Complicated Budget.  
Income-Tax Raised.  
\$9,000,000 in New Charges.  
Aid to Local Rates.  
New Expenditure.

Mr. Lloyd George's Speech.  
A Lack of Lucidity.

Mr. Austen Chamberlain's  
Criticisms.  
Detailed Examination  
Reserved.

5th May The Times Criticism  
A Complicated Budget.

6th May  
Some Aspects of the Budget.  
Budget Policy.

Resumed Debate in The Commons  
Unionist Criticism.

Mr. A. Chamberlain on Lost  
Traditions.  
Income-tax, Old And New.  
Half Earned And Half Unearned.  
The Labour Party's Views.

The Labour Party's Views.  
Social Legislation in England

1. Individualism and Socialism: a study of  
the principle.  
2. The Law of Inheritance.  
3. Education.

4. Poor-Law.  
5. Old-Age Pension and National Insurance.  
6. Trade-Unionism.

7. Factory Legislation.  
8. Taxation.

9. Conclusion: Socialism and Democracy.  
From S. Mark

1. The Sabbath was made for man, and not  
man for the Sabbath. (Ch. II. 27)

2. Whosoever shall do the will of God, the  
same is my brother, and sister, and mother.  
(Ch. III. 35).

3. Ye know that they which are accounted  
to rule over the Gentiles lord it over them;  
and their great ones exercise authority over

them. But it is not so among you, shall  
be your minister; and whosoever would be  
first among you, shall be servant of all.

For verily the son of man came not to be  
ministered unto, but to minister, and to  
give his life a ransom for many. (Chapter  
II. 43-45).

4. Give to the poor and thou shalt have  
treasure in heaven (Chapt. 10. 21).

孟子より

桃応問曰、舜為天子、臯陶為士、瞽瞍殺人、則如之  
何。孟子曰、執之而已矣。

然則舜不禁歟。  
曰、夫舜惡得而禁之、夫有所受之也。  
然則舜如之何。

曰、舜視棄天下、猶棄敝屣、竊負而逃、遵海濱而処、  
終身所然、樂而忘天下。 (良心章句上)

公孫丑曰、伊尹曰、予不狎于不順、放太甲于桐、民  
大悅、太甲賢又反之、民大悅、賢者之為人臣也、其君  
不賢則固可放歟。

孟子曰、有伊尹之志則可、無伊尹之志則不可。  
(良心章句上)

新聞切抜(見出し)  
21st may  
Termination of Hereditary  
Titles.

日本政局観

○大隈内閣が同志会、国民党、中正会の三派合同を  
企てたるは無謀なり。前議会に於て政府反対に一致し  
た丈けでは根本の思想感情に共通点ありと認むるに足  
らず。従て合同の基礎とするには不充分なりといふの  
が余の考であつた所が、尾崎氏は三派合同が出来ると  
思たらしい。

実際に於ても国民党は中立だが中正会はまとまつた  
らしい。併し合同は出来ないで連合に終るだらう。其  
内に二師団問題が出るゝ尾崎氏及中正会が分離して内  
閣が倒れるだらう。政友会たるものは宜しく輕挙せず  
して内閣の自滅を待つべしだ。  
○海軍廓清の一法として山本伯を予備にしたのは大

成効だ。

○大隈内閣の地方官會議の演説中に、神社崇敬の風を起せといふ一條がある。而して選挙権拡張は一言も及んでない。

○今度の東京市會議員選挙に麹町から加藤正義、豊川良平の両氏が打ち出たのは注目を要する一事件だと思ふ。地方議會で disinterested の分子を入れることは僕の素論だ。

May 23. S. Lunch with Mr. Momber.

June 4. Th. Dinner at Mr. Reddaway's.

7. Su. Tea with Mr. Layton. He is going to have a tour round the world.

9. Tu. Consul Nakamura came with his wife.

The East & West Concert. Heard some Indian music.

11. Th. Breakfast with Mr. Warren, an undergraduate who was born in Japan.

Lieutenants Nabeshima and Katsura came to my tea.

12. F. In France Ribot Ministry resigned a day after it was formed.

13. Sa. How to manage the suffragette cases was the first great question discussed in the House of Parliament after the Whitsuntide holiday.

June 14. Su. Had a long walk with Mr. Nabeshima, Tokugawa, Yamazaki and Yamada.

About Woman  
The Duchesse of Marlborough was Miss Vanderbilt before her marriage.

The suicide of an ex-suffragette is reported in today's paper. She was born a daughter of captain. Her mother could allow her £100 a year. But she left her home to be independent. She became a stage girl and then a sort of half-world. (June 12)

The treatment of imprisoned suffragettes became a problem in the House of Commons. There are three methods proposed: 1. de-

portation; 2. leaving them to starve; 3. stopping the financial support given by rich women. Women who actually commit crimes are said to be paid 30 S. to £2 a week.

When Mrs. Simon was a girl a woman of her age (52) used to walk slowly in a dignified manner. Now she doesn't. She cycles. She is altogether much more young spirited.

Political Dialogue 考案

近頃 G. Lowes Dickinson 氏の political dialogue と Justice & Liberty を読んで非常に興味を感じた。此流儀で行けば読者をして論点を捕へしめるのに頗る有効なるのみならず、自分を傍觀者の位置に置いて色々の主義を批評することが出来る。そこで自分も日本へ帰たら早速筆を執つて日本の political dialogue を書いて見ようと思ひだした。そして人物を次の様に取合せようかと思つて居る。

古山巍——貴族院議員、藩閥外の旧型官吏で知事まで進んでから退隱した。漢学の素養ある人。之を国家

主義、貴族主義、家族主義の代表者とす。

中川成吉——前代議士、銀行頭取、四十五才。self made man。英學の素養ある。Mill, Spencer を知る。此人に自由主義を代表せむ。

話の発端は次の通り。  
所は箱根の宮の下。僕が帰朝後最初の春。三週間の転地をして居たとき、父の旧知なる古山及同窓の先輩たる中川が同宿して居て毎日一緒に散歩したり碁を打たりしながら遊んだ。然るに不思議なことには皆議論好きで話をすれば必ず当今の大問題に亘る。或朝例に依つて三人が僕の室へ集たときに古山がいふには、

古山——中川君も上田君も平生は中々忙しくて緩り話が出来ないが、今度は色々御説を聴て非常に面白く日を送りました。併しかう議論好きが揃ふのも珍しいことだから今日は一日真面目に討論して見ては何うだらう。

僕——古山様の気の若いには何時も感心しますが討論会とは愈振てますね。

中川——夫は私も賛成です。実は明日東京へ帰らなければならぬことと成たから皆様の御議論を承るのも

今日限りです。

僕—そこで吹き舞だからうんと吹き飛ばさうといふんだね。夫は面白からう—時に古山さん。昨日から僕の所へ又一人議論家が来て泊て居るのですが仲間に入ましようか。其人は新田進一君といふて先月独逸から帰て来た未来の代議士です。

古山—ああ夫は結構だ。其人さへ遠慮しなければ私の方は構はずやる。

僕—なに、遠慮するなといへば何んなことをいひ出すか分らない様な男です。

といふ内に新田が朝の散歩を終て庭口から入て来たから四人揃た。

古山—そこで今日の討論に就て私は一つ注文があるが皆様聴て下さい。

先日から色々議論を闘はしたが動もすれば枝葉に亘て論が進まないから、今日は問題を順々に出して問題毎に各々が意見を述べたる様にしたらどうだらう。而して其問題の出し方は上田君に一任した。

僕—いや、夫は御年役の貴老に願ひたいものです。中川—どうでない。是はやはり古山さんの言われる

通り君がやらなけりやいけくない。君が一番学者で一番公平だから君が問題を出して皆の意見を纏める適任者だ。

古山—さうさう、かうして四人寄て見ると私が旧派で中川さんが新派で新田さんが最新といふことに成るんだから、君に順序良く問題を出して貰たら面白い討論が出来るよ。

僕—さうですかね—。夫では兎も角私が議事整理役になりましょう。

順序

貴族政治と平民政治

自由放任と保護干渉

家族と国家

宗教及教育

外交及軍備

農業及工業

婦人と社会

社会組織と個人の徳性

June 18. Wrote a letter to inform Mr. Dickinson what I have done during this term

and took it to him and discussed the matter over.

1. Whether democratic and individualistic thought in Europe was stimulated by Christianity.

2. Democracy and individualism. Rousseau's deadlock.

3. Locke's Social Contract. Confounded with utilitarian theory.

4. Extreme individualism is anarchism. Even voluntary associations may be denounced.

5. Bentham's theory. Its individualistic side.

6. J. S. Mill. A strong individualist in his political economy.

7. His turn to socialism Liberalism and Socialism.

8. Conflict between liberty and equality.

9. Abolition of inheritance is both individualistic and socialistic at once.

10. Reformation of political institutions another prospect of harmony. Syndicalism. June-Paris

June 19. Fr. Go to London, stop at 80 Gower St. Visited Royal Academy Exhibition.

20. Sa. Call on Messrs. Tatsumi, Nanjo, Takahashi in the city.

Go to Drury Lane Theater with Mr. R. T. Sir Joseph Beecham's opera season.—Russian opera: Boris Godounov. Played by Russians and sung in Russian. The story is that of Czar Boris Godounov, who usurped the throne, obtained popularity by good government, but became insane owing to his repentance of former disloyal career.—Powerful music, brilliant scene.

21. Su. Started for Paris, via Boulogne.

22. M. Visit Bois de Boulogne—Tour Eiffel—Luna Park.

23. Tu. Call on Embassy. Visit Park Monceau—Tomb of Napoleon—Salon Trianon rigne: La Fille de Regiment, a Tyrol story, and Galathia, Greek.

24. W. Louvre—Pantheon. Dinner at Embassy.

25. Th. Saw proceedings in chamber of dé-

- putiers: there was a hot discussion about foreign labour in France. Opéra Comique: Alceste, a Greek story, music by Gluck.
26. F. St. Cloud & Sevrès—Return by Bois—MAGIC CITY.
27. Sa. St. Germain.
28. Su. Versailles.
- These few days were very hot.
29. M. Bois.
30. Tu. Père Lachaise.
- July 1. W. Visited Gallerie du Cézanne: M. Talerin, a Norwegian gentleman, 19 Ave. de Madrid.
- Opéra: Le Joux de la Madonna, au Italian opéra.
2. Th. Luxembourg.
- Theatre Français: Les Marionnettes.
- 新團切抜(昆出)
- Problems of Modern Japan
3. Fr. Fontainebleau.
4. Sa. Louvres.
- Shopping in Ave. de l'Opéra.
5. Su. Return to London. Stop at 80 Gower St.
6. M. Call on Mr. Haraguchi Ryōhei. Visit Anglo-American Exhibition. Call on Baron Kujo.
7. Tu. Call on Mr. Nakamura Takashi. Return to Cambridge.
8. W. Obtain rooms for Mr. Santo.
9. Th. Write a financial report to Mr. Hibiki. Row with Mrs. Murray.
10. Went to London in order to attend the dinner of Dōsokwai in honor of Profs. Blockhuys and Hasegawa. The dinner was held at Nihonjinkwai and there were about thirty present.
11. Called on Mr. Hasegawa at his room at Hampstead. Came back to Cambridge.
12. Mr. Santo called on me: He removed to Cambridge on Friday.
13. Began writing a political dialogue which I hope to publish some day.
17. Called on Mr. Layton. Gave him my letters of introduction to Japanese friends.

18. Sa. Wrote during the week Chap. I & II of the dialogue.
- Went to London. Stopped at Endsleigh Hotel. Went to Kingsway Theatre: The Great Adventure.
19. Su. Called on Consul Nakamura with Mr. Yokogawa. Had lunch there. The consul will leave for New York within a week.
- Returned to Cambridge.

#### The University Training at Oxford & Cambridge.

Mr. W. T. Layton tells me that \$40-60 per term is the usual sum spent by English undergraduates in Cambridge. This is very hard for young man of middle class. But there are great number of fund available for the help of good or poor students. Half of the men resident here may be said to be receiving some kind of pecuniary help.

Whether University gives a certain sort of training so valuable as many people think is a matter of disputes. But there is a saying

- that Oxford men walk about the world as if it is all their own, Cambridge men walk about the world as if they do not (.....) whom it belongs.
- July 21. The King summoned the leaders of the three parties and Uister to a conference at Buckingham Palace with the view to a peaceful settlement. This is clearly an extraordinary step on the part of the British sovereign.
22. The King's speech to the party leaders was published. He deems it a "new departure" but considers it justified on the ground of an "exceptional circumstances". His attitude is generally accepted as beneficial at this critical moment.
24. The Buckingham Palace Conference was abandoned as the compromise as to the extent of territory, which should be excluded from Home Rule Bill, had been impossible.
25. Went to London with Mr. Tokugawa.

Stopped at Laugham Hotel.  
Went to Theater: Welch: "When Knight were bold".

26. Su. Baron Shimadzu arrived at Charing Cross this afternoon, whom we met at the station. Mr. Ichiji Yamanouchi is accompanying him.  
We invited both of them to a dinner at Japanese Club.

27. There was a street disturbance in Dublin yesterday when guns were landed for use of the nationalist volunteers.

Another news says that the first guns were fired between Austrian and Servian troops.  
I met Mr. Yamanouchi at Specie Bank and afterwards went with him to see Mr. Mori, the Government's Financial Agent.

Jokes

Vicar: Why don't you brush your hair?  
Poor Boy: Haven't got no brush, Sir.  
Vicar: Why don't you borrow your fathers'?

Poor Boy: He hasn't got brush, Sir.  
Vicar: Why hasn't he got any?  
Poor Boy: He hasn't got no hair, Sir.

Vicar: You are not setting a good example to the young men of Parish, when you go to a Public House on Sundays. Why don't you get your gallon of beer to your house at Saturday night?  
Man: I couldn't sleep well if I had a gallon of beer at home, Sir.

Actress: Do you think actresses should get married?  
Her Friend: Yes, of course, how otherwise could they get divorce?

28. Came back to Cambridge.  
29. The Austrian Government declared war against Servia yesterday.  
Madam Caillaux whose trial was a sensation during last week was yesterday simply acquitted.

Sir Ed. Grey's proposal to hold a peace conference consisting of France, Germany, Italy and England was courtiously declaimed by Germany.

30. Th. Austria's communication with St. Petersburg for localizing the war was abandoned.

The movement on the continent are very imperfectly reported in newspapers to-day.  
31. Fr. Belgrade was bombarded yesterday. Russia began to mobilize. Baron Shimazu and Mr. Yamanouchi visited Cambridge. I lead them through colleges and was on the river with them.

The Inaugural Address of the Extension. Lectures was given by Sir J. J. Thomson in the evening, which I attended.

Aug. 1. Sa. General mobilization in Russia. Martial Law declared in Germany. M. Jaures assassinated. These are yesterday's news. I attended lectures by Rev. Lawrence on International Co-operation and by Mr. Lay-

ton on Economic Function of State.

Aug. 2. Su. War declared by Germany on Russia. Kaiser addressed crowd in Berlin in a fiery tone. First shots were exchanged on Russo-German frontier.

Mr. Brandan, Mrs. Simon's German visitor, left this morning for home. He is a student and has not been in the army yet but is liable to be called in case of a war.

In the British House of Commons on 30th the leaders of two parties declared to sink their internal difference under these extraordinary circumstances. On 31st the Premier made a statement as to Russian mobilization and its necessary effect on Germany's attitude.

Bank rate which was 3% was raised to 4% on Thursday, to 8% on Friday, and to 10% on Saturday. 8% was not heard of since 1873. 10% not since 1866.

Stock Exchange was closed on Friday. The Times urges on that England should help her friends, although she has no direct

interests with the continental affairs. This seems to be the general feeling in this country. But some liberals and socialists and peace advocates are appealing to the nation to keep itself apart from the struggle.

Aug. 3. Germany invaded Luxembourg, a neutral State by virtue of the Treaty of London, May 11, 1867. 200,000 Germans are marching to Nancy.

Today's evening paper says that Sir Ed. Grey announced in the House of Commons this afternoon that Great Britain will help France with her navy if the French coast is attacked by Germans.

I attended Mr. Layton's lecture.

森財務官曰く、從來当地の放資家は日本の政策が内閣の更迭如何に拘らず一定せるを以て、好都合なりとなせり。併し現今は事情大に異なるに至れり。

山内一次氏曰く、ロシアの公使マレウイッチの言に、日本の元老を相手に外交を為すは確かなり。日本のstreetを相手にすることならば頗る困ると。

歐洲大戦争雜感

塙がセルヴィアに對し宣戦せるは aggressive なり。露が是に付て對抗せんとするも、 aggressive なり。 aggressive なるもの衝突は公平なる第三者の調停を入れるの余地ある筈なり。

獨が塙の同盟国として之を助くるは至当なるも、何故其必要の生ずる前に塙を制せざりしか。仏が露の同盟国として之を助くるも至当のことなれども、露のセルヴィアに有する利益が小なるに鑑みて、其 aggressive の態度を制すべき筈なり。

獨仏相共に同盟国を制せざりし罪あり。獨の態度は特に怪しむべし。

仏は此機に乗じてアルサス・ロレーンを取返さんとし、獨は蘭白を併せんとするにあらざるか。然らざれば、バルカンの一小事が歐洲の大戦争となるの奇觀を説明すること能はず。そこで英國が此際如何なる態度を取るかといふに、獨を制せんとすれば間接に露を助くることとなる故に不利益なり。之に反して、全然中立を守りて獨の侵略を肆まにせしむれば、ライン河口を

敵手に渡して今後非常の危険を招くべし。

余の考にては出来る丈け中立を守り、唯獨をして Low countries を侵さしめぬ丈けに止むべし。是最上の策なり。(八月二日)

以上の方針は果して英國政府の採用する所となりたり。今日政府が議會に宣言したること即ち是なり。(八月三日)

歐洲大戦争の場合に英仏獨の労働者がストライキを起せば戦争は不能となるべし。併し仏の労働新聞は護國義務を叫びつつあり。

獨の Vorwärts もツィリアム皇帝を賞讃しつつあり。是では話にならぬなり。

階級間の對抗は國家間の對抗に比して如何にも無力なり。(八月三日)

余は昨年ロンドンにて鎌田氏と語りたることあり。歐洲各國間の經濟關係は頗る密接となりたる故、互に戦争をなすこととはなかるべし。但し、平和を保つ為めに武装の必要あり。従て軍備費は益々多くなるべし。そこで各國民が軍備の負担に堪へずして革命を起すならん。所が見解は大違ひで獨も仏も戦争を辞せず、寧

ろ好で戦端を開きたり。

人或は是を君主、武人、資本家等の利己的精神に帰するも余は夫のみと思はず。人民の間に國民的悪感があるからこそ、上級者の名譽や利益が大きく見ゆるなり。

一言にして尽せば國家主義の弊なり。

人民が個人としての幸福を思ふ外に、國威とか、國權とかの空虚なる愛國心に驅らるる為なり。而して此空虚なる愛國心は日本に於て非常に強く、歐洲にては比較的弱けれども夫でもまだ戦争の原因になり得るなり。(八月三日)

Aug. 4. Tu. Yesterday in the House of Commons Moratorium Bill was passed in a few minutes and also the propose to extend Bank holidays until Friday. Then came Sir Ed. Grey's speech explaining the obligation of Great Britain toward France and demanding the consent of the House to help France on the sea. Mr. Bonar Law supported at once. Mr. Redmond said the two volunteer armies

will defend this country in comrade. Mr. Macdonald protested and said the Government's decision will not meet the public opinion of this country. Some liberals including Mr. Morell and Mr. Ponsoyby also protested. But the House quietly supported the Government with a large majority.

This evening's paper reports that Germany declared war on France and Belgium and that Great Britain sent an ultimatum about Belgium to Germany. Naval reservists are called and Territorials are assembled.

Neutrality or not has been discussed everywhere. The Times earnestly urged on helping France from the beginning. It said if Great Britain keep aloof from the continental trouble at this moment, it will not be breaking any treaty. But it is certainly not doing her moral duty. France is England's friend who is expecting her aid in a case like this.

Mr. Normal Angell sent a letter to Times

saying that to help France is to help Russia, at the expense of Germany. Germany is a civilized country; Russia is not. Therefore for humanity's sake English should stand apart from the war.

Some Cambridge professors also made an appeal on a similar reason.

The International Socialists Bureau organized a demonstration at Trafalgar Square. Mr. Keir Hardie and Mr. Henderson spoke. The Daily News insisted upon neutrality until yesterday but after Sir Ed. Grey's announcement it stopped farther proceeding with the same opinion as it will make Government's position awkward and now proposes to keep democratic spirit in flames.

Prof. Hobhouse, Mr. Hobson, Mr. Macdonald, Mr. Hirst and others organized the British Neutrality Committee.

Lord Morley, Mr. Burns, Mr. Harcourt resigned the office.

Lord Provost of Glasgow, Lord Mayor of

Manchester, Bishop of Lincoln, Bishop of Hereford, Sir William Mather, Sir Albert Spice and others important in business world made a declaration that the people of this country wants neutrality on a similar reason as Mr. Norman Angell's. The hatred of Russian barbarity and love of German learnings seem to be widely felt in this country.

Aug. 5. W. The reply from the German Government to the British protest was as follows: that Germany disregarded Belgium neutrality "in order to prevent what means to her a question of life and death, the French advance through Belgium", that she would give a "formal assurance that even in the case of an armed conflict with Belgium, Germany will not under any pretense whatever annex Belgian territory". Thereupon ultimatum followed.

The railways are now put under the State control. The general managers are appointed committees.

Yesterday in the House of Commons the Chancellor of Exchequer made a statement about the Government's insurance scheme by which it undertakes reinsurance of 80% of insurance amount. This step is considered to be indispensable to the protection British shipping and to ensuring the supply of food and raw materials.

The supply of food question was being discussed everywhere but the Board of Agriculture published the statement saying that there are four months stock (inclusive inland harvest) in the country. A large amount of purchases were made by housewives to secure their own private supply in case of need. The effect of this was quickly reflected on prices of provisions. The public are reminded by press not to make panic by themselves.

Aug. 6. Th. Mr. Lloyd George made a statement in the House as to currency. The Government summoned a conference of eminent bankers and Mr. Chamberlain in order

to consider the question and came to the conclusion that Government notes of £1 and 10s will be issued. These are convertible at Bank of England. Postal orders will be also made temporary legal tender, as the printing of notes may not be done quickly enough.

There was a grave danger of withdrawal of gold, which made three days extra bank holiday necessary. Mr. Lloyd George made an appeal to the public with these words: Any one who from his selfish motives of greed or from excessive caution or cowardice goes out of his way to attempt to withdraw sums of gold and appropriate them to his own use is assisting the enemies of his native land, and he is assisting them more effectively probably than he were to take up arms.

Aug. 7. F. In the House of Commons yesterday Mr. Asquith moved a vote of credit for £100,000,000 to be devoted to war purpose. He denounced German attitude explaining it through diplomatic papers pub-

*really was a question only whether we should enter it honourably or be dragged into it with dishonour.* "It (war) is due to human folly and wickedness." "Every one for years has known that the key to peace or war in Berlin, and at this crisis no one doubts that Berlin, if it had chosen, could have prevented this terrible conflict." "It is Napoleonism once again. Thank heaven, so far as we know there is no Napoleon." "It (Manchester Guardian) took this view that (question of neutrality or war) was a question of history, and that now we are in it there is only one question for us, and that is to bring it (war) to a successful issue."

Mr. Herbert Samuel made a statement on the means to be taken to deal with distress. The first means is to secure the trade of sea so that industry should go on as usual. Secondly it is necessary to push on with public works such as road making, tube construction, etc. Thirdly women and children

lished yesterday. He said: The British Government could not stand by when a great power of Europe was going to dominate all the smaller states and reduce France to an insignificant position. Germany assured that she would not annex Belgian territory after the war. But what does it mean when she is actually violating a former treaty at the very moment she is making another assurance. The cause for which Britain is fighting is justice. She must fulfil a solemn international obligation—an obligation not only of law but also of honour.

It was also asked that 500,000 men should be increased in the army.

Mr. Bonar Law said in response: "When this crisis first arose I confess that I was one of those who had the impulse to hope that even though a European conflagration took place, we might be able to stoy out. I have that hope strongly. But in a short time I became convinced that *into this war we should inevitably be drawn and that it*

for whom no economic employment exists must be considered. The money necessary for it will be collected by Prince of Wales. The municipal authority will have to do with the distribution of funds. The Poor Law will be kept in reserve. There was a central committee organized under his presidency and consisting of the Secretary for Scotland, the Secretary for Ireland, Mr. Burns, Mr. Long, Mr. Macdonald, etc. This committee has to give advices to various relief organizations voluntary and municipal.

Banks were open today.

The Cabinet committee on Food Supplies met yesterday. The representatives of the principal retail provision dealers. The representatives will advise the Government as to the maximums retail prices which ought not be exceeded. The prices fixed thus will be published from time to time. The first list is for August 7, 8 and 10.

Lord Sydenham sent a letter to the Times urging on the national unity at this moment

and calling upon the Peace Associations, Trade Unions, Labour Members to use their organization in relief works. In fact this seems to be the general attitude of peace people now. The great trade union and socialist congress held in London was considering how to evade unemployment and how to assist poors.

There was a great battle at Liège between the Belgian and the German forces. Germans were repulsed with a loss of 25,000 men.

Mr. Ramsey MacDonald resigned the chairmanship of Labour Party.

Aug. 8. Sat. In the House of Commons yesterday the Chancellor of Exchequer made a statement as to the financial situation. He said that everything was working smoothly.

The Bank of England received \$5,600,000 gold. Bank rate was reduced to 6% and will be reduced to 5% today.

In view of the war the great trade unions throughout the country have been taking

active and successful steps to close disputes. Mr. Carnegie declares the Kaiser become the "Chief destroyer of Europe."

Aug. 9. Su. The French occupied Altkirch on Friday night after a fierce fight. On Saturday they advanced to Mulhouse. The German loss at this battle is 30,000 and the French loss 15,000.

German Togoland was seized by the British army without resistance.

Aug. 10. M. Liège is now completely invested by Germans but has not fallen yet. The besieged troops are provided with food and ammunitions sufficiently.

There was no substantial correspondence from Germany for the last few days. It was impossible because the Government's censorship is severe. To-day the Times publishes its correspondent's letter which was written after his coming home. The German press is under the control of Government. They dispersed with a false news that Liège was taken and there was a public

demonstration in Berlin. Another popular expression of joy was demonstrated before the Japanese Embassy when on Sunday Aug. 2 a newspaper said that Japan declared war upon Russia.

The Japanese 1st and 2nd squadrons have put out to sea yesterday under the command of Admiral Dewa. (Are they going to take Kianchow and the German possessions in the Pacific?).

新聞切抜(長出し)

The Times. 10. Aug: War and Class-War.

The Daily Citizen Aug. 10: Emergency Measures.

The Chancellor's Speech.

此際独逸の外交は失敗であるまいか。

アイルランド問題でもめてる英国が、斯くまで一致しようとは思はなかつたであらう。伊太利は三国同盟の一員として協同すべく期せられたのではないか。

ヘルギー人は到底独軍の敵にあらずと思つて居なかつ

たか。独逸皇帝が貴族党と共に称導して来た軍国主義は独逸國民を誤たのではないか。此戦争で独逸が負ければ軍国主義、官僚主義の勢力は退滅する筈だ。(八月十日)

歐洲大戦争は日本のために非常の利益だ。

第一、支那の市場に大に手を拡げる余地が出来た。

南米にも出来たらう。

第二、大なる軍費を用ひずして青島及太平洋の独逸領を取る事が出来るだらう。

第三、戦後ロシヤが弱くなるから滿洲の軍備を緩める事が出来るだらう。(八月十日)

今回の戦に英國の捲き込まれることは止むを得なかつたらう。

若し英國が中立したために独逸が勝てば、其勢に乗じて英國を打つだらう。然る時は止むを得ず戦はなければならぬ。其位なら初から仏に加勢して其結果を未然に防ぐに如かず。若し英國の中立に拘らず独逸が負ければ、仏、露の友情を失ふのみならず、仏を非常にえらいものにしてしまふ。Bovar Law のいふ様に何うせ免れない運命だから潔く初めから態度を鮮明に

した方がいい。此戦争は起りが Balkan をめぐるけれど、実際は独仏戦争だから英国の關係せざるを得ない問題になる。英国が白耳義を守るのは日本が朝鮮を守る様なものだ。(八月十日)

此大戦争に際して英国の財界に大恐慌を起さなかつたのは実に感心なことだ。社会党が宣戦の際まさ非戦論を主張して置きながら急に一転して貧民救助で政府と協力したしたのも感心した。夫から平生の不用意に拘らぬ戦争となると義勇兵志願者の多くなるのも不思議だ。是で急製の軍隊が独逸の軍隊に対抗出来るなら、二年兵役は願か、一年兵役又は義勇兵組織も望むくなる。(八月十日)

戦時保険と云ひ、食物供給の監督と云ひ、貧民救助の方法と云ひ、又政府紙幣の発行と云ひ、今度の英國政府の仕事には社会主義的の事が沢山ある。是が社会主義の大きな実験になりさうだ。(八月十日)

Aug. 11. Tu. France declared war on Austria Hungary. A German submarine was sunk by the British fleet. Germans succeed-

ed in penetrating the town of Liège, but the forts are intact.

The rumour that Japan sent an ultimatum to Germany is denied by the Embassy at London.

House of Commons is adjourned for a fortnight. The new press bureau under the chairmanship of Mr. Smith will be open this morning.

新聞切抜(風出し)

Aug. 11: The German People and The War. German National Sentiment.

Aug. 12. W. The French in Mulhouse were driven out by a superior German force.

1,000,000 Germans are now in line of battle near Liège. The French and allies oppose them with a still larger army.

Times 12. Aug. Japans Case

Aug. 13. Tu. War between Great Britain and Austria began last night.

There was yesterday a remarkable increase in shipping movements in all waters. The Atlantic is declared to be almost com-

pletely open for British trade. There is no German shipping. A rumor says that Germany is feeling the want of foodstuffs

Books borrowed from Mr. Dickinson. Nicholls and Mackay, History of English Poor Law 3 vols.

Barnett, New Poor Law or No Poor Law. Fowl, Poor Law.

Craik, The State in its relation to Education.

Aschrott & Preston-Thomas, English Poor Law System.

Aug. 15 Went to Bowness on Windermere with Mr. Sauto. Met there Mr. Tokugawa and Mr. Rogerson. Japan's ultimatum on Germany is reported definitely.

Aug. 16. Su. On the lake.

Aug. 17. M. Motored to Keswick.

Aug. 19. W. Mr. Tokugawa left for Scotland. Walk to Hawkhead.

Aug. 20. F. Coaching to Coniston.

Aug. 22. Sa Knew from last few day's spapers that hundreds of Japanese refugees from

Germany are now in London. Came back to London. Stayed at Endsleigh Palace Hotel. Went to the club but could not learn anything about Mr. Kitsu.

Aug. 23. Su. The term of Japanese ultimatum expired early this morning.

Went to Streatham to ask about Mr. Kitsu. He does not stay with Mrs. Florence but she gave me his address.

Called on Mrs. Astbury. Met Mr. Kozumi. He spent four days on the journey from Berlin. Did not bring any luggage. Aug. 24. M. Called on Mr. Yamanouchi at Queen Anne's Mansion.

Called on Mr. Kitsu but could not see him. Later on he and Dr. Kyuno came.

Aug. 25. Went to City. Met Mr. Nanjo. Went to tea at Consul Yamasaki's.

Invited Mr. Kitsu and Dr. Kyuno to dinner at Club. Met Dr. Takata.

Aug. 26. Baron Kujo came to dine with me.

Aug. 27. Invited to lunch: Messrs. Takata, Onishi, Odaira, Takashima, Natsumeda and

Haraguchi.

Was invited by Mr. Taksumi. Baron Shimazu and Mr. Yamanouchi were there.

Aug. 28. Fr. Messrs. Takidani, Muto, Uno, Kitsu and Dr. Kyuno called on me.

Aug. 29. Sa. Received telegram from Mr. Tokugawa telling me that he will come up to the town to-night.

Aug. 30. Su. Met Mr. Tokugawa at Mr. Kitsu's room. Came back to Cambridge.

Received a letter from Mr. Hori dated July 31st stating that Mr. Seki went to Osaka three days before, that Mr. Sano will become our director in place of Mr. Tsu-bono, that I shall be called back to fill a part of Mr. Seki's place.

War Office published its first substantial news. A really great battle was fought for four days 23rd to 26th Aug. Allies retreated. Namur line was pushed back to inside Cambrai le Cateau line. British loss under 6,000.

Aug. 31. M. Prof. Kambe came.

くなればやるだらう。併し海軍だけではドイツを参らすことは出来ない。今の様にフランス陸軍が負けるとすれば、ロシアの侵略を頼むより外はない。(八月三十一日)

倫敦巽氏の談に、英国の金融界は全く動かない。政府が商業手形の保証をすることに成た(此高が三億ポンドある)から、銀行には金があるが使ふことが出来なう。accepting houses が働かないから新たに手形を組むことが出来ない。Moratorium は破産を救ひ、手形保証は八月四日以前の債務を liquidate したけれども、新たな活動を保証するものがない。是は二十七日の談。(八月三十一日)

戦争の始る前に英国に非戦論が出た時、Cambridge の学者の一部が非戦説を公した。其主義は、独逸は学問の国、文明国である。ロシアは未開国である。英国がロシアと同盟してドイツを打つのは文明の進歩を妨げることになるといふたであつた。

Prof. Marshall は当時此意見書を sign しなかつたが後に、英国に於て戦争の趣意を国民に講演すべしと云ふ説が出た時には、是はいかぬ、ドイツ人を敵とし

八月十日には日本が独逸の南洋領に手を出せるかと思たが、是は英国との關係上出来さうもない。青島を取らんと就ても英国は初め大に喜びはしなかつた。米國は非常に用心した。全体今度日本が開戦したのは得策か、不得策かわからない。

ドイツ艦隊が東洋に於て英国を攻撃しない間は日本は参加する義務がない。

東洋では日本に敵する武力を備へたものはないのだから、日本が東洋に於て戦をせぬと云へば平和は保てらうものだ。青島位を取るよりも、平和にして置て英獨の市場を侵略した方がよくはなかつたか。

若し平和が保てぬとしても、一応平和に努力した上で已むなく、戦争を開た方が公明正大の戦になるではなうか。是は十一月二日頃に出た考だ。(八月三十一日) 今度の戦争はバルキールでドイツが勝てば長く、負ければ早く片がつくと思つて居たが、ドイツが勝た。ドイツは今不完全ながら、オランダの港を通して外海と通商して居る。米國がドイツを兵糧攻めたしようと思へばオランダを封鎖しなけりやならぬ。是は苦し

つ Chauvinism を鼓吹することになるからよくないと主張した。英国の新聞にドイツの新聞から転載された記事に依ると Prof. Eucken, Prof. Hebel が連名で、英国の故意に戦争に加はつたことを攻撃し、ドイツは文明の爲めに戦つ居ることを論じた。又 Lamprecht は英国が Mongolian Race を仲間に入れて、ドイツと戦ふことを攻撃して居る。

在米独大使は頻りに反英熱を煽いで居る。其論の内にも日本を引出したことを攻撃して居る。(九月一日)

Sept. 1. Tu. Mr. Tokugawa brought Dr. Kyuno to me.

2. W. Mr. Yamanouchi—rowing on Granta.

Mr. Yamanouchi called.

Times: "The Great Illusion."

3. Th. Went to London with Dr. Kyuno.

Met. Mr. Koizumi.

4. Fr. Came back to Cambridge.

5. Sa. Moratorium was extended to the 4th of October.

Lemberg. An important battle was fought

at Lemberg in Galicia between Russians and Austrians. The second army of the latter is said to have been entirely destroyed.

*Paris.* Since the great battle on the Belgian frontier the French retired gradually to Paris-Verdun line. The French Government removed to Bordeaux.

*Educational Campaign.* The prime minister and other eminent politicians made speeches at Guild hall in order to raise the mind of the general public. Mr. Asquith said: With a clear judgement and a clean conscience we find ourselves involved with the whole strength of this Empire in a bloody arbitration between might and right.

Sooner than be a silent witness which meant in fact, a silent accomplice of this tragic triumph of force over law and freedom, I would rather see this country of ours blotted out of the page of history.

*Petrograde.* St. Petersburg is henceforth to be called Petrograde.

Sept. 7. M. Started coaching Mr. Tokugawa

and Baron Shimazuu.

Times: Allies' solidarity.  
Democracy and The War.

To The Editor of The Times.  
8. Tu. Wrote the financial report to Mr. Hibiki.

Times Aug. 31. Our Renegade Brother.  
by Prof. Lamprecht.

Similar opinions were declared by Professors Haeckel and Eucken of Jena.

Times: Diary of The War.

June 28. Murder of the Archduke Ferdinand.  
July 26, Sunday: A serious affray between soldiers and civilians took place in Dublin last evening.

July 27. Bourse at Vienna, Budapest, Brussels closed.

July 28. Mme. Caillaud acquitted.

29. Berlin Bourse closed. London stock brokers failed.

30. Bank rate raised from 3 to 4%.

Sept. 16. Indian offer of 70,000 men. Times.

"Indian loyalty" to the Empire was one of the outstanding events of this week.

Sept. 11. *Recruiting.* Times.

The people of this country was too optimistic at the beginning but when German troops neared Paris they were first awake to the gravity of the case. Prime Minister appealed to nation for recruits.

Times: German People's Awakening.

Copenhagen, Sept. 11.

Sept. 11. Mr. W. Churchill, Mr. Smith and Mr. W. Crooks spoke from the same platform on the invitation of the joint committee of the National Liberal and the National Constitutional Clubs. Mr. W. Crooks' attitude as a labour leader is especially interesting.

Sept. 12. Times: Industry and the War.

Mr. Crooks on Imperial Unity. "Liberty and home."

Value of German Friendship. Outspoken

Dutch Article.

The Chancellor's Admission.

Antecedents of The War. Responsibility of Germany.

Russia And The War. The Psychology of A Nation.

Expectant Russia. A Revolutionary's Views. Political Issues. Mr. Dawson on The Future of Germany.

The German People And The War. Britain's Destiny And Duty. Declaration

By Authors.

What I felt deeply at the outset of the war was the helplessness of the permanent neutrality guaranteed by international law.

Sept. 13. Su. Mr. Waza came.

19. Sa. Mr. Ijichi came.

21. M. Went to London on Mr. Yamanouchi's invitation.

23. W. Received cable from High Commercial College.

24. Th. Wrote to Mr. Sano.

独逸人民は戦争を好まぬ。独逸皇帝及政府が責任者だといふものがある。併し独逸人民は拳國一致で戦争を助けて居る。

Berlin で皇帝が演説した時に、社会党までが拍手して迎へたのを見れば此戦争は独逸に於て頗る人望があるといはなければならぬ。

勿論此戦争の氣風は一朝に出来たのではない。独逸の皇室、貴族、學者などが多年鼓吹した所のものであるが、他の方から見れば、Treitschke や Bernhardi の出たのは独逸の空氣が彼等をして然らしめたのだ。即ち独逸國民が好戰的なのだ。

英国は好運の國で早く世界の覇権を握たが、独逸は晩れて出たから実力はあるながら、英国の後に従はなければならぬ。是時に當りて英国に平和論が起り独逸に好戰的氣風が起るのは無理のないことかも知れぬ。併し戦争に依て此目的を達せんとしたのは達眼といへない。戦争は競争國を破壊して二流に下すことが出来るけれども、自國を一流に進ませるものではない。勝つても負けても文明の進歩を一時止めるものである。戦

争は國際競争上、甲乙の位置を転倒させる早道であるけれども人類全体の進歩ではない。

独逸の如き実力ある國は戦争をせぬでも、早晚老國を押のけて第一等の國になることは出来るのである。英国が老衰して居るといふ説は余の信ぜぬ所だが、若し其説が当れりとすれば、独は英を実力の上に凌駕することが出来る筈だ。(九月五日)

General v. Bernhardt, Germany & Next War が開戦後非常に広く読まれた様だ。

本屋へ行つて見ると Norman Angell—Great-Illusion と並べて置てある。余も面白く読た。夫から Crank, Germany & England を讀た。Lord Roberts, Message to the Nation を讀た。此等の書はドイツの軍備成るの日に必ず大戦争が起ると予言して居る。

Emil Reich—Germany's Swelled Head を今讀て居る。(九月九日)

個人主義、社会主義の前に国家主義といふものがある。Sidgwick の Politics などには此国家主義が説明されて居らぬ様だが、日本に於ては勿論、欧米各國共此国家主義の勢力は中々強い。是が軍國主義にもな

る。貴族主義を justify する。

戦争文学を讀て見て偶然国家主義の systematize されたものを味ふことが出来た。(九月十日)

余の帰朝期を早めたること

昨年九月東京を立つ前に徳川侯から頼貞君の洋行中引続き後見せぬかと頼まれたが、三年は学校の都合が出来まい、と云ふた。夫で承諾を得た。其後侯爵夫人から成るべくなら頼貞君帰朝までやつてくれといはれた。其時には出来たらばやりましようと思つた。

英国へ来てから考へて見ると、学校の方にも中々問題が起りさうだ。(果して大学問題から引つづいて校長問題、関君問題が起た)。此では到底永くは居られぬと思つたから二年で帰ることに考をきめて、小泉君に後を頼むかも知れぬと云ふて承諾を得た。

其後頼貞君の大学正科入学問題が起たので序に余の意志を東京へ書送たら、鎌田氏から差支ないといふ返事が来た。頼貞君の入学希望は中止になつたが、僕の方はきめて置た。

僕自身にも三年は長すぎて退屈するだらうと思つたの

だ。八月末に堀君から手紙が来て羨を呼返すことにならうといふこと。

九月二十三日に学校から電報で帰朝を促して来た。そこで愈十二月に帰るべきをめた。

Oct. 6. Went to London.

Oct. 7. Saw Mr. Yamanoichi off at Easton. Told Mr. Tatsumi that I received a cable from Tokyo and my return became definite. Called on Mr. Nanjo. Visited "Empire". Met Mr. Koizumi and Mr. Kitsu. Went to Mr. Webb's lecture at the School of Economics.

9. Called on N.Y.K. and Cook's office. Returned to Cambridge.

10. Mr. Sugimura came. Visited Jesus College with him. The Chapel of the College is one that belonged to a convent and dates from 12th century.

Introduced Mr. Yamada to him.

11. Sunday. Decided to take the Siberian route.

12. Mr. Sugimura (Sojinkwan) visited Cambridge.
  13. I was invited to Dr. Murray's lunch.
  14. To Mrs. Pollock's dinner.
  17. Japanese meeting at Cambridge.
  18. Invited to Corpus College dinner.
  22. Removed to London (Endsleigh Palace Hotel).
  23. Went to Barry to visit Miss Hughes.
  26. Returned to London.
  30. Mr. Tokugawa comes up to town.
- Mr. Sugimura comes to introduce Mr. Wada Hisakazu (Soganoya Goro) to me.

## 孟子の家族主義

万章問ふて曰く、象は舜を殺すことばかり考へて居たのに、舜が天子となつたとき、彼を放たといふのは何の故か。

孟子對へて曰く、放たのではない、有庠の地に封じたのである。

更に問ふて曰く、舜は共工を流し、驩兜を放ち、三苗を殺し、鯀を殛した。是は皆不仁を誅したのである。

然るに独り自分の弟なる象を封じたのは何の故か。對へて曰く、仁人は弟の富貴ならんことを望むものである。曰天子となり、弟匹夫たらば、弟を親愛するものとはいへぬ。(是は家族主義の偏見である。)

更に問ひて曰く、封じたらば悪人は其民を虐げるだらうが、其は差支ないか。

曰く、象は有庠に封じられたけれども、唯名称上の地位を得たので政治は天子自らした。(名称丈でも不仁を上へ置くのは、国政上の欠点である。家族に対する愛情の爲めに、国家の制度を濫用したものである。)

## 近頃読だ日本の小説

女のことを書たのが多いが、其女は大抵芸者か、高淫か、妾か、そんな種類に限られて居る。

## 日本の思想家の鴉呑主義

之は僕の嫌なやつだが、近着時事に以下の論が出た。曰く、今度の戦争で西洋の書物が当分輸入されなくなつたのは喜ぶべきことだ。今迄は余り多く輸入され過ぎた爲めにニーチェやブラグマチズムが名だけ伝

て、まだかみななされぬ中にオイケンやベルグソンが来る。一つことを充分研究して見たいと思つても、新しいものの端をかじらないと思つたる看板に申わけがなくてつい古いものを捨ててしまつた。筆者は長谷川天溪氏。

## 国防の方針

之に就て浮田博士の説が太陽八月号に出て居る。海軍大將竹内平太郎氏の北守南進論と、やまと新聞記者の大陸發展論と並べて論評してある。浮田氏が北守南進の爲めに陸軍を半減すべしといふ論に反対する理由は、日本が米國と戦ふ場合には露國が黙して居ないから陸軍を半減するのは危険だ。加之日米戦争なしとしても、支那には何時乱が起るか分らぬから其時の用意に陸軍を要する。

## 独逸人の異人種排斥

之は英人よりも烈しいと前から思つて居たが、今度の戦争に付ても夫が現はれた。米國でドイツ人の盛に行つてゐる反英運動にも、英國は

黄人たる日本を仲間に入れて白人たる独逸に敵対するから不都合だといふてゐる。

特に驚たのはドイツの宗教家が英國の宗教家に送た公開狀に、英國が barbarous Russians & heathen Japanese を用ひ、race, religion & culture の同じなドイツを打つのは不道德だといふてゐる。

## 独逸人はセンチメンタリストである

ドイツでは最早 gentleman と云ふ語を用ひない。ドイツの婦人は今後バリの流行に従はないで hygienic style を起すといひ、カイセルは英國の勳章を破り、學者は英國の学徒を返す。英國では今でもドイツの哲學を弁護する人が沢山にある。

## 掃朝の道筋

之を決める爲めには随分迷た。安全と愉快と時間とを秤にかけて見るとアメリカも印度洋もシベリアも甲乙がある。つまり Siberia にぎめた訳は Scandinavia を見られるといふことと、其他に旅行の Complicate した所が僕の旅行癖を刺激したので。

アメリカ線を取た所で新しきものは見られなう。布  
 哇は大西洋の西海岸とあまり変ひまじいと思た。印度洋  
 で行けば気楽だけれども、十二月の末でなければ帰れ  
 ない。

シムリア線で行けばメトロポリスへ行くまでも多  
 少危険かも知れないが珍しい光景を見る機会もある。  
 而して早く日本へ帰れる。日本へ帰てから気楽にする  
 時間がたつぷりある。(十月十日)

## Political Dialogue

例の書物に就て昨夜床の中で考へた。

発端はやはりケンブリッジの宿で林檎の花の散る頃  
 に夢を見たところから起す。

三人の論客を今少し同時代の一般日本人の考を語ら  
 せる。根本主義の章の後に國家の組織、經濟政策、外  
 交及軍備、教育及倫理とした。(十月十一日)

It is learning divorced from its social pur-  
 pose, destitute of large and generous ideas,  
 worse than useless as a guide in the problems

of national life, smothering the humanities in  
 cardboards of detail, unavoidable, but fatal to  
 the intellect.

—L. T. Hobhouse, Dem. & React. p. 38

Nov. 2. Went to Cambridge.

3. Mr. Nanjo's dinner.

5. Seisoku Meeting at the Japanese Club.

Messrs. Iijima Kyōhei, Yamamoto Kiyoshi, Tanabe Isao, Konishi Kyosuke, was invited to Ambassador's lunch.

6. Mrs. Asbury's lunch.

14. Leave London by 2.20 train for New Castle. Steamer left at mid-night—Sea very rough.

Nov. 14. (before starting)

English money £74.2.6

Swedish " Kr.91.25

Russian " R.100.-

Japanese " ¥20.-

Nov. 16. As the steamer approached the narrow channel between the Norwegian mainland and the chains of isands, we went out

Ar. Stockholm at 9.08 p.m.

*Swedish:* Some of the notices in train

Förbjuden Ingång

Dam-Rum

Värtsaal

Rökning förbjuden

Rikstelefon

in-ut

Spotting är förbjuden

Warnt-Kalle

Kristiana till Stockholm

Nov. 20. Fr. At Stockholm:-

Called on Japanese minister, Mr. Uchida

Sadatsuchi.

Visited National Museum. It is already

dark at 2 o'clock.

Mr. Uchida came to Hotel, and discussed about the war and Japanese attitude toward

it.

Nov. 21. Sat. At Stockholm:-

Lunch at Legation.

Walk in town.

Meet Mr. Kjellberg, Jap. consul at Gotem-

of the cabin and saw the rough rocky shores and snow clad mountains behind them. We had cups of bouillon after having had nothing for forty hours. Arrived at Bergen harbor about 5 o'clock. Walk to Hotel Norge. The town is beautifully lighted with electricity. Norwegian dinner was a new experience.

Nov. 17. Started early in the morning for Kristiania. The railway goes around a big fiord, then climbs a high mountain that makes the backbone of the peninsular. The highest point reaches 6,000 ft.

Nov. 18. W. Called on Mr. Dahl, Mrs. Simon's Norwegian friend. He took us through the town. Saw among other things Ibsen's tomb.

Was invited to dinner at 4 o'clock by Mr.

Dahl.

Then we went to theater. The piece played was Danish entitled "Guilty or not guilty."

Had Norwegian supper at Hotel.

Nov. 19. Th. Left Kristiania at 7.20 a.m.

Scenery tame. Weather dull.

berg.

Nov. 22. Sun. Visit Skansen.

Leave by 6.37 p.m. train for north.

*Sweedes* are generally well educated in language.

Passengers on railway speaks either English or German.

*Christiania* and Petrograde are on 60° N.

The extreme north of Sweden 66° N.

Nov. 23. M. Travelling all the day, through snow and forest. Ar. Lulea station at 11 p.m. Sleighed to Hotel in a homely village, and had a Swedish supper.

Nov. 24. Tues. Left Lulea 7.30 a.m.

*The population of Norway is only 2,500,000; that of Sweden 4,000,000.*

Finland has a population of 3,000,000 therefore larger than Norway.

*The Northern part of Sweden is not a barren country. It is well wooded and exports timbers.*

*Scandinavian peasants' house is simple-shaped, clean, comfortable-looking thing, but*

could not be called artistic in any sense. Mostly light blue painted.

*From Boden to Korvangi 120 km in 6 hrs.*

About ten miles per hour.

Had Frukost or Breakfast at Morjärva station.

*From Korvangi to Haparanda by auto. Two hours. Extremely cold but dry and peaceful night. Beautiful moon. Neat little villages, lighted windows, church bells. An ideal country to spend Xmas.*

*Torneo. Finnish village. Visabi Haparanda across a river. Russian gendarmes welcomed us at the gate and demanded passport. Spent about an hour in the customs building until our baggages came. Met a Polish gentleman who was waiting for his wife and children from Germany.*

Sleighed to station and put things in cloak room and then came back to town for supper. When we returned to the station, there was found a ferry steamer ice bound, on the high road. Train started at midnight.

Nov. 25. W. All day in train.

Finland is more Swedish han Russian in its customs and manners. They do not use Russian letters, nor Russian money. Finns speak Swedish better than Russian.

Nov. 26. Th. Train stops at many stations and also at many points which are not stations. When it starts bell strikes two and then three. The conductor whistles and then engine does.

There is no restaurant car although every train is provided with sleeping cars.

At meal time we get out on the platform and get foods in stations.

Trains run at 10-15 miles an hour.

Ar. in Petrograde at 11.15 p.m.

Hotel d'Angleterre. 5 Bbles for a room.

Nov. 27. Fr. Drove to Embassy and saw Mr. Tatsuke.

Had a walk at Newsky Prospect.

Dined at Donon Restaurant. Visited a cinema place, 1 Rble for a second class seat.

Nov. 28. Sat. Went for shopping. Resebureau, Bank, etc. Second Class Ticket from

Petrograde to Tokio R. 200.80

Sleeping berth to Irkutsk R. 31.75

Nov. 29. Sun. Ermitage-Issacs Cathedral—

Cinema.

Nov. 30. Mon. Fur shop—Dominique Restaurant, German speaking forbidden—Café—Embassy (invited to Dinner).

Dec. 1. Tues. Mr. Tatsuke took us to a Russian restaurant—had fish soup and delicious hors d'ouvre.

Start on the long journey by 8.37 train. Mr. Yamada saw me off at the station which was quite an unexpected pleasure for me. He and Mr. Umeda Kiyoshi are now working for Okura & Co. at Petrograde. Had pleasant talks with Mr. Umeda and Mr. Wada, both self-made men.

Dec. 2. W. There are two yanks sleeping next door to us. They were working in Bokhara as engineers for six months.

Dec. 8. Tues. Ar. Iktusk at 7 a.m. Drive through town. Temperature 20° below

zero.

Shopping at a large department store. Bought a blanket to be used in the train.

Umeda, Wada, Uyeda no Sanda uchisoroji,

Kinō mo Dabanashi, Kyō mo Dabanashi.

Umeda, Wada, Uyeda no Santa uchisoroji,

Shita Hanashi yara, itta Hanashi yara.

Question:- Aka Shiro, Kiito, Kuro to arikeri

Answer:- Berugei ga Doitsu no Hata o ubai-

tori

Question:- Ikari, kanashimi, ato wa warai

tsutsu

Answer:- Oni no Me ni Namida ga deta to

Fuku ga ii

Dec. 8. Tues. Leave by post train at 6.30

p.m. No beddings, candle light, no dining

car. Got hot water at stations to make tea

ourselves in the train. We were provided

with bottle of wine, caviar, tea, sugar, bread,

butter, cakes, etc. which we bought at

Irkutsk.

Dec. 11. Fr. Ar. Manchuria (.....) 2 o'clock.

Customs house charges duty on my furs.

Left at 8.30 for Harbin.

Dec. 13. Sun. Ar. Harbin at 11.20 p.m.

Stop at Tōyōkwan (¥5 per night).

14. Mon. Visit consul Sato, Umeda, Specie

Bank—Met Mr. Tanimura in the Hotel quite

unexpectedly. Was invited to Mr. Sato's din-

ner.

15. Tues. Called on Mr. Kaida at Y.S.B.

Change money \$17-10-0=¥169-5-7

¥10=11.77 Rbles

Had a lunch with Mr. Tanimura at a Japa-

nese restaurant "Musashino".

Left Harbin at 5 p.m.

Dec. 16. W. Ar. Changchun at 1.20 a.m.

148 miles in 8 hours or 17 miles per hour.

Yamato Hotel, Changchun. ¥4 for a room.

Leave Changchun in the morning. Take first

class to Antung.

Changchun-Mukden 189 miles in 8 hrs. or

23.6 miles per hour. Short stops.

Leave Mukden 8.50 p.m.

Dec. 17. Th. Ar. Antung 6.30 Manchuria

time. L. 8.20 Chosen time (Japanese time)

The landscape changes after Yalu. There is something characteristic of Korea.

Ar. Keijo 7.30 p.m. Mr. Kirita met me at the station. Went to the new Chosen Hotel, but Mr. K. took me to a Jap. restaurant and then to his house. Slept there.

Dec. 18. Fr. Visited Zennin Commercial School—Meet Mr. Honjuku, the principal.

Saw a boarding house where Korean young men pay 6 yen and half per month.

Called on Mr. Sekiya at Government-General—Went to see Kōkō Futsu Gakko, Shukusei Jogakko, Baron Cho-to-jun's residence. Baron has 100 dependents.

Was invited to Chosen dinner at Meigetsu Kwan by the teachers of Zenrin,—18 dishes, but most of them inattractive—Kisan, a girl of 19, learnt Japanese at Koto Jogakko, speaks very good Japanese.

Dec. 19. Sat. Mr. Honjuku took me to a Missionary School Koto Futsugakko. (.....) boys are taught to talk of our Japanese Empire.

Koto Joshi Futsu Gakko. Principal Ota.

There is a dormitory where girls from good families are living together with strangers. Central Experimental Station. There is a school attached to the station, which celebrated a graduation ceremony to-day.

Removed from Hotel to Mr. Sekiya's House.

Mr. Takahashi Kakushiro called.

Dec. 20. Sun. Mr. Kirita called.

In the afternoon Mr. Sekiya took me to Tokuson Experimental Farms.

Called on Mr. Takahashi in the evening.

Dec. 21. Mon. Made an excursion to Suigen.

Mr. Yoshinari went with me.

Dr. Honda Kōsuke showed me his Model Farms.

He proposes to lead the improvement into Korean farming by means of these different manners.

1. by supplying new species of rice and silk worms which give greater yield.
2. by teaching new methods of farming—

大正三年

- e.g. taking off weeds carefully.
3. by introducing manners and more expensive instruments.  
The first measure is already on full swing.  
The second is just begun.  
There is an agricultural school attached.  
Student live with 5 yen per month, out of which one yen goes for fuel. Their foods consist chiefly in rice and pickled cabbages.  
Drove to Suigen Village, 10,000 inhabitants, Jap. & Korea, is surrounded by a wall and provided with four big gates. Gunga is managed by a Korean gentleman Kinkyō Ko. He took me to the old Mausoleum of Li Family.  
This mausoleum and four gates are the only conspicuous buildings. People live in very flat straw touched mud houses. Market halls are interesting in the sense that they recall the scene of Hei-an period of Japanese history.
- Dec. 22. Tues. Left Seoul 8.30 a.m.  
Ar. Fusan 7 p.m.
- L. Fusan 8.30 p.m.  
Take first class berth. 4 yen additional.  
Dec. 23. W. Ar. Shimonoseki 7.30 a.m.  
L. Shimonoseki 9.50 a.m.  
Take first class 8 yen extra, including express ticket ¥1.50.  
Dec. 24. Th. Tei and two children met me at Kōdzu station. Ryoji could not realize that his father was returning home.  
Ar. the New Tokyo Station at 2.38.  
Motored to our house at Koishikawa.  
Dec. 25. Fr. Called on Marquis Tokugawa's office.  
Called on Uyeda, Monbushō, H.C.S.  
Dec. 26. Sat. Met. Marquis at Nobles Club.  
Called on Mr. Kamada, Mrs. Suwara, Mr. Miura.  
Called on Mr. Hibiki.  
Dec. 27. Mr. Kamada's dinner at Kitanoya.  
Dec. 28. Nanki Ikuei Kwai at Kwairakuyen.

大正四年 (一九一五年)

- Jan. 4. Met Mr. Sano at School.
8. Show. Went to School, where Mr. Sano spoke to the students.
10. Shinzō comes back to home from the hospital. Two hundred yen was spend for his illness.
12. Was invited to dinner by Mr. Sakamoto of Fuzambō at Tokiwa, Uyeno.
15. Was invited to lunch by Mr. Nomoto, the Agent for Prince Shimazu, at the Prince's Palace at Atagoshta. Baron Makino, Mr. Yamanouchi, Admiral Takarabe and Major Saigo were also present.
16. Was invited to meeting at Shinshū-Gakusha. Another meeting was proposed by the Ikuyōkai in the evening, but Mr. Kamada
- took me to Kōyōkwan.
17. Mr. Horie, Shōgakushi 1914, came to see me. Was invited to dinner by Mr. Yamaguchi Kōichi. Messrs. Miura and Fujimoto were also there.
19. Was invited to dinner by Prof. Hasegawa (Masabumi).
22. Was invited to dinner by the counsellors of Dōsōkai. Made a speech on war.
23. Dinner at Chūō-Daigaku.
24. Wrestling. (Invited by Mr. Takeda).
25. Visited Prince Shimazu's Residence.  
Presented a book of pictures to Princess Tamme.
27. Umegawa-Kwai at Fukagawatei.
28. Mr. Heise took me to lunch at the Tei-

大正四年

koku Hotel.

Made a visit to Mrs. Kishi and Mrs. Koizumi.

A Seisoku Meeting at Kitanoya, Tsukiji.

29. A meeting of Senkoku students. Made a speech on the Financial Crisis and War.

30. Made a speech at the meeting of Kenkyūbu.

Ikuiei-Kai meeting at Hoshigaoka Charyō, where Mr. Demoto (Takanoshin) of San Francisco was met.

草木普之進氏の談を数年前合衆國及び毛菊と云ふ一變種の菊花が流行したることをあり。

之を日本に送りし世間では珍重したが、或華族家では甚だ迷惑したり。此花は同家の秘蔵の種子にて外部へ出せぬことに成て居たものなりとのことなり。併し米歐共に広く行はれ居るは不思議なりとて、其本を質せし時、昔日本學生にて米國に留學せしもの、下宿の主婦のくれた變種の菊を贈りしが蕃殖したるなりと云ふ。

尚一〇同氏の談は、或時米國の婦人が植木店へ入り来り、盆栽の松を頻りに眺め居たるがやがて之を買ふべしと云ふ故、金を受取りて後何処へ居申すべしやと云ふ、吾々此植木は何の罪ありてか縛られ居る故、自由を争ふべしとて買取りたるなり。何れなりとも其繩を取去つて植替へ玉く。

February

Feb. 6. Meeting of the Rizaigakukai of Keiō Gijyū. Spoke on Liberalism, Socialism and Militarism in England.

Dinner of Mokoku Shōyūkai at Mikawaya. Messrs. Hamaguchi, Ujita, Izume, and others were present.

7. Talk with Messrs. Sano, Minra and Hori about a "Colonial Course".

8. One of the editors of Hakubunkan came and took a note of my story of the war.

10. Dinner of the "Hundred Firms" Tokyo organized by Dōbunkan, at Seiyōken, Tsukiji.

12. Ikuiei-Kan meeting.

19. Saw Soganoya's performance at Shin-tomiza.

20. Lecture at Meiji Daigaku.

24. Made a lecture on the Price Movements in England since the outbreak of war, at the Banker's Club, Sakamoto-cho.

25. Made a lecture on "the English Social Policies before and after the outbreak of war" at a meeting of the Association of Social Policy.

二月二十八日 蒼空院殿法要、上野寛永寺。

帰朝後余の学校にて為すべきことは商工経営及商業政策の講義、専攻部貿易科及商工経営科の研究指導、学科編成の調査である。

学科編成の調査は三浦、堀西君と余と三人が委員になつて居る。

算法学博士、古神道大義に日本の國体は皇室を中心として君臣一体の我を作した所にある。是が「普遍我」である。「日本我」である。此君臣一体の内には「上下

其他の分担が嚴かに定て居る」。

人類全体から見れば、日本人全体がいはい釈迦やキリストの地位に立て世界の人を指導しなければならぬ。而して万邦に比類なき日本の皇室は本来世界の擔者たるべき神命を帯びたるものと信する云々。

詰り、偏屈な日本神國論で、ちやうとして上下階級主義だ。近代人の平等を求めものに對して何等の解決も与つてやることは出来ぬ。

二月二十五日に佐野校長が用があるといふから行て見たら大阪の関一氏の手紙を見せて、大阪高等商業の校長に行ては何うかといふ話だ。自分が校長に適任だといはれたのは中々悪い心持のしないものだが、併し校長は面倒なものだらうと思つて断た。

僕は今年中に兼て考へてゐる Political Dialogue を書かうと思つて居るから、校長などはとてもやる気になれない。それに年俸二千二百円といふのだから、収入の方から見てもあまり芳ばしくない。

七日過ぎの三月四日付で滝本君から辭退の事情を問合せて来た。詰り面倒だからいやだといふ簡単な答を

してやつた。

三月三日からセキが出ていけないから、家へ引籠て医者に見て貰た。ドクトル波多野三郎が来てテイケイ的の気管支カタルだといふ。テイケイ的とは何のことかと問返したら、教科書にある通りといふ意味ださうだ。多分定型的とかくのだらう。妙な語があつたもんだ。

髪結の話に或家の主人が多情で、自分の妻と、妻の妹と、母三人に通じてしまつたといふ。

そこでお貞がさうしてよく三人共仲よくして居たものだね、といつたら、夫あ親子ですから仲よくするのは当たり前です。

あげはのてふはからたちの芽を食ふ、いもむしの化したもの。はなあぶは便所等に居るをながうじの化したもの。

三月十三日 大雪降る。

三月二十五日 佐藤仁寿氏来訪。

愛知県師範学校にて生徒に新聞を取らせぬといふ話あり。

三月二十九日 学士会事務所にて経済学研究会あり。「英国の労働党」といふ講演をなす。

三月三十日 正一を伴れて酒匂松壽園へ行く。

四月二日 てい、良二を伴れて来る。

四月五日 一同にて東京へ帰る。途中江の島へ立寄る。

四月十七日 同窓会事務所にて経済学同政会あり。藤本君、戦争保険に付て講演をなす。同夜英語大会あり。福田、石川及余の三人 judge になる。

四月二十三日 同窓会春季大会あり。

食後歐洲戦争談を試む。同夜、南郷、飯田、竹田、長崎等と新香登にて会す。

四月二十五日 南葵育英会あり(千駄ヶ谷園遊会)。徳川侯に謁し、頼貞君より申出のことに付協議す。音楽堂、及オルガンのこと決定。

四月二十六日 此頃歌舞伎座にて助六の芝居が大評

三月十六日 久し振にて内田耕来る。

水産試験所で鱒の罐詰を作りて成功し、之を民間事業家に勧めてやらせた結果は見事失敗したといふ話あり。

三月二十一日 母の二十年祭に相当する故、飯倉、内田、松尾一同にて墓参し、それから青山のいる。はにて昼飯を共にする。一同大に喜ぶ。初、神職を呼で儀式をやらうといふ兄の説もあつたけれども、之はやめて子供の会にしてみました。

三月二十二日より学校休業。

戦争に関する材料

国際法の新例 New Statesman, Mar. 20

"New Law for New Circumstance"

戦需品製造利益の制限 New Statesman, Mar. 27

Time P. 271

雑材料

英国出産率の減少 (The Problem of Tomorrow)

New Statesman Mar. 20

判なれば、山口弘一氏と同行して見る。

此頃一橋編纂部の委員等一橋生徒の欲する書物を出版して売らんとしたる為め物議を起し、部長会を開きしが営利は不可といふ説中々盛なり。つまり不許可となる。

又編纂幹事三人、江島伊兵衛、山本五郎、吉村近次辞表を出しに来た。文芸好の個人主義者と一橋帝國論者との衝突に依る。

信三は本月初より立て歩み、且口をきく様になりました。

Diary of War.

Mar. 19. Conference of Trade Union Representatives of Treasury sat again yesterday.

20. As agreement has been arrived at between Trade Unionists & Government. (p. 271)

23. The fall of Przemysl.

25. A new regulations empowering Army & Navy to take over & use factories for war purposes.

五月

此月中毎水曜日学科課程調査委員会あり。委員は下野、志田、奈佐、石川、中村、乾、堀、三浦諸氏及余にして原案起草委員は堀、三浦両君と余の三人なり。

本科の分は終了したるが、其結果各学年に対し学科を適当に配置する点よりいへば、現行規則に優りたるものを得たれども、学科種類の過多なるを整理する点よりいへば、大なる改正をなすに至らざりしと思ふ。

五月八日 和田垣博士在職二十五年祝賀会を植物園にて開会せらる。食卓に於て浜尾男の和田垣博士に対する詰問的希望演説あり。

五月十五日 富士見軒にて学校職員懇親会を兼ね、余の婦朝歓迎会あり。

五月二十一日 専攻部学生会あり。学生側の演説振はず。

五月二十三日 中央大学経済学会の請に於て演説す。演題は「英國政治思潮の変遷」

五月二十五日 南葵育英会幹事会あり。常置幹事会の無用を唱へたるに、賛成者多し。

五月二十六日 経済学攻究会あり。早稲田の大山郁夫君、マキャヴェリズムと独逸の軍国主義に付講演をなす。福田博士の批評あり。

五月二十九日 三村鐘三郎氏を訪ひ夕食を饗せらる。兩人婦朝以来初めての会合なり。同氏は近頃植物生理化学に興味を有し、研究しつつあり。

五月三十日 テイ子、タマ子及兩児を伴れて目黒へ散歩し、大黒家にて前田卯之助君及家族を招き、又同氏宅まで散歩す。久し振にて水田の間を歩みたり。

先月末徳川頼貞氏より本邸へ電報来り、本年八月出發、十月婦朝に決したる由申來る。此事に關連して日疋、木下両家令と各一、二回会見す。

此月政治上の事件多し。

日支交渉、一月十八日以来の交渉顛末五月七日に外務省より発表せらる。四月二十六日に日本の最後修正案をだす。

五月一日 支那政變の最後対案出さる。

五月六日 最後通牒を送る。

五月八日 支那政府承諾の通知來る。

第三十六回帝國議會、五月二十日より開會。同志會

百五十、政友百六、中正三十六、國民二十七、無所属(大隈後援会を含む)五十七、純無所属五、合計三百八十一。

六月六日 北村病院より内田、飯倉へ廻る。内田伯父は胃病重かりしも近頃快方の由。

此日木原店に新設の大坂料理にて昼飯を食し、ハモを内田へ土産に持て行く。

六月八日 テイ子、シヅ子及兩児と上野へ家庭博覧会を見に行く。國民新聞社の催なり。

六月九日 学科委員会本會議終了。

六月十日 有楽座へ東西名人会を聴に行く。呂昇よし。此日の講談に貞山の岡野金右衛門あり。おつやの父の言分に、自分達の敵さへ打てば人の娘は弄物にしてみたいと思ふかと云ふ所、面白き矛盾と思へり。

此日学期終了。

六月十二日 竹田常治氏招に依り三浦、堀両君と大角力見に行く。呼物は太刀山と大錦なり。場内にて伊地知虎彦氏に會ひ、竹田氏と三人にて柳橋、りかやに

て食事す。

六月十四日 学年試験始まる。

余の商業政策の問題は

一、関稅政策と財政との關係

二、關稅政策と戰爭との關係

六月十五日 竹田甚太郎より通知あり。英國行確定の由を知る。一橋会雜誌へ寄稿の爲め「戰爭終結の後」を起草す。

六月十六日 商工経営試験。問題は

一、工業品生産販売調査要目

二、会社財政調査要目

二、三日前梅雨止み、日々八十五度以上。

六月十九日 答案を携へて酒匂松濤園へ行く。汽車中にて李文權、杉村楚人冠兩氏に會ふ。共に本日發渡米。

六月二十日 西村新五郎(専攻部学生)來る。同氏より怪異なる経験の話聞き、忠告を与ふ。

六月二十一日 帰京。

六月二十二日 万安にて保険同好会あるに付講演に行く。此会は各保険会社係長以上の人々の団体にて、

余を紹介したるは志田博士なり。簡易保険問題の背後にある官僚主義と個人主義と社会主義との混流を話す。

六月二十三日 昨日及本日、学校試験の立会に行く。徳川頼貞氏より来状。竹田氏持行く土産の件に付日足家命を訪問す。

午後宅にて本二、本三編集部幹事の会を開く。夜まで遊ぶ。

六月二十四日 徳川家江川氏と土産物買に行く。安藤七宝店、大西銀器店。

六月二十五日 専攻部研究指導。

六月二十六日 同。

此日は朝より入学試験監督に行き、午後指導から引き続き学生会に出席。夫から講武所の花屋へ佐野、三浦、堀三氏と会ひに行く。

六月二十九日 本三試験答案審査済み、学校へ報告す。

七月二日 佐藤仁寿氏より報告。実践商業教科書計算書。定価二十六銭、印税二銭六厘。

七月二十三日 教授会。

七月二十四日 小八幡へ帰る。

小八幡滞在中の仕事は、戦時経済講話の材料を *English* nomist より集むることなり。

八月一日 上京。

八月二日 文部省講習会にて開講。

八月十一日 終了。徳川頼貞君住居の件に付、大森の岡崎邦輔氏を訪ふ。

八月十二日 内田伯父を見舞ふ。食欲大に減じ、非常に衰へたり。小八幡へ帰る。

八月十九日 朝六時内田死去の電報に依り帰京して直ちに見舞ふ。臨終の様子は安心した、あきらめよきものなりしと。夜納棺。通夜。

八月二十日 朝飯倉を訪ひ用談の後帰宅。夜、内田を訪ふ。

九月十日 一同小八幡を引揚げ帰京。

九月十六日(木) 頼貞君御帰朝に付準備委員が出来、日足家命、橋井、加納、大山、小林千太郎及余が

竹田甚太郎渡英に付、育英会幹事富士見軒に集り送別会を開く。

七月三日 教授会あり。本科三年の卒業試験落第者二名なり。一橋会、部長会あり。会の収入は五千元にして支出の主なるものは、ポートに千五百円、雑誌に九百八十円なり。本年はポートハウス大修繕に金を要する故にポート部は競争大会を止め、他の各部も経費一割減にすべしと提議して容れらる。

三浦君と浅草、吉原を散歩す。貨幣経済発達の裏面歴々たり。

七月四日(日) 子供と動物園へ行く。

向笠両嬢と午込活動写真へ行く。大正式ともいふべき統一を欠きたる趣味、心せはしき気分満々たり。

七月五日 入学試験立会、第一回。

七月七日 卒業式及謝恩会。

七月八日 てい子、及阿児、酒匂村小八幡の借別荘へ行く。

七月九日 余も小八幡へ行く。借家賃は七、八、九三ヶ月分六十円なり。

七月二十二日 上京。

委員となり、毎週木曜に会合することとなつた。今日は其第一回が開かる。

是より先き、頼貞君の邸宅を求むるに付種々の説あり。余は借家をして置いて然る後に御本人の好に依て新宅を建築することを可とし、差向き大森の岡崎氏の洋館を借るべしと主張したが、之は余り本邸から遠いといふので、遂に白金三光町の福沢大四郎氏の邸を買入れることに成つた。代金三万五千元。

九月十八日 林毅陸氏中心となりて新に発刊されたる雑誌、「新社会」へ「新社会建設の方針如何」といふ文を寄せた。

九月二十二日 高商創立四十年記念式を行ふ。講堂で朝野の紳士及出身者学生を集めて校長の式辞。教授総代として神田男の祝辞。出身者総代として成瀬氏、学生総代として専攻部学生の祝辞あり。夫から三十年以上勤続の職員ヘーヤ、稲川、小菅三氏の功勞を表彰する為めに、間島氏が有志代表として謝辞を読み、夫から高田文部大臣、河野農商務大臣、山川学長(代)、鎌田塾長、水島校長、大隈総理大臣、洪沢男、中野武宮氏の演説又は朗読があつた。夜は提灯行列があつ

た。

九月二十三日は記念講演があつた。

朝から晩まで出身者中の学者が出揃てやつた。其顔触れは村瀬、左右田、堀越、松村、下野、堀等。

九月二十四日は学生の余興。二十五日はポートレースがあつた。中々盛なお祭であつた。余は初めお祭に反対して居たが、やつて見れば悪くもなかつた。

九月二十四日 併し余は此日に東京を立て越後の柏崎へ行た。竹田常治、広田嘉一両君の勧めに依り柏崎商業学校の創立五周年記念講演に出る為めであつた。

九月二十五日 朝から竹田君の案内で石油会社の油井及工場を見る。

九月二十六日 朝商業学校の式に参列。

夫から郡の青年会連合大会へ出て講演をやる。題は「農村青年の経済的覚醒」。聴衆三百人位あつたのは感心した。

夫から学校の記念講演場なる柏崎座へ行た。此処では「戦争と経済」をやつた。夫から懇親会に臨んで、後に夜行で竹田君及講演者の一人なる増田義一氏と同車帰京。

此学年の授業は中々忙しい。高商では財政、商業政

策、商工経営の三科目で六時間（但し十二月から五時間に減る）、専一、専二の指導各二時間。中央大学で商科の世話人を頼まれたに依て、一年に一時間、二年に

二時間、三年に二時間、合計五時間出ること成た。明治からも頼まれて商工経営の講義を二時間（之は来年二月中に終了の筈）。

此合計十七時間になる。併し火曜、水曜は全く明けである。

十月二十五日 戦時経済校正終了。

十一月一日 午前十時女兒出産。是は余が学校へ出掛けた後の出来事。

十一月三日 朝特急で沼津へ行き、商業学校の記念講演に出席。夜の汽車で帰京。

十一月六日 天皇陛下御即位式の為め京都へ向て御発車といふので学生と共に奉送す。

午前三時学校へ参集、四時より整理。

即位式に付て十日（即位式）、十四日（大嘗祭）、十

六日（大饗第一日）が休みになるので、序に十五日は短艇会をやつて休み、十一、十二、十三日も臨時休業となつた。

併し余は風邪になつた故外出不能。

世間は賑かの様だが、山の手の隅で寝て居れば新聞紙の他に即位式の気分を伝えるものはない。

十一月二十七日 一橋会投書家懇親会。

十二月六日 「戦時経済講話」出版。初版千二百部。

十二月七日 徳川頼貞君帰朝に付、横浜に出迎。

十二月十六日 社会政策学会例会（電車賃問題）。

十二月十八日 来年度卒業生詮衡。第一回十五人を

木村恵吉郎君と立会にて面会す。

十二月二十二日 南葵育英会幹事会。

来年の予算九千五百円。

十二月二十六日 開花楼にて島蘭、根岸、丸山、明渡、豊田の五君と会す。島蘭君と久し振にて会談の為め。

## Dialogue (対話)

緒言

世界の歴史上に忘るべからざる一九一四年の秋、僕が英国ケンブリッジに居た時のことである。或晴れた日の午後、はら／＼と散るライムの落葉を眺めながら、パイプ煙草を吹かして居る間に、ついうと／＼と睡てしまつた。其時の夢物語を綴て見たのがこの書物である。

夢の裡に会った人が三人ある。一人は今迄独逸に留学して居たが、今度学位を得て帰朝しようといふ瀟洒たる青年紳士。是は僕が子供の時から知て居る某県豪農の子で其名を新島進一といふ。洋行前には熱烈な帝國主義者であつたが、近頃は変て社会主義に興味を有し

てゐる。

次は僕の同窓の先輩で実業界に其名を知られた中川成吉。二十貫もありさうな大男で、顔に光沢のある元氣満々たる人物。学校に居る時には、ミルの経済学を三度繰返し精読したので有名に成た。大の個人主義者だが、今では実際の経験に依て頗る穩健な説を立てる。夫から最後の一人は何うして此処へ来たか分らないが、七十近くの老人。流石昔の武士教育に鍛へられた丈けあつて、体格の頑丈な、広額隆鼻で而かも両頬に流るゝ如き雪白の長髯を靡かせて居る。風骨高邁の國士。古山巍といふて亡父の旧友だから僕は能く知て居る。彼は元明治政府の大官であつたが、余程前に退官して貴族院議員に勅選されて居る。

此三人の内古山と中川は一週間前からケンブリッジに滞在して居たが、何れも是といふ用事がないので散歩をしたり、碁を打たり、時としては僕の主張でボートを漕ぎに行たりして遊んで居た。

然るに面白いことには二人とも議論家で、話をすれば必ず高論風発といふことに成る。古今の英雄を品評するかと思ふと、東西の風俗を比較する。其他如何な

る問題でも行く処として可ならざるなしたが、中にも日本の政局に関する議論が最も好かつた。

或朝例に依て三人が古山のホテルのモーニングルームへ集たときに、老將軍が一の名案をだした。

古山 中川君も上田君も、日本に居るときは中々忙しくて緩り会ふことも出来ないが、今度は色々御説を聴て非常に面白く日を送りました。併しかう論客が揃ふのも珍しいことだから今日は一日、真面目に討論して見たら何うだらう。

僕 古山様の氣のお若いには何時も敬服しますが、討論会とは愈々振てますね。

中川 夫は私も賛成です。実は会社の用事が出来て明後日まで、ロンドンへ帰らなけりやならなくなつたので、皆様の御論を承るのも今明兩日になりました。

僕 そこで氣焔の吐き仕舞だから大にやらうといふんですね。是は面白いでしょう。一時に古山様、昨日から又一人議論家が来て此ホテルに泊て居るのですが其人も仲間に入れますか。是は新島進一といふ青年で未来の代議士です。

古山 あゝ夫は結構。其人さへ遠慮しなければ私共の方は構はずやる。ねえ、中川君。総て討論は遠慮があつては面白くない。負けた時は快く降参するとして、行く処まで行かうじやないか。

中川 大賛成。但し水掛論はやらぬ事にして。  
僕 新島といふ男は水掛論もやり兼ねないが、遠慮するなといへば何んなことをいひ出すか分らない様な男です。

こんな事をいつてゐる間に、新島が散歩でもして居たと見えて、外からふらりとやつて来た。早速紹介して今の話をすると大喜だ。

古山 そこで今日の討論に就ては私に一の注文があるが、皆様聴て下さい。先日から大分議論を闘はしたが、動もすれば枝葉に走て論が詰まらないから、今日は問題を順序よく出して、其問題毎に各々の意見を述べるとしたら何うだらう。而して問題の出し方と議長を上田君に一任したら。

僕 いや僕は書記官になりますから、議長は御年役の貴老に願ひたいものです。

中川 さうでない。是は古山様のいはれる通り、君が

やらなけりやいかぬ。君が我々の内で一番学者で公平だから、問題の順序を立てるにも、皆の意見を纏めて水掛論を押へるにも最適任者だ。

古山 さう／＼。かうして四人寄で見ると私が旧式で、中川君が新式で、新島君が最新といふことになる。さうして君は誰のいふ事も分りさうだから、是非やつてくれ給へ。

僕 さうですかね。夫では兎も角、私が議事整理役になりましょう。——夫で問題は何んなことがいいんですか。

古山 何でもいいが、当今の大問題が一番面白さうだね。

中川 善いでしょう。題を設ければ「新日本の理想」とてもやるかね。

夫からモーキングルームを出て古山翁のシツチングループへ行た。

### 第一章 新旧思想の混流

僕 討論の基礎として、先づ皆様の根本主義を明かにして置く必要があると思ひます。即ち将来日本

の社会組織、及国民道徳の精神を如何に導かねばならぬか、といふことに就て、皆様の御考を順々に述べて頂きたいのです。是は古山様からお始めを願ひましょう。

古山 僕のは唯、旧式の考といふだけで、到底筋の立た理屈にはならないが、今の世の中を見ると実に心配なことが多いのです。昔は上に、天子、將軍、諸侯があり、中流に士族があり、其下に百姓、町人があつて、各其家柄に依り身分相応の事を為て居たから、社会の秩序といふものが整然と立て居た。其中でも士族が国の中堅であつた。彼等は名誉ある先祖の血統を承けて居るのみならず、家禄に生活して居たから、少しも衣食の心配をする必要がない。従て其志は修身齊家治國平天下にあつた。其学問は今日の様な細い処まで進んで居なかつたけれども、一身を犠牲にして君国の為めに尽すといふ精神があつた。廉恥を貴び、節義を重ずる士風が存して居た。而して平民は是に従ひ、是に倣て上下相和するといふことになつて居た。維新後には諸侯が藩籍を奉還して聖天子が上に立た

れ、其他は四民平等と成たけれども、国家の中堅はやはり旧士族の階級であつた。即ち役人とか、軍人とか、学者とか、又は銀行会社の重役とかいふものは、主に旧士族であつて、此等の人が皆愛國の至誠を以て所謂拳國一致して働いたのです。三百年の鎖國の夢から覚めて見れば、世界各国は実に弱肉強食の有様で、日本の如きはうか／＼して居れば、外国に併呑されさうな形勢が見えた。そこで我々は、此西洋諸國に負けまいと思へば、西洋の知識を利用するに如かずと思つて洋式の陸海軍を組織し、洋式の学校を起し、鉄道電信を布て、国民の進歩を促した。其粉骨碎身の結果が日清、日露の兩戦役に表はれて、今日は世界の一等國とまでいはれる様になつたのです。然るに前門の狼を逐へば、後門に虎が襲て来るとでもいはいはるか、日本國が漸く世界列強の間を立て、独立鞏固の位置を得るに至たと思ふ間に、早くも古来特有の精神が動きだした。即ち西洋の個人主義とか、拝金主義とかが入つて来て、我々の忠孝節義を侵さんとしてゐる。現に近頃、東京で私共の近所に大名

屋敷の様な立派な家が續々として出来るが、其持主は何れも所謂成金党で、素養のない人達だから家まで下品になつて居る。成金といふのは要するに、弱い者たちを履み倒して資産を築き上げた人達ではありませぬか。夫を今の人は奮闘だとか、成効だとかいつて誉めるし、当人も得意で居る。こんな人が社会に勢力を有つとすれば、日本の前途は頗る危いと私共は思ふ。物質的に進んでも精神が腐れば國家は保たないのです。又、世間では明治政府を藩閥とか、官僚とかいつて攻撃するけれども、明治初年の官吏は少くとも皆國家の重きを以て自ら任じて居た。其政治を今成金や百姓議員等に任ずるのは実に心細いことである。此有様で進めば、大和魂も武士道も墜れて唯金の世の中、腕の世の中になり、天下の蒼生其堵に安せず、といふことになりはしないか。是が私共の深く憂へる所です。特に今の世界は文明とかいつても、國際問題になれば義理も人情もないのだから、此裡に立て日本帝國の勢力を強め、所謂國威國光を発展せしめんと思へば、何うしても一死國に報ひん

とする国士が出て、国民を導かなげりや行かぬと思ふ。此の様に考へて来ると、私には今の社会よりも維新前の階級組織の方が、却て善くなります。さうすると貴老の御説では、憲法を中止して更に家禄を有した土族の階級を復活させるのが善いのですか。

古山 まさかそんな暴論は吐かない。勿論土族の制度を復旧すればよからうとは思ふが、是は今の時勢で無論出来ないと諦らめて居る。唯、士道の頽廢は実に憂ふべきことだから何うかしなければならぬ。是が私の問題で、諸君の智恵を借りたい所なのです。

僕 出来るか出来ないかの問題を別にして単に古山様の理想をいへば、昔の土族の様な衣食に心を勞せない階級を置いて、其人達に高尚な人格を発達させて、外の人民は其指導に従て行くのが最も善いのですね。つまりプラトリーの理想郷のようになりますね。

古山 私はプラトリー等を読んだこともなし、又哲学者でないから、出来ないことを空想して見ようとも

れば困るが、兎に角古山様とは大分違つた考を有て居る。私の考では明治の初に旧階級制度を打破て、四民平等の原則を立てたのが抑々日本の今日ある大原因だと信じる。個人の権利を平等にして、家柄に関せず、各其才智芸能を自由に発達させたから、各方面に人材が出て来たので、是を昔のままにして置たならば決して進歩といふことは望まれない。土族でも明治の進歩に貢献したものは、其内の力量見識ある人達に限るので、其他に無気力、無節操で墮落したものは沢山ある。實際の事實は階級打破の結果、下級土族と土族外の実力者が柔弱なる上級土族の代りになつて国民を導たのです。自由競争は所謂「強い者勝ち」で、古山様にいへば「金の世の中、腕の世の中」かも知れないが、私はさほど残酷なものとは思はない。却て大体公平に、智者と愚者とを飾にかける適當の方法である。而して智者が富貴顯榮の位置に上り、愚者が其下に付くのは当然のことで、昔の様に智恵の別なく、唯生れた家の格式に依つて一定の位置を定められるのは不公平極まると思ふ。

思はないが、苟も社会の秩序を保ち、国家の勢力を強くするには、上下の区別を立てることは肝要と思つて居る。即ち一家としては夫婦別あり、長幼序あり。一国としては一天万乗の君主の下に士大夫と庶民の別あり。そこで上は下を愛しみ、下は上を敬ふとなれば、万民皆其処を得て満足し、協力一致して国威を海外に掲げることも出来るのではあるまいか。

僕 近頃の語でいへば、国家主義、家族主義、貴族主義で、而して帝國主義ですね。

古山 まあさうでしょう。但し私は唯頑冥に旧思想を固執し、又は旧制度を維持しようとはいはない。世の中が変るものなら変つても差支ないが、何らか日本固有の美風を失はない様にしてもらひたいのです。

僕 善く分りました。——然らば次には中川君に願ひます。

中川 私も政治学から割り出して、理想を定めたのではない。主として自分の経験に依つて意見を立てたのですから、首尾一貫した主義を述べ、といはる

又、自由競争は総ての道徳を破壊するかの如くいふ人があるけれども、決してさうでない。昔の様に「民は頼らしむべし、知らしむべからず」の主義で行けば、平民は羊の如く率ゐられて行くのだから、其考も羊の如く奴隸的になつてしまふ。然るに自由主義の社会に於ては、各人皆自分の意思に依つて活動するのだから、自然に責任を感じて自立自尊の人になる。他人に依頼せずして自分の力で自分の運命を開拓する。互に相励で克己勉強する。各人は何人の奴隸でもない。何者の機械でもない。自由にして其人格を發展せしむべきものである。夫だから人間の価値が高められる。此人間の価値、個人の人格といふものが認められなければ、国民全体としても品格が低いのです。

古山 つまり昨日の御話の通り総ての人民を皆名譽ある武士の如き人格に仕立てるといふのですね。福沢の独立自尊主義ですね。

中川 左様です。そこで此意味からいふと、明治政府は其初に善い原則を立てたけれども、中頃から方針を誤つたと思ふ。政府は先刻御話の通り国防を充

実し、学校を起し、殖産を奨励して大に国民民福を増進したけれども、其政治の方針が極端な保護干渉画一主義で、人民に対しては、只管柔順であれとばかり教へた。そこで実業家は政府に依頼し、学者は官権に阿り、青年は官吏を志望し、所謂官尊民卑の陋習が今日まで存在して居る。夫でも人民が西洋を知らない間は、政府が西洋の知識を以て之を導たからよかつたけれども、今となつては日本も西洋の糟粕を嘗めてばかり居られなくなつた。此場合には何うしても政府の保護干渉を止めて、個人の自由を許し、其オリヂナリチーとイニシアチーブを發揮させなければならぬ。だから僕は官業も反対、官立学校も反対、殖産奨励も反対です。特に文部省が学校に官権主義を持込んで、政治思想の発達を妨げたり、内務省が知事の勢力を通じて国民道徳を統一するなどといふことは大反対です。日本の代議政治が頗る幼稚で、今日古山様等に心細く思はせるのも従来政府が憲政教育を怠た結果が与て力ありと信じます。

古山 成程、自由平等は善いのだが、明治政府の老物

ずるものに、卑怯な行は出来ない筈ですから、平和の取引に於ても、戦場の進退に於ても、俯仰天地に恥じない公明正大の働が出来る訳です。此意味に於て個人主義は、二十世紀に應用された武士道です。

古山 さういへれると一寸賛成したくなるが、まだ中腑に落ちない所がある。まあ後になつて色々質問しましょう。

僕 さうです。今は討論の予備として皆様の大体の主義を聴取るだけに止めたいと思ひます。——次には新島君の社会主義を聴きましょう。

古山 なに、社会主義かね。

僕 社会主義といふても決して破壊主義や危険思想ではありません。是非貴老に聴て頂きたいと思つて居たことです。

新島 社会主義といへば、日本では直ちに激烈な革命運動かの如く考へられますが、夫は昔の事でありまして、今日欧米ではそんな連想をするものは殆どなからうと考へます。そこで私共の社会主義は中川様の個人主義と相對して居ります。個人主義

共が世話を焼き過ぎて人民を愚にしたから、今日の如き困難な状態に立到た、といはれるのですな。

中川 左様です。假令元は土百姓でも、素町人でも、士の教育を受ければ士になります。現今実業界は勿論のこと、学界に於ても、政治界に於ても、又官吏、軍人の間に於ても平民の肩書を有たものが沢山に成効してゐます。万民平等の機会を与へて実力の競争をさせれば、自然に有為のものの上に立ち、無能のものは下に立て社会の秩序が出来るのです。私は個人主義、自由主義です。

古山 よく分りましたが、其個人主義、自由主義は忠孝の道義と何ういふ關係になりますか。

中川 個人主義は利己主義ではありません。自由主義は我儘主義ではありません。各人が自ら重んじて其徳性を完全にし、他人に対して其人格を尊んで庄迫を加へないといふ意味です。親だから娘の身を売ても善い、といふ道理はありません。主人だから家来を牛馬同様に取扱て善いといふこともありません。併し子として親を思ひ、臣民として君国の為めに尽すのは自然の人情です。又自ら重ん

は十八世紀の中世から十九世紀の末まで歐洲の思想界を風靡した主義であつて、中川様のいはれる通り個人の価値を認めるといふ点に於ては結構な考ですが、實際の結果を見れば決して理論通りに行つて居りませぬ。何故かといふに、現在の財産制度といふものを變更しないで単に自由競争を許しただけでは、万民平等の理想が行はれないばかりでなく、却て不平等になります。昔の大名がない代りに成金大名、即ち所謂資本家が出来、又昔の奴隸同様な百姓がない代りに、同じく奴隸に近い労働者が出来ます。今日の貧乏人といふものは法律上自由の人に相違ないけれども、實際其日其日を食ふや食はずに送るものを、金持と同等の位置に於て契約させれば、何でも資本家のいふ事を聴くより外ありません。聴かなければ餓死する丈けのことです。さうして見れば所謂自由は、餓死の自由に成てしまひます。

又、中川様は今日の世の中では万民平等の機会を与へてあるから勉強さへすれば誰でも立派な人になれる、といひますけれども、貧乏人の子には

義務教育がやうやうのことで、中学等へは行かれませぬ。然らば実地の修業をしたら何うかといふと、是も資本がなければ小売店でも開くことは出来ませぬ。資本を借りることが仮りに出来たとし、ても、大資本家の競争に堪へることは出来ない。さうして自由競争は何と弁解して見ても優勝劣敗ですから、人情が酷薄になつて自分さへよければ人は構はぬ、といふ利己主義に落ちて行きます。

僕 此辺までは古山様も御同論でしょう。

古山 さうさう。夫が所謂奮闘的成效とかで、私の嫌な奴さ。

新島 そこで守旧党は階級制度に帰れといいますが、

古山 夫から先が違ふのだね。

新島 社会主義者は、百尺竿頭を一歩進めよといふのです。大名や士族の特権を廃止して四民平等の主義を打立てるのみならず、土地や資本を公有にして之を人民全体の利益の爲めに用ひよう、と主張します。つまり法律上の平等では足りないから、経済上にも平等を推広めるのです。個人主義の倫

理は各個人が各個人の爲めに働くことですが、社会主義の倫理は、各個人が総ての同胞の爲めに働き、総ての同胞が又個人の爲めに働くことです。

一方は利己説で、他の一方は利他説です。夫で個人主義、即ち資本主義の弊害は欧米各国益々甚だしく成りますから、西洋では中川様のいはれるやうな説は最早時勢遅れです。日本が幸にも後進国で欧米人の經驗を利用する地位に居りながら、今更ら彼等の失敗の轍を履で、資本主義の弊害を繰返す必要は断じてありません。

中川 僕も日本では進歩党の方だが、新島君に会では顔色なしだよ。

古山 御説は如何にも面白いが、財産を国有にする方は如何ですか。

新島 財産を公有にするといふても、其内の肝要なもの、即ち土地、建物、機械等を国有又は市有にすれば宜しいのです。日本でも今日既に鉄道国有、街鉄市有を實行しましたが、あれと同じ方法で電燈、瓦斯、鉱山、銀行、保険、汽船、倉庫、商店、工場を漸々に買上げます。さうすれば無論公債の

発行高が多くなりますけれども、公債を償還する

爲めに資本に課税して行きますから、漸次に資本家といふものが少くなつて、国家が唯一の資本家になります。

古山 成程。是はうまい考だが、夫から其国有や市有になつた資本を何う運転しますか。

新島 是も今と同じで官吏、公吏にやらせます。唯、数が殖えるのです。

古山 つまりは日本中の人が皆政府の役人と雇になるのですね。夫から月給は。

新島 月給は地位の高下に拘らず、平等に当人の必要だけを渡します。例へば子供の多い人には少い人よりも多く給り、病氣や、出産や、死亡の時は平生よりも多く給ります。学校や病院は無論料金を取りませぬ。全体、個人主義の社会では財産あり、力量あるものが労働少くして所得多く、貧乏人と無能の者は労働多くして所得少いといふ、不公平極まる状態になつて居ますが、社会主義の社会では本当の万人平等、其力量に応じて働かせ、而かも報酬は必要に応じて取らせるのを理想としま

す。

古山 分りました。其実行如何は疑ふけれども、主義としては至極美しい。

中川 私も理論に於て社会主義は面白いと思ふが、実行を疑ふのです。第一、万人平等、力量に応じて働かせ、必要に応じて取らせるといふのは結構なことだが、つまり出来ない相談でしょう。何故かといふに、人間は元来労働を好むものでないのだから、必要の物は働かぬでも取れる、必要以上は働いても得られぬとなれば、自然怠けます。各人が怠ければ社会全体の生産が減るから、其分配高も少くなる。然らば経済上の平等といふても、総ての人が貧乏になるより外ないだらうと思はれる。

新島 貴君は人間が怠けることばかり考へてるものと定めて居られますが、必ずしもさうではありませぬ。現に小学校の教育は無月謝です。公立病院の施療も無代価です。水道の共用栓も料金を取りませぬ。道路や公園も通行自由です。其他西洋では老年者年金とか、労働者保険とか、全然無償又は

多くの補助を与へて貧乏人を助けて居ります。是は皆個人の必要に依じて取らせる主義だけれども、其為めに人が怠けはしませぬ。却て此種の設備をする程、人間が教育されて勉強もする、犯罪も少くなるではありませぬか。人は衣食足て礼節を知るのですから、生活を安固にしてやつて悪い筈はありませぬ。

中川 公立学校や、公立病院は仰せの通り理論上から見て、社会主義の一部を實行して居るに相違ないが、是は一部だから弊害がなく、却て個人主義の欠点を補ふことになるのです。若し是を全体に及したら必ず、私が前に申した様なことになる。私共が実際に多数の人を使った経験から判断しても、報酬の高を定めて置いて唯働けといふのは無理です。社会主義者でも世の中に怠けたものがないとはいふまいが、其怠けものに対しては何うしますか。

新島 真の怠けものは一種の精神病者ですから、強制的に働かしても差支ない。即ち今日義務教育を履行様に義務労働を課します。

中川 さあ、其処が私の好きな所なのです。政府が事

業を独占して置いて各人に一定の労働を課するのは非常な圧制ではないか。世の中には働かないで唯考へて居たい人もある。又、自分の好きな事ならするが、其他は働かぬといふ人もある。其自由を許してこそ、大発明家も、大思想家も出るのに、是を千篇一律の型に入れてしまはうとするのは、進歩の敵ではないか。全体、社会主義とか、社会政策とかいふものは、官業を拡張し、官府の干渉を多くするばかりで、民間の自由企業を圧迫するから、官僚政治へ後戻りするより外はない。

新島 所が僕等の眼中には、民間とか官僚とかの区別はないです。社会主義の政府は、真に民衆的の政府で輿論に依て行動するのですから、個人の自由が束縛されるといふても、一の階級が他の階級を圧制するのでなく、個人が一般の輿論に従ふことになります。

中川 仮令民衆政府でも圧制を行へば、やはり圧制政府で、専制政治と同じことではありませぬか。

新島 さうすると貴君の個人主義は無政府主義に近くなりませぬ。

中川 そんなことは断じてない。

古山 大分天候險悪に成て来たが、議長が仲裁しては何うかね。

僕 仲裁の必要はないでしょうが、理論からいへば個人主義は無政府主義と隣り合て居ます。勿論無政府主義といった処がダイナミトを持出す訳じやありませぬがね。

古山 そんなものかねえ。

僕 個人主義は成るべく政府の干渉を除く個人の自由を許さうと主張するのですから、其理屈を極端まで持て行けば、強制的なもの皆悪いといはなきやならない。義務教育も、兵役も、裁判も、刑法も皆悪い。租税を取るのも悪い。つまり政府を止めるより外に仕方がない。政府を止めるのは取も直さず無政府主義じやありませぬか。是は勿論中川君の如き実際の個人主義者の考へてゐない所だけれども、理論は少くとも此通りです。

中川 成程、是は降参だ。今まで考へて居なかつた。併し僕は理屈に基て意見を立ててゐるのでない。実際の必要に依じて実行の出来ることを考へるの

だ。

僕 其処で貴君と新島君と衝突する点を考へて見るに、貴君は平等よりも自由を重んじ、新島君は自由よりも平等を重んじる所から、意見が合はなくなると思ふが何うですか。

中川 夫に違ひない。

僕 所が僕は夫を調和させる一案を有て居ますが、聴てくれますか。

中川 宜しい。

僕 中川君は万民平等の機会を与へるといはれたが、現今の社会には無論機会の均等がない。新島君の論の通り法律上の特権は廢されたが、實際金持の子と貧乏人の子と同等の便宜を有するとはいへない。

中川 夫は已むを得ない。

僕 所が已むを得るんです。親の財産を子に譲るといふことは個人主義から見ても間違て居るじやありませぬか。子が親の財産に依頼するといふのは、独立自尊じやないでしょう。

中川 夫む。

僕 それだから僕は相続権を廃止して、金持の子も貧乏人の子も同様に教育するのは個人主義の極意だと思ふ。

中川 併し其財産を国庫に移すとすれば、やはり社会主義に到着するのではないか。

僕 さうでない。財産は国庫に移すけれども、其運轉は個人か又は会社に請負はせる。入札をして報酬を多く出すものに落してやる。だから国庫に移された事業は国庫と個人の共同事業になります。其他に個人が銀行から資本を借りてやるなら、何んな新事業でも勝手に出来ます。其利益も企業者の手に入ります。其本人が死ぬまでは其人のものです。是まで行かなげりや、自由競争が公平に賢愚を篩ひ分けるとはいへませぬ。

新島 併し夫ではやはり自由競争になる。強者は弱者を圧するのではないか。

僕 無論其通りさ。併し此場合の強弱は財産上の強弱じゃない。本人が天性賢か愚か。又国家の与へた教育を充分に利用して勉強したか否かに依て決するのだ。純然たる個人の価値の上下に依て決す

るのだ。君の立場から見たら違ふだらうが、中川君の立場から見れば、賢愚の区別もなく、勉強の区別もなく、同様の月給をやるのは不公平なんだから、是で差支ない所か此上の理想はありやしない。

新島 さうだ。  
僕 夫から君は先刻、力量に応じて働かせ、必要に応じて取らせるといつた。僕も是が真の社会主義と思ふけれども、英国の社会主義者は通常其流儀を取らない。力量に応じて働かせ、結果に応じて取らせるといふのだ。此人達は僕の案に満足せざるを得ないと思ふがどうだね。

新島 其通りだ。兎に角調和策として名案だが、僕には満足出来ない。

古山 相続の廃止は何んな方法でやるかね。

僕 最近社会主義の智慧を借りて相続税を追々に高く取ればいいでしょう。

中川 余り名案で一寸まごつかされたがやはり欠点がある。といふのは、人間が後世子孫を思はないことになる。従て怠ける。然らずんば奢侈の風が甚

だしくなる。つまりテーブル論で国を誤る本だ。

僕 さう来るだらうと思たが、日本の標準で考へて見るに、実際三万や五万の金は後世子孫の為に必要だらうけれども、其以上は却て邪魔になる。自分で使ふにしても一年に五万円は多過ぎるでしょう。今の実業家は子孫の為めや、自分の奢侈の為に働くのじゃない。権力を握る為めに働くのだと思ふ。さうすれば死後に自分の溜めた財産が

国庫へ取上げられても欲の皮がへこむことはありますまい。

中川 いや、そんなものではない。君のもやはり社会主義と同じ空論だから僕は取らない。併し理想としては社会主義よりも遙かに善い。

古山 私には社会主義の方が何程か善い様だ。何故かといふに、相続権を廃止すれば家産がなくなる。家柄といふ考もなくなくなる。今の成金でも子孫に成ればまだ善からうと思て居るのに、君の案を実行すると本当の成金ばかり幅をきかせるから社会の品格が大に落ちる。社会主義の方でも家産はなく

ら、人情が厚い道理だ。

僕 貴老は日本に居らつしやる時、社会主義は大嫌ひでしたが、大層御鼻根になりましたね。

古山 さうさ、近頃まで社会主義などは、到底私共と話の出来るものでないと思ひ込んで居たが、昨今の討論で大分わかつて来た。大に国家の力を用ひて社会の弊害を救済しようとする所は私共の所謂王道に近い。

新島 併し家族主義や階級政治は僕等と合はない。此点に行くと中川様の方が近いでしょう。

僕 相続権廃止に賛成しない所を見ると、中川様はやはり家族主義と階級政治の旧套を脱しませんね。

中川 さういはれても仕方がないけれども、僕は実際家だから一直線に理想に向て突進することは出来ない。

僕 夫では総論は是で終ります。

終て見ると室の中が煙草の烟で一ぱい。灰皿にはマツチ殻や、シガターの灰や、シガレットの吸口が山を為

して居る。是では堪らないといふ間に階下で昼飯の鐘が鳴つたから、是を休憩の合図としてぞろぞろ食堂へ下りて行た。

## 第二章 政治問題

午食後は少し散歩することに議が纏たので一同外へ出た。町の角を一つ回ると直ぐに青々とした牧場へ出る。其牧場の幾つかを通り越してケム川の上流、バイロンスプールへ来た時に、古山の發案で此青毛氈の上へ円座を作て討論を続けることに成た。空は薄曇だが雨になるほどでない。四隣には静かな森がある。時々山鳩の声と牛羊の音が聞える。

僕

根本主義の討論は大体済んだ様ですから、次には個々の實際問題に移ります。夫で私は是を政治問題、経済問題、道徳問題に大別する外に細い區別を為ませぬから、此大きな区別の範囲内で皆様の御好きな問題を捕へて論じて頂きたう御座います。最初に政治問題から片付けましょう。古山様に御説はありませぬか。

古山 私の意見はもと守旧的だから、別に新しい案がないです。皆様意見が出たときに質問をしましょう。

僕 夫では兎も角後廻しにして中川君から願ひます。

中川 政治問題の範囲内では、私は議院政治の發達を第一に希望します。明治政府の事業は、先刻古山様の仰せの通り、兎も角日本を貧弱未開の状態から救ひ上げて世界の列強と角逐し得るまでに進めたのですから、古今東西の歴史に稀なる大成功であるといはなけりやならない。夫は能く分て居ますが、併し其政府の組織は決して大正の新時代に適するものでありませぬ。維新の際に撥乱反正の功を奏した薩長二藩の政治家が政権を掌握して、長く廟堂の上に立たたのは無理のないことではあります。其時代は既に去て居ります。彼等は各藩の士族、特に自藩の士族中才幹あるものを抜て官僚を組織し、又新たに各種の学校を起して青年官吏を養成しました。特に軍人の養成には非常に骨を折たから、今でも薩の海軍、長の陸軍といはれ

る程多数の將校を出して要路を独占しました。而して此等の文武官吏は当時の日本で最も多く新知識を有て居たから、薩長元老の為さんと欲して能はざることはない程の勢力を築き上げた。そこで更に華族の制度を設け、自分等を旧の公卿大名と同じ階級に置て豪然天下に号令した。彼等は明治天皇を扶けて帝国憲法を發布し、議會を開たけれども、勿論人民の意志に従ふ考はない。代議士といふものは、明治政府に用ひられなかつた少数の不平等と田舎の地主位なものだから、知識に於ても實目に於ても到底官僚の敵でない。其中には御用党も出来て、つまり政府の道具に使はれることに成て居た。つまり明治政府は大体に於て善政を行たけれども、其方法は專制的であつた。ベネヴォレント・デスポチスムであつた。併し專制政府と教育の普及とは到底両立することが出来ない。人民教育が進めば何でも政府の言ふ所に従て居らないで、自治の精神が湧て来る。日本でも封建的の旧思想に育てられた旧時代の人民が没落して、明治の新教育を受けた子供が成長して来たか

ら、最早此様な政府に満足しない。であるから藩閥打破の聲が、前には少数政治家の聲であつたのに、今は本當に輿論の聲に成た。是が大正元年冬以来の政變の根本原因だと私は觀察して居る。だから陸軍閥の桂が出ても行かず、海軍閥の山本伯が出ても行かず、文官閥の清浦子を出ない内に引込み、終に元老が意を決して閥族以外の大隈伯を引出すことに成たのです。さうして見れば今後内閣を組織し得るものは政党より外にない。従て今日の急務は政党を完成するより外にないと思ひます。日本の輿論政治は是から始るのです。

古山 政府の組織の善悪は別として、事實は貴君のいはる通りでしょうが、其輿論政治が果してうまく行きますか。

中川 左様、少くとも今までの閥族内閣よりは善い政治を為るだらうと思ひます。何故かといふに、閥族内閣は少数有力者の意見を実行しようとしてますが、政党内閣はさういふ訳に行かない。是非自分等を選挙した人民の意思に従はねばならぬ。閥族政治家といへども、固より国家の利益を思ふには

相違ないが、兎に角彼等の信じて可とする所は、時として國民の爲めに可ならず、唯彼等同輩の爲めに利益であるかも知れない。例へば陸海軍を擴張する場合にしても、夫が國の爲めには絶対の必要でなくして、彼等の勢力を扶殖する爲めに必要なかも知れない。然るに政党政治になれば、所謂被治者が治者を監督することになりますから、國民の要求する減税を後にして急ぎもしない軍備擴張を行ふことは出来ないでしょう。若し一の党派が國民の利益に反する様な事をやれば、勿ち反対の攻撃を受けて人望を失ひ、従て政府を明渡さなければなりません。此場合には國民の前に争ふのですから、妥協とか情意投合とかは行はれないで政治が公明正大になります。

古山 成程理論は其通りかも知れぬが、今の代議士は真に民意を代表して居るでしょうか。實際代議士の選挙には其人の人格や意見が重きを為すのでなくして、保険会社の勧誘員の様な投票引受人の敏捷なのを使った人が勝つのではないか。甚だしきに至ては、投票の売買も可なり行はれて居るのでは

ないか。一度の選挙に一万円を使ふ人のあるのは到底真面目の話でなからうと思ひます。

中川 私も勿論今日の選挙が必ず正直に行はれて居ると思ひませぬ。併し議会が今までの様に政府の道具でなくして、真に国政を左右する所の第一の機関となれば、選挙人も被選挙人も一層責任を感じて真面目になるといふ事は確に予想出来ます。特に今までの選挙人は、代議政治の何者たる事を知らなかつたけれども、是から先は新教育を受けたものが其資格を得るのですから、余程心持が変て来るだらうといふことは、私の大に望を囑する点なのです。そこで私の切實に感じて居るのは、明治年間の教育が政治を度外視したことであります。今後輿論政治を完全に爲すためには、是非政治教育を行はなければならず、政治教育は単に憲法を教場で教へるのみならず、学校の寄宿舎又はクラブ等の組織を出来るだけ自治的にして憲法政治の实地練習を爲しむべし。又中学以上の生徒に新聞を読ませぬといふ如き狭隘なる考を去て、寧ろ当今の問題に興味を感じる様に奨励すべし。地

古山 然らば選挙が比較的公平に出来るとした処で、代議士に選挙される人は今までの様な地主連か、成金か、然らずんば弁護士位のものでしょうか。其人達は演説は上手かも知れないが、實際政務に通じてゐないでしょう。少くとも官吏出身に比べて素人だと見なければならぬ。夫に天下の政権を取らせて、果して外国に負けない程の事が出来ま

すか。

中川 勿論政党政治は官僚政治に比べて素人政治です。併し素人が専門家に劣るとは定りませぬ。却て専門家の様に細い事に拘泥しないから大局を見て公平な判断をするものです。今までも大臣として成功したものは、高等官上りの専門家よりも

實世間の経験を積んだ人に多かつた様です。例へて見れば、政治は家を建てる様なものです。何んな材木を如何に組合はすかといふ様な細いことは専門家に任せなければならず、客間を北向にするとか、食堂を南向にするとかいふ大体の計画は、實際其処へ住む人でなければ分らない。大臣はつまり其大体を定めるのが本職で、細いことは法律技師たる官僚に任せるがよいのです。是も現今の議員等には六かしいといはれるかも知れないが、實際政府に立つものは議員中の選り抜であつて、普通の議員ではありませぬ。況や是から先き議会で出づるにあらざれば、台閣に上ることが出来ぬとなれば、遙かに多くの人材が翕然として日比谷に集ることは明かに予想の出来ることではありませぬか。現に今日でも上級の高等官で天下の経営に志を抱たものは、続々官界を去て代議士になりつつある。其他実業界からでも、教育界からでも有為の人材が起つて議会に入ること、今後益々多いと思はれます。であるから、私は、議会政治に就て少しも悲観する必要を認めませぬ。唯此際社会

の先覚者たるものが率先して政党を重じ、政党を扶ける様に、早く時代の思潮を導て行くことが必要だと信じます。

古山 さうですか。尚考へて見ましよう。

僕 そこで私は、中川君は二大政党が善いと思ひますか。小党分立が善いと思ひますか。

中川 夫は二大政党が望ましいと思ひます。フランスの様な小党分立の国では、各党派が極めて小さな意見の相異から、其旗幟を別にして居るのですから、一旦或大問題に關してブロックを作て同盟しても、反対党から又別の問題を出せば、容易に突崩されてしまふ。英米の如き二大政党の国では、内閣の基礎が鞏固だから比較的長持ちします。而して政府の度々動搖することは宜しくないから、二大政党併立が善いと思ふのです。併し政党の数よりも一層肝腎な問題は、其主義に依て立つか、情実に依て立つかといふ点にある。時代の思想を支配する所の主義が二つあるならば、二大政党が出来る筈。主義が三つあるならば三大政党が出来る筈でしょう。現に此にも古山様と新島君と私と

三人の大主義が各異て居るから、三大政党が成立て居る。若し君が第四の主義を出すならば四大政党になる訳です。兎に角政党に重んずべきものは主義を以て第一としなければならぬ。主義を論ぜずして単に二大政党とか、何とか喋いで居るのは無意味の俗論です。

僕 夫では政党政治の論は一段落として、新島君は何んな意見を出しますか。

新島 僕は政党政治には大に賛成します。併し今日の議会には甚だ不満足です。何故ならば、彼等は人民の輿論を代表して居りませぬ。議会をして輿論を代表させるには選挙法の改正を要する。即ち現今の納税の制限を撤廃して普通選挙に為さなければならぬ。僕は理想として此他に貴族院廃止論を有てゐますが、併し差当りの問題として衆議院議員の選挙権を総ての成年男子の上に許したい。後には女子にも及ぼさなければならぬが、今直ちに少くとも成年男子の普通選挙を行ひたいのです。抑々今日の選挙に弊害の多いことは先刻の御論の通りですが、其原因は主として選挙人の数が少い

為めに、情実や利益の交換が行はれるからです。

選挙人が即ち一般公衆であるといふ事に成れば、そんな手段を行ふ余地がないから、已むを得ずして公明正大になるでしょう。併し僕には選挙法以上の根本的大問題があるのです。今著しい例を取て申せば、現今日本の租税及専売収入が——万円ある。其内で地租、所得税、營業税の如き直接税は——万円即ち總体の四割に当り、関税、酒税、石油税、砂糖税、煙草及塩専売等が——万円即ち六割に当ります。直接税はいふまでもなく中流以上に掛る税で、消費税は一般に掛る税です。貧乏人に掛る税です。特に石油、塩、外国米、砂糖等の税は貧乏人を苦しめる悪税です。日本の中流以下のものは是が為めに何の位苦て居るか分らない。然るに日本の議会が此問題に就て大に注意を払たことがありませんか。昨今の如き剰余金が出来れば、直ちに營業税、所得税の減廃を主張するではありませぬか。是は抑々何の為めかといへば、国民の大多数なる貧乏人の利益が代表されないで、中流以上の人がかりが代表されて居るからです。中

川様は先に元老政治が少数政治で、政党政治が輿論政治の様にいはれましたが、實際は政党政治も

今の処やはり少数政治です。階級政治です。而かも国家全体のことを知らずに自己の階級の利益のみを計るオリガキーです。夫から見れば国家的觀念を何らか多く有てる元老政治の方がましかも知れませぬ。何れにしても五十歩百歩の差です。

古山 日本の成年男子の人口と選挙人の数との比例は何んなものですか。

新島 成年男子の数が凡そ千五百万人、選挙権者の数が百九十万、即ち七分一にも足りませぬ。世界中に立憲国として、こんな例は外にありません。

僕 中川君は選挙権拡張に就て何ういふ御意見ですか。

中川 私は選挙権拡張に反対する所が大賛成です。併し物事に順序があるから、今急に普通選挙を行ふことは好みませぬ。差当り現行法の、直接国税十円以上といふのを直接国税二円以上に改正する案が出て居るが、是で今の百九十万人が四百四十万人に増加します。其辺の所は最もよからうと思ふ

のです。

新島 夫は少々失望ですね。中川様は少くとも法律上に徹底した個人平等主義を主張されると思て居ましたが、参政権の分配に就ては平民の味方でないのですか。ブルジョア党ですか。

中川 いや理想としては普通選挙がいいと思ふが、実際に於て日本の労働階級に選挙権を有たせるのはまだ早いでしょう。元来自治の制度は政治教育と伴て行かなければならぬ、といふのが私の素論です。日本の議会政治を楽観して居るのも、中流人民の政治思想が進で来たと思ふからです。若し此程度を考へないで普通選挙を行へば、却て色々の危険があります。一方には無責任な新聞記者とか、大道演説家等に煽動されて、乱暴論に雷同するでしょう。又他の一方には雇主とか親方とかに強制されて、心にもない投票をするでしょう。さうなると議会政治が暴民政治又は愚民政治になる。日比谷公園あたりでモップを率ゐる事の上様な先生達が、政治上の大勢力に成てしまふ。さうなればブルジョアの利益どころか、労働者自身の利益まで

で壮士の食物になります。そこで私の考では、今後二、三十年間、日本で安全に、有効に普通選挙制を行ふ見込はないです。

古山 そこへ行くと私も中川君と同論だ。今後何うしても議会政治より外に方法なしとすれば、出来るだけ徐々に進でもらひたい。

新島 併しこんな事も考へなければならぬと思ひます。人間は何時まで子供扱にして置けば無責任で終りますが、大人扱にしてやれば自ら教育されて大人になります。労働者に選挙権を与へるのも、夫自身政治教育の有力な一法ではありませんか。

中川 是は私も同論です。併し今の処は中等階級が漸く其辺に来て居る位のものでしよう。労働者はまだ職工組合さへ作て居らないのですから幼稚なものです。もし君が職工組合の発達を主張して政治教育の当初にするならば、僕は双手を挙げて賛成します。

新島 貴君の御考はよく分りました。僕は兎に角、普通選挙を主張するつもりですけれども、中間の選挙権拡張案にも順序として賛成することを厭ひま

せぬ。

僕 是丈で選挙権の問題は終りにして宜しう御座いますか。

古山 一寸待て下さい。私の意見は何時も守旧論で、社会の階級といふ所に重きを置くのですが、今まで討論を聴て見ると中川様の説も絶対の平等主義ではない。説は平等主義かも知れないが、結果から見ると自ら此に新しい階級が出来る。即ち今後政治上に重きを為すべき階級は、昔の士族の外に中流の商工業者を加へたものだと見ることが出来るかと思ふが何うですか。

僕 中川君が個人主義でも純粹の個人主義でない實際的個人主義者ですから、結果が其通りになります。是は貴老の立場から考へて余程肝要のことと思ひます。

古山 さうでしょうねえ。そこで選挙権の拡張の程度は此問題と大関係があるに相違ないが、何んなんものですか。是は西洋に定めて実例があるんだらうから、理屈でなしに歴史上から一つ説明してもらひたい。

僕

夫では手近い所で此英国の例を御話しますが、

此国では第十九世紀の間に二回の選挙権拡張がありました。第一回は一八三二年で、第二回は一八六七年です。全体英国で日本の士族に当る階級は所謂カンツリー・ゼントルマンであらうと思ひますが、此等の人は封建時代の武士の血統を受けて居り、且土地を多く所有して居たから、自然地方の有力者となり、選挙権の如きも大貴族にあらずんば則ち此種の人々が独占して居た。商業に身を起した人で、社会に重きを為さうと思へば、土地を買つてゼントルマンの仲間入をしなけりやならぬといふ事に成て居た。所が一八三二年の改正で、選挙権は中流の商工業者にも附与される様になりました。夫から一八六七年の改正は更に之を推広めて殆ど総ての成年男子に及ぼし、労働者までが選挙権を有つことに成たのです。併し代議士になるには金があるし、又代議士に成た上で勢力を有たうとすれば猶更金がいりますから、誰でも代議士候補に打て出るといふことは出来ない。今でも多くの議員は大地主か又は実業家が多い。近頃は

労働者でも職工組合の後援で選出されるものがあるけれども、是は極めて少数です。大臣にでもならうといふ人は、大抵財産家の家に生れて、小壮の時から政治に関係することの出来た人達です。

古山 さうすると選挙権を拡張しても、實際政権を握るものはやはり中以上の階級の人だといふて差支ないですか。議院政治も発達すれば官僚政治と同じ結果になりますか。

僕 選挙権を拡張すればする程、中以下の階級の利益を顧みなければならぬ様になるから、官僚政治とは大に違ひますが、併し其中以下の輿論を指導し、且之を實地に行ふものは財産階級から出ることになると思ひます。日本では教育費が比較的に安いから、英国とは事情が大分違ひますけれども、兎に角家に多少の財産がなければ学校へも満足に行くことが出来ないのは事実ですから、貧乏人が政治界に活動するといふことは出来ませぬ。即ち私の前に申上げた通り財産相続が行はれる間は、眞の平等といふことは有り得ないのです。

古山 中川君は此説明に満足しますか。

中川 新島君は先刻貴族院廃止論を臭はされたが、私は遠い将来は知らぬこと、今後私の限界の及ぶ限りでは是を大切な機関と思つて居ます。日本の貴族院は華族と勅選議員と多額納税者から成立して居るが、先祖の遺産に依て坐食して居る馬鹿殿様は別問題として、其他の人は自分の衣食に苦勞せずして、只管国民の利益を進めんとするものか、然らざれば国家に功勞ある老官吏又は学者、軍人、技師家等でありますから、仮令直接に国民の多数を代表しないでも、国民中の知識を集めた所と見ることが出来る。夫だから衆議院の院議が急進に走つた場合に忠告を与へるのは結構なことです。特に私は政党政治を原則としたい考ですが、今日の政党が完全なものでない以上は、時として眞に民意を代表しないものが衆議院の多数を占めるといふこともありさうに思ふ。此の如き場合には貴族院が警告を与へて一旦議會を解散せしめ、国民の再考を促すといふのは最も大切だと信じます。但し貴族院は常に忠告者の態度を取らなければならぬ。衆議院をそちのけにして政権を張らうとすれ

中川

實際其通りでしょう。併し私の説は貴老の階級主義とは大に違ひます。貴老は家柄を重んじて居られるけれども、私は實力を貴びます。卑賤の人でも勉強して財産を作れば代議士にも大臣にもなれる。仮令当人はなれぬとしても其子は一階級上の人として活動することが出来る。夫だから社会に階級があることはあるけれども、是が下から上まで梯子段になつて居て、奮発すれば下から登ることが出来る。惰けて居れば上から落ちることになる。是処が昔の士族制度と異て大に進歩的な点です。夫から政治上の権力も、社会上の地位と同じく勉強したものが執り、不勉強のものが失ふのでありますが、併し選挙権が一般人民にあるときは、政治家は輿論に従はなければならぬから、自分等の利益を中心として政治の方針を立てることとは出来ない。最大多数の最大幸福を標準にしなければならぬ。是が議會政治の官僚政治に優る点です。

古山 夫で衆議院の方は分りましたが、貴族院の方は

何うですか。

古山 成程是は私も同論ですが、新島君は何うですか。

新島 私は社会に階級といふもののあることを好みます。私から、貴族院は扱措き、公侯伯子男の家柄を設けたことに反対します。人間の価値は各個人の人格に依て定まる筈のものであつて、決して偶然の出来事たる家柄とか血統とかに依て先天的に定むべきものでありませぬ。偉人の子でも馬鹿は馬鹿です。孤兒院から出ても偉人は偉人です。殊更に甲を貴び、乙を卑むといふ理由はありませぬ。

古山 併し君が或人の世話に成たと仮定して其人が死んだら其子に対して恩返しをするといふ氣にはなりませんか。

新島 社会の公益に反しない限り其子を助けたいと思ひます。

古山 然らば国家に功勞のある人の子孫に榮辭を与へて故人の名譽を永遠に伝へるのは当然ではありませぬか。

新島

偉人の子孫を国民が尊敬するのは自然の人情かも知れませぬが、何も其人に華族の称号を与へて他の人民から異な特別の階級を作る必要はなからうと思ひます。固より称号を廃すれば、先祖の名誉を永遠に伝えることは出来ませぬが、本来其名誉に相当しない様な子孫ならば之を失ふのが当然です。強て馬鹿息子を尊敬するには当りませぬ。尤も是が称号丈の問題ならば、人間平等の思想の発達すると共に金箱が剥けてしまふでしようけれども、此処に特別の参政権といふ実質上の問題が附てくるから、大に反対せざるを得ないのです。

中川

そこで議論が榮爵の問題から貴族院の問題に移た様だが、国家の政治を議するのに一院制といふことは善くない。第二院を作て第一院の欠点を補ふといふのが憲法政治の必要ではありませぬか。

新島

夫は代議政治の真に発達しない間だけ必要でしようけれども、夫ならば勅選議員其他の有識者を集めればよいので、其他に血統上の参政権を設けるのは余計なことです。

中川

其点は私の主義からいつても理論上不都合ですが、併し實際論として見ると、華族の家柄も一定したものでなくして新華族を作て行く以上は、貴族院に於て旧華族の馬鹿殿様が幅を利かすことはあり得ない。大体に於て貴族院の実権は新華族、即ち勅選議員同様の人が、さもなくば旧華族中の実力ある人々の手に握られるのです。さうして見れば、今急に華族の制度を廃するには及ばぬと思ひます。

古山

私共から見ると旧華族にも非常に善い処がある。勿論中には感心しないものもあるけれども、兎に角名家に生れた人は古い家風の内に育て行くから、自ら典雅高尚な気風を具へて居る。此高尚な気風といふものは、国民の徳性を涵養する上からいふても頗る大切なことです。若し日本の上流に此美風がなくなつて成金や新華族の野鄙な風のみが跋扈する様になつたら到底国民の気品を高めることは出来ませぬ。私は貴君方のいふ様な万民平等といふことが出来るか否かを疑ふけれども、若し出来るならば、貴族が平民の卑賤な風に同化

新島

私も成金に比ぶれば、華族の方がいいと思ひますが、しかし所謂華族の美風といふものは、高尚の裏に傲慢を蔵し、典雅の裏に柔弱を蔵して居る。人に会へば先方からお辞儀をして来るものと心得て居る。不幸な貧乏人を見れば野鄙だと軽蔑してしまふ。こんなのは美風でも何でもありません。是を保護奨励する必要が何処にありますか。

古山

何うせ不完全な世の中だから、君のいはれる様な理想的なことは望んで得られない。つまり此辺で満足して置ては何うです。

新島

私も今直ちに貴族院廃止を唱へる考はありません。今の所では貴族院が中川様のいはれる様に賢明に働き、又貴族が古山様の御説の通り高尚になつて貰ひたいです。

僕

夫では此で政治論の部を終りとしませう。

此時恰も五時に近かつたから、グランヂエスターの村へ引返して、林檎の実る果樹園の片隅に茶を飲むことに成つた。パイロンスブルを去らうとして立上た時には、夕陽が美しく輝て村の教会から鐘の音が聞え出した。

## 大正五年（一九一六年）

（上半季の記事を七月三十日認む。）

一月

一月一日（雨）

辰の春煙草をすへばけぶり立つ

小便すれば泡が立つなり

一月四日より単騎独行。

先づ小田原へ行き左右田君を訪ね、同所一泊。翌日は稲取へ河野広一君を訪ねに行く筈なりしも、海荒れ船出でざる故目的を変じて箱根底倉へ行く。同所にて村瀬春雄氏、黒板勝美氏に会ふこと例年の如し。

六日には明神岳へ登り道を經て帰る。天気好く相模海岸の風光画の如し。

七日、又好天氣に乘じ駒ヶ岳登山をなす。相、駿二洋の夕照、富岳の暮雪、箱根湖の深碧を見て久し振に

俗腸を一洗し得たり。

八日帰京の途次、大磯に徳川侯を訪ひ長談。同夜一泊す。

一月十二日 本年一月号太陽に福田博士の独逸の戦時經濟に関する論文出て、其内に余の近著「戦時經濟講話」を批評されたるに付、答文を認め新日本に投ず。

一月中農商務省より茶業組合中央会議所特別議員を囑託せらる。

二月

先月一橋編纂部に紛擾あり、調停に失敗し、二十九日に部長の職を辞したれども其後の事情中々險惡。本月十日の都下諸新聞に誤報を伝へらるるなどのことあり、頗る面倒なり。

大正五年

之に加へて三光町にも結婚問題困難になり、山内、鎌田、日疋、中島夫人、竹田などと屢々会談したり。十七日より十日間風邪にて引籠る。

## 三月

編纂部問題が福田問題へ発展し来た時に、三光郎問題も中々六かしく見え、そこへ飯倉の嫂が病氣になり三方の心配をすることになる。三光町の方は三月二十二日、島津姫の来訪を断行したる時に解決の曙光を認めたるも、全部解決に至らず。

## 四月、五月

正一は四月より池袋の成蹊小学校に入れたり。

福田問題は四月末に一先解決。

前記二問題未決。学校の方は新学期実行の爲め授業時数増加す。

## 六月

少し神経衰弱にかゝる。三日三光町より電話にて日疋氏辞任の事を知る。之より鎌田、日疋、竹田等と

屢々会談し、飯倉家政一新を謀る。二十日鎌田氏と同席、華族会館にて侯爵に面会したるに依り解決。

## 七月

八日 飯倉邸にて鎌田、三浦男、木下、日疋、斎藤、江川及余の七人理事を委嘱せらる。同時に三光町の方も島津婦朝韓旋の結果、急転解決を告げ、二十五日婚札と決す。

飯倉嫂の病氣も追々よくなる。之も家政改革と関係あり。漸く諸問題解決したる処へ、長女たつ子百日咳の内に肺炎を起し、又々一騒動。

## 大正五年下半年(大正六年一月六日記)

徳川家にては頼貞氏の結婚と、家政改革と同時に進行し、結婚式は愈本月二十五日を以て行はる。此間余は学校の答案調べをなしつつ、時々飯倉へ行きたり。

たつ子の病氣は次第に險惡となり、二十八日神田猿樂町の三輪病院に入らしむ。

貞子は二人の看護婦と共に泊り込む。三十日病勢悪しとして酸素吸入を行ふ。余は此夜一旦帰宅せしに、三

十一日早朝痙攣ありしといふ報に接し病院へ行く。午前九時第二回の痙攣あり。一時絶息し、人工呼吸法に依り蘇生す。午後一時四十分第三回の痙攣ありしも其後稍安静なりし。

## 八月

八月一日は無事なりし故、二日朝一旦帰宅す。三日朝病院へ行きしに此日も容態宜し。四日朝は楽観して飯倉邸へ出掛けしに、此夜より容態不良となる。

五日、六日、七日は悪くなるばかりにて七日午後一時四十分死去す。貞子は死屍に涙を落しながら「短い命であつたね」といつた。如何にも九ヶ月と七日の生命である。

九日 午前八時自宅にて葬儀を行ふ。次で棺を落合火葬場へ運び火葬に付す。

葬式は死者の信ずる宗教に従ふべきものと思ひ居たるも、赤子の葬式に就ては曾て考へたることもなければ、貞子と病院にて度々相談したるが、結局神道に決し氏神なる小日向神社の宮司に依頼することゝなす。火葬は余の主義なり。十日朝火葬場へ骨揚げに行く。

遺骨は当分自宅に置き、追て墓地買入の上にて土葬することゝなす。

十六日 十日祭を行ふ。

十八日 酒匂小八幡の借別荘へ移る。本年は正一は東京にありて学校へ通ふことゝし、良二、信三は十三日より向笠老母と共に転地せり。二十一日、貞子葬式の跡仕末を済まして酒匂に來り、老母と交代す。

たつ子の骨を火葬場に送りし八月九日の夜、加藤成一君よりハガキ來り長女光子の死を伝ふ。同君は夏休に光子を伴れて上京中なりしことは先日病院へ見舞に來てくれた時に承知せしが、光子も亦たつ子と同運命に陥らんとは測らざりしなり。十一日、青山墓地にて葬儀に會す。光子は既に四才になれば、其思出の深きは察するに堪へたり。

小八幡滞在中、上田幹一來り数日泊る。其平生を見るに思ひたるよりも活潑にて発達の見込あるが如し。

八月二十七日 国府津を立て輕井沢に徳川頼貞氏夫婦を訪ふ。新婚後極めて仲好く、同地借別荘に簡單な

生活をされつゝあり。

小泉信三、竹田甚太郎両氏も滞在中にて同氏等と三光邸の事及財務部の事に付話す。

八月二十九日 小泉氏と同道帰京。直ちに麻布籠篋町なる徳川家財務部の新事務所に日疋氏を訪ひ話すとあり。夜に至る。

八月三十日 小泉君と財務部員石川藤太郎氏とを芝公園三縁亭に招き話すとあり。

次で日疋氏を訪ひ夜に入り更に三氏を赤坂もみじに招き閑談す。

八月三十一日 酒匂へ帰れば内田伯母と瑞子母子あり。九月二日まで滞在す。多少瑞子の平生を見るの機を得たり。

九月

九月五日 大磯に徳川侯を訪ひ諸事を談す。

九月七日 帰京し、直ちに三光邸にて日疋、斎藤、

小泉、竹田氏等と会し相談の結果、明日の理事会を十五日に延期せしむ。飯倉と三光町との衝突を避くる為めなり。

九月十三日より学校始まる故帰京す。

九月二十二日 正一同道酒匂へ赴き、二十四日一同地を引揚げ帰京す。

十月、各方面無事

十月二十日 河野広一君来訪。今後甲州塩山に住居すべし。

十月二十二日 晴天に乗じ目白方面散歩の途中、雑司ヶ谷上り屋敷に格好の地所を発見す。後此地所三百坪を一坪一月に付三銭の割にて五ヶ年間借入の約束をなす。貸主は佐々木菊若氏なり。此月末より十一月初へかけ、会合多し。

十月二十八日 社会政策学会第一日(慶応義塾)。

十月二十九日 同第二日。余も「租税と社会政策」に

付講演す。同夜侯爵家和歌山県知事招待会(華族会館)。

十月三十日 金井博士在職二十五年祝賀会(上野精養軒)。

十月三十一日 山下芳太郎氏の招待を受く(築地新喜楽)。

十一月

十一月三日 立太子式に付学校より丸ノ内へ出張整列すべき筈なれども欠席す。

十一月四日 徳川家理事会。(和歌浦両社合併後の祭典費に関する件。神田猿樂町地所八万円売却の件。右売地の代りに朝鮮に農地を買入るゝ件。財務部成立以来の有価証券売買報告の件)。此日郵船売却を提議す。

十一月九日 再び理事会を催し、郵船売却を決す。

十一月十一日 朝、神田神保町公証人齋藤孝治氏役場にて佐々木菊若氏と会し借地の契約を公証せしむ。敷金百円也。

十一月十三日 卒業生詮衡委員会あり。此後三回に分け卒業生の一部を引見す。

十一月十四日 国民経済雑誌へ「租税と社会政策」を寄す。

十一月十六日 財政経済時報記者に戦後の英国経済政策に付て談す。

十一月十八日 同題にて慶応義塾理財学会にて講演す。

す。

十一月二十二日 「新旧思想の混流」と云ふ対話を一橋会雑誌へ寄す。

十一月二十六日 雑司ヶ谷墓地へ行き、土地買入を定め石屋へ注文す。石塔、敷石、垣根等一切にて百八円を要す。外に地所三坪の代金三十六円也。

十一月二十八日 飯倉嫂帰宅す。先月末より約一ヶ月滞在了たり。勿論恢復はせざれども稍良き方なり。

十一月二十九日 商店雑誌へ「商業組織の革新」を婦人雑誌へ「家庭より社会へ」を寄す。

十一月三十日 南葵育英会常置幹事会あり。植野大佐より文武会計分立論出で、事情少しく紛糾す。結局特別委員に付託さる。委員は川瀬博士、日疋氏、植野氏、及余なり。

十二月二日 特別委員会。

十二月四日 徳川家結婚披露あり。此機に委員会の議を進行す。

十二月九日 同旧藩人に対する披露あり。  
十二月十二日 特別委員会。会則中役員に関する部

大正五年

を改正すること。

十二月十六日 常置幹事会へ特別委員会の決議を報告し、同意を得たり。

十二月十九日 特別委員会、来年の予算の方針を議す。和歌山会。

十二月二十二日 三縁亭にて育英会幹事会を開き、規則改正及来年の予算を議し、同意を得たり。今後は主任幹事、常置幹事を廃し、五人の常務幹事に依て会務を執るべし。

川瀬、齋藤、日疋、植野及余が常務幹事に指名せらる。

大正五年はタツ子の死亡に付病院費、葬儀費に二百五十円を要し、墓に百五十円を要し、夏季の転地に二百円を要したる等の臨時費あり。徳川頼貞氏結婚の際に徳川家より金二千円の特別贈与を得たると、株式騰貴の爲めに収めたる利益千円に上りたるを臨時収入とす。

# 大正六年 (一九一七年)

(大正七年二月二十四日記)

一月一日は箱根にて歩く。

此年の元旦は前田卯之助兄と共に、箱根小涌谷の三河屋にて祝ひたり。前年十二月二十九日底倉へ来り葛屋に二泊し、大晦日に三河屋へ移り、其処にて偶然山東隆君に会し夜は花カルタを遊びたり。前田兄も山東君と旧知の間なることを初めて知りたり。

元旦は朝十時に宿を立ち、山越して伊豆湯河原へ下り一泊す。天気好く湖畔の富士の眺望鮮かなり。又鞍掛山麓にて十州の風光を見ながら弁当をつかひたり。

一月二日 伊豆山に行きたるも客満員にて室なきに付引返し其まゝ帰京せり。

年賀状、当年出状三百十枚。

松之内の仕事 Oppenheimer, The State を読了。

交友

一月七日 切田太郎君渡米送別会(三々会)。中央亭にて。

一月十一日 志田鉦太郎、堀光亀両氏と共に切田君を招待す(牛込末吉)。

一月十三日 経済学同攻会(河津博士、戦後の通商条約に付講演)。中央亭にて。

一月二十日 田崎慎治君同席、東京クラブにて秋元春朝氏の招待を受く。木国商会(四谷伊勢虎にて)。

一月二十一日 竹田常治君招待にて角力見物(大錦、太刀山を敗る)。

大正六年

文章 十五日、雑誌「新公論」の爲め「減債基金論」を書く。

病氣 一月二十五日より風邪にて引籠る。凡そ一週間。

二月

三村鐘三郎夫人、繁子逝く。一日朝其報を得て悔に行き、二日葬儀に列す。

交友

二月三日 慶応義塾にて経済学同攻会あり。小泉信三君、E. Lassalle に付談す。

二月六日 頼貞氏より招かれ、明治座へ曾我の家見物。

二月七日 社会政策学会（鈴木文治氏、米国職工組合に付）。

二月八日 高商同窓会常議員会（中央亭）。

二月十日 高商職員懇親会（富士見軒）。

二月十五日 専二会（四谷三河屋）。

二月二十五日 頼貞氏夫妻を新富座へ招待す（雁治

郎、左団次）。

二月二十七日 南英育英会常務幹事会。

紹介

細野トシ子氏を三光邸へ薦む。

広田嘉一氏を富士製紙会社へ紹介す。

松方正彦氏をShibata氏へ紹介す。

建築

二月七日より雑司ヶ谷宅建築に取かゝる。

二月十一日縄張、二月十七日井戸を見る。

三月

学校

三月一日 授業終了。例年の通試験あり。

三月二十二日より入学試験あり。

三月十五日 商工経営科謝恩会を宇治里に催され、

大に飲み、後銀座方面へぶらぶら。

卒業生は磯崎功、井上尚文、金子鷹之助、伊藤茂八

郎、金子忠二、衛藤嘉六、大幡久一、神品芳博等の連中なり。

例の問題にて校長、三浦、堀、左右田諸君と屢会合す。

飯倉及三光町

三月六日 育英会常務会。

三月七日 同晚餐会。（遠藤新任支部幹事上京）

三月十六日 小泉信三君、竹田甚太郎君を伴ひ来り、

竹田君辞任を申出づ。直ちに承諾す。

三月二十四日 南英楽堂地鎮祭。

三月二十六日 大山園地所購入に付、日疋財務部長

と行違あり。本日三縁亭にて同氏及武内基次君と会す。

三月二十七日 楽堂建築に付ヴォリス氏及戸田組代表者と会谈。（楽堂の件は、小泉信三氏に一任す）

建築

前田君より金二千円借入ることとし、二十七日送金を受取る。

学問

三月三日 経済学同攻会。（大塚君地割制度に付）

三月八日 「英国に於ける戦時勤儉論」を投す。

三月十七日 早稲田大学にて英国商政論を講演す。

四月

学校

四月一日 築地精養軒にて謝恩会あり。後福田、下

野両氏と活躍す。

四月二十八日 同窓会。（上野）

上智大学

水野繁太郎氏の懇請に依り、独逸ジエスイト派の経営する上智大学へ商業政策の講義に行くこととなる。本科三年商科学学生僅かに五人。

向笠讓

今迄三光邸にて給仕を勤めしも、本人文部省検定試

験を受くるの希望あるに付、宅へ引取る。

上田幹一

昨年来余の勧めに依り、家兄も同人の希望に任せ東京府立工芸学校へ入ることを許す。

四月十一日 余自ら同道して同校へ行く。

前田卯之助君

南阿へ渡航するに付、送別の意味にて君の家族と余の家族と総出にて箱根へ行く(十三日)。二十四日同氏出発す。

会合

四月二日 鎌田榮吉氏新築祝。

四月七日 鎌田竹夫氏結婚披露。

四月十七日 新宿御苑観桜会。

四月二十一日 花月にて三々会、プロクホイス氏を招く。

四月二十二日 富山房招待にて帝劇に助六を見る

(左団次)。

同、育英会貸費生会。

引越

四月三十日 雑司ヶ谷へ移る。但し新築未成に付、隣家を借りて当分住ぶ。

専攻部授業

今年の newcomers は A. Smith—Wealth of Nations 及 Ashley—Economic Organization of England を読みしむ。

研究室

学校にて学生の読書室及新設教授研究室の事務を執る為め、余に研究室幹事を命ぜらる。

勲章

五月二十八日 勲六等に叙し瑞宝章を授けらる。教授就職以来十二年に達したることを思へば多少の感なきにあらす。願はくは Teaching Machine に終りたくなきものなり。

会合

木国商友会、育英会大会。徳川侯の鹿子木知事招待会。和歌山会。

六月

旅行

学校の修学旅行に加はり、五月三十一日朝立ち、塩原に一泊。六月一日は塩之湯より新潟方面へ行く。久し振にて無人の荒野に入る。二日帰京す。

貞子病氣

珍しく神経性の病氣になる。其初め余が無頓着にやつつけた為めに成績宜しからざりしも、幸にして間もなく恢復したり。

婦人の生理は妙なものなりと思つた。

向笠玉子結婚

六月二十八日 神田三崎町バプチスト会堂にて高谷

七月

奥太郎氏と結婚式を挙げたるに付、参列す。

学期試験

本年より学期試験が七月に行はるゝこととなり六日に授業終了したが、暑くして到底満足なことは出来ない。早く休んでしまつた方がよいと思つた。併し試験は九日以後十四日迄あつた。

学問

此頃余の考へたことは、英国の戦時勲論であつた。去三月の学校の財政の試験問題にも之をだした。商業政策の方は Hobson—New Protectionism.

徳川家

七月七日 本邸にて侯爵に拝謁。

七月八日 紀州出身女学生招待茶話会。

七月十一日 理事会(南龍公三百年祭のこと報告あり)。

七月十四日 日疋氏より来状。来年以後毎年侯爵お手許より金三百円づつ贈与せらるゝこととなりたり。  
七月十九日 三光邸夫人着帯式。

会合

七月一日 赤坂三會堂にて共立電気会社員の為め講演(本山佗吉君の依頼)。  
七月十四日 浜町錦水にて中央大学佐藤正之氏に招

かる。

七月十七日 木挽町浜村にて正則懇親会(高橋徹夫に会す)。

旅行

徳川頼貞氏と北支漫遊することとなり、学校よりも出張の辭令を取りて行く。  
七月二十五日 夜東京発。

七月二十六日 朝神戸着。兼ねて水島鏡也氏より請求ありしに付、本日同氏を訪問す。  
序を以て内池氏を訪ひ、同道にて滝本美夫氏にも面

会す。

七月二十七日 朝神戸発。車中九十八度。同夜下関乗船。

七月二十八日 朝釜山着。ホテルにて休息す。追間房太郎氏に招かれ同氏別荘へ行く。

夜 小川貴氏に招かる。夜十一時出發。  
七月二十九日 朝九時京城着。関屋貞三郎、大河平

隆兩氏出迎ふ。ホテルにて休息す。  
関屋氏案内にて秘園と称する国王宮殿の庭、及清涼里の閼妃の陵を見る。

夜十時四十分出發(之より大河平氏、滿鉄の命に依り吾々を案内の為め同行す)。

七月三十日 朝九時安東県へ着。領事館の馬車にて市中を一周す。日本町あり。

安奉線は玉黍畑の裡を走り、鳳凰城以西にて山地に入る。釣魚台と称する奇景あり。

本溪湖製鉄所左に見ゆ。夕刻奉天着。ヤマトホテルに入る。同窓角野、朝岡、揚妻、高橋四氏に招かる。

七月三十一日 赤塚総領事案内にて北陵を見る。規模の大なるは流石に支那人の仕事なり。併し手入の少しもしてなき所又支那流なり。城内滿鉄公所にて昼飯

(支那料理)を饗せらる。次長鎌田弥氏接待す。

市中砂塵の内に馬車を駆る。鉄道馬車もあり、夜領事館にて招かる。

北支旅行

八月一日 朝、ブレイキソンにて立ち、撫順見物す。露天掘の雄大なるに驚く。全然西洋風の新市街もまた意想外なりし。

午後出發。途中湯崗子にて温泉に浴し、其夜又乗車。  
八月二日 朝大連着。日中休息。

夜滿洲館にて中村総督の招待を受く。南葵會員同席。大連の西洋風日本町も亦意想外に立派なり。

八月三日 中央試験所、工業学校、滿鉄本社、図書館を見る。夜、谷村、小沢兩氏に招かれ大連の料理屋へ行く。外部は煉瓦造なれども内部は純日本座敷なり。

八月四日 埠頭参観(辻勝氏案内)。

三泰油房、取引所錢鈔部を見る。午後星ヶ浦海水浴場へ赴く。夜高商同窓会をホテル屋上に開く。河辺勝氏より高商学生の滿洲旅行費として毎年金千円づつ寄

付の申込を受く。

八月五日 旅順へ赴く。砲台廻りに一日を費す。白玉山頭戦死者に対して無限の感慨を催す。

八月六日 午前來客に接す。午後老虎灘海水浴場へ赴く。

八月七日 午前大河平、河辺兩氏を訪ふ。午後築業試験所に赴き平野耕輔氏に會す。

夜白須信次氏來。午後四時滿鉄讀書會にて講演す。

八月八日 午前税関に行き江原忠氏を訪ふ。午後埠頭に行き高砂丸を見る。

八月九日 朝十時高砂丸(一六七三噸)にて立つ。

八月十日 朝七時半、太沽浮燈台を過ぐ。夫より徐行十時に至りて日本陸軍棧橋に着く。電報局にて忽ち大洋小洋の計算にまごつかさる。一時塘沽発。途中天津にて下車。

自動車中にて市中を一巡す。天津、北京の間水害にて村落浸水数里に及ぶ。夕刻北京着。六国飯店 (Hotel de Wagon lit) に入る。

八月十一日 公使館調査の案内にて市中見物す。午前天壇。午後那桐氏邸宅。ラマ寺。鼓楼。北海。夜出

淵氏に招かる。張競立、権量、楊汝梅同席。

八月十二日 公使館留學生の案内にて万寿山を見に行き、玉泉山に至る。帰途農事試験場を見る。夜林公使に招かる。

八月十三日 午前教育部を訪ふ。教育総長不在にて次官に面会す。正午、阪西利八郎氏(陸軍少将)に招かる。青木中将同席。

午後 London Times 記者、Fraser 氏を訪ふ。夜、権量氏等に招かれ、支那料理店及支那芸者を見る。

八月十四日 Cook 案内人を伴れ、八達嶺及長城見物に行く。南口まで汽車にて行き、ホテルに入る。此処にて Chair を雇ひ、明十三陵を見に行く。

八月十五日 汽車にて青龍橋といふ処に行く。鉄道は元の張家口街道に沿つて山峽の間を通ず。居庸関、彈琴峽の名所あり。

青龍橋より徒歩にて八達嶺に行き、長城の一角に登り遙かに城外の広野を見る。嶺頭の駅路には馱馬の鈴の音頻りなり。

此夜帰京後頼貞氏腸カタルにて苦しむ。日華同仁醫院より医師の来診を乞ふ。

日本料理店にて

八月二十三日 朝、山本中尉(紀州出身)案内にて砲台、堡壘を見る。十一時西京丸出帆。大谷大将と同船することとなる。

八月二十四日 朝船は朝鮮南端の多島海に入り、海上平穩にして風景佳し。

八月二十五日 十時下関上陸。山陽ホテルにて休息。午後七時十分、急行にて東上。

八月二十六日 朝大阪にて頼貞氏と別れ、和歌山へ赴く。

和歌山及熊野

新宮の有志等育英会幹事の来遊を希望せるに付、余が其請に応ずることとなり、支那旅行の帰途、熊野旅行を為す。

八月二十六日 和歌山に入り有田屋に泊る。

八月二十七日 県庁、市役所、徳義社を訪ひ、天主閣を見る。午後遠藤市長、三浦男爵、奥津助役及明渡善一氏の招待にて新和歌浦望海楼に飲む。夕刻同所より汽船緑川丸に乗込む。明月の夜なり。

明日出発の予定なりしも右に付延期す。

八月十六日 公使館芳沢参事官の午餐に招かる。午後公使館員吉田氏案内にて瑠璃荘といふ町へ行く。骨董商、書籍店の多き所なり。

八月十七日 朝城壁の上を散歩す。ヤマトクラブ、及東京朝日記者神尾氏を訪ふ。

八月十八日 阪西氏来訪。支那談を聴く。

八月十九日 午前孔子廟を見る。午後大柵欄といふ支那町へ行く。勸工場の商品は大抵日本品なり。

八月二十日 白雲観といふ道教の寺を見る。帰途広安門内にて関帝廟の縁日を見る。一種の市なり。

八月二十一日 朝出発。天津洪水未だ引かず。埠頭より小蒸汽にて津浦線某駅に連絡す。駅夫無能の爲め頗る乱雑なり。終日直隸山東の広野を走り、夜九時半濟南に着す。小須田駅長(高商出身)出迎へられ、雑談す。

八月二十二日 朝濟南発。

山東線は不毛の地を通過す。山東鉄道の遠藤氏に出迎へらる。午後七時青島着。グランドホテルに入る。夜山鉄管理部、藤田虎力氏に招かる。(くめの家といふ

八月二十八日 午前六時勝浦入港。新宮学生などの出迎を受け上陸。汽車にて新宮に行き油屋に投ず。熊野権現参詣(速玉神社と称し、本年より官幣大社に列せらる)。

八月二十九日 瀬八丁見物に行く。風雨にて船後れ、夜九時半瀟亭といふ旅館に着く。

八月三十日 朝、増水五尺に及び遅くならば舟行危険ならんとのことに付、急ぎ帰途に就く。十二時帰宿。郡長、郡視学、実業学校長など来訪。

八月三十一日 午前新宮町公会堂にて修養会主催の講演会に出席。「昔の町人と今の実業家」に付講演。午後七時再公会堂にて有志懇話会あり。南葵育英会の事業に付談話す。

後、植松、池田、尾崎三氏(何れも実業家)に招待せらる。

九月一日 新宮発。那智行。野中書記、及山本秋広氏同行。夕刻勝浦着。赤島温泉に入る。夜、小学校にて講話。

九月二日 八時乗船(武庫川丸)。天気好く風景頗る佳し。二時田辺着。郡長及同窓金谷氏、近藤氏出迎。

錦城館に入る。  
夜、金谷、近藤、脇村氏等に招かる。  
九月三日 中学校にて講演(満洲支那視察談)。次で  
女学校へ行き講演。

二時乗船。龍田川丸。六時半和歌浦着。  
直ちに三浦男の好意に依り望海楼にて夕食を認む。

九月四日 市会議事堂にて講演(満洲北支那視察  
談)。夜有志懇話会(城東館)。実業界、教育界、県庁、  
市役所、徳義社の人々会す。

九月五日 徳義社の為め再び市会議事堂にて講演  
(土族の過去、現在、将来)。

午後五時和歌山市発大阪へ。此夜在大阪の旧門生  
(専攻部、商工経営科) 諸氏に招かる(河内屋)。大阪  
ホテル泊。

九月六日 帰京。

交友

九月八日 三光邸にて晩餐、青嶋新聞社長長鬼頭玉汝  
氏同席。

九月九日 飯田一馬君に招かる。(寿々本)

九月十日 井爪亟次氏送別会(中央亭)。同氏は東京  
海上保険社員として米國へ行く。

九月十一日 橋静二氏主宰の雑誌「大学及大学生」  
の為に劍橋談を試む。

九月十六日 三光邸晩餐。満鉄重役、改野耕造氏、  
山東鐵道部長、阪口新圃氏同席。

九月十七日 南葵育英会常務幹事会(紀州旅行の報  
告をなす)。

高商図書館開館式。九月二十八日執行。

徳川家財務問題

九月二十日 鎌田先生を訪ひ、財務部の資金運用に  
付取調の必要あることを説く。

九月二十一日 飯倉邸に日足部長の来訪を乞ひ、鎌  
田氏同席して右経過を聞く。

九月二十二日 夜交詢社に於て鎌田氏同席、再び日  
足氏より詳細の事実を聞く。

九月二十三日 財務部にて鎌田氏と共に日足部長初  
め、部員一同に面会し善後策を議定す。

九月三十日 斎藤勇見彦氏葬儀。

十月一日 大暴風雨。三光邸女中頭、細野寿子辭職。

十月十五日 財務部へ行き整理の経過を聴く。

十月十七日 鎌田氏を訪ふ。

十月二十日 朝、日足氏来訪。理事会開会。財務部  
長更迭を申渡す。

十月二十二日 財務部引継立会。

十月二十三日 同上。

十月二十六日 理事会(引継の報告)。

十月三十日 日足信亮氏青年会を代表し渡欧に付、  
送別会を開く。

三光邸細野問題

十月一日 夜、日足氏来訪。細野辭職を報ず。次で  
細野氏来る。武内基次氏来る。

十月二日 頼貞氏へ手紙を書き此問題に付ては、余  
は一切関係せざることを告ぐ。

山東誠三郎氏学校へ来訪。

夜、武内氏、竹田甚太郎氏来訪す(小泉氏が三光邸  
へ余の手紙と同様のことを送りたる趣)。

十月五日 山東氏来訪。其後山東氏が頼貞氏と余及

小泉氏との間に立つこととなる。

十月十九日 東京ステーションホテル楼上にて頼貞  
氏に面会し、問題解決す。

細野氏辭職は十一月に入り形式的解決す。

大暴風

十月一日 早暁のことなり。宅の二階の廂を剥ぎ取  
られ、諸所浸水す。

十月中交友

十月七日 飯倉本邸にて中学校長招待会。育英学生  
懇談会、引継ぎ幹事会。

十月十日 木國商友会。

十月十四日 飯倉にて師範学校長招待会。

十月二十一日 育英会大会(大山園)。

十月二十七日 高商同窓会。

十月三十一日 ポートレース。

十一月

学問

雑誌経済時論新年号の爲めに戦時の英国に於ける商政論を研究執筆。

交友

十一月二日 南龍公三百年祭相談会(精養軒)。  
十一月十日 上智大学教授 Winkler 氏を、頼貞氏へ独乙語教師として紹介す。  
十一月十三日 切田太郎氏帰朝し、其就職のことに付度々会合。  
十一月二十日 赤坂離宮観菊会(後、下野、三浦両君と会合)。

学校

十一月二十二日 星野氏の主唱に依り、三浦、堀、藤本三氏同席にて会計学会のことに付相談したれども纏らず。  
十一月二十九日 三浦君と共に左右田君の招に応ず。福田博士復職のことに付相談す。

徳川家

山東誠三郎氏三光邸の主任となる。余は毎木曜日訪問することゝ定む。

十二月

武内基次君結婚媒酌  
同君が医師渡辺真氏の女と結婚するに付、媒酌を勤む。二日、上野精養軒にて長嶋式に依り式を行ひ、次で披露の宴を催す。  
併し實際の媒酌者は塚口慶三郎君なり。

徳川家

十二月三日 三光邸男子出産。  
十二月九日 飯倉邸にて祝宴。  
十二月十七日 飯倉邸にて侯爵夫妻銀婚祝宴(理事として招待せらる)。  
十二月二十一日 再び育英会幹事として招待せられしも欠席す。此間新築の御殿にて日々各種の知人を招待せられしなり。

併し此と同時に来年の経費に付大節約説出づ。其爲め度々理事相談会を開きたり。  
社会政策学会(十二月二十一日、二十二日)(専修学校)。

本年は小工業問題を論ずることゝなり、余自身報告者の一人たり。三日目に本所の貧民窟視察に行く。此視察は衛生設備、特に住宅問題の頗る重大なることを余に感ぜしめたり。

## 大正七年 (一九一八年)

一月より三月までの記事

大体無事平穩なりし。

学校には福田氏の位置のこと及会計学、計理学の調和のことあるも別に心配する程の形勢にあらず。

徳川家にては節約論の勵行並に家政部長の後任に付、多少問題あれども之は心配に及ばず。三光郎は山東君主任として専ら家政向を整理しつゝあり。余は毎木曜日学校へ出る前に立寄るのみ。

正月は近年箱根にて越年する例なれども、本年は宅に居たり。松之内の面白かりしことは堀君を訪ふて飲んだ拳句、俊秀学生の養成費を国家自ら負担すべしといふ論を出し、之を後藤内相に説かんとて同道にて出掛けたるにあり。併し内相不在は云ふまでもなし。

### 国民経済雑誌

之は従来、関、津村、藤本三氏編輯主任たりしが、津村氏教育界を去るに付き、雑誌の経営を余に任せたとの相談あり。余は、内池、阪西氏等がやるならば手伝をなさん、と答へ結局阪西、滝谷両氏が主任中の主任となりて、引受くることになったのは一月下旬なり。三月号より新しき編輯主任の名を以て発行す。此引継に付、旧主任が退任すると共に、一旦雑誌を廢刊せんとの議ありしも、余が極力反対したる為め沙汰止みとなる。

雑誌は巻を改めず続刊し、唯編輯主任の名を変へたるのみ。

法学博士会にて新博士推挙の爲め、投票を行ひしは

大正七年

三月三十日なり。其候補者の中に余も数へられたれども落選せり。

余は兼て博士号に多くの趣味を有せざれども、候補に数へられて見れば悪い感じは起らず。又落選は勿論有がたからず。併し本年は法律側の景気よくして、経済側の景気悪しく、老人の景気よくして青年の景気悪しきが、一般の形勢なりしが如し。

向笠讓は昨年四月徳川家を止めさせて宅へ引取り、初めは文部省検定を受けるといふ意気込であつたが、是は和歌山で受験失敗の結果全然望みなきこと明かとなり、余の支那旅行の後に中学四年の入学試験を受けたるに、之も二度失敗し、結局郁文館へ入学し通学し居たりしが、余り勉強せず、外出不規則にして書生の役も満足にせず、結局此際兄の許へ帰して直接監督せしむるの他なしと考へ、此事を断行したり。四月四日、讓は東京を立ちたり。但し今後一年位は和歌山中学へ通学の入費として毎月五円づつを送金する考なり。

#### 松尾五代太郎

是も財務部に居るが、なまいきにて余り見込なき様

なり。三月中病氣にかゝり、無断にて休み房州へ養生に行き、辭職を願出でたといふので、石川部長に頼み辭職聽許を差控へてもらひ、本人へ意見をなしたり。

論文は一月中に雑誌中外へ寄せたる「社会政策問答」、一月中旬に国民経済雑誌へ「小工業問題研究」、三月中に同誌へ「紀州綿ネル研究」、経済時論へ「独逸の消費組合」。

#### 会合

一月十七日 高商職員懇親会（余と長谷川方文氏が幹事たり）。上田辰之助、高瀬莊太郎兩氏の渡米送別と横井時敬博士の帰朝歓迎を兼たり。

一月二十日 進修学舎記念会あり。余は成金論を演説す。

一月二十七日 徳川邸にて旧藩出身貴衆兩院議員招待会あり。

二月三日 関一氏上京に付、同氏と三浦君をほてい家へ招く。

#### 二月六日 日比谷平野家にて松徑会を開く。

経済学同攻会は久しく打絶えたりしが、復活の意味を以て二月十二日、中央亭に開く。余が幹事なり。同時に講演者として「保護税なしの保護策」に付述べ。

二月二十日 社会政策学会（永井亨氏の鉄道院救済会）。

三月一日 三光邸にて故治君追悼音楽会。

三月八日 会計学会評議員会。

三月十五日 専攻部商工経営科謝恩会（築地万安）。

三月二十日 経済学攻究会（高野博士の国勢調査）。

三月二十二日 余が自称幹事にて久し振の三々会を浜町錦水に開く。出淵、山中、前田の三君を客とし、出席総数十八名。

三月二十四日 窪田四郎、前田米蔵兩氏の紀州人招待（新喜楽にて）。

（以上大正七年四月八日誌す。）

#### 博士会

三月三十日に法学博士会が開かれ、高商側からは内池廉吉氏と余が推薦されて居たが、両方共投票不足で当選しなかつた。余は由来学位といふものを余り尊重して居ないから、先輩等が推薦するといはるれば拒絶もせぬが強ひて頼みはしない。詰り何うでも宜しい、といふ態度で居る。

併し三十日の晩に三浦君から落選のことを電話で知らせて来た時は、一寸不愉快に思つた。蓋し自分ならばまさか落選はしまいといふ自惚があつたからであらう。

四月の事

卒業式

例に依て四月一日は朝卒業式があり、夜謝恩会があつた。謝恩会テーブルスピーチには、余の今迄に遭遇した一番凄い経験として、或青年が自殺の覚悟をして熱海魚見崎まで行きながら、暗夜と怒濤に恐れて目的を遂げずに引返した其足で、余を酒匂の松濤園に訪問した時の話をした。

向笠讓を国へ返すこと  
讓は昨年四月から余の家へ引取り、書生にして置たけれども働きもせず、勉学もせぬ故てい子から苦情が出た結果、学年の替り目を機会として兄謙太郎の許へ帰すこととなつた。但し向ふ一年間毎月五円づつを余から贈ることにした。

「経済政策より見たる軍国主義及民本主義」新公論の爲めに起草。

春休暇

三月十五日に学年試験が済みしだい答案調べに着手し、二十二日から二十六日までには入学試験で引出さる。二十八日、卒業生の及落に付教授会あり。四月八日漸く答案全部の調べを了し、九日教授会で及落を決す。夫からは暇なわけだが、中央と上智は既に始つて居る。

新学期計画

五月の事

研究の方針

今年の夏は株式会社論及商業史教科書の改訂を行はんとして居るが、気が散つてうまく行かぬ。両方とも余の学問上の興味が向いて居るのでなく、旧著改訂といふ外部の事情が此様な方針を立てしめたからだと思ふ。

併し一方からいへば自分の思ふまゝに任せたら、あちらこちら嚙るばかりで何も纏らないかも知れぬなどと諦めても見る。

何か一生の内には大成して見たいと思ふが、其題目が見当らない。見当たと思ふて取かゝつても自分の興味が間もなく去つてしまふ。

大山園

昨年春買入れた徳川家の大山園の地所が、船成金山下氏へ売渡さるゝことゝ成た。

本一経済大意は前年の続き。  
本三は新規則実施に付、商工経営論を講ぜず。商業政策のみを受持つ。

専一では Liefmann, Unternehmensformen を読む (商工経営論として)。  
指導は専一、専二共通とす。

第四男出生

四月十七日午前三時安産。七夜に勇五と命名す。

会合 (四月中)

四月五日 下村宏氏より新富座楽天会へ招かる。紀州出身の連中なり。

四月二十一日 会計学会大会。

四月二十七日 同窓会春季大会。

四月二十八日 加藤重男君結婚披露。

交友

四月十四日 内田宅を訪ふ。(西村夫婦帰朝に付)

交友

五月二日 三十二、三年連合同級会。

五月五日 南葵育英会懇話会。

五月七日 松径会 (平野家)。

五月八日 徳川邸にて県地青年会、在郷軍人を招待に付接待。

五月九日 前田卯之助兄濠洲へ出発に付、飯田、竹田両兄と共に北野家にて会食。

五月十日 堀口米太郎、野田一両氏校長会議出席の爲め上京に付来訪。

五月十三日 高商の元教師 Hare 氏葬儀。

五月十七日 小沢新之輔上京に付三々会を開く (中

央亭)。

五月十九日 育英会大会。

五月二十日 経済学攻究会 (北沢新次郎君の I. W. W. に就ての講演を聴く)。

五月二十五日 経済学同攻会 (森莊三郎君の疾病保険に就てを聴く)。

五月三十日 松径会有志三名と飯能へ一日帰り遠足

す。

## 渡辺与七兄

同君とは専攻部卒業以来面会の機会なくして過ぎたれば、今回は十六年目の会合なり。

同君が郷里の公人として実際の成績を挙げつゝある其努力には敬意を表せざるを得ず。同君の自ら「俺の身体は油津の町有なり」と云へる一言は余に深き印象を与へたり。

余も「油津社会主義」を開けと勧めたり。

(以上六月四日記す。)

## 六月

月初に神経衰弱の気味にて二週間程休養す。其後も夜分の会合等は絶て断る。

六月三十日 飯倉兄、内田、西村一族の爲めに玉川鮎漁を催す。西村省三夫婦帰朝中の故なり。

## 七月

月初より学期試験始る。十日終了。

ら金を貸すわけに行かぬ。自動車に乗るなら三十万円の話でなければならぬ、と云ふて帰した。

七月十八日 徳川頼貞君と鎌倉に病氣療養中の小泉信三君を見舞に行ぐ。自動車にて青田の間を走り、丘陵を越えて行く。

今年の暑中休暇は、三省堂出版の旧著日本商業史教科書及富山房出版の旧著、株式会社経済論叢書を校訂増補して見んとし、大部分自宅で暮す考なり。今月中頃より株式会社歴史の発達を研究する爲めに、左の諸書を読み始めたり。 Goldschmidt—Handbuch des Handelsrecht. Lehmann—Das Recht der Aktiengesellschaften. Scott—English Joint Stock Companies to 1720. Hunter—History of British India. etc.

八月十日 徳川家々政部長心得、村井信晴氏の古稀祝宴を交詢社にて催されしに付出席す。此日、岡崎、関、楠木、矢田等諸氏和歌山の兵隊のこと又は時習學校のことを語り出でられ、面白く聴きたり。岡崎氏の記憶のよきには感心したり。

宝文館番頭鈴木来り、太田哲三氏と共著にて商事要項教科書を編纂せんことを頼む。之を諾す。教科書を多く作ることは余の素志にあらざれども、実際に中等学校教授の経験ある人が編纂する場合に之を校閲して世に紹介するは不可なしと思ふ。

商学士細谷裕治氏、武内基次君の紹介にて来り面会す。信託業に關する同氏の著書出版に關してなり。余は之を宝文館に紹介し、引受けしむることゝなりたり。細谷氏は卒業後住友家に入り、後日本興業銀行に勤務したりして最近に辞職せり。硬骨の人にして人に盲従するを好まず。面白味ある人物なりと思ふ。

七月十四日 小泉新兵衛君旅館より電話をかけ、次で余を訪問す。同時に竹田常治君も来る。依て鬼子母神側に開店せる開泉閣へ誘ひて会食す。

小泉君には数年振にて面会したるが、何時も余は同君の不用意に発する言葉の内に、典型的第三階級の佛を発見す。今日も同君の談の中に、友人其自動車に乗り来りて事業資金の借入を相談したから、何程入るかと聞けば三万円なりと答へたり。そこで君は僅か三万円の金策をなすに自動車を乗り廻す様なやり方だか

此頃まで株式会社校訂と庭掃除水撒きに日を暮して居たが、身体疲労の気味あるに付、十二日より四日掛りにて軽井沢へ行く。正一、良二同行す。鶴屋に投じ碓氷峠、小瀬等へ散歩す。

八月十六日 徳川家理事相談会あり。米廉亮の寄附金に就ての相談なり。結局東京は五千元、和歌山は三万円と決したり。和歌山にて騒動激烈にて、富豪等は何れも多額の寄附を余儀なくされしなり。

八月十九日 神田錦輝館より出火の事を出入商人より聞き、午後四時頃学校へ行て見たるが火は既に消えたり。事務員のみにて校長老教授連も来て居らぬ故、余は夕刻まで見て居たが別条なき故引取りたり。

八月二十日 米穀仲買人高垣甚之助氏来訪。同氏は紀州有田郡出身にて、郷里の爲めに種々有益の寄附をなし、一身を持すること儉素なる珍しき人物なり。此度湯浅にて講演を催すに付、武内基次君を介して余に出席を請ひたるなり。

八月二十三日 朝特急にて出発大阪に向ふ。  
八月二十四日 大阪にあり、市公会堂事務所に栗山

寛一氏を訪ひ、次でホテルにて同氏列席の上にて栗本勇之助氏に面会し、同氏より南葵育英会へ寄附すべき學術研究補助金の件に付取極めをなす。栗本氏は下村宏君等と同時代の法学士にて裁判官、弁護士に就き後、製鉄業に関係し、最近の時局にて一躍富豪の列に入りたり。寄附金の高は七千五百円にて學術研究者を助くるを目的とす。

午後和歌山へ行き有田屋に投ず。夜明渡益一氏来訪。向笠謙太郎来訪。

八月二十五日 午前遠藤慎司氏小笠原駐三郎氏来訪。育英会事務に付打合せをなす。

午後明渡益一、宮本春吉両氏の招に依り、新和歌浦へ行き望海樓に飲む。

八月二十六日 朝有田郡視学梶原某、広村小学校長平木伴次郎氏来訪。内田彦四郎氏を訪ふ。県庁へ出頭し、知事に面会して育英会へ果より補助金を支出さるゝことになりたる礼を述べ。知事は池松氏なり。

市役所及徳義社を訪ふ。午後三時半和歌浦発汽船にて湯浅に向ふ。平木氏同行。二時間にして湯浅着。郡長以下の出迎あり。広屋といふ旅館に入る。此家は古

き旅屋にて菊地海莊の書を多く蔵す。武内基次君同宿。

八月二十七日 郡長柳瀬氏来る。

九時半より小学校講堂にて講演。演題は現代経済組織の解剖にて、三回講了の都合なり。午後平木氏案内にて耐久中学に浜口梧陵翁の遺書を見る。其内に海保青陵著、富貴談、變理談の二編あるを発見し謄写を依頼す。

夜、武内一郎氏招宴。

八月二十八日 朝講演。此日より同所にて法学士山下信義氏の講演あり。同氏は伊豆に農場を有する実驗家にて、農村改良の事に付き各地に講演をなす。一年の半は之が爲めに旅行する由なり。

午後郡長案内にて勝楽寺の国宝なる仏像を見る。此寺は白鳳年間の創立なりといふも、縁起明かならず。幕府時代には相当修理もなされしが、維新後荒廃し、仏像も仮小屋の内に安置せらる。夜郡長招宴。

八月二十九日 朝講演。

浜口梧陵翁墓に詣ず。浜口八十五氏案内なり。汽船出でず。平木氏同行陸行す。

湯浅の町を離れると道は丘陵の間に入りて曲折す。

夫より有田川の左岸に出で坦々たる大道、箕嶋町に通ず。此辺兩岸の丘腹一面に蜜柑を植え、農村は瓦葺白壁にて如何にも富裕に見ゆ。箕嶋より峠を越し下津浦といふ海辺の小村に下り、浜中の盆地を横断して又一つの峠にかゝる。此峠の頂上は既に塩津町の一部分なり、日方町にて車を捨て、電車にて和歌山に着せしは午後八時半なり。湯浅より四時間余を費したり。

八月三十日 曉暴風至る。

此日高野山行の計画もありしが、中止して京都に行きホテルに投ず。夜島蘭順次郎君来訪。余を花外樓に誘ひ飲む。此家は小綺麗の料理屋にて、知人ならば宿泊をなさしむ。鴨川に面し、庭先に棧敷様の物を設け、暑中は水上にて飲食をなさしむ。此設備は鴨川西岸の家には必ずあり。九月の来ると共に一様に取去る由。帰館後岩橋大六君来訪。

八月三十一日 朝大学病院に行き、島蘭君の診察を受く。余の胃病疾患は以前よりありて、洋行より帰るし当時北村精蔵氏の治療を受けたるも中途にて止めたり。

然るに今年の夏は殆んど日々不消化を自覚し、夜睡眠を妨げらるゝのことも屢なれば、島蘭君の忠告を請ふ為め態々京都に立寄りたる次第なり。島蘭君の診断にて胃痛などの重大なる疾病なきこと明になりしも、此まゝに放任するは不可なり。依て今後禁酒し、肉食を節し専ら撰養することゝ決心したり。

尚目下胃にカタルある故、之を治する為め温泉へ行くことゝしたり。此夜島蘭君案内にて円山、四条辺を散歩し、遂にいす茶といふ茶屋に入り老妓等と雑談して帰る。

九月一日 特急にて帰京。

禁酒は此日より勵行す。

余の胃病治療は生活上に大なる変化を来たらしむるならんと思はる。酒を飲まず、食物をも制限することになれば、当分諸会合等は大抵謝絶の外なく、従て生活は規則的になる代りに外部との接触は多少妨げられる不便あるべし。其利害は今後一年位たてば判る。

(以上十月七日記す。)

九月

此月一日より禁酒、禁肉を實行す。此月の大半は箱根底倉、葛屋に居て養生した。

九月四日 滝口金之助（医師）を訪ひ、向笠老人の病状を問ふ。老人は最近衰弱甚だしき模様なるに自ら転地を希望せる故、其事に付き相談したるなり。

九月五日 底倉に来る。正一同伴。

九月十二日 一旦帰宅。

九月十四日 夜大風雨。

九月十七日 再び葛屋に来る。単独。

九月二十三日 帰宅。

九月二十四日 又大暴風雨。

九月二十九日 木更津に向笠老人を見舞ふ。三兄同行。

九月三十日 初めて学校へ出づ。本月中にて胃カタルは全治したり。併し心地尚宜しからず。

十月

今学期は学校本科にて、経済大意、商政の講義を為

麓路の柿熟したる日和哉

枯野原鹿の背に似た山路哉

唯落つる水に声あり山の秋

十月二十六日 向笠老容態不良と聞き見舞に行く。

十月二十七日 南葵文庫記念館開館式。

頼貞氏は本月上旬以来病氣にて参列せず。

十月二十九日 早朝向笠氏死去の電話あり。直ちに木更津へ行く。夜自動車に遺骸を載せ、向笠老母と余と同乗して帰宅す。

小石川台町向笠宅にて通夜す。

十月三十日 葬式其他準備。

十月三十一日 同様。

十一月

十一月一日 葬儀執行。牛込宗参寺。

戒名禅岩院梅崖壁立居士

二日、三日も向笠宅にあり。

向笠氏用意

星飛んで波に声なし浜の秋

つばぶきの枯れたる庭の淋しさよ

す外に専攻部に、Liefmann, Unternehmungsform-  
en 及 Adam Smith, Wealth of Nations の講義をな  
し、研究指導をなす。指導は一、二年合併とす。

此他中央大学にて四時間、上智大学にて二時間あり。  
尚新たに早稲田にて二時間引受けることになりたり。

三光邸へは毎水曜日午後に行くことと定めたり。此  
丈の仕事をするれば病氣ある身として随分骨が折れる。

夫故氣分悪しき時は休むつもりなり。

十月一日 大谷敏一君葬儀に列す。同君は正則中学  
の同窓なり。

十月七日 昨夜不眠に付休む。

十月十七日 向笠見舞旁休養のため旅行す。是日木  
更津玉屋一泊。

十月十八日 佐貫まで汽車にて行き、夫より人力車  
にて行ける所まで行き、それより歩行して鹿野山に登  
る。大塚旅館に泊る。

十月十九日 鹿野山滞在。神野寺及九十九谷の勝景  
を視る。鳥居崎十五州展望台に至る。

十月二十日 下山。木更津へ立寄り、夜帰宅。

鹿野山吟行

余の胃病は九月中にカタル全治し、十月中は尚時々  
疲労を感じたれども、本月に入りて大に恢復せり。併  
し殆んど総ての宴会に出席せず。

十一月十日 向笠氏二七日。

十一月十一日 休戦成立の報十三日新聞に伝へら  
る。

十一月十四日の新聞に休戦条約の正文発表せられ、  
其条件の峻烈なるに驚く。

我国の陸軍又は外務当局等独逸の容易に屈せざるを  
信じたるは全く見当外れなりき。

十一月十六日 夜京都へ行く。島蘭君の診察を受く  
る為めなり。

十一月十七日 朝京都着。二条木屋町花外楼に泊  
す。本日島蘭氏不在に付単独にて奈良に遊ぶ。宿に帰  
れば、小泉、島蘭両氏来る。

十一月十八日 大学病院にて胃液検査及レントゲン  
検査を受く。胃液酸過多症なることを確めらる。夜、  
小泉新兵衛氏宅へ。

十一月十九日 帝室博物館を見る。石山へ散歩す。

島蘭氏にわらじやへ招かる。此家は蠟燭の燈にて食事せしむる古風の料理屋なり。此日三浦新七君より電報に依り帰京す。

京都吟行

花の外かすかに鐘を聴く夜かな

沖は時雨帰る舟には夕日かな

加茂の秋唯水音ぞすみける

暁や一すじ白き秋の水

十一月二十日 正午十二時東京着。

直ちに三浦君宅へ行く。問題は高商昇格に付立案の相談なり。佐野校長の外は三浦、堀両君と余と出席す。

十一月二十一日も引続き三浦君宅に参集す。案の大要は、

一、大学予科を専属せしめて、普通高等学校の学科の外に書法、算術、簿記、商業通論、経済通論、法学通論等を学ばしむること。

二、大学本科は貿易、銀行、交通、保険、計理、商品工営等に分つこと。研究指導を行ふこと。

三、別に専門部を附属せしむること。

十一月二十日 夜九ノ内の提灯行列を見に行く。此

日初めて行列の宮内省構内通過を許されたる由。

十一月二十四日 育英会大会(徳川邸)。

十一月二十九日 学校にて緒方清氏のこと付校長と会談す。緒方氏は専二学生にて教職に就く希望あり。住友家との先約を取消し、学校へ就職のこと決定す。

十一月三十日 社会政策学会例会にて山川菊栄女史の婦人職業問題に付ての講話を聴く。同会にて婦人の講話をなさしめしは之を嚆矢とす。

十二月

十二月四日 三光郎を見舞ふ。

頼貞君十一月二十九日流行感冒に罹り、数日の後肺炎に犯され一時重態と称せらる。

本月初に度々見舞ひたり。

十二月十三日 丸の内東京海上ビルディング内中央亭分店に於て、一橋商学会第一回を開く。此会は余と内藤章氏が発起人となり十年前の商学研究会を復興する積りにて創設したるなり。会の目的は一橋出身者中学位にあるものと、實際界にあるものとの連絡を計り共

同研究機関となるにあり。併し会員としては出身者ならざる母校教員をも入会せしむることとなしたり。

今夜は外務省参事官川島信太郎君の支那関税改正顛末に関する講演あり。来会者四十余名。今後毎月一回開会の筈なり。幹事には余と内藤氏と他一人就任することとなりたり。

十二月十九日 一橋会投書家懇親会に出席す。今年は大学問題の解決眼前にあるため、多数の出席者ありしも、演説者の大体の調子は頗る熟考のなりき。例に依り福田博士の長舌を聴く。

同日、学校にて商業政策の試験を行ふ。

財政の講義を担当し居たる工藤重義氏が先頃死去したるため、本学年中余に同学科を一時担任すべしとの交渉を受けたるが余は病氣療養中なる故、此上時間を増すことを断り、結局今学期にて商業政策を切り上げ、来年一月より一週四時間にて財政を講ずることとなしたるなり。

十二月二十日 南葵育英会幹事会を本邸にて催され出席す。会の収入は来年度予算に於て一万八千円。此内寄宿舎費、本舎九百四十六円、分舎七百十四円。貸

給費一万六百五十円也。

十二月二十一日 兼ての打合せに依り神戸の田崎慎治君と学校にて面談す。三浦、堀両君同席なり。問題は内池廉吉氏を東京へ聘するに關してなり。此事に付二十三日にも再び会談したり。

同日、早稲田大学に於ける社会政策学会大会に出席す。婦人労働問題に付河田嗣郎、阿部秀助、森戸辰男三氏の報告ありたり。

十二月二十二日 島蘭順次郎兄上京に付、根岸信君と同行にて会食し閑談したり。

十二月二十四日 築地精養軒に於ける堀越善重郎氏送別会の後、青山中島力造氏葬儀に参列す。中島博士は流行感冒及肺炎にて突然死去されしなり。

十二月二十五日 三光郎にて山東氏より学事報酬として二百五十円を渡されたり。

余は昨春秋以来毎週一回づつ日を定めて同邸を訪問し、家事向相談に与ると共に学問上の談話をなし居たれども、徳川家よりは理事としての手当千円と盆暮の慰労三百円を受くるのみならずしかば、山東氏より先頃別口の報酬を受けては如何との申出ありたり。

其時余は三光邸の事は自分以外の人に関して、頼貞氏と自分とにて決定するが、自分の事になれば頼貞氏、山東氏の外本邸及財務部当事者の承認を得る必要ありと答へたり。

山東は此言に聴き、手続を履みたる上にて此金を支出したるなり。

十二月二十六日より三十一日まで答案調べにて半日づつ潰し、其他には何もなせず。

十二月二十六日 愈高等教育機関大拡張の政府案が公にされた。皇室から一千万円の恩賜金が出ることもなつた。東京高商昇格は此大計画の一部である。

大正七年十月より十二月まで余は何も研究したことがない。高商と中央と早稲田と上智と而して三光邸の仕事で、月曜から木曜まで毎日午前と午後がつぶされる。

金曜の午後と土曜一日は明いて居るが、A. Smith (専二)とLiefmann (専一)の下説に費される。而して夜は病氣療養中働かぬことに極めた。夫故国民経済雑誌にも書かず、他の雑誌の依頼をも受けぬことにして居た。禁酒禁肉は励行されて居る。

饗応宴会等は一切断つて居る。容態は引続き宜しいが、時としては眠られぬこともある。下痢することもある。

此調子で勉強もせず。遊びもせずに一年間位続けたら何か効果があるだらうと思つて居る。昔の人は此様な時に適当な養生法を断行しなかつたから、早死にしたのだらうが、自分は之で命を取り止める考だから、今の処成績がなくても我慢するのだ。

長命したら何か学者らしい研究も出来るかと、当てにならぬことを当てにして居る。(十二月三十一日記)